

新 方 遺 跡

野手・西方地区発掘調査報告書 1

2003

神戸市教育委員会



西側微高地 溝状埋葬遺構



3号人骨（南から）



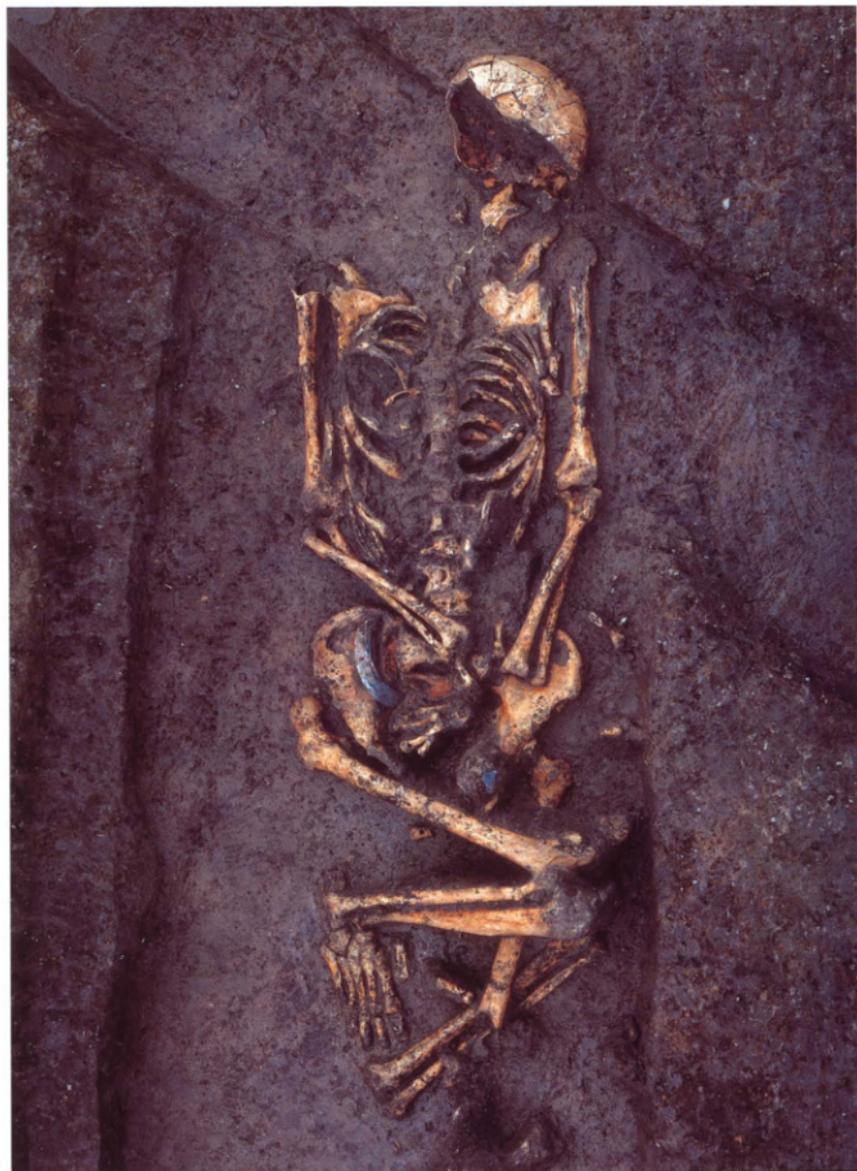
東側微高地 ST401・ST402 (北から)



11号人骨 頭部（裏面から）



11号人骨 鹿角製指輪着装状況（裏面から）



13号人骨（東から）



弥生時代前期土器



彩紋土器



イノシシ下顎骨

新 方 遺 跡

野手・西方地区発掘調査報告書 1

2003

神戸市教育委員会

序 文

明石川は神戸市の西区を流れる河川で、明石海峡に流下しています。流域は市内有数の遺跡の密集地帯で、特に下流域はその大部分で埋蔵文化財の存在が確認されています。

新方遺跡は明石川下流域に位置する大規模な遺跡で、これまでの調査で弥生時代から近世に至る大規模な遺跡であることが判明しております。今回、多くの遺物や遺構とともに弥生時代前期の人骨が複数検出され、考古学的にも、人類学的にも大変貴重な成果を得ることができました。

調査に際しましては、全国から復興調査の支援に来ていただいた調査員の方々のご協力をいただきました。弥生時代開始期の人々の営みを知るとともに、震災と復興に携わった人々の記憶を後世に残すために、本書が役立てることができれば幸いです。

最後になりましたが、調査ならびに本書の刊行にご協力いただきました関係各位に感謝申し上げます。

平成15年3月

神戸市教育委員会
教育長 西川 和 機

例 言

1. 本書は、兵庫県神戸市西区玉津町新方字西方・西河原字野手に所在する、新方遺跡野手・西方地区第1次、第2次、第5次調査の、弥生時代前期関連の発掘調査報告書である。
2. 調査の契機は、住宅復興事業に伴う遺跡範囲確認調査で、神戸市教育委員会が主体となり実施した。第1次調査は、阪神淡路大震災に伴う復興事業の一環として行われたため、神戸市教育委員会の文要委託のもと、兵庫県教育委員会からの派遣職員の手を受け調査を実施した。第2次調査は、財団法人淡神文化財協会が調査していた調査地を引き継ぎ、調査を継続した。
3. 発掘調査は、第1次調査が平成8年10月21日～平成9年7月25日まで、第2次調査が平成9年9月5日～平成9年11月28日まで、第5次調査が平成9年4月21日～平成9年10月21日まで、それぞれ実施した。
4. 調査担当は、第1次調査を兵庫県教育委員埋蔵文化財事務所 工藤忍（青森県教育委員会から支援）・同半澤幹雄（千葉県教育委員会から支援）・神戸市教育委員会 山口英正・浅谷誠吾・阿部功、第2次調査を山口・東喜代秀、第5次調査を山口・浅谷が担当した。
5. 調査の実施にあたっては、野手西方地区十地区西整理組合準備会の協力をいただきました。また、下記の方々にご指導、助言をいただきました。記して感謝いたします。
安部きみこ・小川良太・上栗善通・酒井龍一・篠宮正・角南聡一郎・清家章・種定淳二・中橋孝博・福宜田佳男・春成秀爾・福永伸哉・松下孝幸・森岡秀人・山本三郎（五十音順 敬称略）
6. 発掘調査作業は、第1次・第2次調査を企業組合神戸労協に、第5次調査を株式会社社長谷川工務店に委託して実施した。
7. 遺構写真は、人骨関連遺構の撮影を神戸市教育委員会 丸山潔が撮影し、他は、山口・浅谷が撮影した。空中写真撮影は、株式会社アジア航測に委託した。
遺物写真は、丸山と、独立行政法人奈良文化財研究所 牛島茂氏の指導のもと、杉本和樹氏が撮影した。
X線写真の撮影は、神戸市教育委員会 千種浩・中村大介が行った。
8. 基準点は、神戸市復興基準点をもとに設置した4級基準点およびGPSを用いた多角点測量により国土地院を求め、これを基準とした。なお、調査地はV系に属し、本書で用いる方は座標北を示す。また、標高は、東京湾平均海水準（T.P.）を基準とした。
9. 整理作業は、神戸市埋蔵文化財センターで実施した。遺物の実測は山口・中村が行った。
10. 本書に用いた遺物番号は、本文・挿図・図版ともに統一している。
11. 本書の執筆は、出土人骨の鑑定を京都大学霊長類研究所 片山一彦氏・大藪山美子氏、人骨のカラーゲン分析を北海道大学大学院地球環境科学研究所 南川雅男氏、古病理学については大阪リハビリテーション病院、七川記念リウマチ骨関節症センター 井上康二氏、動物遺存体の鑑定を独立行政法人奈良文化財研究所 松井章氏・京都大学大学院 丸山真史氏より玉稿を賜りました。人骨と動物遺体の取り上げと保存については千種・中村が執筆し、他は山口が執筆した。
12. 石器の石材鑑定については、株式会社京都フィッション・トラック 檀原徹氏のご教示をいただきました。
13. 発掘調査には、下記の参加者があった。
岩井美枝・大藪山美子・大前篤子・川上博子・柴田紀三子・田中英子・藤井珠美・三木雅子
14. 本書にかかわる遺物は、神戸市埋蔵文化財センターに保管している。

目 次

巻頭図版

序 文

例 言

第 I 章	はじめに	1
第 1 節	調査に至る経過	1
第 2 節	調査の方法	2
第 3 節	調査の経過	2
第 4 節	調査組織	3
第 II 章	地理的環境と歴史的環境	7
第 1 節	地理的環境	7
第 2 節	歴史的環境	8
第 3 節	新方遺跡の概要	10
第 4 節	野手西方地区の概要	13
第 III 章	第 1 次調査地点の調査	15
第 1 節	調査の概要	15
第 2 節	第 9 遺構面	15
(1)	溝状埋葬遺構	17
(2)	土坑	23
(3)	溝	26
(4)	微高地末端部	29
(5)	石器	32
第 IV 章	第 2 次調査地点の調査	31
第 1 節	調査の概要	33
第 2 節	第 7 遺構面	33
(1)	区画溝	33
(2)	土坑・ピット	45
(3)	用途不明遺構	47
(4)	柱穴	49
第 3 節	第 6 遺構面	50
(1)	溝状遺構	51
(2)	土坑・ピット	54
(3)	用途不明遺構	59
(4)	竪穴住居	64
第 4 節	復旧遺構面	65
第 5 節	土製品と石器	72

(1) 土製品	72
(2) 石器	72
第V章 第5次調査地点の調査	77
第1節 調査の概要	77
第2節 7トレンチの調査	77
1. 第5遺構面	77
(1) 区画溝	79
(2) 土坑	86
(3) 用途不明遺構	89
(4) 柱穴	90
(5) 遺構に伴わない遺物	90
2. 第4遺構面	91
(1) 土坑	92
(2) 土器集積遺構	94
(3) 用途不明遺構	97
(4) 木棺墓	99
第3節 8トレンチの調査	103
1. 第4遺構面	103
(1) 土坑	103
(2) 柱穴	104
2. 第3遺構面	104
(1) 溝状遺構	105
(2) 土坑墓	106
(3) 土坑	106
(4) 竪穴住居	107
第4節 紋様	109
第5節 石器	110
第6節 弥生時代中期以降の人骨	111
第VI章 人骨と動物遺存体の調査	115
第1節 人骨と動物遺存体	115
第2節 新方遺跡の弥生時代人骨	123
〈付記 第13号人骨の腰骨でみられる骨病変〉	150
第3節 新方遺跡出土古人骨の炭素・窒素同位体分析による食性解析	153
第4節 新方遺跡(野手・西方地区)出土の動物遺存体	157
第VII章 まとめ	183
第1節 遺構について	183
第2節 遺物について	186

挿図目次

図1	調査地位位置図	1	図36	第2次 SD7001平断面図	41
図2	調査区配置図	2	図37	第2次 SD7001出土遺物実測図(1)	42
図3	神戸市位置図	7	図38	第2次 SD7001出土遺物実測図(2)	45
図4	遺跡位置図	7	図39	第2次 SK7001平断面図	45
図5	周辺遺跡分布図	9	図40	第2次 SK7002平断面図	46
図6	調査地区位置図	11	図41	第2次 SK7003平断面図	46
図7	基本土層図	14	図42	第2次 土坑出土遺物実測図	47
図8	第1次 第9遺構面平面図	15	図43	第2次 SX7001平断面図	47
図9	第1次 調査区平面図	16	図44	第2次 SX7001出土遺物実測図	48
図10	第1次 溝状埋葬遺構平面図	17	図45	第2次 SP7003出土遺物実測図	49
図11	第1次 1号人骨平立面図	18	図46	第2次 第6遺構面平面図	50
図12	第1次 2号人骨平面図	19	図47	第2次 第6遺構面包含層 出土遺物実測図	51
図13	第1次 3号人骨平面図	20	図48	第2次 SD6001平断面図	52
図14	第1次 大型鉢・突帯紋土器 出土状況平立面図	21	図49	第2次 SD6001出土遺物実測図	52
図15	第1次 溝状埋葬遺構出土遺物実測図	22	図50	第2次 SD6002平断面図	52
図16	第1次 人骨関連石鏃実測図	22	図51	第2次 SD6002出土遺物実測図	53
図17	第1次 SK8001平断面図	23	図52	第2次 SD6005出土遺物実測図	54
図18	第1次 SK8001出土遺物実測図(1)	24	図53	第2次 SK6001平立面図	55
図19	第1次 SK8001出土遺物実測図(2)	25	図54	第2次 SK6001出土遺物実測図	55
図20	第1次 SD9002周辺平断面図	26	図55	第2次 SK6002平立面図	56
図21	第1次 SD9002上層出土遺物実測図	27	図56	第2次 SK6002出土遺物実測図(1)	56
図22	第1次 SD8001・SD8005平断面図	28	図57	第2次 SK6002出土遺物実測図(2)	57
図23	第1次 SD8001出土遺物実測図	28	図58	第2次 SK6004出土遺物実測図	57
図24	第1次 SD8005出土遺物実測図	29	図59	第2次 SK6007出土遺物実測図	57
図25	第1次 落ち込み9002下層出土遺物実測図	30	図60	第2次 SK6010平立面図	58
図26	第1次 落ち込み9002上層出土遺物実測図	32	図61	第2次 SK6010出土遺物実測図	59
図27	第2次 第7遺構面平面図	34	図62	第2次 SK6011出土遺物実測図	59
図28	第2次 SD5003平断面図	35	図63	第2次 SX6001平断面図	60
図29	第2次 SD5003出土遺物実測図(1)	36	図64	第2次 SX6001出土遺物実測図	61
図30	第2次 SD5003出土遺物実測図(2)	37	図65	第2次 SX6002平断面図	62
図31	第2次 SD5004平断面図	39	図66	第2次 SX6002出土遺物実測図	63
図32	第2次 SD5004出土遺物実測図	40	図67	第2次 SB6001平断面図	64
図33	第2次 SD6003平面図	40	図68	第2次 SB6001出土遺物実測図	65
図34	第2次 SD6003出土遺物実測図(1)	40	図69	第2次 復旧遺構面平面図	66
図35	第2次 SD6003出土遺物実測図(2)	41	図70	第2次 調査団検出土遺物実測図(1)	68

図71	第2次	SK109平立面図	69	図104	第5次	7トレンチSX403出土遺物実測図	98
図72	第2次	調査団検出遺物実測図(2)	70	図105	第5次	7トレンチST401平立面図	99
図73	第2次	調査団検出遺物実測図(3)	72	図106	第5次	7トレンチST401出土遺物実測図	100
図74	第2次	土製品実測図	74	図107	第5次	7トレンチST401出土石炭実測図	100
図75	第2次	石器実測図(1)	75	図108	第5次	7トレンチST401摺輪実測図	101
図76	第2次	石器実測図(2)	76	図109	第5次	7トレンチST402平立面図	101
図77	第5次	7トレンチ平面図	78	図110	第5次	7トレンチST402出土石炭実測図	102
図78	第5次	7トレンチ第5遺構面包含層出土遺物実測図	79	図111	第5次	7トレンチST402直上層出土遺物実測図	102
図79	第5次	7トレンチSD401出土遺物実測図	80	図112	第5次	8トレンチSX401出土遺物実測図	103
図80	第5次	7トレンチSD401・SD405平断面図	81	図113	第5次	8トレンチ第4遺構面平面図	104
図81	第5次	7トレンチSD405出土遺物実測図(1)	83	図114	第5次	8トレンチSP403出土遺物実測図	104
図82	第5次	7トレンチSD405出土遺物実測図(2)	85	図115	第5次	8トレンチ第3遺構面平面図	105
図83	第5次	7トレンチSK502平断面図	86	図116	第5次	8トレンチSD301平断面図	105
図84	第5次	7トレンチSK502出土遺物実測図	87	図117	第5次	8トレンチST301平立面図	106
図85	第5次	7トレンチSK503出土遺物実測図	87	図118	第5次	8トレンチSK301出土遺物実測図	107
図86	第5次	7トレンチSK504出土遺物実測図	88	図119	第5次	8トレンチSB301平断面図	107
図87	第5次	7トレンチSK507出土遺物実測図	88	図120	第5次	8トレンチSK301出土遺物実測図(1)	108
図88	第5次	7トレンチSK601出土遺物実測図	89	図121	第5次	8トレンチSK301出土遺物実測図(2)	109
図89	第5次	7トレンチSX501平断面図	89	図122	第5次	包含層出土遺物実測図	109
図90	第5次	7トレンチSX501出土遺物実測図	90	図123	第5次	石器実測図	110
図91	第5次	7トレンチSP514出土遺物実測図	90	図124	弥生時代中期以降の人骨出土位置図		111
図92	第5次	7トレンチ石剣実測図	91	図125	第1次	4号人骨平立面図	112
図93	第5次	7トレンチ第4遺構面包含層出土遺物実測図	91	図126	第5次	8号人骨平立面図	113
図94	第5次	7トレンチSK401平断面図	92	図127	第5次	9号人骨平面図	114
図95	第5次	7トレンチSK401出土遺物実測図	93	図128	蛍光X線分析スペクトル図		122
図96	第5次	7トレンチSK402出土遺物実測図	93	図129	新方遺跡歯冠計測値比較図		152
図97	第5次	7トレンチSK403出土遺物実測図	94	図130	新方遺跡人骨と他の遺跡人骨との比較		155
図98	第5次	7トレンチSK404出土遺物実測図	94	図131	食物資源および新方遺跡人の 利用食物の同位体組成		156
図99	第5次	7トレンチSK404平面図	94	図132	出土動物遺存体の破片比率		168
図100	第5次	7トレンチSX401平面図	95	図133	弥生時代前期の出土動物遺存体の破片比率		168
図101	第5次	7トレンチSX401出土遺物実測図(1)	95	図134	イノシシ・ニホンジカの骨に残る痕跡		168
図102	第5次	7トレンチSX401出土遺物実測図(2)	96	図135	イノシシ・ニホンジカの年齢構成		168
図103	第5次	7トレンチSX403平面図	98				

挿図写真目次

挿図写真1	切り取る範囲の設定	115	挿図写真13	裏側検出状況の記録撮影をする	118
挿図写真2	砂・アルミホイルで骨を保護する	115	挿図写真14	裏側検出状況の図化作業	118
挿図写真3	保護の終わった状態	115	挿図写真15	合成樹脂で表面を補強する	118
挿図写真4	ウレタンを吹き付ける	115	挿図写真16	底面をウレタンで再梱包する	118
挿図写真5	トンネルを掘って地面から切り離す	116	挿図写真17	ホイストクレーンで正位に戻す	119
挿図写真6	パワーショベルで吊り上げる	116	挿図写真18	ウレタンを開梱する	119
挿図写真7	反転させる	116	挿図写真19	表側をクリーニングし樹脂で強化する	119
挿図写真8	裏側の余分な土を取り除く	116	挿図写真20	収納ケースを組み立てる	119
挿図写真9	ウレタンを裏側から開梱する	117	挿図写真21	駄骨をウレタンで梱包する	120
挿図写真10	裏側から遺構基盤層を掘削する	117	挿図写真22	室内で開梱しクリーニングする	120
挿図写真11	人骨を裏側から精査する	117	挿図写真23	保存処理終了後(外側)	121
挿図写真12	形質人類学的調査を行なう	117	挿図写真24	保存処理終了後(内側)	121

表目次

表1	地区名一覧	10	表24	出土動物遺存体同定表(11)	179
表2	第1次調査 石製品計測値	23	表25	出土動物遺存体同定表(12)	180
表3	第2次調査 土製品計測値	73	表26	出土動物遺存体同定表(13)	181
表4	第2次調査 石製品計測値	73	表27	出土動物遺存体同定表(14)	182
表5	第5次調査 指輪計測値	100	表28	主要遺構時期一覧	
表6	第5次調査 石製品計測値	110	表29	第1次 SK8001壺紋様別集計表	184
表7	新方遺跡人骨歯式	150	表30	第1次 SK8001壺紋様別集計表	190
表8	新方遺跡男性人骨の歯冠計測値	151	表31	第2次 SK6002壺紋様別集計表	190
表9	新方遺跡女性人骨の歯冠計測値	151	表32	第2次 SK6002壺紋様別集計表	190
表10	新方遺跡出土人骨の元素分析 および同位体分析の結果	154	表33	第2次 SX6002壺紋様別集計表	191
表11	新方遺跡出土人骨の動物遺存体種名	166	表34	第2次 SX6002壺紋様別集計表	191
表12	イノシシ下顎歯列	167	表35	第2次 SB6001壺紋様別集計表	192
表13	哺乳類部位別出土量	168	表36	第2次 SB6001壺紋様別集計表	192
表14	出土動物遺存体同定表(1)	169	表37	第2次 SX7001壺紋様別集計表	192
表15	出土動物遺存体同定表(2)	170	表38	第2次 SX7001壺紋様別集計表	193
表16	出土動物遺存体同定表(3)	171	表39	第5次 SK401壺紋様別集計表	193
表17	出土動物遺存体同定表(4)	172	表40	第5次 SK401 k 壺紋様別集計表	193
表18	出土動物遺存体同定表(5)	173	表41	第5次 8トレスB301壺紋様別集計表	194
表19	出土動物遺存体同定表(6)	174	表42	第5次 8トレスB301壺紋様別集計表	194
表20	出土動物遺存体同定表(7)	175	表43	第5次 ST402直上壺紋様別集計表	194
表21	出土動物遺存体同定表(8)	176	表44	第5次 ST402直上壺紋様別集計表	195
表22	出土動物遺存体同定表(9)	177	表45	第5次 SD405壺紋様別集計表	195
表23	出土動物遺存体同定表(10)	178	表46	第5次 SD405壺紋様別集計表	195

巻頭写真図版目次

巻頭写真図版1	西側微高地 溝状埋葬遺構	巻頭写真図版5	13号人骨 (東から)
巻頭写真図版2	3号人骨 (南から)	巻頭写真図版6	弥生時代前期土器
巻頭写真図版3	東側微高地 ST401・ST402(北から)	巻頭写真図版7	彩紋土器
巻頭写真図版4	11号人骨 頭部 (裏面から)	巻頭写真図版8	イノシシ下顎骨
	11号人骨 鹿角製指輪着装状況 (裏面から)		

写真図版目次

写真図版1	1 調査地遠景 (南から)		4 第1次調査 1号人骨 歯列 (X線撮影)
	2 調査地遠景 (北から)	写真図版11	1 第1次調査 1号人骨 歯列正面 (X線撮影)
写真図版2	1 調査地遠景 (垂直)		2 第1次調査 2号人骨上下顎骨 (南から)
写真図版3	1 東側微高地遠景 (北から)	写真図版12	1 第1次調査 2号人骨 上下顎骨側面
	2 西側微高地遠景 (北から)		2 第1次調査 2号人骨 歯列
写真図版4	1 第1次調査 溝状埋葬遺構 (南から)		3 第1次調査 2号人骨 上下顎骨側面 (X線撮影)
	2 第1次調査 溝状埋葬遺構 (北から)		4 第1次調査 2号人骨 歯列 (X線撮影)
	3 第1次調査 溝状埋葬遺構 (北東から)	写真図版13	1 第1次調査 3号人骨 (南から)
写真図版5	1 第1次調査 溝状埋葬遺構 (北東から)		2 第1次調査 3号人骨 (裏面から)
	2 第1次調査 小型出土状況 (北から)		3 第1次調査 3号人骨 (北から)
写真図版6	1 第1次調査 大型鉢・突帯紋土器出土状況 (北から)		4 第1次調査 3号人骨 18号石鏃出土状況
	2 第1次調査 大型鉢・突帯紋土器出土状況 (東から)	写真図版14	1 第2次調査 第7遺構面 (南西から)
写真図版7	1 第1次調査 1号人骨 (南から)	写真図版15	1 第2次調査 第7遺構面 (北から)
	2 第1次調査 1号人骨 (裏面から)	写真図版16	1 第2次調査 SD5003・SD5004 (南から)
	3 第1次調査 1号人骨 (西から)		2 第2次調査 SD5004断面 (南から)
写真図版8	1 第1次調査 1号人骨 (北から)	写真図版17	1 第2次調査 SD5003イノシシ 下顎骨出土状況 (西から)
	2 第1次調査 1号人骨石鏃出土状況 (北から)		2 第2次調査 SK7001断面 (南から)
	3 第1次調査 1号人骨 頭部 (裏面から)	写真図版18	1 第2次調査 第6遺構面 (北東から)
写真図版9	1 第1次調査 1号人骨 上下顎骨正面	写真図版19	1 第2次調査 SK6001遺物出土状況 (北から)
	2 第1次調査 1号人骨 上下顎骨正面 (X線撮影)		2 第2次調査 SK6002遺物出土状況上層 (北から)
写真図版10	1 第1次調査 1号人骨 上下顎骨側面	写真図版20	1 第2次調査 SK6002遺物出土状況下層 (北から)
	2 第1次調査 1号人骨 歯列		
	3 第1次調査 1号人骨 上下顎骨側面 (X線撮影)		

	2	第2次調査	SX6002遺物出土状況 (北西から)		4	第5次調査	13号人骨 腰骨・脚部 (裏面から)
写真図版21	1	第2次調査	SB6001(北から)	写真図版34	1	第5次調査	13号人骨 胸部・腰部 (東から)
写真図版22	1	第2次調査	SB6001(東から)		2	第5次調査	13号人骨 イノシシ牙出土状況(東から)
	2	第2次調査	SK6010(北東から)		3	第5次調査	13号人骨 脚部(南から)
写真図版23	1	第2次調査	復旧遺構面 SK79 (南から)	写真図版35	1	第5次調査	8トレンチ第3遺構面 (南西から)
	2	第2次調査	復旧遺構面 SK101 (南から)		2	第5次調査	8トレンチ第3遺構面(北東から)
写真図版24	1	第2次調査	D区 微高地末端部 (北西から)		3	第5次調査	8トレンチSD301(北東から)
	2	第2次調査	E区全景(南東から)		4	第5次調査	8トレンチSB301周辺(北東から)
写真図版25	1	第5次調査	第5遺構面全景(北東から)	写真図版36	1	第5次調査	8トレンチSB301(南東から)
写真図版26	1	第5次調査	第4遺構面全景(南西から)		2	第5次調査	8トレンチSB301 遺物出土状況(北西から)
	2	第5次調査	第4遺構面全景(北東から)	写真図版37	1	第5次調査	8トレンチSB301内 SK01遺物出土状況(北西から)
写真図版27	1	第5次調査	SD401・SD405(北から)		2	第5次調査	8トレンチSP403 遺物出土状況(南から)
	2	第5次調査	SK210(南から)	写真図版38	1	第5次調査	第10号・11号人骨(南から)
写真図版28	1	第5次調査	SX201(南東から)		2	第5次調査	第10号人骨(南から)
	2	第5次調査	SX401(南から)		3	第5次調査	第11号人骨(南から)
写真図版29	1	第5次調査	12号人骨(北から)	写真図版39	1	第1次調査	第4号人骨(北西から)
	2	第5次調査	12号人骨(裏面から)		2	第5次調査	第9号人骨(東から)
	3	第5次調査	12号人骨(南西から)	写真図版40	1	第5次調査	第8号人骨(西から)
写真図版30	1	第5次調査	12号人骨(北から)		2	第5次調査	第9号人骨(裏面から)
	2	第5次調査	12号人骨 頭部 (裏面から)		3	第5次調査	第9号人骨(南から)
	3	第5次調査	12号人骨 頭部 (裏面から)	写真図版41	1	第5次調査	第9号人骨 頭部・胸部 (西から)
写真図版31	1	第5次調査	12号人骨 頭部・胸部 (南西から)		2	第5次調査	第9号人骨 頭部・胸部 (裏面から)
	2	第5次調査	12号人骨 脚部 (南東から)		3	第5次調査	第9号人骨 脚部(西から)
写真図版32	1	第5次調査	13号人骨(東から)		4	第5次調査	第9号人骨 脚部(裏面から)
	2	第5次調査	13号人骨(裏面から)	写真図版42	1	第5次調査	第9号人骨 頭部(南から)
	3	第5次調査	13号人骨(南東から)		2	第5次調査	第9号人骨 頭部(西から)
写真図版33	1	第5次調査	13号人骨(西から)		3	第5次調査	第9号人骨 頭部(裏面から)
	2	第5次調査	13号人骨(裏面から)				
	3	第5次調査	13号人骨 頭部・胸部 (裏面から)				

- 写真図版43 1 1号人骨 保存処理完了状況
2 3号人骨 保存処理完了状況
3 12号人骨 保存処理完了状況
4 13号人骨 保存処理完了状況
- 写真図版44 1 第1次調査 溝状埋葬遺構出土遺物
2 人骨関連石鏃
- 写真図版45 1 第1次調査 SK8001出土遺物
- 写真図版46 1 第1次調査 落ち込み9002上層出土遺物
- 写真図版47 1 第2次調査 SD5003出土遺物
2 第2次調査 SD5004出土遺物
- 写真図版48 1 第2次調査 SD7001出土遺物
2 第2次調査 SK7003出土遺物
3 第2次調査 SX7001出土遺物
- 写真図版49 1 第2次調査 第6遺構面包含層出土遺物
- 写真図版50 1 第2次調査 SD6003出土遺物
2 第2次調査 SD6005出土遺物
3 第2次調査 SK6001出土遺物
4 第2次調査 SK6002出土遺物
5 第2次調査 SK6007出土遺物
6 第2次調査 SK6010出土遺物
- 写真図版51 1 第2次調査 SX6001出土遺物
2 第2次調査 SX6002出土遺物
3 第2次調査 SK5002出土遺物
- 写真図版52 1 第2次調査 SB6001出土遺物
2 第2次調査 土製品
- 写真図版53 1 第2次調査 調査団検出遺物 (SK14)
- 写真図版54 1 第2次調査 調査団検出遺物 (SD170他)
- 写真図版55 1 第2次調査 紋様 (第7面出土)
- 写真図版56 1 第2次調査 紋様 (第6面出土)
- 写真図版57 1 第2次調査 紋様 重弧紋
2 第2次調査 紋様 山形紋
- 写真図版58 1 第2次調査 サスカイト製石器
- 写真図版59 1 第2次調査 石器
- 写真図版60 1 第5次調査 SD401出土遺物
2 第5次調査 SD405出土遺物
3 第5次調査 SK502出土遺物
- 写真図版61 1 第5次調査 SD405出土遺物
2 第5次調査 SD405・SK302出土遺物
- 写真図版62 1 第5次調査 SK303出土遺物
2 第5次調査 SX501出土遺物
3 第5次調査 第5遺構面出土遺物
- 写真図版63 1 第5次調査 SK401出土遺物
2 第5次調査 SK403出土遺物
3 第5次調査 第4遺構面出土遺物
- 写真図版64 1 第5次調査 SX401出土遺物
2 第5次調査 SX403出土遺物
3 第5次調査 ST401出土遺物
- 写真図版65 1 第5次調査 第4遺構面包含層出土遺物
2 第5次調査 8トレンチSP403出土遺物
3 第5次調査 8トレンチSX401出土遺物
4 第5次調査 8トレンチSB301出土遺物
5 第5次調査 8トレンチST401出土指輪
- 写真図版66 1 第5次調査 土製円板
2 第5次調査 紋様 (木葉紋)
- 写真図版67 1 第5次調査 紋様 (重弧紋)
2 第5次調査 紋様 (山形紋)
- 写真図版68 1 第5次調査 石鏃
2 第5次調査 石棒
- 写真図版69 1 第5次調査 砥石
2 第5次調査 磨石
3 第5次調査 有柄式石剣
- 写真図版70 イノシシ
- 写真図版71 イノシシ
- 写真図版72 イノシシ
- 写真図版73 イノシシ
- 写真図版74 ニホンジカ
- 写真図版75 ニホンジカ
- 写真図版76 ニホンジカ
- 写真図版77 ウシ・ウマ・イヌ
- 写真図版78 魚類・海棲哺乳類
- 写真図版79 骨角器

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

今回の調査地である野手西方地区は、明石川に面し、堤防上を除き水田地帯が広がる地域に当たり、新方遺跡の西南端に位置する。

当地区において土地区画整理事業の計画が起り、平成7年度に事業主体となる大和ハウス工業株式会社より、文化財課に試掘調査依頼書が提出された。これを受けて平成7年度に実施した試掘調査の結果により、事業地全域において弥生時代から中世における文化財の存在が明らかとなった。協議の結果、大和ハウス工業株式会社が財団法人淡神文化財協会に発掘調査事業を依頼し、兵庫県教育委員会および神戸市教育委員会の指導のもと、平成7年度より調査を開始することになった。平成8年度から平成12年度は、震災復興事業に伴う早期の住宅供給を目的として、神戸市教育委員会が主体となる調査を開始した。当教育委員会が実施した調査は、第1次・第2次・第4次・第5次・第6次の各調査である。兵庫県教育委員会の震災復興班が主体となる調査は、平成10年度に実施した第3次調査が該当する。

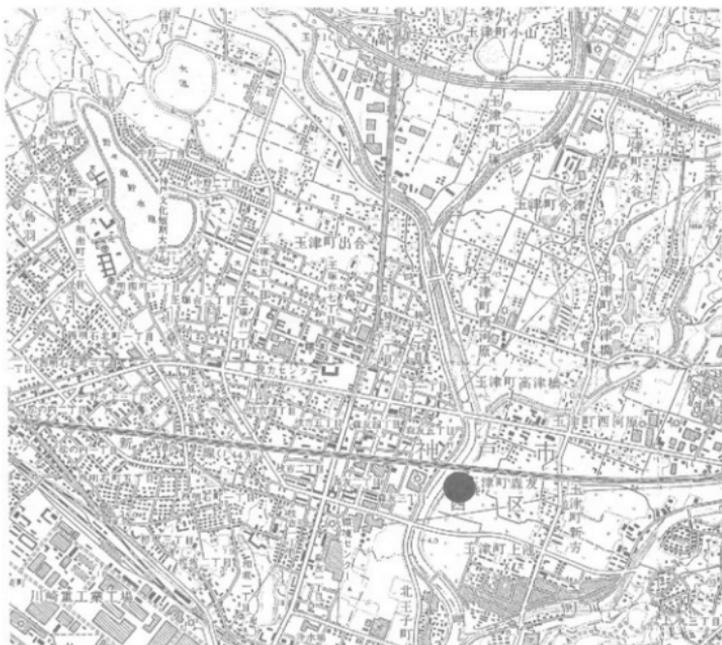
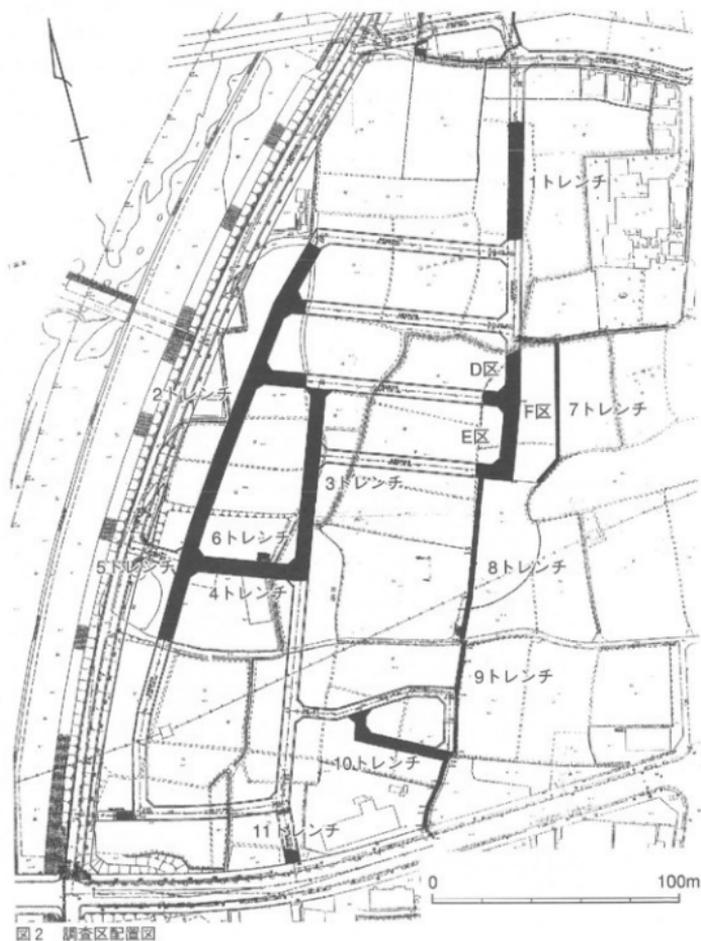


図1 調査地位位置

第2節 調査の方法

今回報告する弥生時代前期関連の調査区を図2に示した。第1次調査は、幅6mの調査区(1~4トレンチ)を設定した。第2次調査は、財団法人淡神文化財協会による調査中断に伴い、幅6mの調査区(B~F区)を継続調査した。第5次調査は、重要遺跡の範囲確認を目的とする調査区は、事業地の東端部に設定し、幅2mの調査区(7トレンチ)を設定した。水路設置予定箇所については幅3mの調査区(8トレンチ)を設定した。



第3節 調査の経過と概要

本報告の記述範囲 4年度に及ぶ野手西方地区の調査では、遺物収納コンテナ1,100箱を越える遺物の出土があった。今回の報告では、整理作業が完了した弥生時代前期の資料について記述を進める。弥生時代中期以降の資料については、整理作業の進展を待って、順次報告を進める予定である。

各調査の経過と成果の概要は下記のとおりである。

第1次調査 (1～4トレンチ)

平成8年10月21日から平成9年7月25日まで調査を実施した。工事により影響を受ける道路計画部分について、約2,200㎡の調査を行った。(延べ13,200㎡)

弥生時代前期から近世に至る遺構が検出された。弥生時代前期の人骨を伴う埋葬遺構や古墳時代中期後半から後期にかけての竪穴住居群、掘立柱建物群、奈良・平安時代の掘立柱建物群等が特記される。今回の報告では、弥生時代前期の資料を対象とする。

第2次調査 (A～F区)

財団法人淡神文化財協会が平成9年4月より調査を実施していたが、古墳時代中期の遺構面の調査途中で中断した。放置された遺構の保全と土層の調査を実施するため、平成9年9月5日から11月28日まで、約540㎡について神戸市教育委員会が引き続き調査を行った。(延べ1,620㎡)。弥生時代前期から古墳時代後期に至る遺構が検出された。今回の報告では、弥生時代前期の資料を対象とする。

第5次調査 (7・8トレンチ)

平成11年8月23日から平成11年12月24日まで調査を実施した。第2次調査区のF区に東接する調査区で東および南に接する調査区である。重要遺跡の範囲確認調査(7トレンチ)と、水路計画部分(8トレンチ)に相当する。(延べ2,700㎡)弥生時代前期から中期、古墳時代中期の人骨や古墳時代中期後半の竪穴住居群等が検出された。今回、弥生時代前期の資料を報告対象とする。

第4節 調査組織

各調査年度の発掘調査組織は以下のとおりである。

平成8年度

(第1次調査)

神戸市文化財保護審議会(埋蔵文化財部会委員)

檀上重光 前神戸女子短期大学教授

和田晴吾 立命館大学文学部教授

山岸常人 神戸芸術工科大学助教授

神戸市教育委員会

教 育 長 鞍本昌男 社会教育部長 矢野栄一郎

文 化 財 課 長 杉田年章 社会教育部主幹 奥田哲通

埋蔵文化財係長 渡辺伸行 文化財課主査 丹治康明 丸山潔
 事務担当学芸員 菅本宏明 松林宏典 橋詰清孝
 保存科学担当学芸員 千種浩
 調査担当 兵庫県教育委員会埋蔵文化財事務所
 工藤忍（青森県教育委員会から支援）
 神戸市教育委員会
 発掘調査担当学芸員 山口英正 阿部功

平成9年度 (第1・2次調査)

神戸市文化財保護審議会（埋蔵文化財部会委員）

檀上重光 前神戸女子短期大学教授
 工業普通 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長
 和田晴吾 立命館大学文学部教授

神戸市教育委員会

教育長 鞍本昌男 社会教育部長 矢野栄一郎
 文化財課長 杉田年章 社会教育部主幹 奥田哲通
 埋蔵文化財係長 渡辺伸行
 文化財課主査 丹治康明 丸山潔 菅本宏明
 事務担当学芸員 安田滋 橋詰清孝 阿部功
 保存科学担当学芸員 千種浩
 調査担当 兵庫県教育委員会埋蔵文化財事務所
 半澤幹雄（千葉県教育委員会から支援）
 神戸市教育委員会
 発掘調査担当学芸員 山口英正 浅谷誠吾

平成10年度 (第3次調査・人骨関連調査・遺物整理)

神戸市文化財保護審議会（史跡・考古担当委員）

檀上重光 前神戸女子短期大学教授
 工業普通 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長
 和田晴吾 立命館大学文学部教授

神戸市教育委員会

教育長 鞍本昌男 社会教育部長 矢野栄一郎
 文化財課長 杉田年章 社会教育部主幹 奥田哲通
 埋蔵文化財係長 渡辺伸行
 文化財課主査 丹治康明 丸山潔 菅本宏明
 事務担当学芸員 東喜代秀 遺物整理担当学芸員 平田朋子
 保存科学担当学芸員 千種浩 中村大介
 調査担当 兵庫県教育委員会埋蔵文化財事務所
 中川渉 深江英憲

平成11年度 (第4・5・6次調査)

神戸市文化財保護審議会（史跡・考古担当委員）

檀上重光 前神戸女子短期大学教授
 工楽善通 ユネスコアジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長
 和田晴吾 立命館大学文学部教授

神戸市教育委員会

教 育 長 鞍本昌男 社会教育部長 水田裕二
 文化財課長 大勝俊一 埋蔵文化財係長 渡辺伸行
 文化財課主査 丹治康明 丸山潔 菅本宏明
 事務担当学芸員 東喜代秀 井尻格 藤井太郎
 遺物整理担当学芸員 平田朋子
 保存科学担当学芸員 千種浩 中村大介
 発掘調査担当学芸員 山本雅和 山口英正 浅谷誠吾

平成12年度（人骨関連調査・遺物整理）

神戸市文化財保護審議会（史跡・考古担当委員）

檀上重光 前神戸女子短期大学教授
 工楽善通 ユネスコアジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長
 和田晴吾 立命館大学文学部教授

神戸市教育委員会

教 育 長 木村良一 社会教育部長 水田裕二
 文化財課長 大勝俊一 社会教育部主幹 渡辺伸行
 文化財調査係長係長 丹治康明
 文化財課主査 宮本郁雄 丸山潔 菅本宏明
 事務担当学芸員 西岡誠司 山口英正 東喜代秀 橋詰清孝
 遺物整理担当学芸員 谷正俊
 保存科学担当学芸員 千種浩 中村大介

平成13年度（人骨関連調査・遺物整理・報告書作成）

神戸市文化財保護審議会（史跡・考古担当委員）

檀上重光 前神戸女子短期大学教授
 工楽善通 ユネスコアジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長
 和田晴吾 立命館大学文学部教授

神戸市教育委員会

教 育 長 木村良一 社会教育部長 岩畔法夫
 文化財課長 桑原泰豊 社会教育部主幹 渡辺伸行
 文化財課主査 宮本郁雄 丸山潔 菅本宏明 千種浩
 事務担当学芸員 口野博史 西岡誠司 齋木巖 橋詰清孝
 遺物整理担当学芸員 黒田恭正
 保存科学担当学芸員 中村大介
 報告書作成担当学芸員 山口英正

平成14年度 (人骨関連調査・遺物整理・報告書作成)

神戸市文化財保護審議会(史跡・考古担当委員)

檀上重光 前神戸女子短期大学教授

工楽善通 エネスコアジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長

和田晴吾 立命館大学文学部教授

神戸市教育委員会

教 育 長 西川和機 社会教育部長 岩畔法夫

文化財課長 桑原泰豊 社会教育部主管 波辺伸行 宮本郁雄

文化財課主査 丸山 潔 菅本宏明 千種浩

事務担当学芸員 内藤俊哉

遺物整理担当学芸員 関野豊

保存科学担当学芸員 中村大介

報告書作成担当学芸員 山口英正

- [参考文献] 山口英正・浅谷誠吾他「新方遺跡野手西方地区 第1次調査」〔平成9年度 神戸市埋蔵文化財年報〕神戸市教育委員会 2000
山口英正・東喜代秀「新方遺跡野手西方地区 第2次調査」〔平成9年度 神戸市埋蔵文化財年報〕神戸市教育委員会 2000
山口英正・浅谷誠吾「新方遺跡野手西方地区 第5次調査」〔平成11年度 神戸市埋蔵文化財年報〕神戸市教育委員会 2002

第Ⅱ章 地理的環境と歴史的環境

第1節 地理的環境

神戸市は兵庫県南東部に位置する。市域の西半部は、明石川とその支流により形成された丘陵部と平野からなる。明石川流域は、繰り返されてきた氾濫により、中・下流域に平野部を形成している。市内有数の遺跡密集地帯がこれらの平野部に展開し、特に中・下流域は大規模な遺跡が点在する。集落の多くは、河岸段丘上に居住域を形成し、水系をコントロールしやすい低湿地に生産域を設けている。

新方遺跡は、明石川とその支流である伊川の合流する地区の上流側に広がる広範な遺跡である。両河川によって形成された沖積地上に、弥生時代から近世に至る遺構が、東西1.5km、南北1kmの範囲から検出されている。

今回報告する野手西方地区は、新方遺跡の南西端部に位置し、明石川左岸の低い河岸段丘の縁部とその後背湿地に立地する。現標高は約8~10mで、海岸部まで約3kmの平坦な地形にあたる。



図3 神戸市位置図

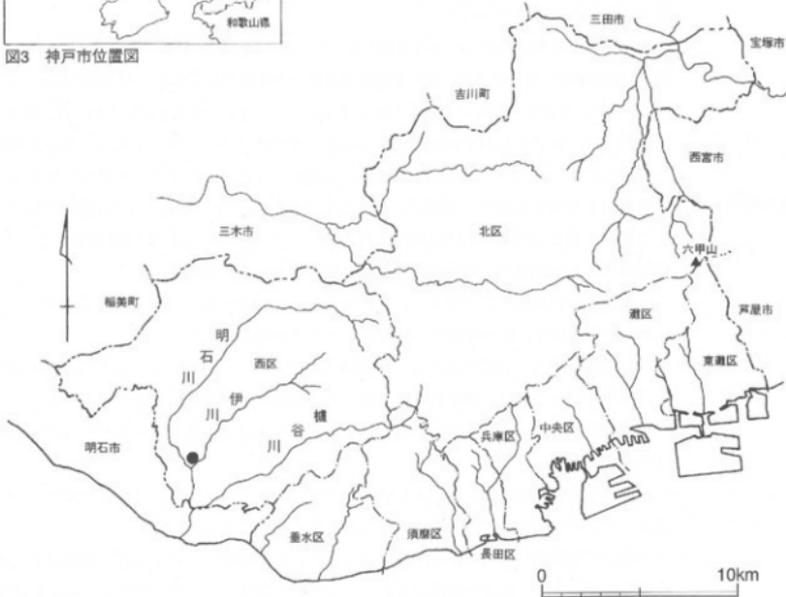


図4 遺跡位置図

第2節 歴史的環境

当地域は、明石川およびその支流によって形成された低位段丘が広がり、近年の宅地開発により景観に大きな変化が見られるが、市内では比較的農地が広がる地域である。まとまった可耕地を持つ平野部は、開発の影響を免れ、その大半は埋蔵文化財の包蔵地となっている。以下、明石川下流域の弥生時代の遺跡を中心に概要を記す。

縄文時代

明石川下流域において、縄文時代以前の集落の様相が明らかな遺跡は少ない。後期の遺物は、片山遺跡、印路遺跡、南別府遺跡、大畑遺跡、堅田遺跡等で確認されている。晩期の遺物は玉津田中遺跡、堅田遺跡等で確認されている。

弥生時代

吉田遺跡と片山遺跡は、弥生時代の最も早い段階に、人々の営みが開始した集落である。次いで周辺の新方遺跡や玉津田中遺跡などの拠点集落が出現する。両遺跡ともに中核的な性格を持つ遺跡であり、盛衰はあるが中世に至るまで継続的に集落を営んでいる。新方遺跡は、前期の前半段階に成立し、微高地上で居住域、墓域が確認されている。中段階で遺構の数を増す。玉津田中遺跡は、前半段階に段丘上に集落を展開し、中段階に規模を減少させる。

前期後半段階から中期前半には、前時代からの集落は継続して発展する。新方遺跡では玉生産が始まり、生活域の拡大が見られる。玉津田中遺跡も最盛期を迎え、大規模な集落へ発展する。また、新たな集落の形成が見られ、沖積地上に今津遺跡、片山遺跡、出合遺跡等の分村的な集落が現れる。

中期後葉には集落形成に大きな変化が見られる。墓域を除く遺構が平野部から激減し、丘陵上に表山遺跡、頭高山遺跡、城ヶ谷遺跡等の新たな集落が展開する。当時期に形成された集落は、ほとんどが丘陵上に立地し、平野では周溝墓を主とする墓域が確認される場合が多い。

後期には、再び集落が平野部に戻るものが大半であるが、一部は丘陵上に集落を継続する集落もあり、池上口の池遺跡や高津橋大塚遺跡のように、新出する集落も存在する。

古墳時代

明石川下流域で最も古い古墳は、伊川右岸の丘陵上に築かれた天王山古墳群である。5基で構成される古墳群のうち2基が前期古墳である。継続して白水氈塚古墳が築かれる。柄鏡形の前方後円墳で、埴輪列および埴輪棺の調査が行われている。

中期には明石川右岸に吉田王塚古墳が築かれる。周壕を巡らす前方後円墳であり、平成12年度の周壕修復に伴う調査で、埴輪列やテラスが確認された。

中期後半以降は、古墳の数が増大し丘陵上に古墳群が形成される。明石川本流と榎谷川の分岐点の段丘上では、高津橋大塚遺跡、水谷遺跡等で古墳群の形成が見られる。

後期になると、下流域で古墳の遺構は減少し、中流域の丘陵上に小規模の古墳、木棺墓が形成される。

古墳時代前期の集落は、弥生時代後期に再形成された場所に立地する場合が多く、平地では、玉津田中遺跡、古田南遺跡等で大きな集落を形成する。

古墳時代中期から後期に継続する集落は多く、新方遺跡、古田南遺跡、寒風遺跡で多数の堅穴住居址や獨立柱建物が発出されている。新方遺跡では、滑石製の玉生産が最盛期を迎える。伊川左岸の寒風遺跡では、大壁造り住居群が発出され、他の集落とは性格を異に

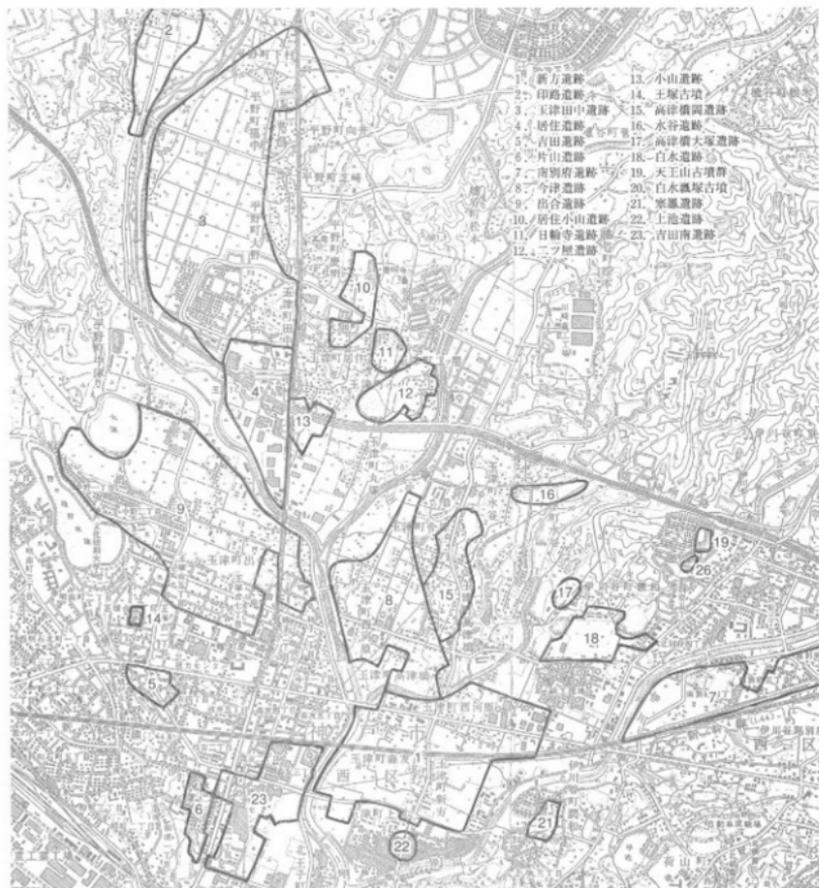


図5 周辺遺跡分布図

する集落が短期間営まれている。

古代 古代山陽道関連の遺跡が多く、吉田南遺跡では奈良時代から平安時代の整然と配置された官衙関連と考えられる掘立柱建物群が検出されている。平安時代には、白水遺跡等で集落が形成されており、梵鐘製造遺構など特殊な遺構が検出されている。

中世 明石川流域の中世の集落は、現在の集落立地の傾向と近い。顕著な特色を示す遺跡は少なく、農村集落として安定した状態を保っている。特筆すべき遺跡としては、上流域においては、11世紀代に神出古窯址群で操業が開始され、東播系須恵器の主要窯として発展する。玉津田中遺跡では、12世紀末から13世紀の方形区画の居館が検出されている。

第3節 新方遺跡の概要

新方遺跡は、これまで40次を超える調査が実施されてきた。広範な範囲に遺跡が広がるため、各地区において様相が大きく異なる。以下、各地区別に調査概要を記述する。なお西に隣接する西河原遺跡についても、今回報告する西側微高地と関連が深いと考えられるため、合わせて記述する。

調査地区の
名称

基本的に小字名を地区名としている。

町名	玉津町			伊川谷町
大字名	西河原	高津橋	新方	潤和
小字名	七反田	高ナギ	東方	大日
	野手	丁の坪	北方	堂後
	村中		西方	走り上
				平松

表1 新方遺跡地区名一覧

- 七反田地区 弥生時代前期後半の供献土器や土器棺等、弥生時代中期の周溝墓、木棺墓、奈良・平安時代の齊串、人形木製品などが検出されている。
- 村中地区 弥生時代中期前半の円形周溝墓、古墳時代の溝が検出されている。
- 高ナギ地区 弥生時代中期後葉の焼失竪穴住居、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居、鎌倉時代の井戸、掘立柱建物、呪符木簡等が出土している。
- 丁の坪地区 弥生時代中期前半と古墳時代後期の玉造関連遺物、周溝の斜面に張石を施した弥生時代中期の周溝墓、木棺墓、土坑墓で構成される墓域、弥生時代中期の竪穴住居・掘立柱建物、古墳時代から中世の自然流路が検出されている。
- 東方地区 弥生時代前期から中期前半の溝・河道・土坑・木製品、弥生時代中期・後期末の竪穴住居・土坑、中世のピットが検出されている。
- 北方地区 縄文時代晩期の浅鉢、弥生時代前期から中期の水田・溝・河道・土坑、弥生時代後期末の居住域、古墳時代後期の溝・掘立柱建物・扉材を井戸枠に転用した井戸、奈良時代後期及び中世の掘立柱建物が検出されている。
- 西方地区 平安時代から鎌倉時代の掘立柱建物群が検出されている。
- 大日地区 弥生時代中期・後期の竪穴住居・木棺墓、古墳時代以前の水田、弥生時代中期前半と古墳時代後期の玉造関連遺構・遺物・竪穴住居、中世の掘立柱建物・溝が検出されている。
- 堂後地区 弥生時代の自然流路と古墳時代から平安時代の段状遺構、溝が検出されている。
- 走り上地区 弥生時代後期末の居住域が検出されている。調査区の制約により詳細は不明であるが、古墳時代後期の古墳の存在を想定させる遺構や遺物が検出されている。
- 平松地区 弥生時代前期の溝、弥生時代後期の居住域、平安時代から中世にかけての掘立柱建物・鍛冶関連遺構などが検出された。
- 西河原遺跡 弥生時代末から古墳時代の包含層が検出され、古墳時代の微高地が検出されている。

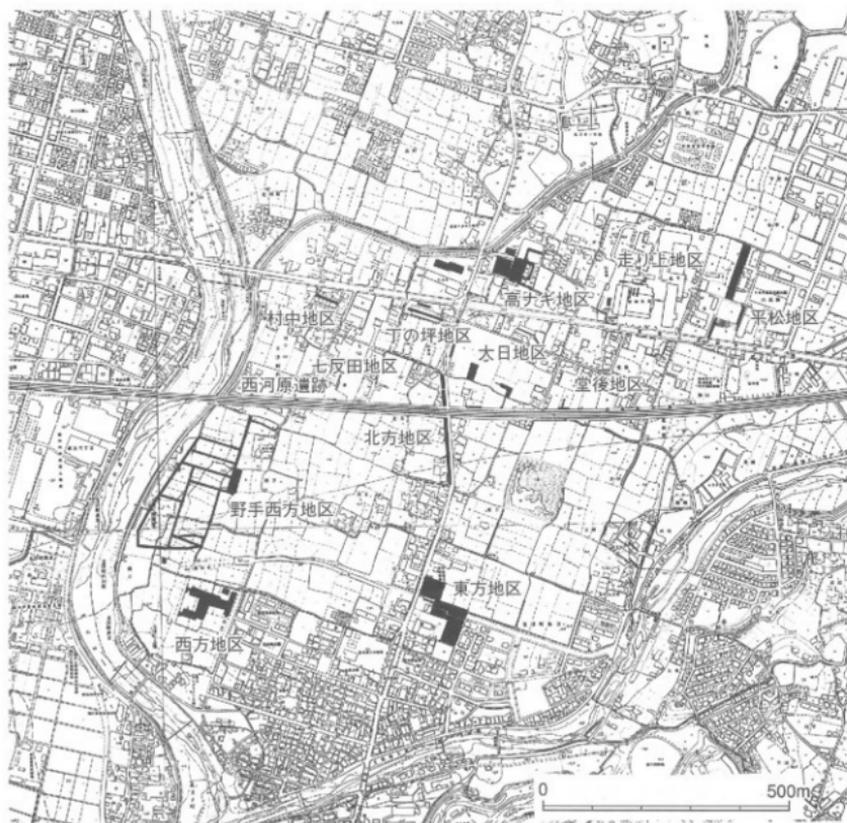


図6 調査地区位置図

小 結

新方遺跡は、縄文晩期以降、近世に至るまで継続する遺跡である。縄文時代晩期の遺構は検出されていないが、弥生時代前期以降、明石川下流域の拠点集落として継続している。

弥生時代前期には、野手西方地区、七反田地区を中心とする現明石川沿いの微高地に集落を形成する。弥生時代中期以降に集落が拡散し、丁の坪、北方、大日、東方、高ナギの各地区で新たに集落が営まれ、大きな展開を見せる。野手西方地区、大日地区、丁の坪地区では、当遺跡を特徴付ける玉造りが始まる。中期後半には、高ナギ地区以外で居住域が確認されず、周溝墓等の遺構が確認されるに留まる。弥生時代後期には生活の痕跡がほとんど確認されず、明石川対岸の吉田南遺跡や、丘陵上に集落が移動する。古墳時代中期後半以降に再び大集落を形成する。数多くの掘立柱建物群、竪穴住居群が展開し、野手西方地区、丁の坪地区、大日地区で滑石製の玉製品や未製品を伴う遺構が検出されており、玉造りの集落として最盛期を迎える。走り上地区では、古墳の存在が想定できる遺構が検出

されている。以後、吉田南遺跡と共に奈良時代から平安時代に至るまで、中核的な集落として継続する。平安時代後半以降は、集落の規模を縮小し、一般的な農村集落の様相を呈する。

註

- (1) 本来は、野手地区と西方地区に分けるべきであるが、両地区にまたがる事業であるため、野手・西方地区と呼称する。
- (2) 調査地の名称は、「地点」と「地区」が混用されている。本報告書では、面的な広がりを出す「地区」を用いる。参考文献に関しては、当該報告の記述名称に従った。

(参考文献)

- | | |
|-------|---|
| 走り上地区 | 川上厚志 「新方遺跡」『平成11年度年報』神戸市教育委員会 2002 |
| 東方地区 | 渡辺伸行 「新方遺跡 東方地区第1次調査」『昭和59年度年報』神戸市教育委員会 1986 |
| | 渡辺伸行 「新方遺跡 東方地区第2次調査」『昭和59年度年報』神戸市教育委員会 1986 |
| | 渡辺伸行 「新方遺跡 東方地区第3次調査」『昭和60年度年報』神戸市教育委員会 1988 |
| | 佐伯二郎 「新方遺跡 東方地区」『平成2年度年報』神戸市教育委員会 1993 |
| | 前田佳久 上藤 忍 「新方遺跡 東方地区第5次調査」『平成9年度年報』神戸市教育委員会 2000 |
| | 富山直人 「新方遺跡 東方地区第6次調査」『平成9年度年報』神戸市教育委員会 2000 |
| | 富山直人 「新方遺跡 東方地区第7次調査」『平成10年度年報』神戸市教育委員会 2001 |
| 七反田地区 | 輪老拓治 「山陽新幹線地内新方遺跡」『兵庫県文化財報告書第Ⅲ巻(附)』兵庫県教育委員会 1970 |
| | 浅岡俊夫 「新方遺跡調査概要」神戸市教育委員会1977 |
| | 東 喜代秀 阿部 功 「新方遺跡 東方地区第5次調査」『平成9年度年報』神戸市教育委員会 2000 |
| | 佐伯二郎 「新方遺跡 七反田地区」『平成10年度年報』神戸市教育委員会 2001 |
| 丁の坪地区 | 「地下におもむ神戸の歴史展」神戸市立考古館 1980 |
| | 丸山 潔 「新方遺跡(丁の坪地点)」『昭和57年度年報』神戸市教育委員会 1982 |
| | 丸山 潔 「新方遺跡発掘調査概要」神戸市教育委員会1984 |
| | 山本雅和 「新方遺跡 丁の坪地点第4次調査」『平成2年度年報』神戸市教育委員会 1993 |
| | 佐伯二郎 「新方遺跡 丁の坪地区第5次調査」『平成6年度年報』神戸市教育委員会 1997 |
| | 富加見泰彦 和田 理啓 「新方遺跡 丁の坪地区第6次調査」『平成9年度年報』神戸市教育委員会 2000 |
| 西方地区 | 関野 豊 「新方遺跡 西方地区第1次調査」『平成7年度年報』神戸市教育委員会 1998 |
| | 東 喜代秀 「新方遺跡 西方地区第2次調査」『平成7年度年報』神戸市教育委員会 1999 |
| | 東 喜代秀 阿部 功 「新方遺跡 西方地区第2次調査」『平成8年度年報』神戸市教育委員会 1999 |
| | 東 喜代秀 阿部 功 「新方遺跡 西方地区第3次調査」『平成9年度年報』神戸市教育委員会 2000 |
| 村中地区 | 丹治康明 「新方遺跡 村中地点」『昭和59年度年報』神戸市教育委員会 1986 |
| 平松地区 | 東 喜代秀 「新方遺跡(平松地点)」『平成2年度年報』神戸市教育委員会 1993 |
| | 西岡誠司 藤井太郎 石島三和 「新方遺跡 平松地区第3次調査」『平成9年度年報』神戸市教育委員会 2000 |
| 北方地区 | 喜谷美実 「新方遺跡調査概要」神戸市教育委員会1977 |
| | 松林宏典 「新方遺跡 北方地点第2次調査」『平成4年度年報』神戸市教育委員会 1995 |
| | 浅谷誠吾 「新方遺跡 北方地点第3次調査」『平成5年度年報』神戸市教育委員会 1996 |
| | 浅谷誠吾 「新方遺跡 北方地点第3次調査」『平成6年度年報』神戸市教育委員会 1997 |
| | 内藤俊哉 「新方遺跡 北方地区第4次調査」『平成6年度年報』神戸市教育委員会 1997 |
| | 東 喜代秀 「新方遺跡 北方地点第5次調査」『平成6年度年報』神戸市教育委員会 1997 |
| 大目地区 | 丹治康明 「新方遺跡 大目地点第1次調査」『昭和57年度年報』神戸市教育委員会 1982 |
| | 東 喜代秀 「新方遺跡 大目地点第2次調査」『平成6年度年報』神戸市教育委員会 1997 |
| | 佐伯二郎 「新方遺跡 大目地点」『平成6年度年報』神戸市教育委員会 1997 |
| 高ナギ地区 | 丹治康明 「新方遺跡 高ナギ地点」『昭和59年度年報』神戸市教育委員会 1986 |
| | 菅本宏明 「新方遺跡 高ナギ地区第2次調査」『昭和62年度年報』神戸市教育委員会 1990 |
| 西河原遺跡 | 渡辺 昇 久保弘幸 「西河原遺跡」兵庫県教育委員会 1992 |

第4節 野手西方地区の概要

現況

事業予定地の現況は、水田として利用されている。先行調査により、事業予定地の中央に南北方向に広がる低湿地が存在することが明らかになっている。この低湿地からは、遺構、遺物の検出がほとんど無い。明石川の氾濫時には水没していたようで、粗砂とシルト質の土層の堆積が交互に繰り返されている状況が、広い範囲で確認できる。

遺構面は、低湿地の東西の微高地上に広がっており、弥生時代前期から近世に至るまで、濃密な遺構の分布が確認された。東側微高地と西側微高地では、各遺構面の残存状況に大きな差がある。

基本地形

西側微高地（第1次調査区）は遺構面の遺存状況が良好で、最大9面の遺構面が検出された。河川の影響を強く受けたことが幸いし、自然堆積層が各遺構面の保護層となっている。しかし、古墳時代の積極的な土地利用により、弥生時代の遺構面に大きな影響を与えている。そのため、弥生時代前期から中期中葉の遺構面の峻別が困難であった。弥生時代前期の生活面に相当するのは、第8・9遺構面である。

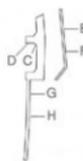
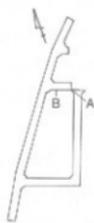
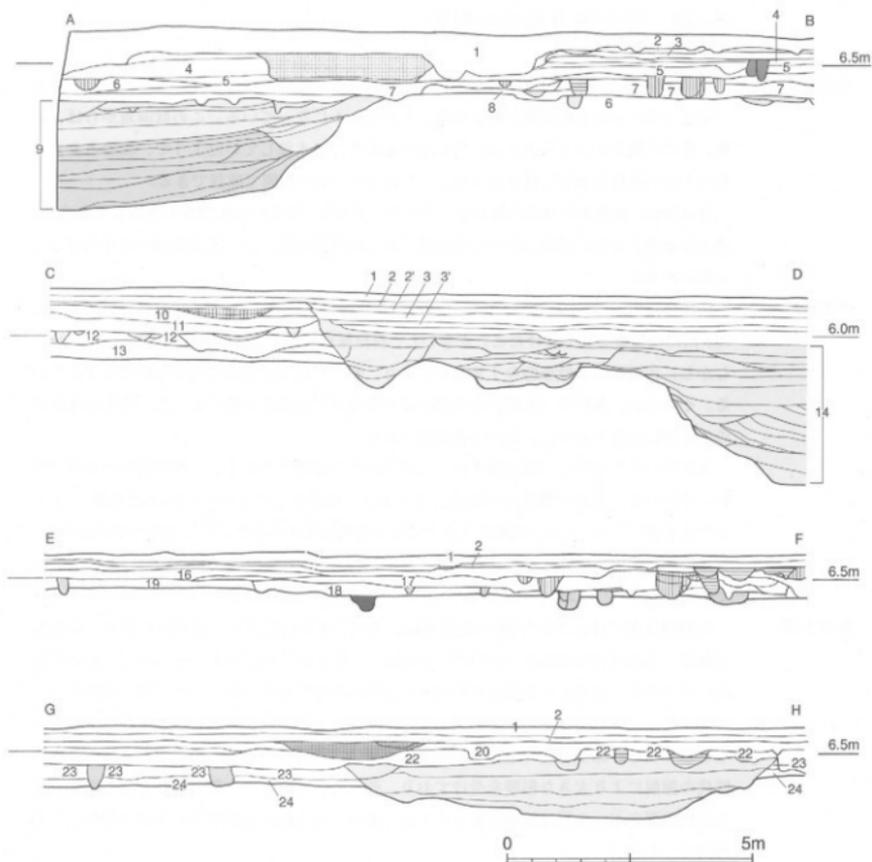
東側微高地（第2次・第5次調査区）は事業地内では標高が高く、自然堆積層の形成は弱い。そのため、後世の耕作地の造成により大きな影響を受けている。特に北東部（7トレンチ北半部）については、現耕作土直下で弥生時代前期から中世に至る遺構が検出された。弥生時代前期の生活面に相当するのは、第2次調査区では、第6・7遺構面および復旧遺構面である。7トレンチは第4・5遺構面、8トレンチは第3・4遺構面である。

基本土層

西側微高地で確認された9面の遺構面は、近代、平安時代後半、奈良時代後半、古墳時代後期、古墳時代中期2面、弥生時代中期後半、弥生時代中期前半、弥生時代前期の遺構面に相当する。安定した生活面を形成する古墳時代中期から後期にかけては、粘質の強いシルト層が良好な遺物包含層を形成している。他の土層は砂質の強いシルト質の上壤を基本としている。弥生時代の遺物を包含する土層は古墳時代中期のベース層であるが、古墳時代の掘削により大きな影響を受けており、弥生時代前期から中期の遺物を混在する。弥生時代前期のベース層は淡黄灰色シルト層であり、基本的に西側微高地全域で検出される地山層である。

東側微高地で検出された遺構面は、近代、平安時代後半、古墳時代後期、中期2面、弥生時代中期、弥生時代前期の遺構面に相当する。西側微高地と比較すると各層の堆積が薄く、粘質の強いシルト質の土壌を基本としている。この特徴は北東部で顕著であり、土壌の流人の少ない安定した立地を示しているといえる。弥生時代前期のベース層は黄灰色シルト層で、東側微高地全域で検出される地山層である。

両側の微高地に挟まれた調査区からは遺構面の存在は確認されなかった。遺物の出土も少ない。弥生時代中期前半以前は、微高地より1m程度低い湿地状の地形であったが、弥生時代中期前半には砂質層を基本とした堆積層により埋没している。以後、数枚の耕作土の堆積が見られ、現代に至るまで耕作地として利用されていたことが伺える。



- | | | |
|---|---|--|
| <p>1. 表土及び覆土
2. 埴土
3. 旧埴土
4. 暗灰色砂質土
5. 灰褐色砂質土
6. 暗灰色粘質土
7. 暗黄色粘質土
8. 暗灰色砂質土
9. 自然堆積層
(前期末～中期前半)
10. 暗灰色シルト質粘質土
11. 暗灰色シルト質粘質土
+ 12ブロック混じり</p> | <p>12. 黄灰色礫砂混じりシルト
13. 暗灰色礫砂
14. 自然堆積層 (中期前半)
15. 暗灰色シルト質粘質土
16. 15 + 淡灰色シルト混じり
17. 淡灰色シルト質粘質土
18. 暗灰色シルト質粘質土
19. 黒灰色シルト質粘質土
20. 灰褐色砂質土
21. 淡灰色粘質土
22. 暗褐色砂質土
23. 黒褐色砂質土
24. 淡灰色礫質砂</p> | <p>▨ 江戸時代遺構埋土
▨ 奈良～平安時代遺構埋土
▨ 古墳時代後期遺構埋土
▨ 古墳時代中期遺構埋土
▨ 弥生時代中期遺構埋土
▨ 弥生時代前期上面遺構埋土
▨ 弥生時代前期下面遺構埋土</p> |
|---|---|--|

図7 基本土層図

第Ⅲ章 第1次調査地点の調査

第1節 調査の概要

区画道路建設予定部分に、2トレンチから4トレンチの調査区を設定した。調査の結果、弥生時代前期から近世に至る9面の遺構面が検出された。調査成果を概略すると、弥生時代前期の墓域、中期前半の溝、中期中葉から後葉にかけての周溝墓2基、古墳時代中期後半の堅穴住居群、掘立柱建物群、奈良時代後半の井戸、平安時代の掘立柱建物群、近世の墓域等が検出されている。特に、今回報告する弥生時代前期の人骨を出土した溝状埋葬施設と、古墳時代中期後半の遺構、遺物量は特記される。以下、弥生時代前期の遺構面で検出された成果を記述する。

第2節 第9遺構面

西側微高地の最終遺構面である。弥生時代前期の遺構数は、上層で検出された遺構面に比べると少ない。微高地の南東の末端部に当たり、溝、土坑等が少数検出されたにとどまる。性格の判明した遺構は、埋葬行為に伴うものである。

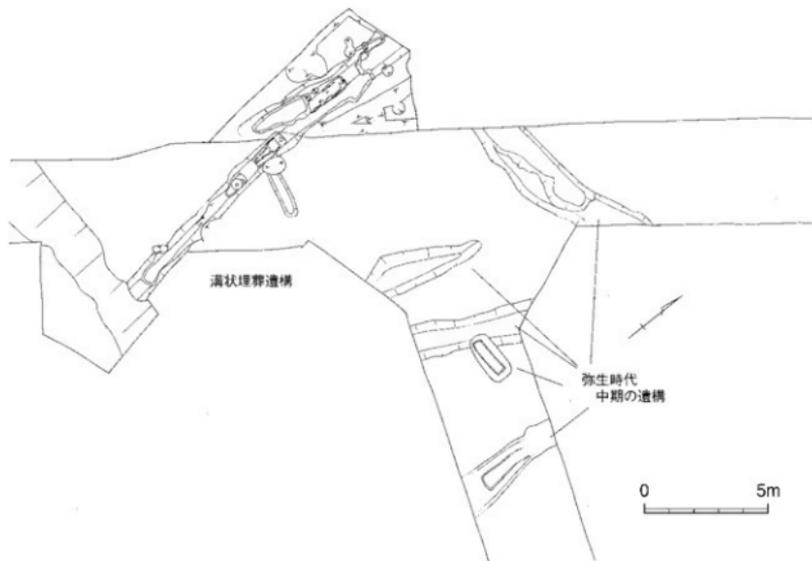


図8 第1次 第9遺構面平面図

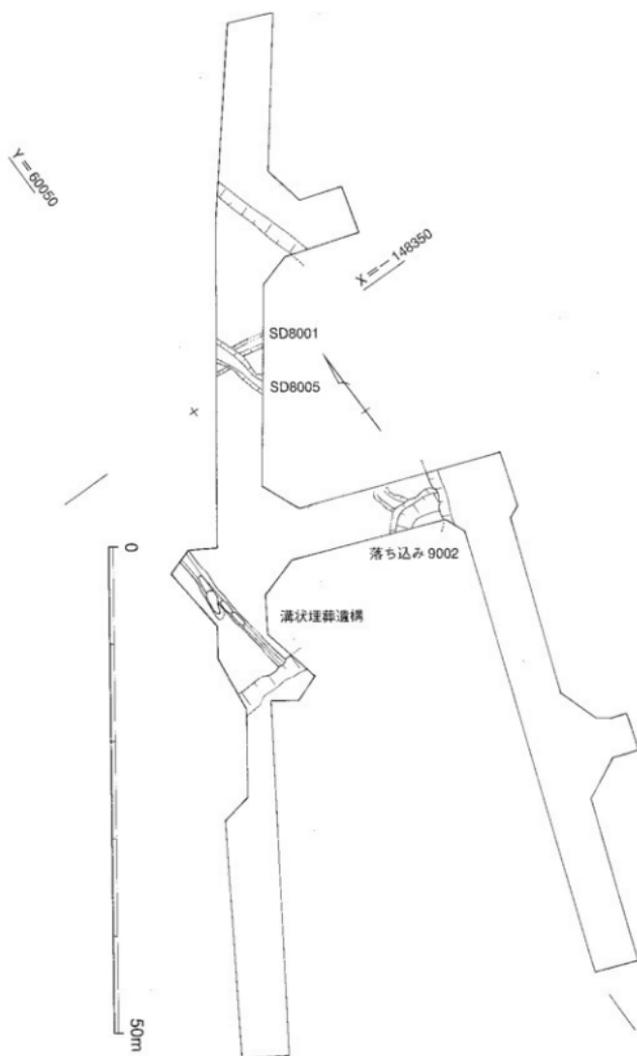


図9 第1次調査区平面図

(1) 溝状埋葬遺構

検出長14m、最大幅1.5m、深さ30cm程度の溝状遺構で、ほぼ南北方向に掘削されている。南端は微高地の端部に接続し、1.3m程度落ち込む。北端は調査区内では取東せず、さらに調査区外へ伸びる。堆積土の断面観察により、自然埋没していることが確認できた。この溝状遺構に平行または直行する同時期の溝は存在しないことから、方形周溝墓の周溝とは考えられない。

溝状遺構のプランが検出されたレベルで、大型鉢の底部が検出された。この段階では鉢を埋置した掘形は明確に確認できなかったが、若干掘り下げた段階で、3基の墓坑のプランと共に掘形が検出された。

人骨を伴う3基の墓坑と大型の鉢の掘形が、直線的に間隔を保って掘削されていることから、溝状遺構が完全に埋没して認識できなくなる前に、それぞれの掘削が短い期間に行われたと考えられる。上層遺構面とのレベル差は5cm程度であり、盛土の存在は確認できなかった。

検出された人骨は3体で、頭位はすべて北である。いずれも石楯を伴っていること、2体が伏臥伸展という

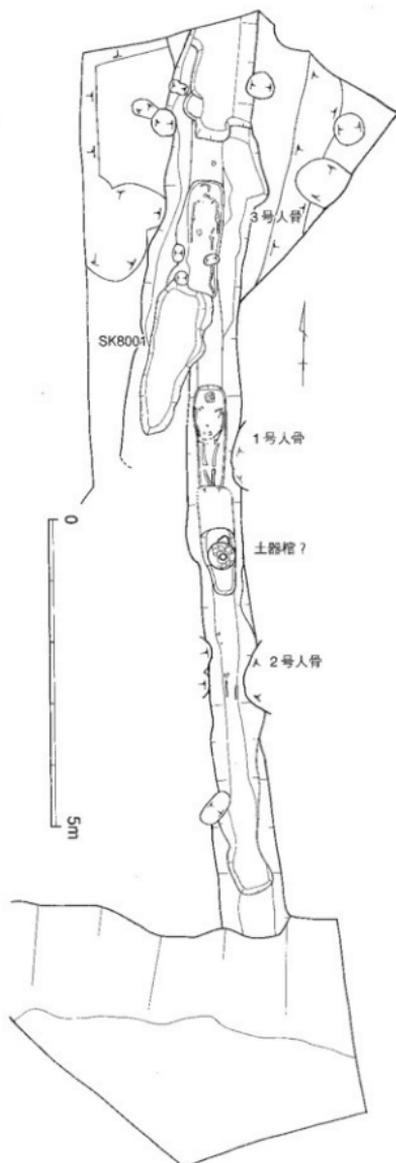


図10 第1次 溝状埋葬遺構平面図

墓坑

人骨

特異な姿勢で埋葬されていることが特記される。人骨の詳細な鑑定結果については、第VI章第2節を参照されたい。

1号人骨

墓坑の南側は、古墳時代中期後半の上坑掘削時の攪乱を受けており、全長は不明である。全長165cm以上、幅60cmの掘形の墓坑から、埋葬時の姿勢を保った人骨が検出された。木棺の痕跡は確認されなかった。墓坑内より人骨が出土した。

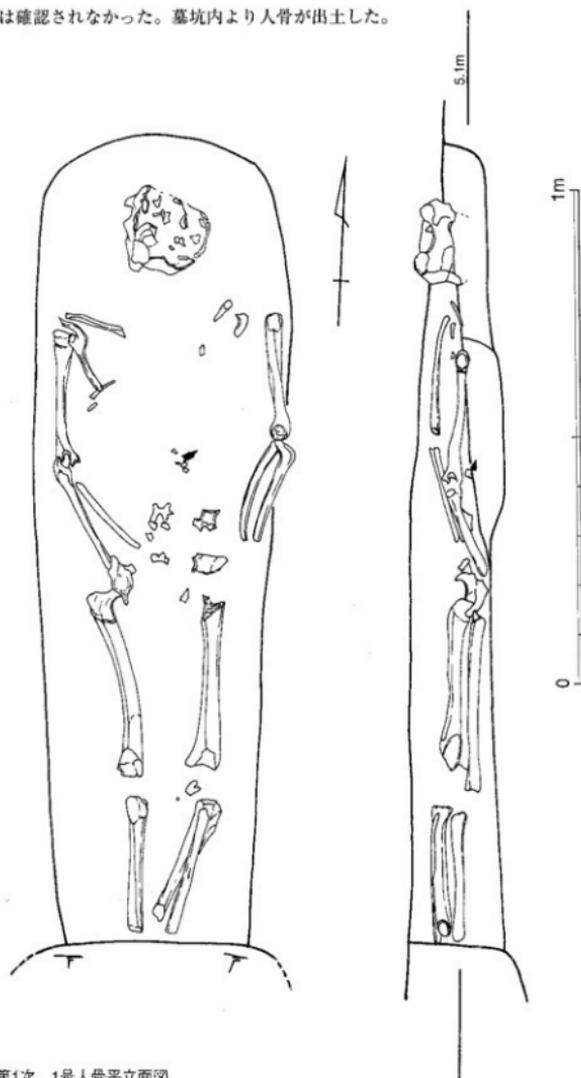


図11 第1次 1号人骨平面図

身長155から160cmの男性の人骨で、伏臥伸展の姿勢で埋葬されている。死亡年齢は壮年(25から40歳)と推察される。遺存する人骨は、頭蓋骨、四肢長骨、腰骨の一部、椎骨の一部であり、足骨は前述した古墳時代の攪乱により失われている。

主な特徴として、縄文人骨に特徴的な骨格を持っていること、残存する過半数の歯に虫歯状の疾患の跡があること、上下顎左右の犬歯を抜歯していること、エナメル質減形成が見られ、幼小児期に栄養失調状態を経験していること、石鏃が1点出土していることが挙げられる。

遺物

石鏃

墓坑内より出土した遺物は、石鏃と山形紋を施した壺(1)である。

人骨検出面と同じレベルで検出された。出土位置は、椎骨はほとんど残存していないが、胸椎または腰椎付近に相当する。サヌカイト製で無蓋式石鏃である。基部は凹基式で、刃部の両側縁部に抉りを持つ。

壺

墓坑底より小型壺の小片が出土した。1は頸胴界に段を持ち、下方に沈線を1条巡らす。段と沈線間を紋様帯とし、2条の山形紋を施す。外面は丁寧な横方向のミガキを施す。

2号人骨

掘形の形状は不明である。骨体の遺存状況が悪く、上下の顎骨および歯弓列と、両側の長骨の痕跡が検出されたにとどまる。歯の咬耗状況により死亡年齢は20から40歳であると推察される。顎骨及び脚部の長骨の出土状況から、伏臥伸展の姿勢で埋葬されていることがわかる。1号人骨の出土状況と共通点が多く、上下顎左右の犬歯を抜歯していること、エナメル質減形成が見られ、幼小児期に栄養失調状態を経験していること、伏臥伸展葬という特殊な姿勢で埋葬されていること、胸部付近から石鏃が1点出土していることが特記される。

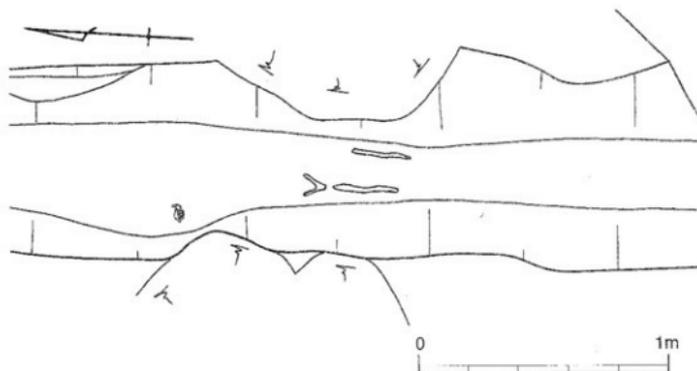


図12 第1次 2号人骨平面図

遺物 人骨に伴って出土した遺物は石鏃である。
 石鏃 サマカイト製で、無茎式石鏃である。基部は凹基式で、刃部の両側縁部に抉りを持つ。

3号人骨 墓坑の南側はSK8001の掘形により失われており、全長は不明であるが、190cm程度に取まると考えられる。幅60~70cmの掘形の埋土から、埋土の断面観察により木棺の痕跡が検出されたが、全体のプランは不明である。墓坑内より人骨が出土した。

身長160cmを超える男性の人骨で、仰臥伸展の姿勢で埋葬されている。死亡年齢は壮年後半から熟年(30から60歳)である。遺存する人骨は、頭蓋骨、下顎骨、右下肢骨を除く四肢長骨、腰骨の一部である。右下肢骨は古墳時代中期後半の柱穴掘削時の攪乱により失われている。右下顎骨に釘植する第1・第2大臼歯に、頬側に傾斜する異常な咬耗が見られる。草や植物繊維等のなめし作業など、食物の咀嚼以外の用途に歯が使用されたと推察され、道具としての歯の使用を示す資料と言える。他の主な特徴として、縄紋的な骨格を持っている事、脚部以外の全身から17本の石鏃が検出されたことが挙げられる。

石鏃 石鏃の計測値は、表2に示した。出土状況に規則性はなく、上顎骨から腹部に至る18ヶ所でサマカイト製石鏃が検出された。石鏃の検出レベルは、人骨の検出レベル内に収まっている。先端部のNo11と基部のNo12

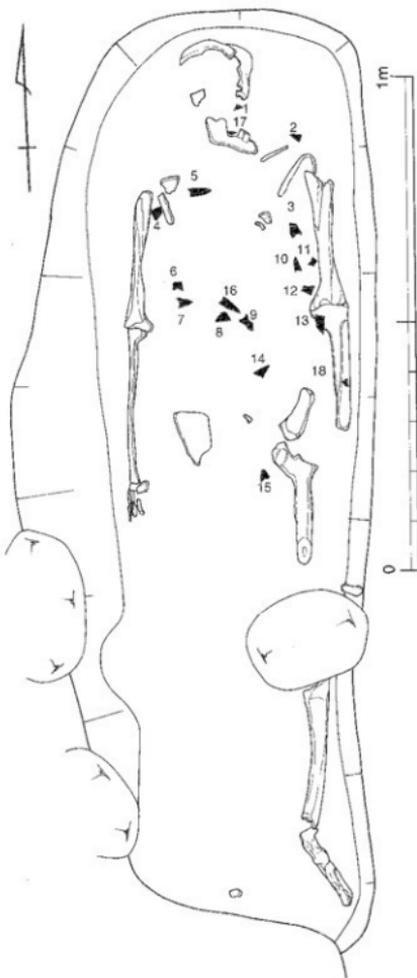


図13 第1次 3号人骨平面図

が接合し、遺体内の硬質部に射込まれて割れたと考えられる。石鏃は、17点すべて無茎鏃であり、基部の形状は凹基式である。7点が五角形鏃である。全長3cmを超える大型品が2点ある。他は全長2cm程度の資料が多い。

ミニチュア壺 3号人骨埋葬墓坑北側の土坑から、完形のミニチュアの壺(2)が出土した。頸胴界に段を持つ。口縁部は強く外反し、端部はやや面を持つ。体部外面に棒状の工具による刺突が多く見られるが、規則性は無い。口径6.4cmを測る。

大型鉢 1号人骨と2号人骨の間で、完形の大型鉢(4)と突帯紋土器の破片(3)が検出された。
出土状況 突帯紋土器の破片の上に伏せられた状態で埋置されている。器表面の残存状況は良好であり、長期間地表で晒されることなく、地中に埋められたと考えられる。鉢内には、約20センチ程度の堆積土が見られた。シルト及び精良な粘土の堆積で、後世の土砂の流入によるものである。堆積上の水選を試みたが遺物、骨等の検出は無かった。

形状 3は口頸界に段を持ち、口縁部はやや上外方に開く。端部は面を持つ。外面は縦方向のハケを施した後、胴部は横方向のミガキを施し、口縁部外面はナデを施す。胴部内面は横方向のミガキ、口縁部内面は斜め方向のハケを施したのち、横方向のミガキを施す。口径43.2cmを測る。

突帯紋土器 大型鉢の下から、約20cm角の突帯紋土器の破片が検出された。3は口縁部を北側に向け、外面を下にして検出された。口縁端部より1cm程度下がった箇所と頸胴部界の屈曲部に、低い突帯を貼付ける。突帯はいずれもキザミを施さない。器表面が風化しており、調整は不明である。断面観察により内頬接合が確認できる。胎土は明石川下流域および生駒西麓地域の胎土ではない。口縁部に歪みが見られ、頸部及び突帯部分から口径を復元したため若干の誤差はあると考えられるが、口径は約30.8cmを測る。

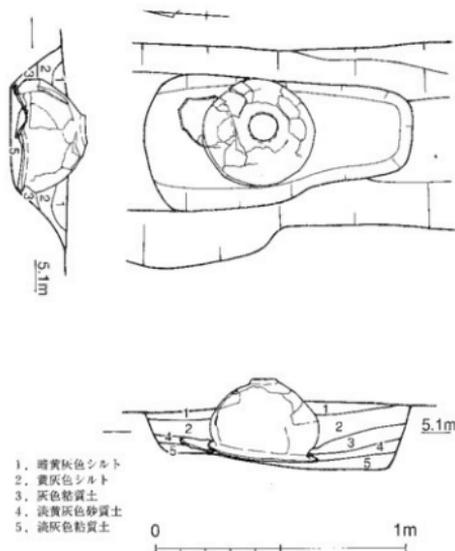


図14 第1次 大型鉢・突帯紋土器出土状況平立面図

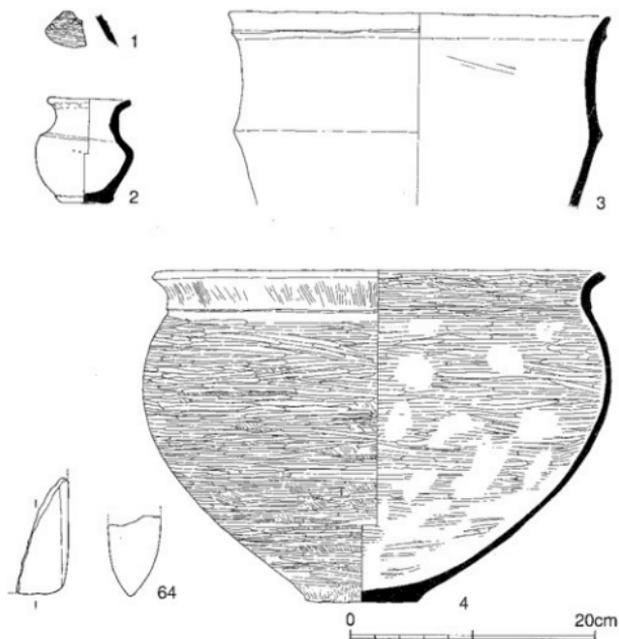


図15 第1次 溝状埋葬遺構出土遺物実測図

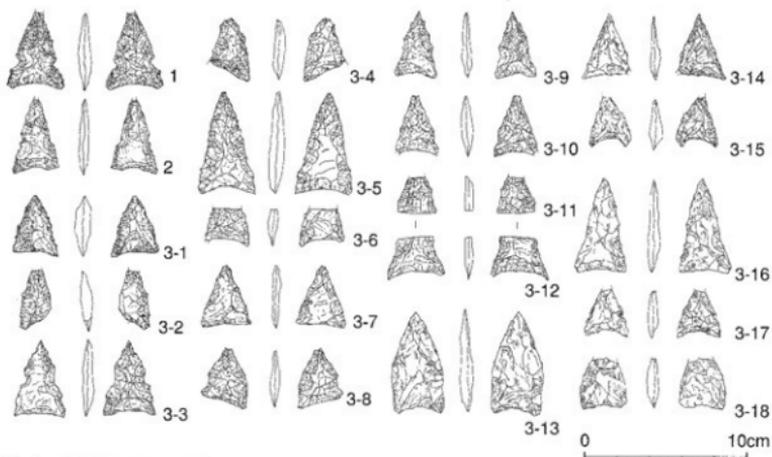


図16 第1次 人骨関連石鏃・石斧実測図

出土地	法量					出土地	法量				
	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	比重		長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	比重
1号人骨	23.9	17.6	3.8	1.08	2.51	3号人骨-9	21.2	12.8	2.6	0.42	2.63
2号人骨	22.7	14.2	2.9	0.77	2.66	3号人骨-10	18.7	13.8	3	0.57	2.59
3号人骨-1	18.9	15.4	4.4	0.75	2.68	3号人骨-11	11.1~	12.2~	2.7	0.38	2.71
3号人骨-2	18.1~	11.0~	3.5	0.56	2.55	3号人骨-12	12.5~	17.7	2.4	0.53	2.65
3号人骨-3	24	16.5	3	0.84	2.63	3号人骨-13	32.4	30.1	4	1.9	2.6
3号人骨-4	20.7~	14.3~	3.4	0.66	2.64	3号人骨-14	21.4	15.6~	3	0.59	2.57
3号人骨-5	31.9	17.2	3.9	1.49	2.61	3号人骨-15	15.6~	12.3	3.9	0.55	2.62
3号人骨-6	12.1~	13.9	3.1	0.46	2.56	3号人骨-16	29.5	16	3.6	1.26	2.63
3号人骨-7	19.4	15.4	1.9	0.54	2.7	3号人骨-17	1.5~	1.4	2.6	0.84	2.63
3号人骨-8	17.6~	13.6~	2.4	0.48	2.53	3号人骨-18	16.7~	13.8~	3.6	0.87	2.64

表2 第1次調査 石鍬計測値

(2) 土坑

SK8001

幅60cm、長さ140cm以上、深さ約30cmを測る。遺物の検出位置は土坑の堆積に沿っており、一括性は高い。

遺物 図示した遺物は壺蓋(5・6)、甕蓋(7)、甕(8~11)、甕(12~15)である。

壺蓋 5はつまみ部である。断面U字状に窪め、穿孔を施している。つまみ径1.4cmを測る。

6はほぼ直線的に大きく開く傘部を持ち、頂部に穿孔を施す。外面は横および斜め方向のミガキを施す。口径11.4cmを測る。

甕蓋 7は強く上方に立ち上がる傘部を持ち、口縁端部は丸い。外面の調整は不明であるが、内面は横方向のミガキを施す。口径20.4cmを測る。



図17 第1次 SK8001平面図

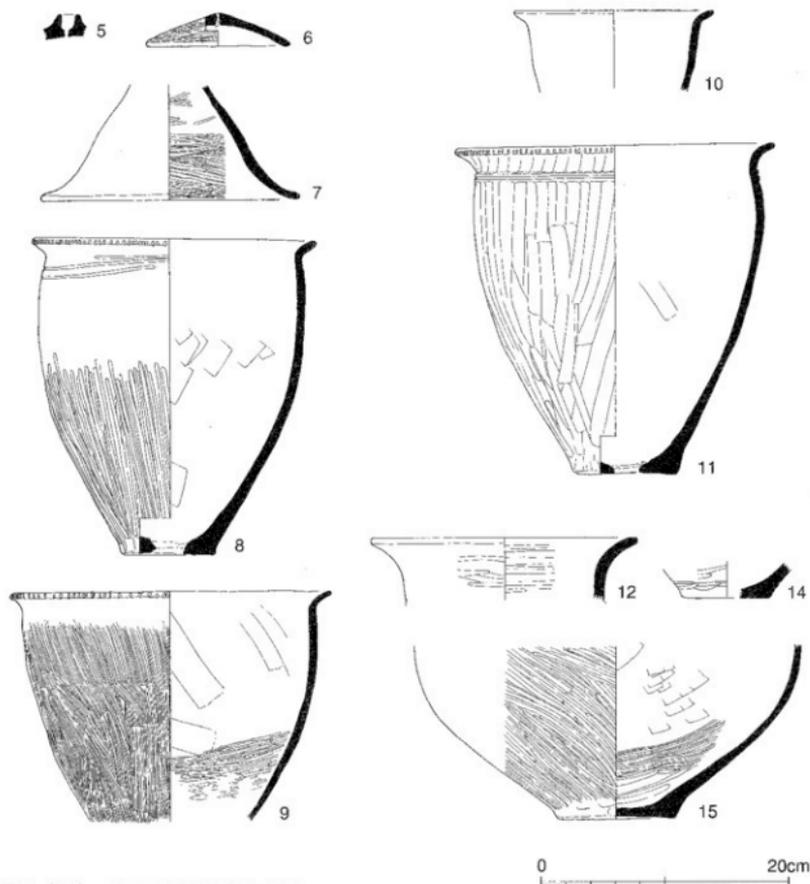


図18 第1次 SK8001出土物実測図(1)

甕

8は頸部下部に2周強連続する沈線を巡らす。如意形の口縁を持ち、端部にキザミを施す。胴部下半に縦方向のミガキを、内面は斜め方向の板ナデを施す。底面はわずかに凹み、焼成後に穿孔されている。口径22.5cmを測る。

9は無紋で、如意形の口縁を持ち、端部にキザミを施す。胴部外面は縦方向の板ナデを施し、胴部上方は板ナデ、下半は斜め方向のミガキを施す。口径25.1cmを測る。

10は口頸部下無紋の甕である。如意形の口縁を持ち、外面にハケの痕跡が残る。口径15.8cmを測る。

11は頸部に1条の沈線を伴う削出突帯を巡らす。如意形の口縁を持ち、端部はキザミを

施す。外面は縦方向の板ナデを施し、内面は斜め方向の板ナデの痕跡が残る。底面はわずかに凹み、焼成後の穿孔が見られる。胴部下半部に炭化物の焦げ付きが見られる。口径25.6cmを測る。

壺 12は頸部に1条の浅い沈線を巡らす。内外面共に横方向のミガキを施す。口縁端部はナデで丸く仕上げる。口径21.2cmを測る。

13は大型の壺で、頸部および頸胴界にハケナデによる削出突帯を巡らし、胴部上半部以上を内外面ともに横方向および斜め方向のミガキを施す。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は丸い。胴部下半部外面を横方向のハケナデ、内面を縦方向のハケナデを施す。口径44.2cmを測る。

底部 14・15は壺または鉢の底部である。

14は1条の沈線を巡らす。外面は横方向のナデ、内面はナデを施す。底径6.8cmを測る。

15は外面を斜め方向のミガキ、内面を斜め方向に板ナデを施した後、斜め方向のミガキを施している。底面は凹む。底径9.6cmを測る。

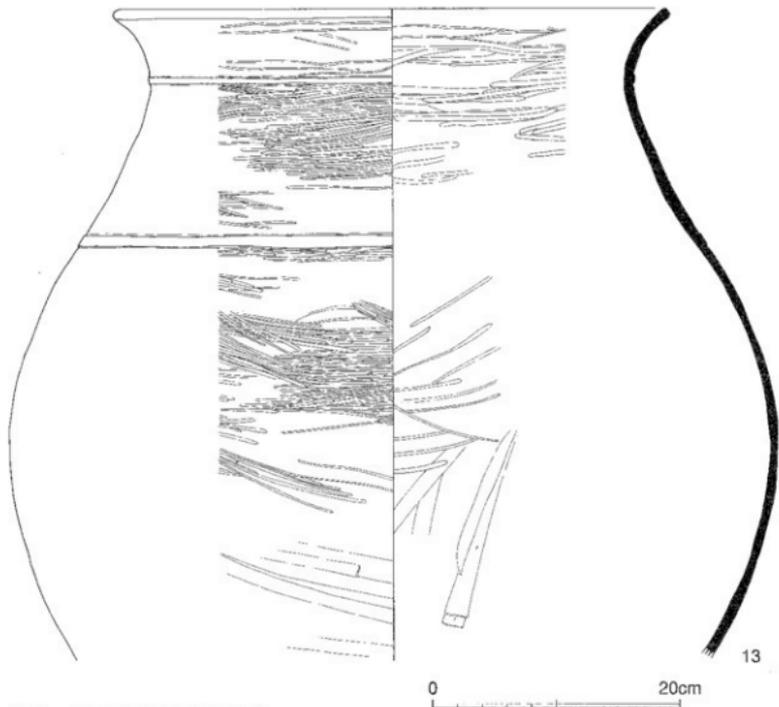


図19 第1次 SK8001出土遺物実測図(2)

(3) 溝

SD9002

幅1.6m以上の溝で、ほぼ南北方向に流れる。南端で落ち込み9002に切られている。埋土は上下2層に分層できる。

下層遺物 甕はすべて如意形の口縁を持つ。沈線は5条以下で胴部がやや張る形状のものを含む。

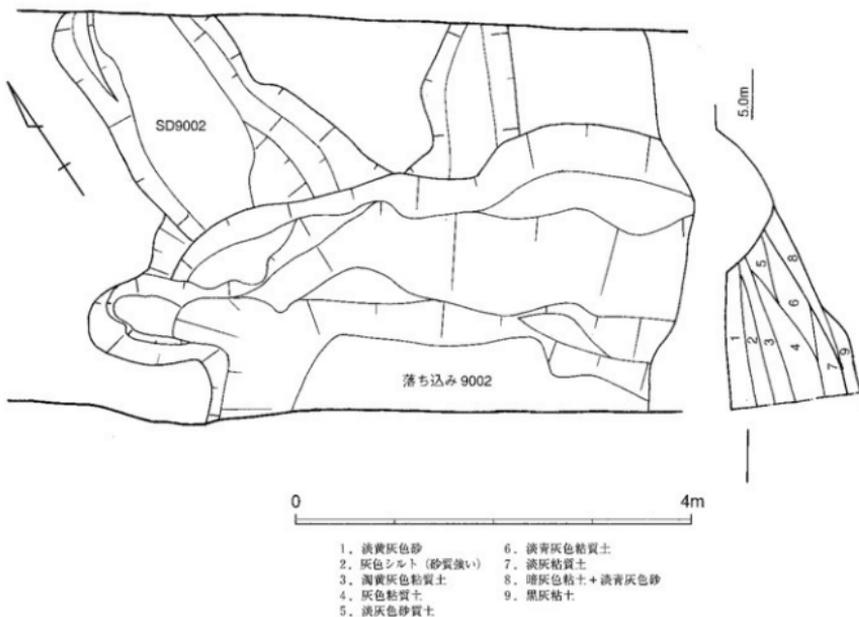


図20 第1次 SD9002周辺平面断面図

上層遺物 図示した遺物は、鉢 (16)、甕 (17~19)、壺 (20~24) である。

鉢 16は頸部下に2条の沈線を巡らす。口縁は短く外反し、端部にキザミを施す。外面は、縦方向のハケを施す。口径16.1cmを測る。

甕 17は頸部に3条の沈線を巡らす。口縁はわずかに外反し、端部にキザミを施す。口径20.6cmを測る。

18は頸部に5条の沈線を巡らす。口縁は強く外反し、端部にキザミを施す。胴部最大径は口径程度まで張る。胴部外面は縦方向の板ナデ、内面は横方向の板ナデの痕跡が残る。底面は凹む。口径20.1cmを測る。

19は大型の甕で、短く強く外反する口縁を持ち、端部にキザミを施さない。胴部最大径は口径径を越え大きく膨らむ。頸部下に縦方向のハケナデによる削出突帯を巡らし、2条の沈線を伴う。口径46.8cmを測る。

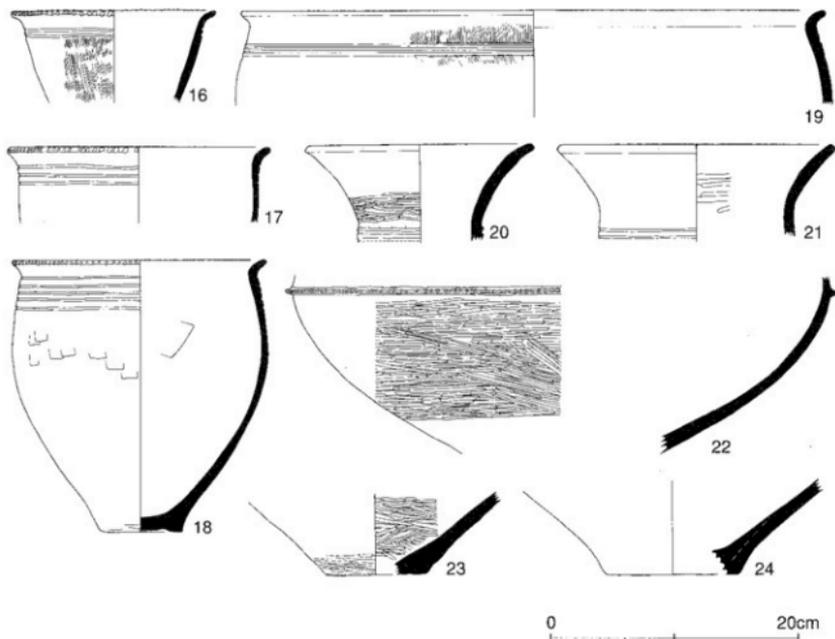


図21 第1次 SD9002上層出土遺物実測図

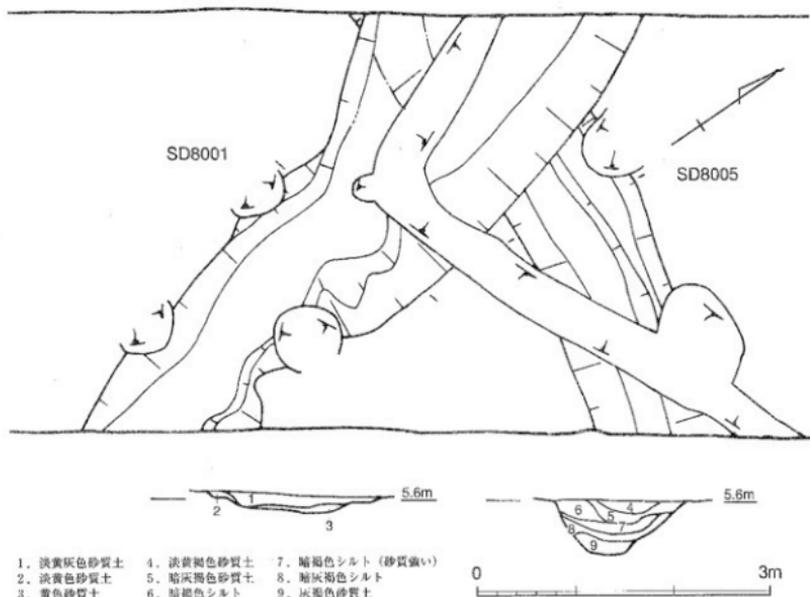
- 壺** 口頸界および頸胴界に貼付突帯を巡らす資料を含む。
 20は頸部に2条以上の沈線を伴う削出突帯を巡らす。口縁は緩やかに外反しながら大きく開く。口縁部外面は横方向のミガキを施す。口径17.8cmを測る。
 21は頸部に2条以上の沈線を巡らす。口縁部内外面にミガキを施す。口径21.7cmを測る。
 22は大型の壺の胴部下半部である。胴部最大径部にキザミを伴う貼付突帯を巡らす。外面は横および斜め方向のミガキを施す。最大径44.8を測る。
- 底部** 23・24は壺または鉢の底部であり、いずれも底面は凹む。23は内外面ともミガキを施す。底径は23が7.8cm、24が10.6cmを測る。
- その他** 他に鉢の小片が1点出土している。

SD8001

やや弧を描いて南北に流れる溝である。SD8005に切られている。幅2.6m以下、深さ25cmを測る。

遺物 図示した遺物は、壺(25)、鉢(26・27)、甕(28)である。

壺 25は頸部に断面台形の貼付突帯を巡らす。口縁は緩やかに外反し、端部は丸い。口径14.8cmを測る。



- | | | |
|------------|------------|-----------------|
| 1. 淡黄灰色砂質土 | 4. 淡黄褐色砂質土 | 7. 暗褐色シルト(砂質強い) |
| 2. 淡黄色砂質土 | 5. 暗灰褐色砂質土 | 8. 暗灰褐色シルト |
| 3. 黄色砂質土 | 6. 暗褐色シルト | 9. 灰黄色砂質土 |

図22 第1次 SD8001・SD8005平断面図

- 鉢** 26は口縁部下方に形骸化した段を巡らし、端部は強く外反する。口径16.3cmを測る。
27は内傾する口縁部を持ち、外面に4条の貼付突帯を巡らし、縦方向の棒状浮紋を施す。口縁端部は水平方向に面を持ち、外方にキザミを施す。
- 甕** 28は頸胴界に3条の半裁竹管による沈線を巡らし、その上下に竹管による波状紋を施す。外面は縦方向ハケ、内面は板ナデを施す。内面最大径部下に焦げ付きが見られ、外面最大径部以下に、被熱による赤変が見られる。最大径24.4cmを測る。
29は甕の底部である。外面は縦方向のハケ、内面は板ナデを施す。底面はわずかに凹む。底径8.0cmを測る。

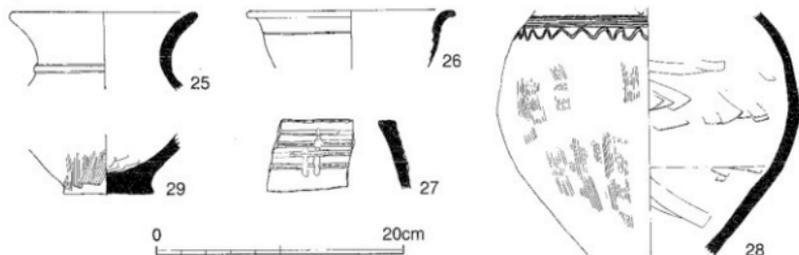


図23 第1次 SD8001出土遺物実測図

SD8005

ほぼ東西方向に流れる溝である。幅1.5m、深さ約50cmを測る。SD8001に切り込まれている。

遺物

図示した遺物は、壺 (30~34)、甕 (35~38) である。他に鉢が1点出土した。

壺

30は頸部に貼付突帯を巡らし、ユビオサエによる押圧痕を施す。口縁部は緩やかに外反し、口縁部上方に穿孔を施す。口縁端部はヨコナデ、他は横方向の丁寧なミガキを施す。口径18.1cmを測る。

底部

31~34は壺または鉢の底部である。外面をミガキまたは縦方向の板ナデを施す。底面はわずかに凹む。

31は壺または鉢の底部である。外面は縦方向ハケナデ後、横及び斜め方向のミガキを施す。底面はわずかに凹む。底径は8.5cmを測る。

35~38は甕の底部である。外面に縦方向の板ナデを施し、底面はすべて凹む。(38)は焼成後に穿孔を施す。

他の底部も、器種にかかわらず底面外縁部が一段高くなっている。

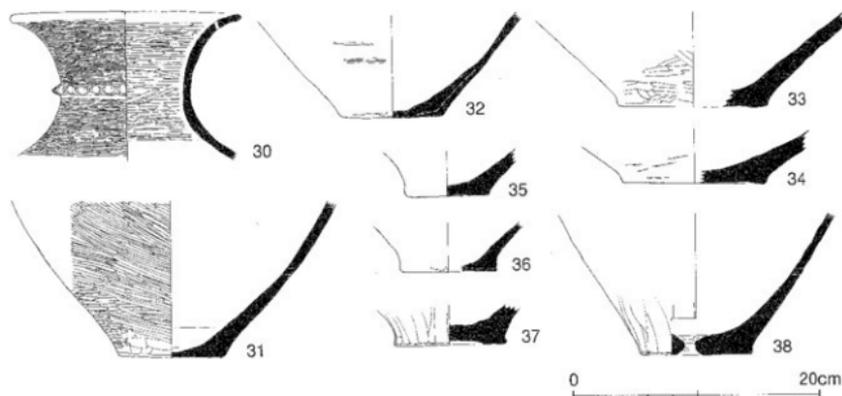


図24 第1次 SD8005出土遺物実測図

(4) 微高地末端部

落ち込み

9002

南東側に約80cmほど落ちこむ地形が検出された。東に隣接する調査区の断面観察により、微高地の末端部に相当することが確認され、低湿地に落ち込む傾斜面の一部であることが判明した。弥生時代中期前半段階には埋没している。この状況は、東側微高地の西端部でも確認されており、弥生時代前期末から中期初頭にかけて大規模な洪水があったことが推定される。堆積層は大きく2層に分層される。

- 下層遺物 遺物は底面で検出された。図示した遺物は鉢 (39)、壺 (40) である。
- 鉢 39は直線的に開く胴部を持ち、端部は外方に強く開く。端部は丸い。つまみは斜め下方に短く貼り付ける。外面は縦方向のハケ、口縁部内面は横方向のハケを施す。口径41.8cmを測る。
- 壺 40は長頸化した頸部から斜め上方に開く口縁を持つ。頸部には10条の沈線を巡らす。口縁部外面は縦方向のハケ、内面は横方向の板ナデを施す。口径22.8cmを測る。

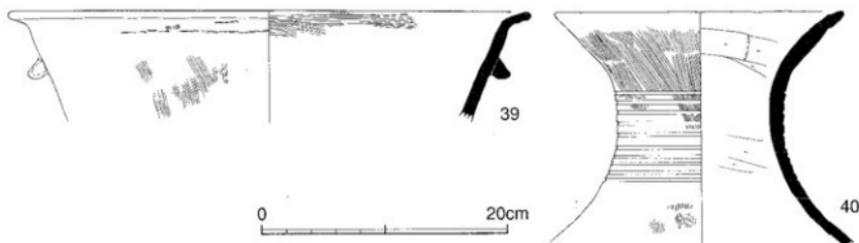


図25 第1次 落ち込み9002下層出土遺物実測図

- 上層遺物 落ち込み9002が埋没した後、最掘削された部分に堆積した遺物である。
- 壺蓋 41は蓋の上半部である。つまみ部上方は強く凹み、傘部は直線的に開く。外面はタテ方向のハケを施す。つまみ径は6.3cmである。
- 42は傘部が直線的に伸びる蓋の口縁部である。口縁端部内面にススが付着する。内外面ともに縦方向のハケを施す。口径20.6cmを測る。
- 甕 43は頸部下に5条の沈線を巡らす。口縁は短く外反し、端部にキザミを施す。口縁内面にも張り出しが見られる。胴部外面は斜め方向のハケ、内面を横方向のハケを施す。口径19.7cmを測る。
- 44は胴部最大径部に凹形浮紋を張り巡らし、その上方に6条、下方に5条の沈線を巡らす。口縁端部はT字状で内外面ともに張り出す。口縁外側の端部にキザミを施す。外面は縦方向のハケ、内面はナデを施す。口径16.6cmを測る。
- 45は頸部下に5条の沈線を巡らし、口縁端部やや上方にキザミを施す。調整は不明である。口径15.0cmを測る。
- 46は口縁部が強く外反する。口縁端部は面を持ち、端部にキザミを施す。胴部外面は縦方向のハケ、頸部内面をハケナデ、以下はナデを施す。口径18.1cmを測る。
- 47は上方に立ち上がる胴部の外側に、粘土を張り出して口縁としており、端部にキザミを施す。胴部外面は縦方向のハケを施す。口径19.2cmを測る。
- 48は強く外方に屈曲する口縁を持ち、端部にキザミを施す。内外面ともにナデを施す。口径19.3cmを測る。
- 49は甕の底部である。外面にハケナデの痕跡が見られる。底面はわずかに凹み、焼成後に穿孔されている。底径7.6cmを測る。

50・51は口縁部の断面図である。50は間隔の広い3条の沈線を巡らす。51は3条の沈線を巡らし、逆L字型の口縁を持ち、端部にキザミを施す。52は直口口縁のやや下方にキザミを伴う貼付突帯を巡らし、上方に2条、下方に2条以上の沈線を巡らす。

壺

52は強く開く口縁の端部に1条の沈線を巡らす。内外面ともにナデを施す。口径14.0cmを測る。

53は頸部に1条以上の沈線を巡らし、強く外反する口縁を持つ。口縁端部は面を持つ。外面を縦方向および斜め方向のハケ、内面を横方向および斜め方向のハケを施す。口径24.2cmを測る。

54は強く外反する壺の口縁部で、端部は面を持ち、キザミを施す。内面に3条の沈線を巡らし、最内周の沈線を除く3条で紋様帯を構成する。紋様帯には2重の三角形のスタンプ紋が連続して施紋される。外面は縦方向のハケ、最内周の沈線以内は斜め方向のハケを施す。口径18.0cmを測る。

55は頸部に断面三角形の貼付突帯を、2条巡らす。上方の細い突帯には細かいキザミを、下方の太い突帯には横方向に長いキザミを施す。頸部径12.3cmを測る。

56は頸部に縦方向のハケを施したのち、5条以上の沈線を巡らす。頸部径12.3cmを測る。

57は球状を呈する胴部である。最大径部上方に5条の沈線を巡らす。外面は斜め方向のハケ、内面を斜め方向の板ナデを施す。胴部最大径35.1cmを測る。

58は直口壺の口頸部である。口縁端部は面を持ち、端部に1条の沈線を巡らしたのち、キザミを断続的に施す。外面は縦方向のハケ、内面はナデを施す。口径11.3cmを測る。

底部

59・60は壺または鉢の底部である。60は外面に縦方向および斜め方向のハケ、内面に横方向および斜め方向のハケを施す。底面はわずかに凹む。底径11.5cmを測る。61は緩やかに内湾して立ち上がる体部を持つ。外面は横方向および斜め方向のミガキ、内面はナデを施す。底面はわずかに凹む。底径10.7cmを測る。

鉢

61は鉢の口縁部である。口縁部は短く外反し、全面にナデを施す。口径21.6cmを測る。

62は鉢の口縁部である。口縁端部は強く外反する。体部外面は縦方向のハケ、内面はナデを施す。口径22.6cmを測る。

63は体部上方に3条の沈線を巡らし、口縁部は強く外反する。端部は面を持ち、1条の沈線とキザミを伴う。内外面ともにナデを施す。口径34.0cmを測る。

(5) 石器

石器は、埋葬遺構に伴うサヌカイト製石鏃以外に、石斧が1点出土した。

石斧

64は溝状埋葬遺構の遺構底より出土した太型刃石斧の先端部の破片である。刃部は両刃で、側面部は、直線的に仕上げている。石材は角閃岩である。残存長9.5cmを測る。

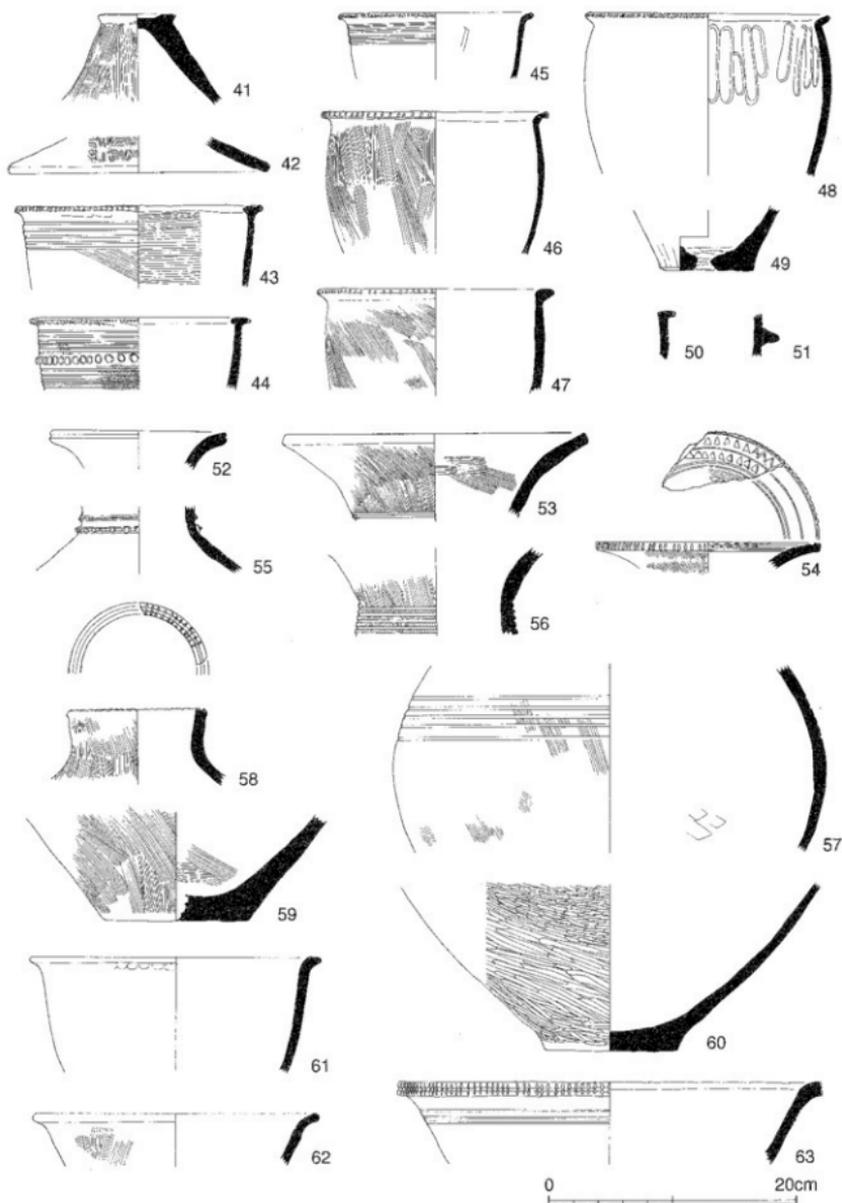


図26 第1次 落ち込み9002上層出土遺物実測図

第IV章 第2次調査地点の調査

第1節 調査の概要

低湿地の東側に面する微高地上に遺構面が展開する。調査中断後に約半年間放置されていたため、調査区の壁面及び底面は著しく損傷を受けていた。排水後、泥濘化した堆積土を除去したが、現況では遺構と擾乱の判別が困難であるため、復旧時に新たに検出された遺構と、再調査の結果、形状が大きく異なった遺構については4桁の遺構番号を付し、調査団が設定した遺構番号との混乱を避けた。調査団作成実測図と整合性を持たせるため、平面調査が必要なD区・E区・F・S区については、現況の実測図を作成した。B区・C区・F・N区については、壁面の精査と3箇所のトレンチ調査を実施した。調査の結果、第7遺構面・第6遺構面・復旧遺構面において、弥生前期の生活面が確認された。

第2節 第7遺構面

弥生時代前期前半から中葉にかけての遺構面である。F・S区北半は区画溝以外の遺構は少ない。南半部に土坑、柱穴等が集中している。D区西端で微高地の末端部が検出された。

(1) 区画溝

幅2m以上の溝で、断面形は逆台形を呈し、溝肩の傾斜が強いものを基本とする。調査区の制約により、全体の形状や接続関係は不明であるが、低湿地に接続すると考えられる例や、平行して掘削されている例がある。

SD5003

遺物
甕

調査団により掘削されていた遺構であるが、精査の結果、幅約210cm以上、深さ110cmの溝状遺構であることが判明した。断面形は、約45度の勾配でV字状である。

遺物の大半は、溝底付近と中層部から出土した。図示した遺物は、甕(65~73)、壺蓋(74・75)、ミニチュア(76)、鉢(77・78)、壺(79~93)である。

4条以下の沈線または削出突起が施紋される。口縁はいずれも如意形口縁である。

65~69は2~4条の沈線を巡らす。口縁端部にキザミを施す。67は口縁部がやや強く広がる。68は胴部が強く張る。口径は65が ϕ 18.1cm、66が ϕ 21.4cm、67が ϕ 24.3cm、68が ϕ 32.6cm、69が29.4cmを測る。

70は頸部上部に、ハケ押圧による段を持ち、段以下に4条の沈線を巡らす。口縁端部にキザミを断続的に施す。口径25.5cmを測る。

71・72は頸部下方にハケ押圧による段を持つ。71は段以上に3条の沈線を巡らし、口縁端部にキザミを施す。口径25.0cmを測る。72は段上方に2条の沈線を巡らせ、口縁端部は間隔の広いキザミを施す。口径29.2cmを測る。

73は口頸部下無紋である。口縁は緩やかに外反し、端部は面を持つ。頸部内面に比較的明瞭な稜を有する。口径26.2cmを測る。

壺蓋 74は外面に3条の沈線を巡らし、口縁端部及び内面は丁寧な横方向ミガキを施す。口径9.8cmを測る。

75はつまみ部外面に板ナデの痕跡を残し、つまみ部頂部はわずかに凹む。内面は横方向のミガキを施す。つまみ部径6.8cmを測る。

ミニチュア 76の口縁部はユビオサエによりわずかに外反し、外面は縦方向のハケを施す。口径9.6cmを測る。

鉢 77の口縁部は短く外反する。胴部外面は丁寧な横方向のミガキを施し、内面はナデを施す。口径11.3cmを測る。

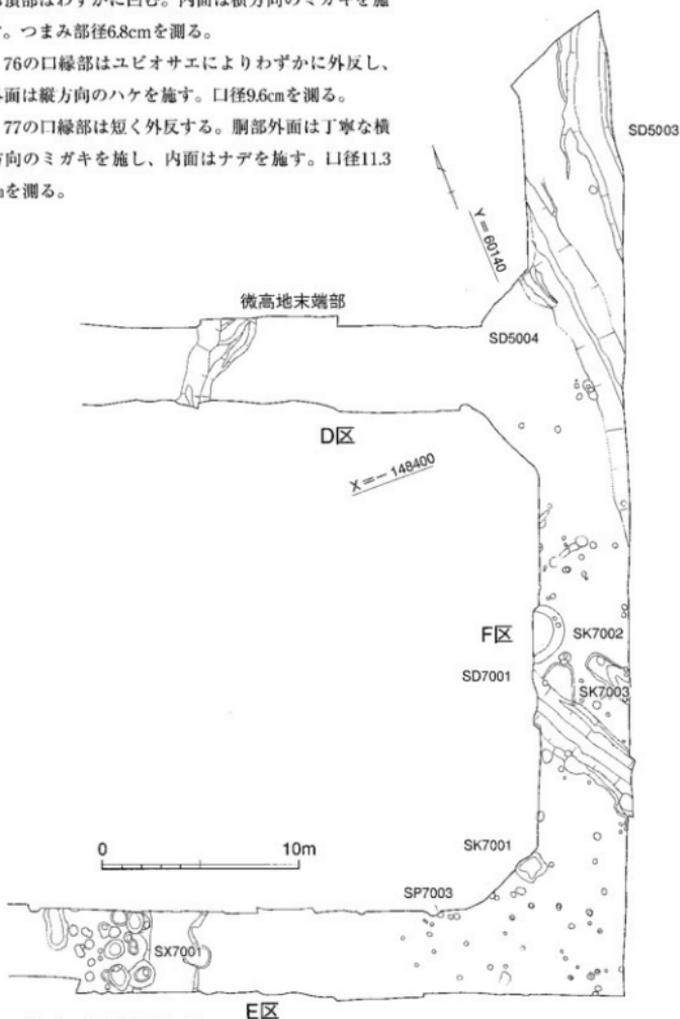


図27 第2次 第7遺構面平面図

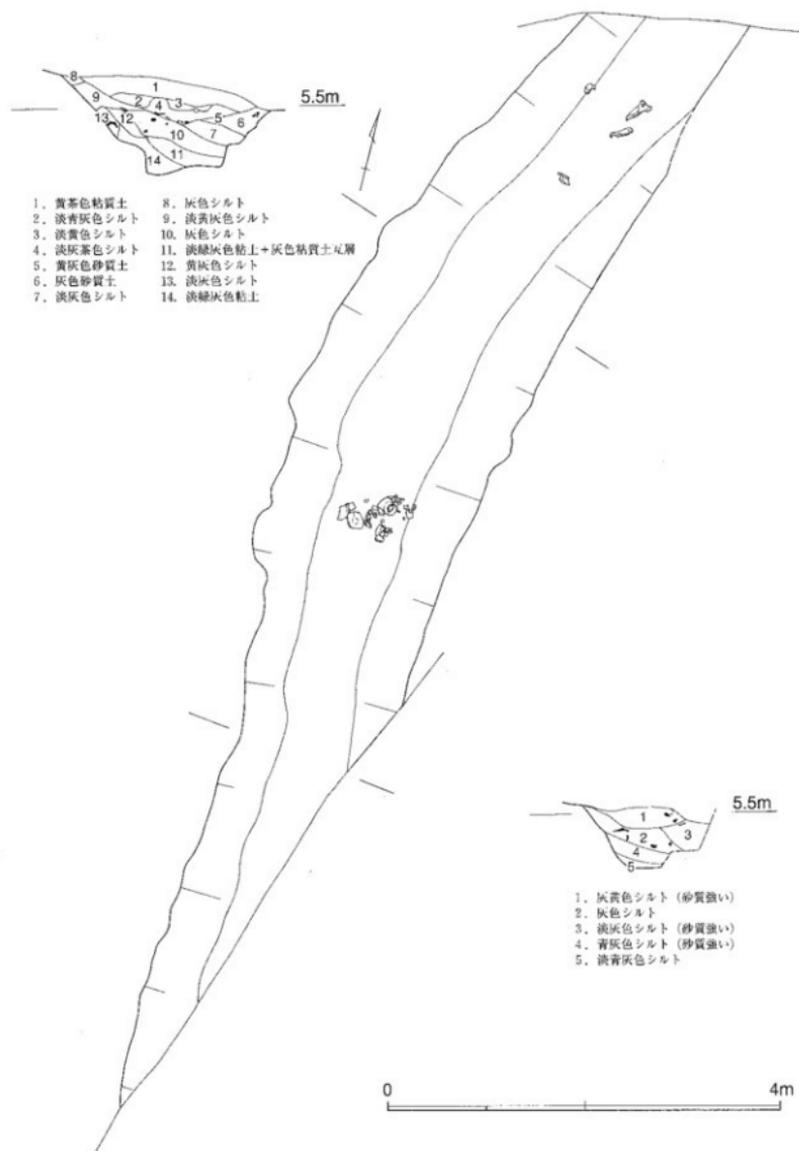


図28 第2次 SD5003平衡面図

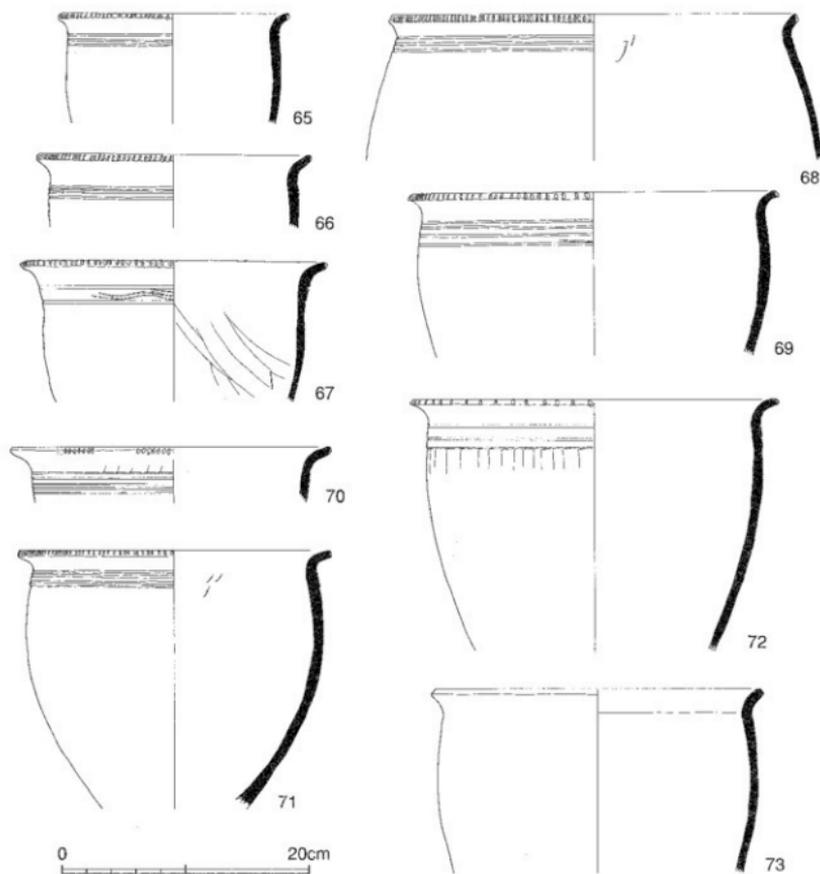


図29 第2次 SD5003出土遺物実測図(1)

78の鉢部は緩やかに内湾し、口縁部は上方に立ち上がり端部は丸い。内外面とも、横方向及び斜め方向のミガキを施す。底面はわずかに凹む。口径18.2cmを測る。

壺

頸部の施紋は、4条以下の沈線(79~81)・削出突帯(82~87)・貼付突帯(88~89)がある。貼付突帯以外の壺は、内外面とも丁寧は横方向のミガキを施すものが基本で、貼付突帯を施す例は、ナデまたはハケで調整している。

貼付突帯以外の壺は、内外面とも丁寧は横方向のミガキを施すものが基本で、貼付突帯を施す例は、ナデまたはハケで調整している。

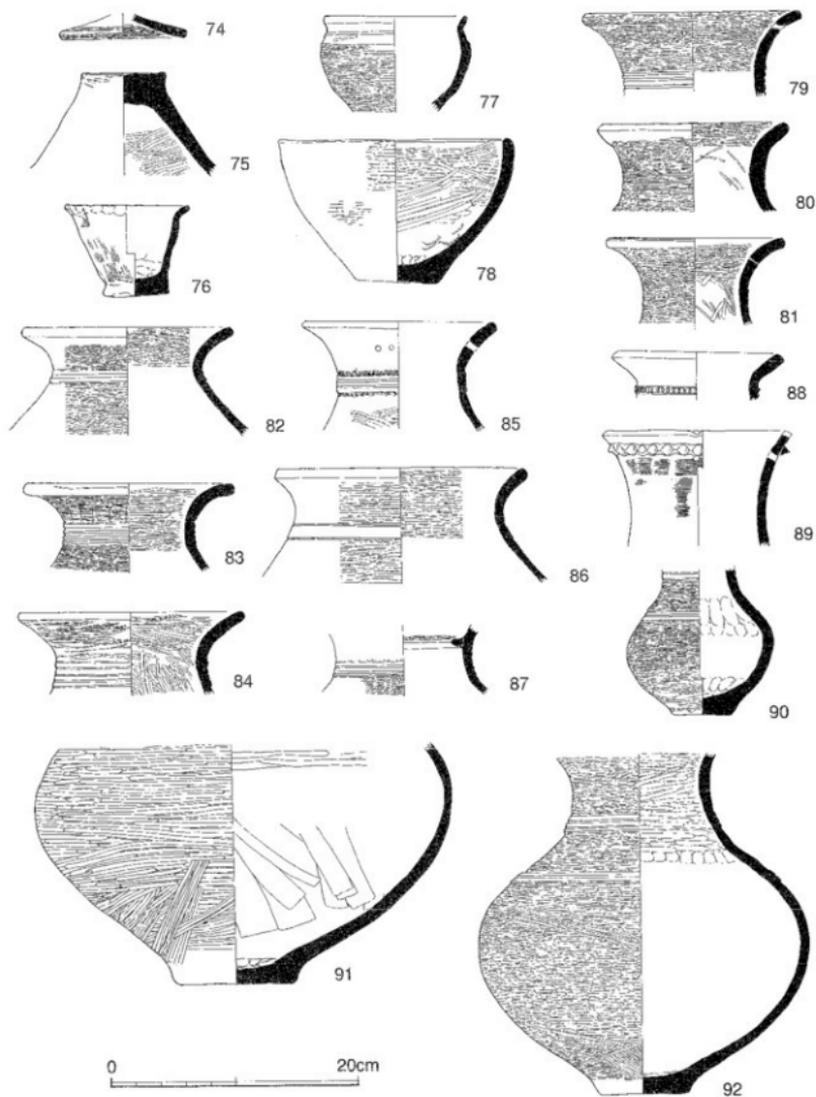


図30 第2次 SD5003出土遺物実測図(2)

79は頸部に4条以上の沈線を巡らす。口縁部は緩やかに外反し、穿孔が1箇所見られる。口縁端部は面を持つ。内外面ともに横方向のミガキを施す。口径17.1cmを測る。

80は頸部に3条の沈線を巡らす。口縁部は緩やかに外反し端部は丸い。外面及び口縁部内面に横方向のミガキを施す。口径14.7cmを測る。

81は頸部に3条の沈線を巡らす。口縁部は強く外反し、穿孔が1箇所見られる。口縁端部上方に1条の沈線を巡らす。外面及び口縁部内面に横方向のミガキを施す。口径14.2cmを測る。

82は頸部に1条の沈線を伴う削出突帯を巡らす。口縁部は強く外反し、端部は丸い。削出突帯上部は細い沈線で区画し、下部は横方向のミガキで成形する。外面及び口縁部内面に横方向のミガキを施す。口径16.2cmを測る。

83は頸部下に3条の沈線を伴う削出突帯を巡らし、突帯は横方向のミガキにより成型される。口縁部は強く外反し、端部は丸い。内外面共に横方向のミガキを施す。生駒西麓の胎土である。口径16.2cmを測る。

84は頸部に3条の沈線を伴う削出突帯を巡らす。口縁部は直線的に外方に伸び、端部は丸い。外面および口縁部内面に横方向のミガキ、頸部以下内面に縦方向のミガキを施す。口径17.8cmを測る。

85は頸部に2条の沈線を伴う削出突帯を巡らす。突帯は、上下共に縦方向のハケ押圧により成形する。口縁部は緩やかに外方に伸び、2箇所穿孔されている。頸部以下外面に、粗いミガキを施す。口径15.1cmを測る。

86は頸部下にミガキによる押圧による低い突帯を設けている。口縁部は緩やかに外反し、端部は丸い。外面全面と口縁部内面は、横方向のミガキを施す。口径19.7cmを測る。

87は壺の頸部である。頸部に2条の沈線を伴う削出突帯を巡らす。突帯の上部は、ハケの押圧により、下部を横方向のミガキによる押圧により成形する頸部内面に貼付突帯を巡らし、上方は横方向のミガキを施す。口径11.0cmを測る。

88は口頸部界に楕円形の刺突紋を伴う貼付突帯を巡らす。口縁部は強く外反し、口縁端部は面を持つ。口径12.9cmを測る。

89は緩やかに外反する直口口縁を持ち、口縁部外面に断面三角形の貼付突帯を巡らす。口縁端部は面を持ち、凹みを4方向に設ける。貼付突帯には円柱状の工具による押圧を施す。突帯直下に4箇所の穿孔が見られ、端部の凹みの方向と一致する。頸部外面は横方向ハケ、内面はナデを施す。口径14.5cmを測る。

90は口縁部を欠損する小型の壺である。頸部に2条以上の沈線を巡らす。頸部界に段を意識したミガキによる浅い施紋を行い、その下に2条の沈線を巡らす。外面は丁寧な横方向のミガキを施し、内面はナデ、指オサエを施す。胴部最大径12.0cmを測る。

91は壺の体部である。外面は1工程が長い横方向からナメ方向のミガキを施し、内面下半部は板ナデを施す。頸部界付近は横方向ミガキを施す。底面はわずかに凹む。胴部最大径33.6cmを測る。

92は頸部に2条沈線を伴う削出突帯、頸部界に1条沈線を伴う削出突帯を巡らす。いづれも、強いミガキにより突帯を成形している。頸部界上部内面に指頭圧痕が見られ、以

上は横方向ミガキが施される。
底面はわずかに凹む。胴部最大
径26.7cmを測る。

93は赤色顔料で山形紋が施紋
された、壺の胴部上半部である。
3条以上の沈線を巡らし、沈線
に接して4条以上の山形紋が施
紋されている。

獣骨

溝底よりイノシシの下顎骨
が、前顎部で割れた状態で1体
分出土した。左右の角前部に穿
孔が見られる。

SD5004

調査団により掘削されていた
遺構であるが、再掘削の結果、
弥生時代前期に掘削され、弥生
時代中期中葉まで継続した溝状
遺構であることが判明した。幅
約240cm、深さ130cmの溝状遺構
である。断面形は、約45度の勾
配でV字状である。溝底部付近
の堆積状況から、西側から土砂
が流入が優勢であることが認め
られる。西側の溝肩から、約1
mの幅で遺構密度が低いことか
ら、排上を西側に積み上げて
いた可能性が高い。

遺物

弥生時代前期の遺物量は少な
い。図示した遺物は、鉢 (94)
である。

鉢

94は大型の鉢である。頸部下
に粘土を追加して成形した段を
持つ。口縁部は強く外反し、端
部は丸い。胴部内外面に、丁寧
な横方向及び斜め方向のミガキ
を施す。口径31.9cmを測る。

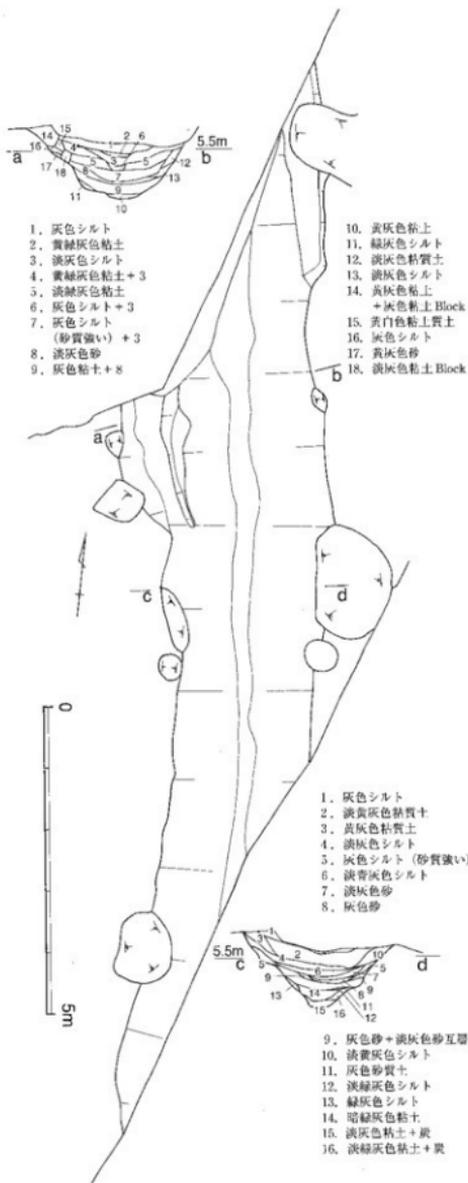


図31 第2次 SD5004平断面図

SD6003

調査団によって掘削されていたが、精査の結果、さらに埋土が残存していることが判明し、再調査を行った。幅約440cm、深さ110cmの溝状遺構で、ほぼ南北方向に掘削されている。2段に掘削されており、SD5003・SD5004とは形状が異なる。堆積状況から、SD5004同様、前期の古段階に掘削され、中期中葉段階まで機能していたと考えられる。前期の遺物は、遺構底で検出された。甕、大型鉢が出土している。

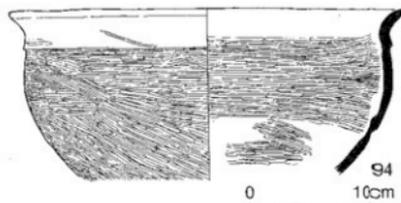


図32 第2次 SD5004出土遺物実測図

遺物

図示した遺物は、鉢 (95)、甕 (96) である。

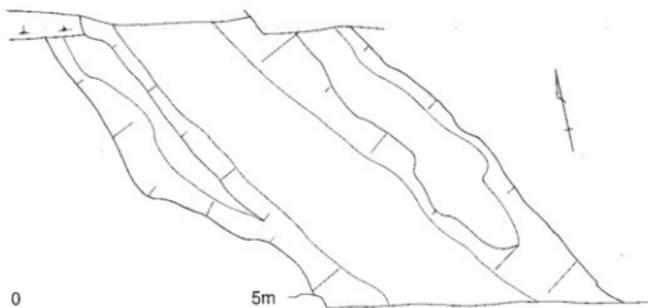


図33 第2次 SD6003平面図

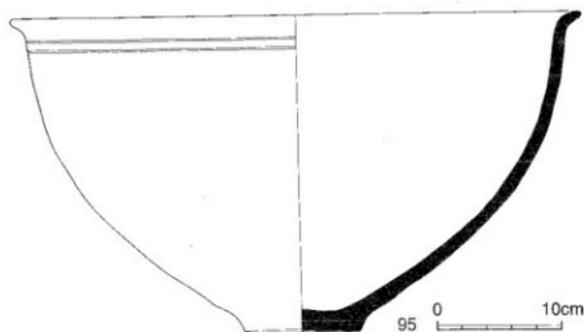


図34 第2次 SD6003出土遺物実測図 (1)

鉢 95は頸部下に2条の沈線を施す大型の鉢である。体部は内湾して立ち上がり、口縁部は強く外反する。底面はわずかに凹む。器表面の残存状況が悪く、調整は不明である。口径46.4cmを測る。

甕 96は頸部下に3条の沈線を巡らし、口縁端部にキザミを施す。外面は縦及び斜め方向のハケを施す。口径25.8cmを測る。

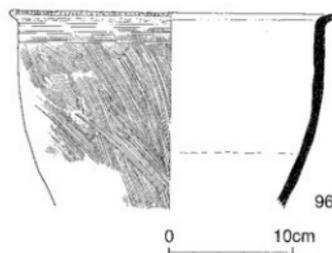


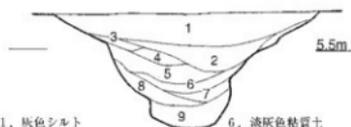
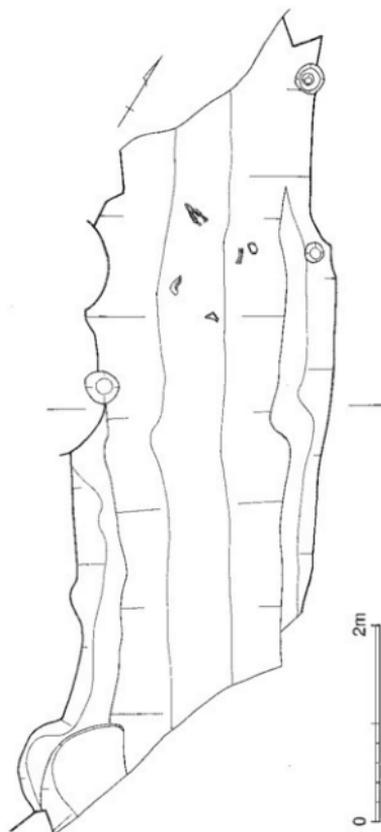
図35 第2次 SD6003出土遺物実測図(2)

SD7001

幅約270cm、深さ110cmの溝状遺構である。上部は、両肩共に約30度の勾配で掘削されているが、西肩は途中で傾斜を強め、最深处はほぼ垂直に約20cm落ち込む。堆積土の中層は、ブロック状の粘土の堆積が見られ、再掘削時の崩土が落ち込んだ状況が観察できる。最終埋土層は粘性の強い均質なシルトの堆積で、滞水状態で徐々に埋没したことが推定できる。最終埋土層出土遺物より、弥生時代前期のうちに埋没したと考えられる。また、獣骨は溝底面付近から多く検出された。

遺物 遺物は最終埋土層より多量に出土した。図示した遺物は、浮線紋系土器、(97) 壺蓋 (98)、甕蓋 (99) 甕 (100~105)、壺 (106~117)、鉢 (118~119) 施紋土器 (120~132) である。

浮線紋系土器 97は浮線紋系土器の口縁部の小片である。口縁部外面に横方向の強いナデを施し、1条の浮線紋を成形している。口縁端部は丸くおさめ、円柱状の原体押圧によるキザ



1. 灰色シルト
2. 淡灰色シルト
3. 淡灰色粘質土
4. 層状シルト
5. 淡灰色シルト+緑灰色粘土混じり
6. 淡灰色粘質土
7. 淡緑灰色粘質土
8. 灰色粘質土
9. 薄緑色粘質土

図36 第2次 SD7001平断面図

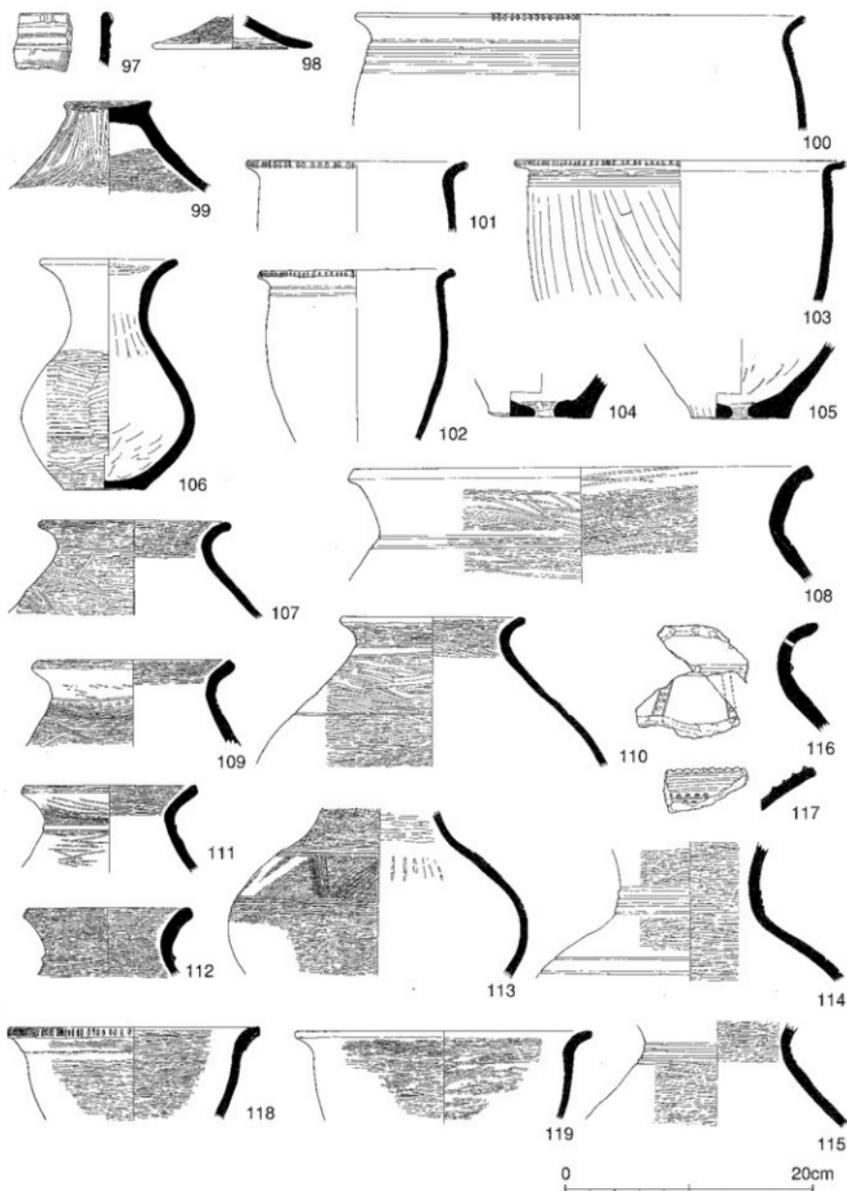


図37 第2次 SD7001出土遺物実測図(1)

ミを施す。外面は縦方向のハケ、内面はナデを施す。

壺蓋

98はつまみ部を欠損するが、ほぼ直線的に伸びる傘部を持ち、口縁部でわずかに外反する。内外面とも、丁寧な横方向のミガキを施す。口径12.0cmを測る。

99は壺蓋である。つまみ部上方は強く凹む。外面は縦方向から横方向のミガキ、内面は横方向のミガキを施す。つまみ径7.1cmを測る。

壺

いずれも如意形の口縁を持ち、端部はキザミを施す。

100は頸部下に4条の沈線を巡らす。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部にキザミを施すが全周しない。胴部は口径程度まで張る。胴部内面にハケの痕跡が残る。口径35.8cmを測る。

101は口頸部下無紋で、口縁部は強く外反する。口縁端部はキザミを施す。口径17.2cmを測る。

102は頸部に2条の沈線を巡らす。口縁部は強く外反し、端部はキザミを施す。口径15.4cmを測る。

103は強く外反する口縁を持ち、頸部に2条の沈線を巡らす。胴部外面は縦方向から斜め方向の板ナデを施す。口径15.4cmを測る。

104・105は壺の底部である。104は内外面に板ナデの痕跡が残る。焼成後、底部を穿孔している。底面はわずかに凹む。底径は、104が8.3cm、105が7.9cmである。

壺

外面および、頸部以上の内面はミガキを施す。

106は長頸化した無紋の壺である。胴部外面および口縁部内面は横方向のミガキを施す。胴部内面下半は板ナデを施す。端部は丸い。口径10.6cmを測る。

107は頸部に1条の沈線を巡らす。口縁部は強く外反し、端部は丸い。外面および口縁部内面に横方向のミガキを施す。口径14.8cmを測る。

108は大型の壺で、頸部下方に2条の沈線を巡らす。口縁部は明瞭に屈曲して外方に伸び、端部は面を持つ。外面は縦方向のハケを施した後、横方向のやや粗いミガキを施す。内面は横方向のミガキを施す。口径36.6cmを測る。

109は頸部に凹形の列点紋を伴う2条の沈線を巡らす。口縁部は強く外反する。胴部外面および口縁部内面に横方向のミガキを施す。口径15.5cmを測る。

110は頸部に1条の沈線、頸胴界に強いミガキによる段を巡らす。口縁部は直線的に上方に伸び、端部はわずかに外反する。口縁端部は面を持つ。外面と口縁部内面に横方向のミガキを施す。口径14.2cmを測る。

111は頸部にハケおよび強いミガキによる削出突帯を巡らす。口縁部は強く外方に屈曲し上方に伸びる。外面はタテ方向のハケを施した後、横方向の粗いミガキを施す。口縁部内面は、丁寧な横方向のミガキを施す。口径13.6cmを測る。

112は頸部に1条の貼付突帯を巡らす。突帯の断面形は三角形である。口縁部は緩やかに外反し、端部は丸い。内外面とも丁寧な横方向のミガキを施す。口径12.8cmを測る。

113は頸胴界に1条沈線を伴う削出突帯を、胴部最大径部に3条の沈線を巡らす。その間に紋線帯とし、ヘラガキによる5～6条の山形紋を施している。口胴界にキザミの痕跡が残る。胴部外面および頸部内面は横方向のミガキを施す。最大径24.3cmを測る。

- 114は頸部に2条の沈線を伴う削出突帯を巡らし、頸胴界に2条の沈線を巡らす。内外面とも横方向のミガキを施す。
- 115は頸部に2条の沈線を伴う削出突帯を巡らす。胴部外面と口縁部内面に横方向のミガキを施す。頸部径10.4cmを測る。
- 116は強く外反する壺の口頸部である。頸部に貼付突帯を巡らし、口縁部に1箇所穿孔している。頸部以下は縦方向のミガキを施した後、円形の刺突紋を伴う2条の直線紋を施す。
- 117は強く開く壺の口縁部で、端部に面を持つ。口縁内面に断面三角形の貼付突帯を4条と、さらに内側に1条の沈線を巡らしている。最外周の貼付突帯には棒状工具押圧によるキザミを施す。沈線の内周と外周には、半円状の刺突紋を施す。
- 鉢** 118は口縁部に粘土を追加してできた段を持つ。口縁部はわずかに外反し、端部はキザミを施す。胴部外面および内面は横方向のミガキを施す。段の下部と口縁部外面はハケを施す。口径20.0cmを測る。
- 119は無紋の鉢で、口縁部は強く外反し端部は丸い。内外面を横方向のミガキで仕上げる。口径23.7cmを測る。
- 施紋土器** 図化した遺物は12点である。いずれも壺の頸胴部に施されている。120から125は木葉紋、126と127は重弧紋、128から130直線紋、131は山形紋が施紋されている。
- 木葉紋** 施紋箇所はいずれも壺の頸胴部である。
- 120は胴部の紋様帯に施紋された有軸2条のX木葉紋である。中心部に2つの刺突紋を施す。
- 121は胴部の文様帯施紋された無軸2条のX木葉紋である。
- 122は小片であるが、有軸2条のX木葉紋と考えられる。
- 123は4条以上のヘラガキ沈線により木葉紋が描かれている。区画線と考えられる直線が直交せず、紋様構成は不明である。
- 124は胴部の紋様帯に施紋された有軸2条のX木葉紋である。
- 125は頸胴部の段以下に施紋された有軸2条のX木葉紋である。頸部には3条以上の直線紋を施している。
- 重弧紋** 施紋箇所はいずれも壺の頸胴部下方である。
- 126は頸胴部の2条以上の沈線以下に施紋された2条の重弧紋である。
- 127は胴部に施紋された3条の重弧紋である。
- 直線紋** 施紋箇所はいずれも頸部である。
- 128は口頸部の3条の沈線以下に施紋された2条の直線紋である。
- 129は口頸部の2条の沈線以下に施紋された3条の直線紋である。
- 130を頸部に施紋された3条の直線紋である。
- 山形紋** 施紋箇所は、壺の胴部である。129は胴部の紋様帯に施紋されている。6条以上の沈線を1単位とした山形紋である。

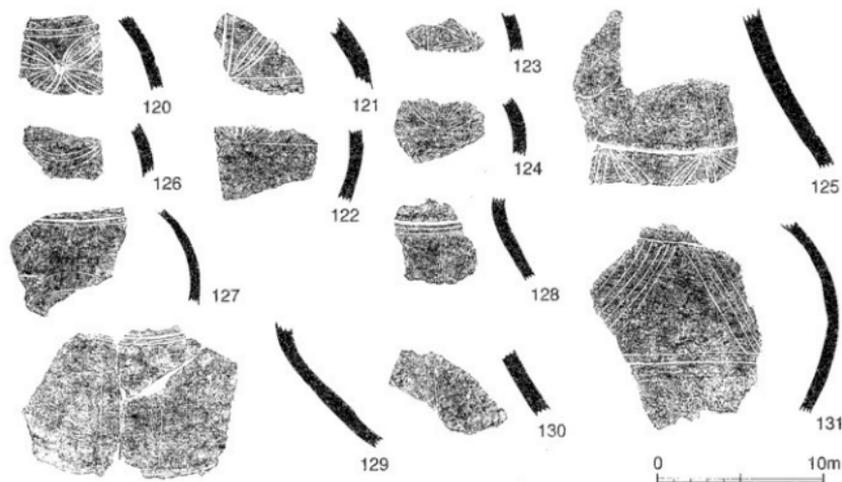


図38 第2次 SD7001出土遺物実測図(2)

(2) 土坑・ピット

20基以上の土坑・ピットが検出された。遺物や獣骨の出土量が多いものが多い。

SK7001

長辺 150cm 短辺 120cm、深さ50cmの不定形の土坑である。埋上は、粘質土と粘土の互層であり、人為的に埋められている。

遺物

図示した遺物は、甕蓋(132)、甕(133・134)、甕(135)である。

甕蓋

132は甕蓋の頂部である。傘部は直線的に外方へ伸びる。外面はナデ、内面はハケナデを施す。頂部上面はわずかに凹む。頂部径6.0cmを測る。

甕

133は頸部下に3条の沈線を巡らす。口縁部はわずかに開き、口縁部下方にキザミを施す。口径15.2cmを測る。

底部

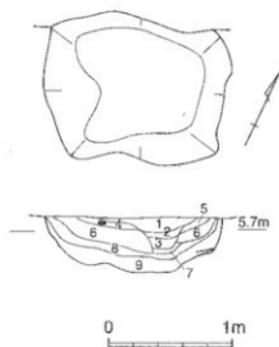
134は壺または鉢の底部である。内外面はヘラミガキを施している。底面は平坦である。底径8.6cmを測る。

重弧紋

135は壺の頸部破片である。頸部界に 図39 第2次 SK7001平面断面図 段を持ち、段下に3条の重弧紋を施する。内外面はミガキを施す。

獣骨

イノシシの肩甲骨が1点出土した。



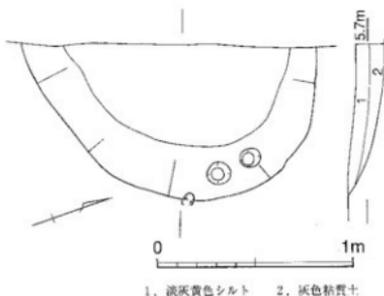
- | | |
|------------|-----------|
| 1. 淡黄褐色シルト | 6. 灰色シルト |
| 2. 黄灰色砂質土 | 7. 暗灰色シルト |
| +灰褐色シルト | 8. 灰白色シルト |
| 3. 黄灰色砂質土 | +黄灰色シルト |
| 4. 明黄褐色シルト | 9. 黒褐色シルト |
| 5. 灰白色砂質土 | |

SK7002

調査区の制約により全体の形状は不明であるが、直径約2.8m、深さ約35cmの円形の土坑であると考えられる。

遺物
甕

図示した遺物は、甕(136)である。136は頸部下にハケナデによる低い段を持つ。口縁は短く強く外反し、口縁端部下側にキザミを施す。口径18.1cmを測る。



1. 淡灰黄色シルト 2. 灰色粘質土

図40 第2次 SK7002平断面図

SK7003

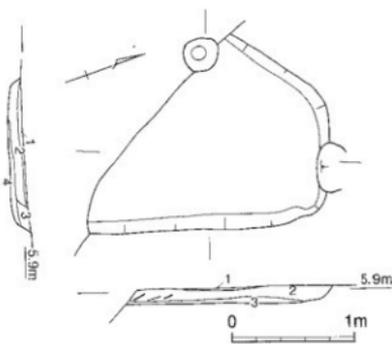
SD7001に切られている土坑である。長辺2m以上、短辺1.6m以上、深さ約15cmの円形の不定形の遺構である。遺物は土坑底よりやや浮いた状態で検出された。

遺物

図示した遺物は、突帯紋土器(137)、甕(138)、壺(139)である。

突帯紋土器

137は深鉢である。口縁端部に円柱状の原体押圧によるキザミを、3個を1単位として4方向に施す。口縁端部から2.5cm程度下がった位置に、断面三角形の突帯を巡らす。突帯上には浅いキザミを施す。頸部下に1条の沈線を巡らし、頸部以下を縦方向から斜め方向のミガキを施す。内面の調整は不明である。口径24.6cmを測る。



1. 淡灰黄色シルト 2. 灰色粘質土 3. 灰色粘質土 4. 2+黄褐色シルト

図41 第2次 SK7003平断面図

甕

138は甕の底部である。外面は板ナデ、内面はナデを施す。底面はわずかに凹む。底径8.3cmを測る。

底部

139は壺または鉢の底部である。外面は縦方向のミガキ、内面は横方向のミガキを施す。底面はわずかに凹む。底径7.7cmを測る。

SK7006

遺物

直径約40cm、深さ約15cmの円形の遺構である。

図示した遺物は、壺(140)である。

140は強く外反する口縁部を持ち、口頸界に段を持つ。内外面ともに横方向のミガキを施す。口径14.0cmを測る。

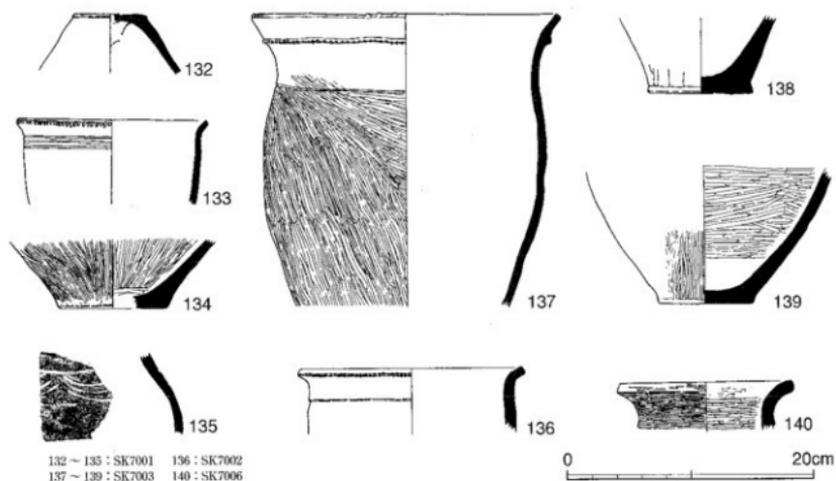


図42 第2次 土坑出土遺物実測図

(3) 用途不明遺構

SX7001

E区で不定円形の遺構が検出された。幅約6.2m、深さ約1.2mの遺構である。遺構は調査区外へ続いたため、全体の形状は不明である。遺物は遺構底面付近から出土した。

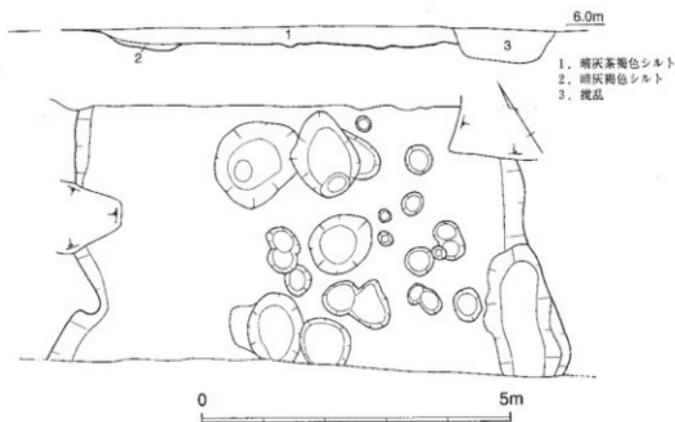


図43 第2次 SX7001平面図

遺物
壺

図示した遺物は、壺 (141~146)、甕 (147~152)、である。

141は頸部に2条の沈線を巡らし、口縁部はわずかに外反する。口縁端部は丸くおさめ、断続的にキザミを施している。口径20.4cmを測る。

142は頸部に2条の沈線を巡らし、口縁部は強く外反する。口縁端部は断続的にキザミを施している。胴部下半内外面に板ナデの痕跡が残る。口径24.8cmを測る。

143は頸部下方に4条の沈線を巡らす。施紋部は外面に粘土を追加し、厚みを増す。口

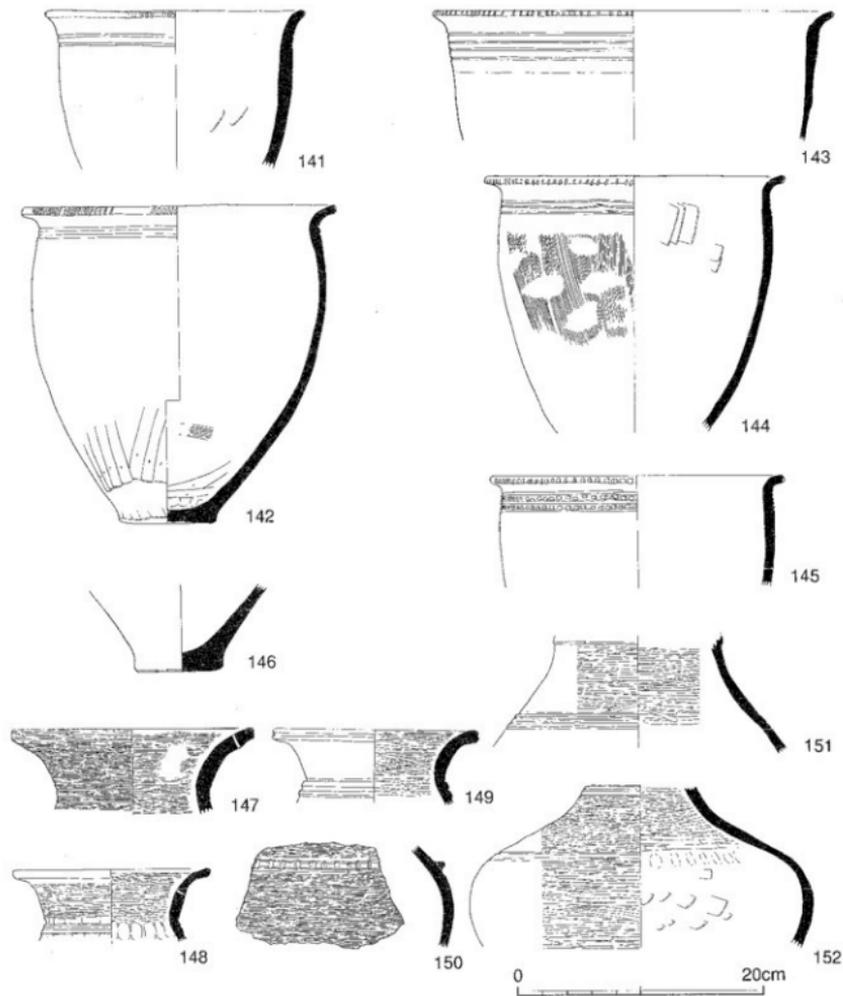


図44 第2次 SX7001出土遺物実測図

縁部は緩やかに外反し、端部は刻みを施す。口径32.0cmを測る。

144は頸部下方に3条の沈線を巡らす。口縁部は強く外反し、端部下端にキザミを施す。外面は縦方向のハケ、内面上半部は横方向の板ナデを施す。口径23.9cmを測る。

145は頸部下方に2列の列点紋を伴う3条の沈線を巡らす。口縁部は強く外半し、端部下端にキザミを施す。口径16.0cmを測る。

146は甕の底部である。底面は平坦である。底径7.0cmを測る。

壺

147は頸部に4条の沈線を巡らす。口縁部は緩やかに外反し穿孔を施す。口縁端部は面を持つ。内外面は丁寧な横方向のヘラミガキを施している。口径19.3cmを測る。

148は頸部下方にハケ押圧による削出突帯を巡らし、1条の沈線を伴う。口縁部は緩やかに外反し穿孔を施す。口縁部内外面共に横方向のミガキを施す。口径15.5cmを測る。

149は頸部下方にヘラ押圧による削出突帯を巡らし、1条の沈線を伴う。口縁部は緩やかに外反し、端部は刻みを施す。口縁部は強く外反し、端部に1条の沈線を巡らす。口縁部外面はナデ、内面は横方向ミガキを施す。口径16.0cmを測る。

150は頸胴界に貼付突帯を巡らし、突帯上にキザミを施す。内外面とも、丁寧な横方向のミガキを施す。

151は頸部下に1条以上の沈線を伴う削出突帯を巡らす。頸胴界下方にミガキによる低い削出突帯を巡らし、その上方に2条の沈線を巡らす。頸部内外面は横方向のミガキを施す。頸部径13.6cmを測る。

152は口頸界下方にミガキ押圧による段を持つ。頸胴界はミガキによる削出突帯を巡らし、1条の沈線を伴う。外面と頸部内面は横方向のミガキを施す。胴部内面は板ナデを施す。最大径27.9cmを測る。

(4) 柱穴

10数基の柱穴が検出されたが、建物としての纏りは不明である。遺物の出土量も少ない。

SP7003

直径30cm、深さ35cmの柱穴である。土器片がSP7023と接合した。

遺物
壺

図示した遺物は、甕(153)である。

153は頸部に1条の沈線を巡らし、口縁部は緩やかに外反する。口縁端部はキザミを施す。胴部外面は板ナデを施す。口径21.8cmを測る。

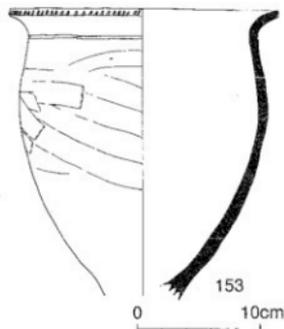


図45 第2次 SP7003出土遺物実測図

D区

D区西端部で240cm以上の高低差のある落ち込みが検出された。微高地の端部にあたり、低湿地への変化点であると考えられる。この低湿地は、幅約60mあり、西側微高地まで広がる。弥生時代中期段階では、前期の微高地のレベルまで埋没している。弥生時代前期末から中期初頭に、大規模な洪水等による土砂の流入があったと考えられる。

第3節 第6遺構面

弥生時代前期後半の遺構面である。第7遺構面との検出レベル差がほとんど無く、土器型式においても大きな差異は認められない。しかし、区画溝が埋没した後に竪穴住居を新たに設けるなど、土地利用の変容は明確である。第7遺構面に比べ、遺物を多く含む土坑が多い。また、獣骨の出土が多い事が特記される。区画溝、竪穴住居、土坑、柱穴等が検出された。

包含層

第5遺構面（復旧遺構面）のベース層となる灰色粘質土は、調査区はほぼ全域で検出された。

遺物

図示した遺物は、浮線紋系土器（154）、突帯紋土器（155）、ミニチュア（156～158）、鉢（159・160）、甕（161）である。

浮線紋系土器

154は浮線紋系土器の口縁部の小片である。口縁部外面に横方向の強いナデを施し、浮線紋を成形している。口縁端部は丸くおさめ、円柱状の原体による押圧によるキザミを施し、キザミの両側は、凹状に窪ませる。外面は縦方向のハケ、内面はナデを施す。

突帯紋土器

155は口縁部からやや下がったところに、断面三角形の突帯を持ち、小D字のキザミを施す。

ミニチュア

156は胴部最大径部の粘土接合部に、突帯を設けている。口縁部は緩やかに外反し、2穴2箇所の穿孔が見られる。全面ユビオサエで成形している。底部は

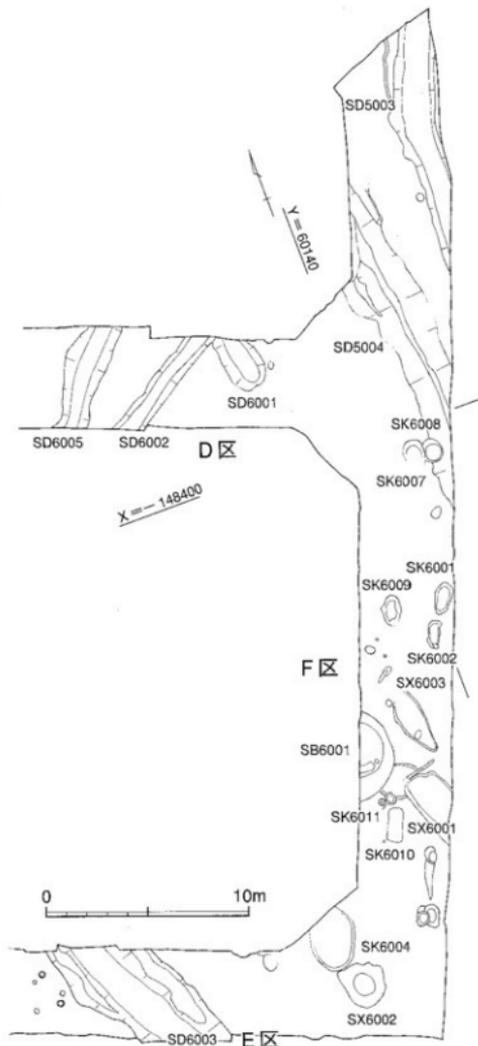


図46 第2次 第6遺構面平面図

欠損している。口径5.2cmを測る。

157は口縁部が緩やかに内湾して上方に立ち上がる。外面は縦方向のハケナデ、内面はエビオサエの痕跡が残る。口径6.8cmを測る。

158は口縁部が内湾して外方に立ち上がり、端部は面を持つ。外面は縦方向の板ナデを施す。底面はわずかに凹む。口径9.0cmを測る。

鉢
159は口縁部がほぼ直線的に外方に立ち上がり、端部は面を持つ。外面は縦方向または斜め方向のハケを施す。口径15.6cmを測る。

160は直門口縁を持ち、体部が強く内湾して立ち上がる。口縁端部から約2cm下に段を持ち、段以上に3条の沈線を巡らす。胴部最大径部に4条の重弧紋を7方向、底面に2軸1重の木葉紋を施紋する。外面と底面にミガキを施す。底面はわずかに凹む。口径19.2cmを測る。

甕
161は頸部下に3条の沈線を巡らす。口縁は強く外反する、口縁端部にキザミを施す。調整は不明瞭である。口径28.4cmを測る。

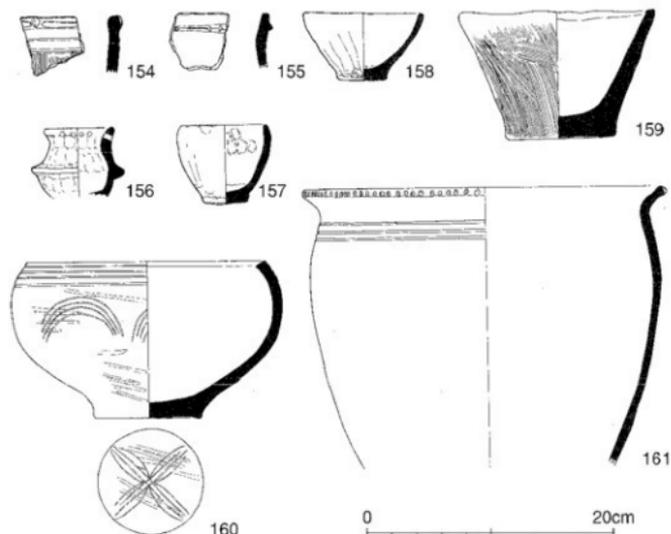


図47 第2次 第6遺構面包含層出土遺物実測図

(1) 溝状遺構

第7遺構面で検出されたSD5003・SD5004・SD6003は継続して使用されるが、SD7001は埋没する。D区の微高地末端部で、小規模な溝が新たに1条検出された。

SD6001

幅1.8m、検出長3.1m以上、深さ35cmの遺構である。ほぼ南北方向に掘削されている。SD6002に切り込まれている。

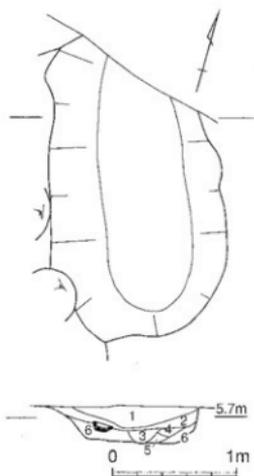


図48 第2次 SD6001平断面図

1. 灰褐色シルト
2. 灰褐色シルト
3. 灰黄褐色シルト
4. 褐色シルト
5. 暗褐色シルト
6. 黒褐色シルト

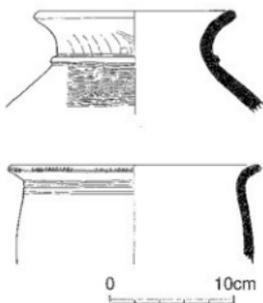


図49 第2次 SD6001出土遺物実測図

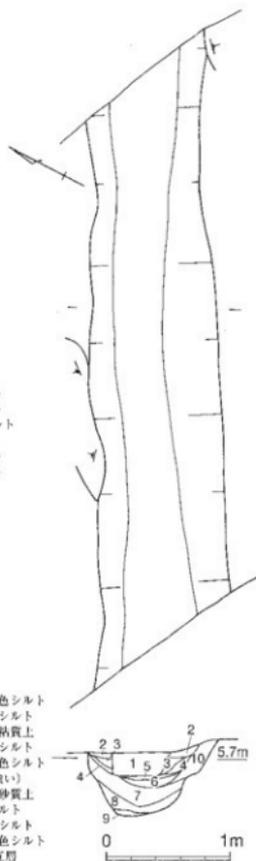


図50 第2次 SD6002平断面図

1. 淡黄灰色シルト
2. 黄灰色シルト
3. 淡灰色粘質土
4. 灰白色シルト
5. 淡黄灰色シルト (砂質強い)
6. 黄灰色砂質土
7. 灰褐色シルト
8. 淡灰色シルト
9. 淡黄灰色シルト
10. 7+8互層

遺物
壺
甕

図示した遺物は、壺 (162)、甕 (163) である。

162は頸部に1条の貼付突帯をめぐらす。突帯の断面形は台形である。口縁部は強く外反し、端部は丸い。口縁部外面を縦方向のハケ、胴部外面を横および斜め方向のミガキを施す。口径15.5cmを測る。

163は頸部に3条の沈線を巡らし、口縁は強く開く。口縁端部にキザミを断続的に施す。口径19.8cmを測る。

SD6002

幅約120cm、深さ65cmの溝状遺構で、ほぼ東西方向に掘削されている。SD5003やSD5004と比べると規模が小さいが、西側の肩が60度近い急傾斜になっており、東側の肩

は45度程度で2段に掘削されている。堆積層は上下に2分され、上層は再掘削後の堆積によるものと考えられる。埋土からは、土器に混じって獣骨が出上している。

遺物

遺物は細片が多く、図示した遺物は甕の底部(164)である。

甕

164は外面を縦方向のハケを施す。内面に横方向のミガキ状の痕跡が残るが、ナデにより不明瞭になっている。底面外周部は未調整で、内側をナデで強く凹ませている。中央部に穿孔が見られる。底径9.9cmを測る。

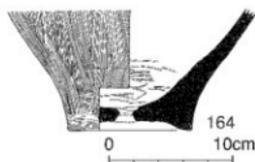


図51 第2次 SD6002出土土物実測図

SD6005

幅約190cm、深さ50cmの溝状遺構である。南端で西に屈曲する。SD6002と同様の堆積をしており、同時期の遺構であると考えられる。

遺物

図示した遺物は、甕(165)、壺(166~174)である。

甕

165は頸部下方に1条沈線を伴う削出突帯を巡らす。突帯は上下ともに縦ハケにより成形する。口縁部は緩やかに外反し、端部下半部にキザミを施す。胴部外面下半部にスガが付着する。口径17.5cmを測る。

壺

166は口頸部外面に粘土を追加し、頸部下に段を持つ。口縁部は緩やかに外反する。端部は丸い。調整は不明である。口径15.7cmを測る。

167は無紋の直口壺で、口縁部は短く立ち上がる。底部付近外面に斜め方向のミガキ、胴部外面及び頸部内面に横方向のミガキを施す。底面はわずかに凹む。口径8.2cmを測る。

168は頸部に2条沈線を伴う削出突帯を巡らす。突帯下部はヘラナデにより成形する。口縁部はほぼ直線的に大きく開く。口縁部内面の一部にミガキが残る。口径18.8cmを測る。

169は頸部下に断面三角形の貼付突帯を2条、突帯下方に5条以上の沈線を巡らす。頸胴界に沈線1条以上を伴う削出突帯を巡らす。口縁部は強く外反し、2個×2箇所の穿孔を持つ。内外面共に横方向の丁寧なミガキを施す。SD7001と破片が接合した。口径14.4cmを測る。

170は頸部に断面三角形の貼付突帯を1条巡らし、頸胴界に沈線1条以上を伴う削出突帯を巡らす。口縁部は強く外反し、端部は面を持つ。頸部から口縁部の内外面は、横方向の丁寧なミガキを施している。口径20.0cmを測る。

171は頸胴界に2条の沈線を伴う削出突帯を巡らし、胴部に3条の沈線を施す。頸胴界及び胴部最大径部の粘土接合痕は明瞭である。胴部最大径cmを測る。

172は壺または鉢の底部である。外面に横方向および斜め方向のミガキ、内面に斜め方向の板ナデを施している。底面はわずかに凹む。底径8.0cmを測る。

173は甕の底部である。内外面にヘラナデの痕跡が残る。底面はわずかに凹む。底径8.4cmを測る。

174は壺胴部の紋縁帯に施された無軸2条+木葉紋である。円形の刺突紋を伴う。

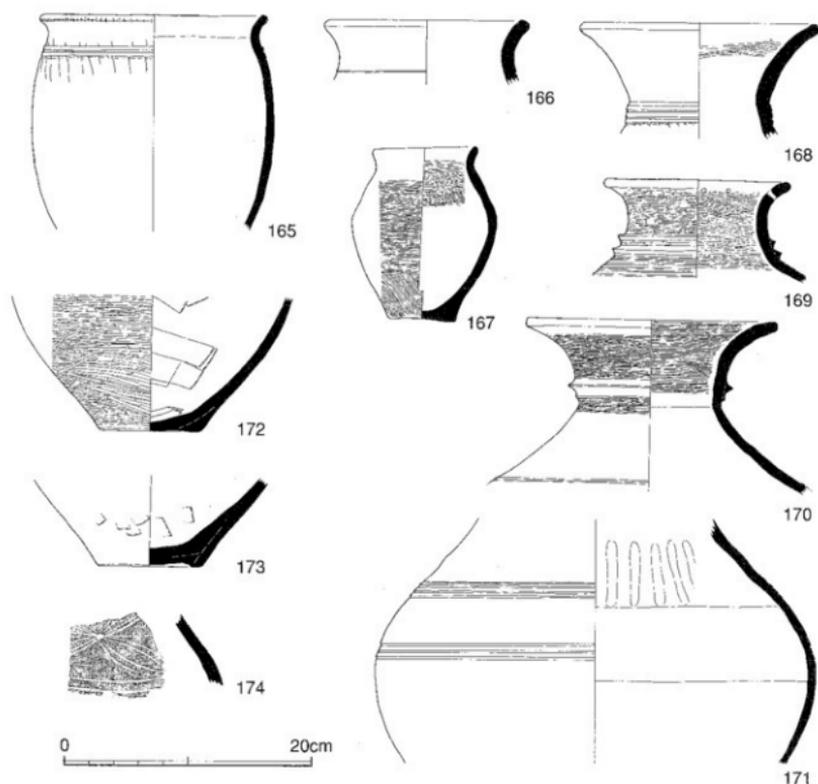


図52 第2次 SD6005出土遺物実測図

(2) 土坑・ピット

調査区のほぼ全城から、20数基の土坑、ピットが検出された。

SK6001

長辺170cm、短辺70cm、深さ40cmの不定形の土坑である。遺物は土坑底部より浮いているが、纏った状態で出土した。土器のほかにはイノシシ上顎骨等の獣骨が出土した。

遺物
壺

図示した遺物は、壺（175・176）、甕（177・178）である。

175は頸部に1条の貼付突帯を巡らす。断面形は台形である。突帯下方に1条の沈線を巡らし、頸胴界に削出突帯を巡らす。口縁部は強く外反し、端部は面を持つ。口縁部内面は横方向のミガキを施す。口径11.9cmを測る。

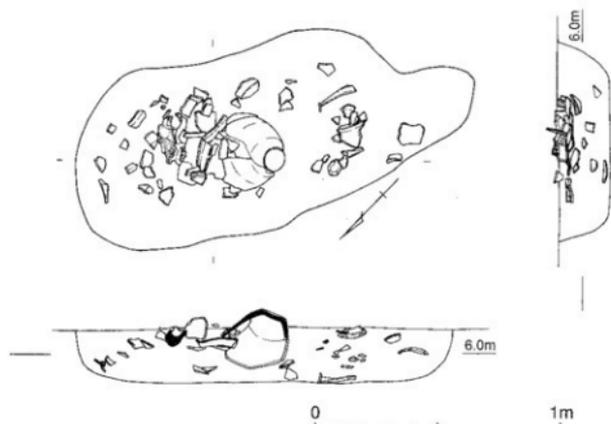


図53 第2次 SK6001平立面図

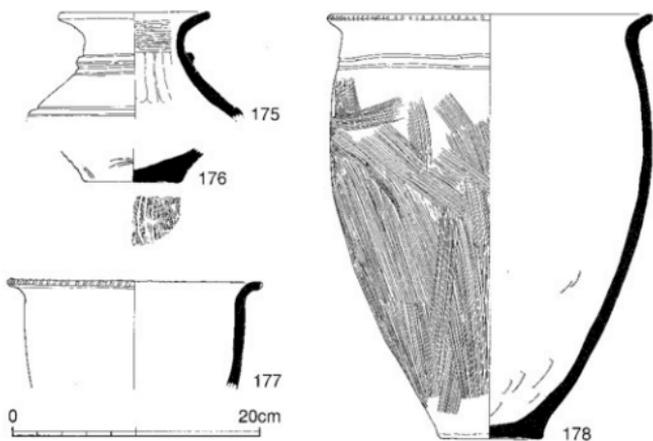


図54 第2次 SK6001出土遺物実測図

176は壺または鉢の底部である。外面に3条、底面に4条の重弧紋を施している。底面はわずかに凹む。底径7.6cmを測る。

壺

177の口縁部は強く外反し、端部は刻みを施す。頸部以下は無紋である。口径20.3cmを測る。

178は頸部下に2条の沈線を廻らす。口縁は強く屈曲し、端部にキザミを施す。胴部外面は縦及び斜め方向のハケ、内面は板ナデの痕跡が残る。底面はわずかに凹む。口径25.8cmを測る。

SK6002

長辺120cm、短辺55cm、深さ40cmの不定型の土坑である。遺物の出土状況はSK6001と類似しており、土坑底部より浮いた状態で纏って検出されている。獣骨の出土が多い。

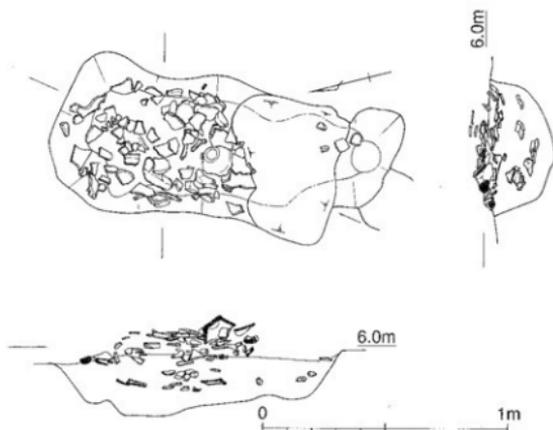


図55 第2次 SK6002平立面図

遺物
甕

図示した遺物は、甕（179～183）、葦または鉢の底部（184）である。

179は口頸部に粘土を追加することにより、頸部に段を持つ。口縁部は強く外反し、口縁端部にキザミを施す。調整は不明である。口径18.0cmを測る。

180は頸部下に沈線を1条巡らし、口縁部は強く外方に屈曲する。口縁端部下端にキザミを施す。胴部外面はナナメ方向の板ナデを施す。口径は20.8cmを測る。

181～183はいずれも頸部に2条の沈線を巡らし、口縁端部にキザミを施す。181は大型の甕で口径35.0cmを測る。182は口径22.0cmを測る。183は口径20.2cmを測る。

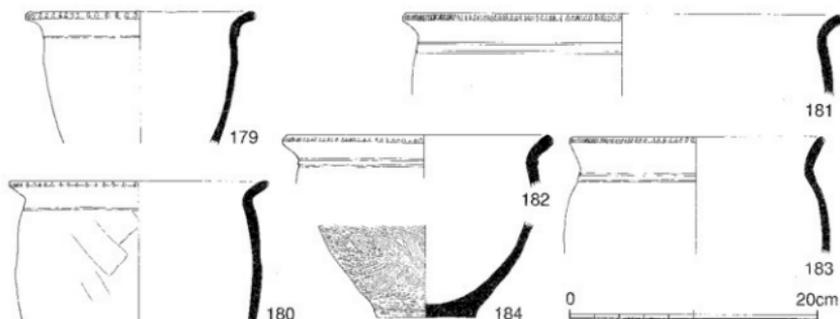


図56 第2次 SK6002出土遺物実測図(1)

底部 184は壺の底部外面に1条の沈線を廻らす。外面を横及び斜め方向の丁寧なミガキで仕上げる。底径8.0cmを測る。

木葉紋 185は壺の頸胴界の段下方に施された無軸2条の+木葉紋である。

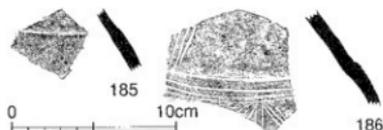


図57 第2次 SK6002出土遺物実測図(2)

186は壺の頸胴界の段下方に3条の沈線を廻らし、その下方に有軸1条のX木葉紋である。頸部に3条の直線紋を施す。

SK6004

遺物
壺

長辺35cm以上、短辺25cm、深さ25cmの不定型の上坑である。図示した遺物は、山形紋が施された壺(187・188)である。



図58 第2次 SK6004出土遺物実測図

いずれも細片であるが、施紋パターンは復元可能である。187は頸胴界下方の紋様帯に施された山形紋である。2列対称に施紋されており、1単位は4条の沈線で構成されている。

188は頸胴界の削出突帯に施された山形紋である。1単位3条以上の沈線により構成されている。

SK6007

古墳時代中期以降の遺構掘削により擾乱されており、全体の形状は不明であるが、長径1.2m以上、短径1.0m以上、深さ40cmの楕円形の土坑である。

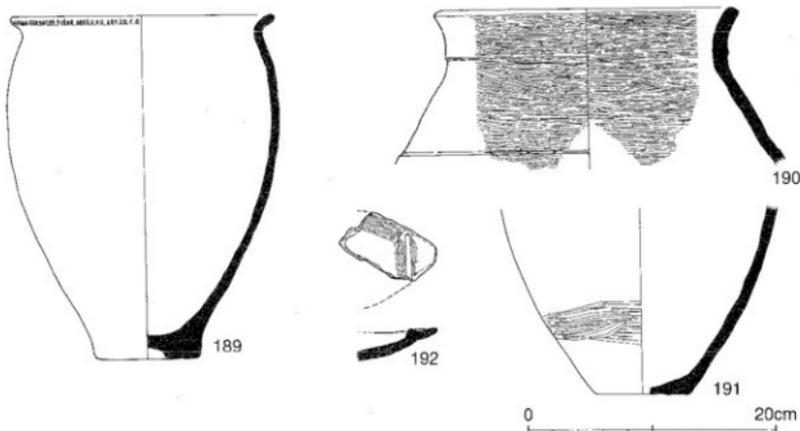


図59 第2次 SK6007出土遺物実測図

- 遺物 図示した遺物は、甕 (189)、壺 (190・191)、耳付鉢 (192) である。
- 甕 189は強く外方に屈曲する口縁を持ち、端部下端にキザミを施す。頸部以下は無紋である。底部内面に炭化物の吸着が見られる。底面中央は強く凹む。口径21.0cmを測る。
- 壺 190は大型の壺の口頸部である。口頸界、頸胴界に段を持つ。口縁部はわずかに外反して立ち上がり、端部は面を持つ。内外面とも横方向のミガキを施す。口径23.6cmを測る。
- 191は壺の底部である。外面に横方向のミガキを施す。底面はわずかに凹む。底径7.3cmを測る。
- 耳付鉢 192は舟形の浅い耳付鉢である。耳部と鉢部の境に高まりを設け、鉢部内面端部はミガキを施す。残存長7.9cmを測る。

SK6010

長辺 165cm、短辺70cm、深さ35cmの隅丸方形の土坑である。遺構の断面形は、袋状であり、壁面は内傾して立ち上がる。床面外周に9箇所の枕穴が検出された。いずれも内傾しており、合掌状の屋根等の存在が想定され、貯蔵穴と考えられる。遺物は土坑底に接して少量出土しており、上器のほかに紡錘車、鹿骨が出土した。

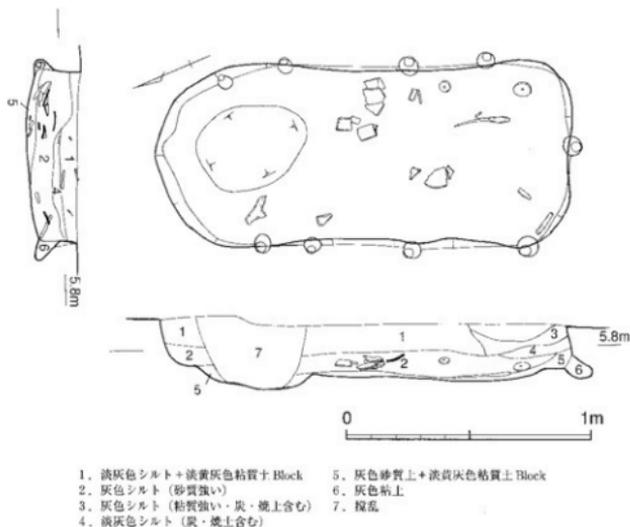


図60 第2次 SK6010平立面図

- 遺物 図示した遺物は、ミニチュア (193)、壺底部 (194) である。
- ミニチュア 193は頸部に細い貼付突帯を1条巡らす。口縁部は直線的に外方に伸び、端部は面を持つ。口径4.4cmを測る。
- 壺底部 194は胴部が強く張る壺の底部である。内外面ともミガキを施す。底径8.8cmを測る。

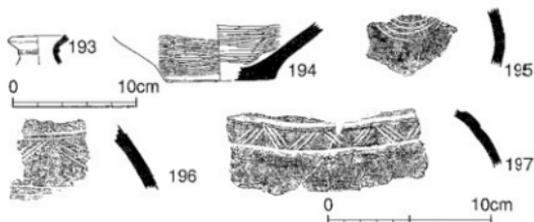


図61 第2次 SK6010出土遺物実測図

- 紋様 いずれも壺または鉢の頸胴間に施紋されている。
 195は4条の重弧紋である。
 196は頸胴界の段下方に1条の沈線と2条以上の沈線による紋様帯を区画し、3条の山形紋を施紋している。
 197は頸胴界の削出突帯に3条の山形紋を施紋している。
- 鹿角 鹿角が1点出土した。加工痕、使用痕共に不明である。

SK6011

遺物

直径約30cm、深さ20cmの円形の土坑である。

図示した遺物は、甕 (198~200) である。

甕

198は頸部下に2条1単位の沈線を2単位巡らす。口縁部は強く外反し、端部にキザミを施す。口径31.8cmを測る。

199は甕の胴部下半部である。外面は縦方向のハケ、内面は板ナデを施す。底面は平坦である。底面は平坦である。底径7.3cmを測る。

200は甕の底部である。内外面は板ナデを施す。底面はわずかに凹み、焼成後穿孔している。底径8.3cmを測る。

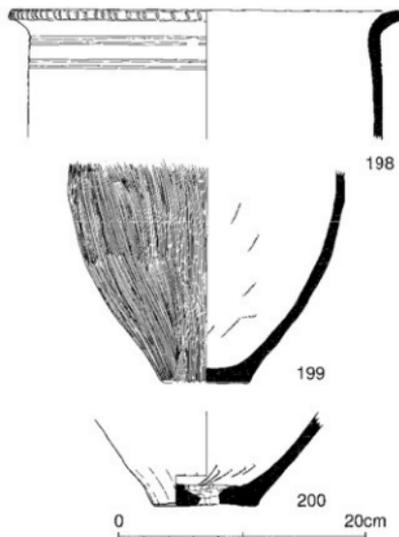


図62 第2次 SK6011出土遺物実測図

(3) 用途不明遺構

SX6001

調査区の制約により全体の形状は不明であるが、長辺370cm以上、短辺190cm、深さ20cmの不定形の土坑である。埋土の堆積状況から、自然堆積したと考えられる。遺構の

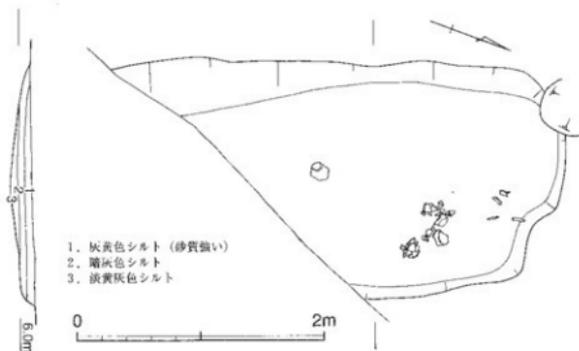


図63 第2次 SX6001平面断面図

底面付近から、獣骨を含む遺物が出土した。

遺物
甕

図示した遺物は、甕（201～205）、壺（206～212）である。

201は頸部下に6条の沈線を巡らす。口縁部は粘土の追加による成形ではなく、強く外反させて逆L字形を呈する。端部は面を持ち、キザミを施す。口径16.7cmを測る。

202は逆L字形の口縁部で、粘土を追加して成形している。口縁端部及び口縁部内側にキザミを施す。口縁直下に5条以上の沈線を巡らす。

203は緩やかに外反する口縁を持ち、端部は断続的に刻みを施す。外面は縦方向のハケを施す。

204は頸部に3条の沈線を巡らす。口縁部は強く外反しているが、端部はやや上方に内湾させ、キザミを施す。外面下半は縦方向のハケ、外面上半は斜め方向のハケを施す。内面は縦方向の板ナデを施す。底面に穿孔が見られる。口径21.2cmを測る。

205は2条及び3条の沈線で区画した紋様帯に、ヘラ描きによる2段の縦流水紋を施す。上段は閉塞する2重の沈線を単位とし、下段は2本の平行線を囲む1重の沈線を単位としている。口縁部は粘土を追加して逆L字形を呈し、端部に細かいキザミを施す。胴部外面は縦方向のハケを施し、内面に板ナデの痕跡が残る。底面はわずかに凹む。口径18.4cmを測る。

壺

206は頸部に4条以上の沈線を巡らし、口縁は緩やかに外反する。口縁端部下にキザミを施す。口縁部外面は縦方向のハケを施す。口径16.7cmを測る。

207は頸部に5条の貼付突帯を巡らし、突帯にはキザミを施す。口縁部外面にハケ、内面に横方向のミガキを施す。頸部径8.4cmを測る。

208は頸部に5条の沈線を巡らし、外面を縦方向のハケ、頸部内面上半部を横方向のミガキ、頸部内面下半部を横方向のハケを施す。頸部径12.4cmを測る。

209は壺の胴部下半部である。外面は縦及び斜め方向のハケ、内面は斜め方向の板ナデを施す。底面はわずかに凹む。底径7.6cmを測る。

210は壺の底部である。外面は縦ハケ、内面は板ナデを施す。底面は木調整である。底径16.0cmを測る。

木葉紋 211・212は頸部部に施された木葉紋である。211は有軸2条の木葉紋である。212は有軸1条の木葉紋で、上方の2条の区画線の間に列点紋を施す。

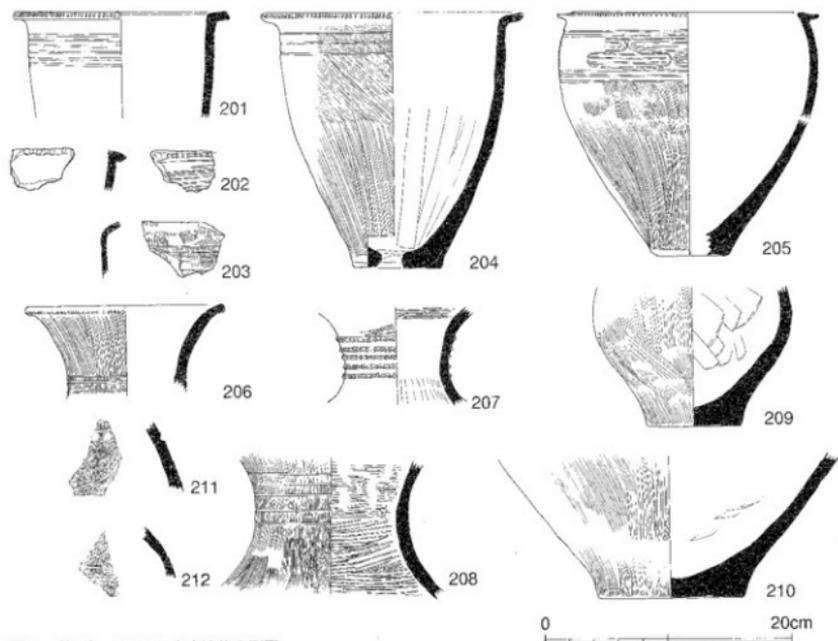


図64 第2次 SX6001出土遺物実測図

SX6002

直径約270cm、深さ約70cmの不整円形の土坑である。埋土より多量の獣骨、土器、土製紡錘車が出土した。遺物は、遺構が20cm程度埋没した段階に投棄されている状態で、面的に広がって検出されており、一括性は高いと考えられる。他に斑レイ岩製の磨石が出土している。

遺物 土器は細片が多く、遺物量に比して個体として纏まるものは少ない。甕は少条の沈線、壺は削出突帯を主な施紋とする。図示した遺物は、ミニチュア (213～215)、壺蓋 (216)、甕 (217～220)、甕 (221・224) である。

ミニチュア 3点出土しており、いずれもナデ、指頭圧で成形されている。口径は、213が3.6cm、214が3.4cm、215が6.9cmを測る。

壺 216は小型の壺蓋である。つまみ部は4方向の突起を持つ。つまみ部中央に3mmの穿孔がある。外面は丁寧なミガキを施す。

甕 217は口頸部下無紋で、わずかに外半する口縁を持つ。口縁端部にキザミを施す。口径18.4cmを測る。

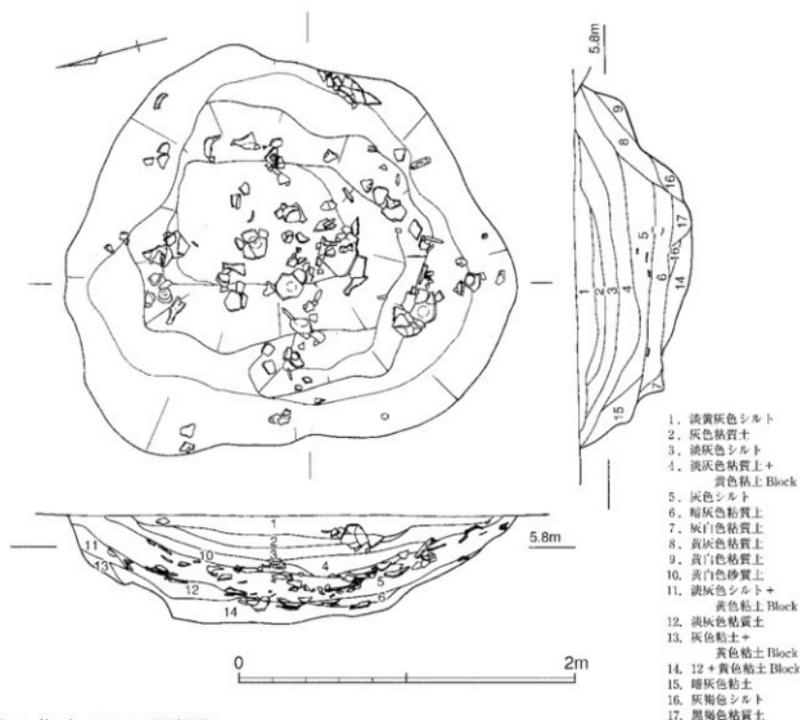


図65 第2次 SX6002平面図

218は頸部下に3条の沈線を巡らす。口縁部は強く外反し、端部下端にキザミを施す。体部外面に縦方向のハケを施す。口径23.2cmを測る。

219は頸部下に1条の沈線を巡らす。口縁は直線的に外方に伸び、口縁端部にキザミを施す。底面はわずかに凹み、焼成後に穿孔している。体部外面に縦方向ハケを施す。口径22.2cmを測る。

220は頸部下に2条1単位の沈線を2単位巡らし、単位間に円形の刺突紋を施す。口縁は強く外反し、口縁端部にキザミを施す。胴部は内外面ともにハケナデを施す。口径36.8cmを測る。

壺 221は口縁部が強く外反し、穿孔が1箇所見られる。口径13.6cmを測る。

222は頸部下に低い貼付突帯を巡らし、1条の沈線を伴う。口縁部は強く外反し、穿孔が1箇所見られる。頸部外面および口縁部内面に横方向のミガキを施す。口径16.7cmを測る。

223は胴部が強く張り出す。内外面ともに横方向のミガキを施す。底面は平坦である。底径8.0cmを測る。

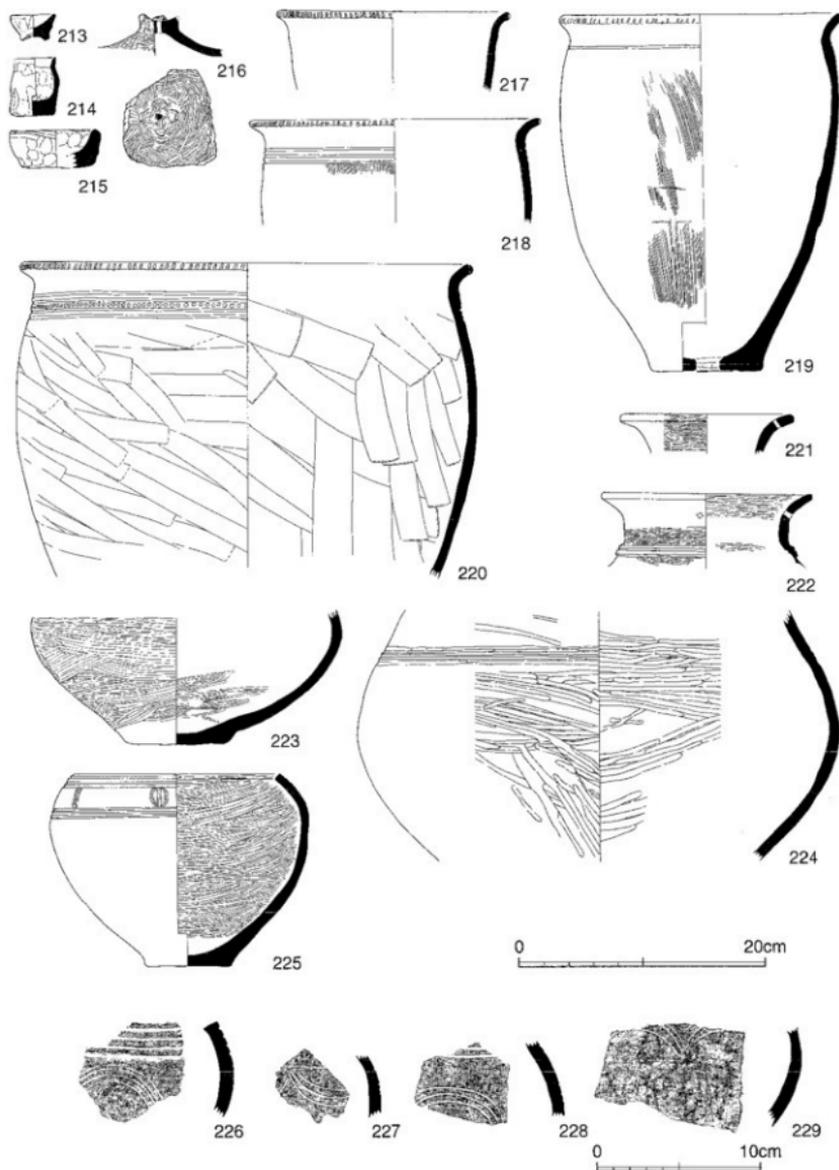


図66 第2次 SX6002出土遺物実測図

224は大型の壺の頸胴部である。頸胴界に1条沈線を伴う削出突帯を巡らす。削出突帯は上下とも、横方向のヘラオサエによって成形されている。内外面ともミガキを施す。胴部最大径38.8cmを測る。

鉢

225は山縁部および胴部最大径部上方に3条の沈線で紋様帯を区画し、2軸2条の縦位の木葉紋と3条の直線紋を施紋する。山縁部は強く内湾して内側上方に伸び、端部は面を持つ。外面の器表面は剥離しており調整は不明である。内面は丁寧なミガキを施す。口径16.7cmを測る。

紋様

226は壺の頸胴界に段を持つ。段下に1条沈線を巡らし、沈線に接して3連の重弧紋を巡らす。

227は壺の頸胴界に2条+aの沈線を巡らす。胴部最大径部に3条の重弧紋を施す。

228は壺の最大径部に3条の重弧紋を施す。

229は壺の最大径部に1条の沈線を巡らし、沈線に接して3条の重弧紋を施す。

(4) 竪穴住居

SB6001

調査区の制約により、全体の形状は不明であるが、直径440cm以上、深さ約15cmの円形の遺構である。2段の平坦面を持ち、遺構内のやや北東寄り、直径約280cmの円形に約10cm掘り込まれている。下面から土坑(SB6001内SK01)、ピット、溝が検出された。周壁溝、炬等の施設は検出されなかったが、規模・ピットの存在から竪穴住居であると考えられる。

土坑

長径70cm、短径40cm以上、深さ10cmの土坑と考えられる。SB6001出土遺物の大半は、当土坑から出土している。遺物は最終理上から出土した。

溝

長辺80cm以上、幅約30cm、深さ20cmの溝状の遺構である。遺物は出土しなかった。

柱穴

直径20cm、深さ20cmの柱穴である。遺物は出土しなかった。

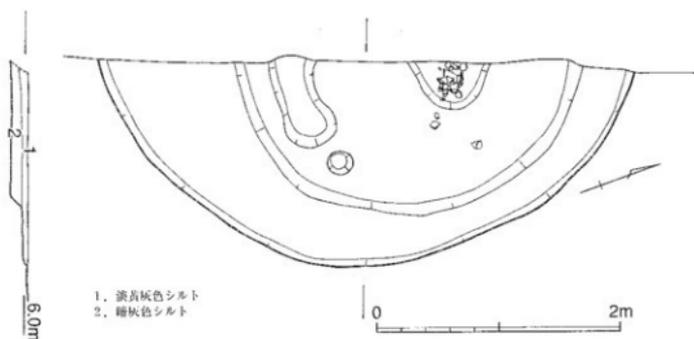


図67 第2次 SB6001平面断面図

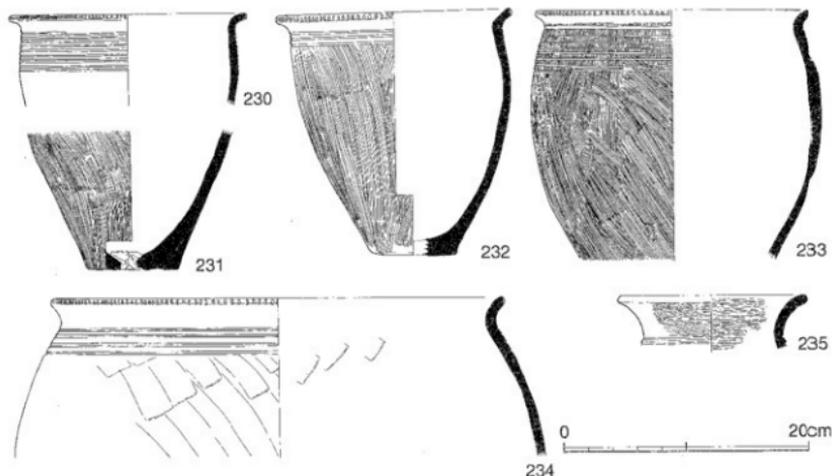


図68 第2次 SB6001出土遺物実測図

遺物

図示した遺物は、甕 (230~234)、壺 (235) である。

甕

230は10条の沈線を巡らす。口縁部は強く外反し、端部にキザミを施す。口径19.6cmを測る。

231は甕の底部である。外面を縦方向のハケを施す。底面は未調整で、穿孔が見られる。底径7.5cmを測る。

232は頸部に3条の沈線を巡らす。口縁部は強く外方に屈曲し、直線的に伸びる。口縁端部にキザミを施す。外面は縦方向のハケを施す。口径19.1cmを測る。

233は7条の沈線を巡らす。口縁部は短く外反し、口縁端部に刻みを施す。胴部外面は斜め方向のハケを施す。口縁部内面は横方向ハケを施す。口径22.4cmを測る。

234は胴が強く張る大型の甕である。頸部下に4条の沈線を巡らす。沈線の断面形は半円形ではなく、約90度の角を持つ。胴部内外面は斜め方向の板ナデを施す。口径36.4cmを測る。

壺

235は緩やかに外半する広口壺の口縁部である。頸部に1条以上の沈線を伴う削出突帯を巡らす。口縁部内外面は横方向のミガキを施す。口径15.6cmを測る。

第4節 復旧遺構面

調査団による調査で、弥生時代前期から古墳時代中期の遺構が同一面で検出されていた。遺構の詳細な検出状況は不明であり、一括性については確認できないが、主要な資料を中心に遺物の図化を行った。

復旧時に未完掘の遺構に関しては、新規検出遺構として取り扱い、遺構の名称は既出のものを使用した。精査の結果、大きく形状が変化したものと、新たに検出された遺構については、4桁の遺構番号を付した。

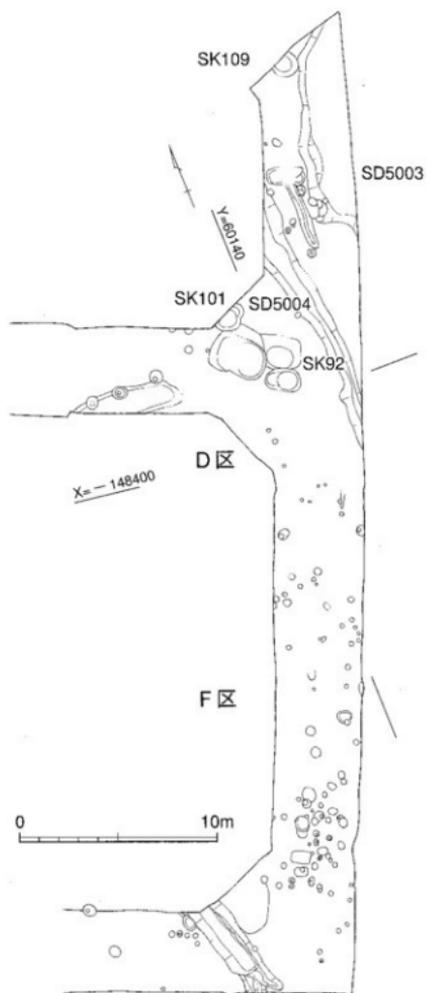


図69 第2次 復旧遺構面平面図

SK14出土遺物

図示した遺物は、甕 (236)、壺 (237~241) である。壺は胴が強く張り出すものが含まれる。

甕 236は頸胴界にハケ押圧による段を持つ。口縁端部に棒状工具の押圧によるキザミを施し、底面はわずかに凹む。口径18.4cmを測る。

壺 237は頸胴界にミガキ押圧による明瞭な段を持ち、内面の指頭圧痕と対応している。胴部の張り出しが強い。頸部下外面に下方から上方に施されたハケの痕跡が認められ、以下は横および斜め方向のミガキを施す。頸部下及び頸胴界の内面に、強い指頭圧痕が見られる。口径12.3cmを測る。

238は口頸部界および頸胴界に横方向のミガキによる明瞭な段を持ち、胴部の張り出しが強い。頸胴界の内面に強い指頭圧痕が見られる。口縁部はわずかに外反する。口径15.1cmを測る。

239は口頸部にハケ押圧による段を施し、その上に1条の沈線を巡らす。沈線と段の間に円形の刺突紋を施す。頸胴界はタテ方向のハケを施した後、ミガキによる押圧で段を施し、内面の強いナデと対応する。外面は全面に縦方向のハケを施した後、縦及び斜め方向のミガキを施す。口縁部内面はヨコハケ、頸部内面は指頭圧痕、底部内面はハケナデの痕跡が認められる。底面はわずかに凹む。口径16.0cmを測る。

240は頸部に2条の沈線を巡らし、頸胴界に3条の沈線を伴う低い段を持つ。外面及び口縁部内面は、横及び斜め方向のミガキが施される。口径12.5cmを測る。

241は頸部及び頸胴界に3条の沈線を巡らす。胴部最大径部の上下に2条の沈線を巡らし、紋様帯の区画線に類似する施紋であると考えられる。口径14.8cmを測る。

SK17出土遺物

図示した遺物は鉢 (242) である。

鉢 242は頸部に1条の沈線を巡らし、口縁部は強く外反する。口縁端部にキザミを施す。底部外面にミガキの痕跡が残り、底面はわずかに凹む。口径16.4cmを測る。

SK21出土遺物

図示した遺物は鉢 (243) である。

鉢 243は頸部に2条の沈線を巡らし、沈線間に楕円形の刺突紋を施す。口縁部は強く外反し端部は面を持つ。口縁端部はキザミを施す。調整は不明である。口径32.2cmを測る。

SK24出土遺物

図示した遺物は壺の口縁部 (244) である。

壺 244は頸部に段を持ち、口縁部は緩やかに外反する。内外面ともにナデを施す。口径18.0cmを測る。

SK80出土遺物

図示した遺物は鉢 (245) である。SK100と破片が接合した。口縁部は緩やかに内湾し、斜め内方に伸びる。器表面が残存せず調整は不明瞭であるが、底部外面に縦方向のハケの痕跡が残る。口径16.8cmを測る。

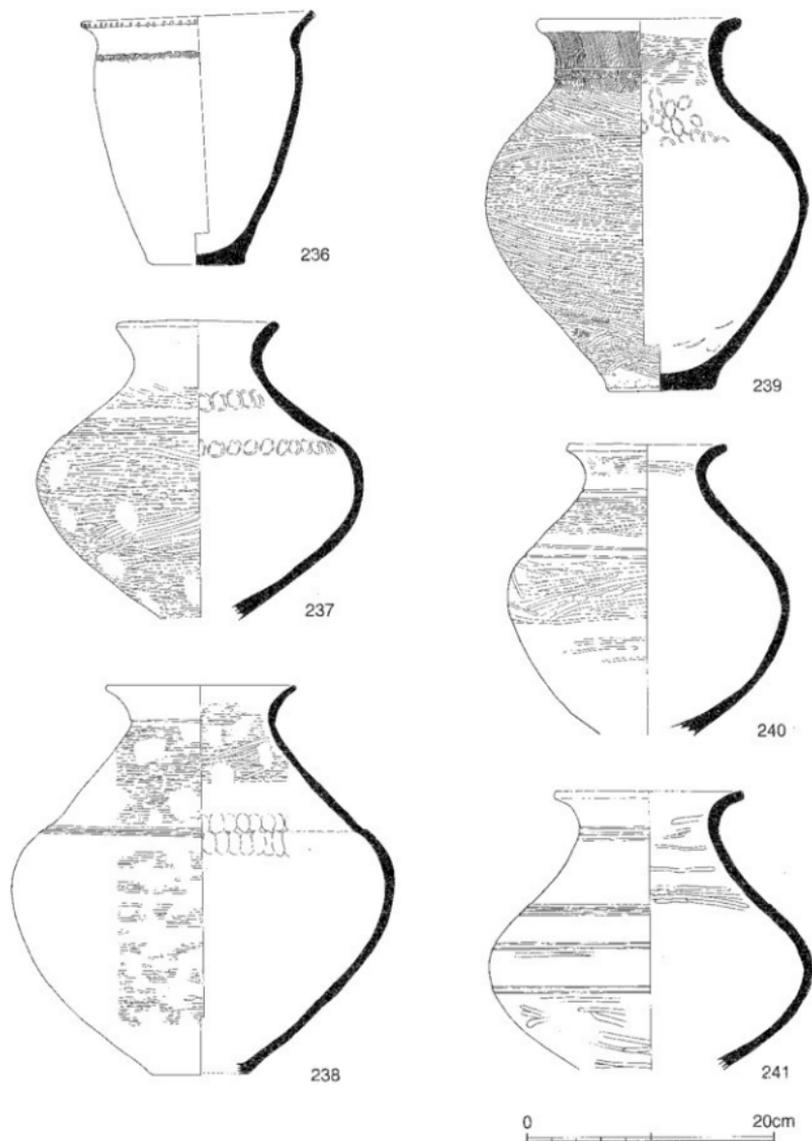


図70 第2次 調査団検出遺物実測図 (1)

SK81出土遺物

図示した遺物は壺または鉢の底部（246）である。外面は縦方向のミガキ、内面は横方向のミガキを施す。底面はわずかに凹む。底径7.6cmを測る。

SK92出土遺物

図示した遺物は甕（247）である。

甕

247は口頸部下無紋である。口縁部は緩やかに外反し、端部は面を持つ。口縁端部に棒状工具押圧によるキザミを施す。口径23.0cmを測る。

SK101

精査の結果、埋土が残存していることが判明し、再掘削を行った結果、最大径約170cm、深さ約30cmの円形土坑であることが判明した。

遺物

甕の上半部（248）、鹿の角・肩甲骨が出土した。

甕

248は口頸部下無紋の甕である。口縁部は緩やかに外反し、端部にキザミを施す。調整は不明である。口径29.4cmを測る。

SK109

精査の結果、埋土が残存していることが判明し、再掘削を行った結果、長径約170cm、短径135cm以上、深さ約30cmの不定形の土坑であることが判明した。調査区の制約により、全体の形状は不明である。底面直上で弥生土器、獣骨が検出された。

遺物

図示した遺物は甕（249）である。

甕

249は頸部に2条の沈線を巡らし、竹管状工具による刺突紋を伴う。口縁部は強く外反し、口縁端部下端にキザミを施す。口径18.6cmを測る。

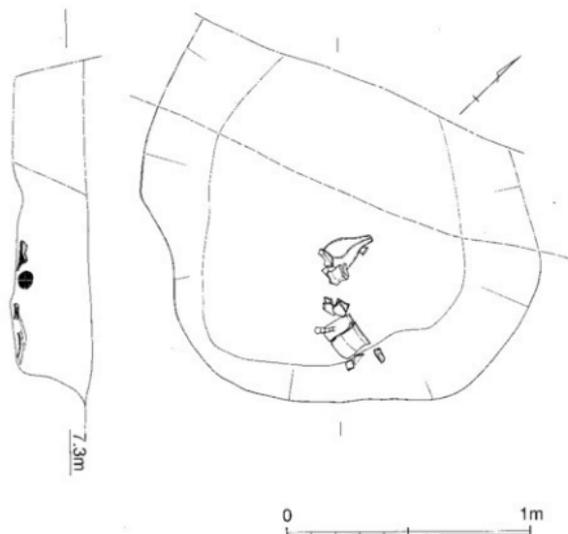


図71 第2次 SK109平立面図

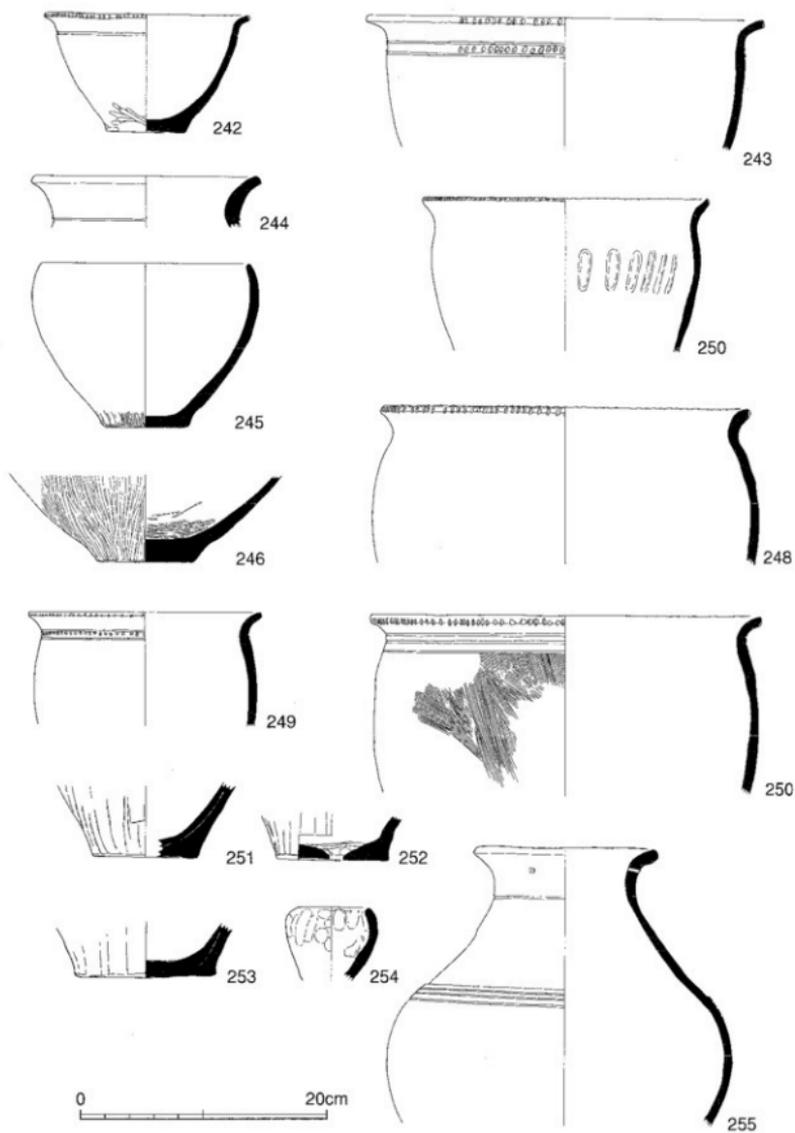


図72 第2次 調査団検出遺物実測図(2)

250は頸部に3条の沈線を巡らす。口縁部は強く外反し、口縁部下端にキザミを施す。胴部はタテ及びナナメ方向のハケを施す。口径31.6cmを測る。

251～253はいずれも甕の底部である。外面は縦方向のハケが施されている。251は焼成後穿孔されている。252・253の底面は、わずかに凹む。251は8.4cm、252は8.8cm、253は11.5cmを測る。

SK113出土

遺物 図示した遺物はミニチュア（254）である。

ミニチュア 254は口縁部は緩やかに内湾し、口縁部は丸い。全面、ユビオサエ、ナデを施す。口径4.6cmを測る。

SX25出土遺物

図示した遺物は、壺（255）である。

壺 255は頸部に1条の沈線を巡らし、口縁部は緩やかに外反する。頸胴界に段を持ち、3条の沈線を伴う。口縁部に、焼成前穿孔が1箇所見られる。器表面が失われており、調整は不明である。口径14.3cmを測る。

SP74出土遺物

図示した遺物は甕（256）である。SK14出土遺物と破片が接合した。

甕 頸部に沈線を1条巡らす。口縁部は緩やかに外反し、口縁部下端にキザミを施す。内外面とも、板ナデの痕跡が残る。外面の胴部最大径部付近にススの付着が認められる。内面底部には炭化物の吸着がわずかに認められる。底面はわずかに凹む。口径22.4cmを測る。

SP96出土遺物

図示した遺物は甕（257）である。

甕 257は無紋の甕である。口縁部は緩やかに外反し、頸部内外面にハケの痕跡が残る。底面はわずかに凹む。口径17.2cmを測る。

SD170出土

遺物 図示した遺物はミニチュア（258）である。

ミニチュア 258は鉢を模したミニチュアである。手づくねによる成型で底部は高台状に仕上げる。口径6.1cmを測る。

他の遺物 重弧紋・木葉紋等を施紋している資料について記述する。

木葉紋 SK93より出土している。259は胴部の2条の直線紋による紋様帯をもつ壺である。紋様帯に有軸木葉紋が施紋されている。

重弧紋 SK15・SK97・SP823より出土している。

260は頸部に段を持ち、その下に1条の沈線を巡らす壺である。沈線に接して上弦3連の重弧紋を重ねるように施紋する。

261は頸部に2条の沈線を巡らす壺である。沈線に接して、上弦3連の重弧紋を施紋する。

262はタテ4条、ヨコ2条以上の直線紋で画された、3条の重弧紋である。胎土は金雲母、クサリ礫を含み、六甲山南麓の胎土と考えられる。

山形紋 SK102より出土している。263は頸部下に1条以上の沈線を巡らした甕である。沈線に接して、3本のヘラガキ沈線による山形紋が施紋されている。

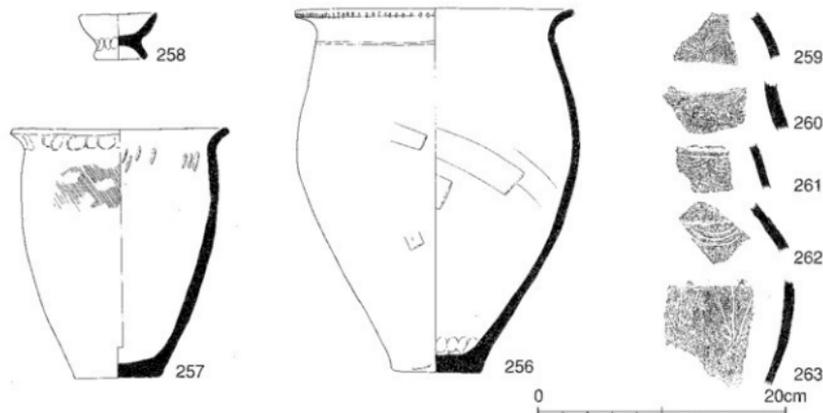


図73 第2次 調査団検出遺物実測図 (3)

第5節 土製品と石器

(1) 土製品

出土した土製品は、有孔円板 (264~269)、用途不明円板 (270)、土器片転用円板 (271~278)、土錘 (279・280) である。

- 有孔円板** 6点出土した。いずれも円板状で、中心部が穿孔されている。直径1cm台の小型品 (264~268) が5点と、直径9.2cmの大型品 (269) が1点出土した。小型品はすべて全面ナデで成形されているが、大型品は両面ともにヘラミガキを施し、端面はナデを施す。大型品は、紡錘車または舞錐等の回転穿孔具として使用された可能性が考えられる。
- 用途不明円板** 270は上記の土製円板と形状が異なり、端部を薄く成形し、端部から約1cmの箇所斜め方向の穿孔が施されている。用途は不明である。
- 土器転用円板** 271~278は土器片を円板状に調整している。土器片を打ち欠いて粗く形を整えた後、短部を調整して面取りを行うもの (271~273・278) と、未調整のもの (274~277) がある。
- 土錘** 299は球形で全面ユビオサエで成形されている。
280は棒状に成形されており、端部はユビオサエ、端部以外はヘラミガキが施されている。

(2) 石器

サヌカイト製石器

削器 (281~292)、楔形石器 (293~300) が出土した。

刃器

削器または石匙等と呼称されるものを、鋭角な刃部を持つものと併わせて刃器とした。片面に大剥離面を持つものが多い。

楔形石器

打点に敲打痕、作用点に階段状の剥離が見られ、破損品は打点から作用点に破断面が見られるものを楔形石器とした。

その他の石器

石包丁 (301~303)、削器 (304)、紡錘車 (305-306)、叩石 (307)、擦石 (308)、砥石 (309)、石斧 (310) が出土した。

石包丁

301・302は外湾型である。いずれも破片であるが穿孔部が残り、両側穿孔が確認できる。302の両面には成型時の擦痕が明瞭に残る。市内北区道場町産出の塩田石製である。

303は小片であり形状は不明である。穿孔部は片側穿孔であり、裏面は、貫通前に円錐状に剥離している。

刃器

304は石包丁の可能性があるが、穿孔部が確認できないため、刃器とした刃部はわずかに湾曲し、両側から刃部を研ぎだしている。

紡錘車

305・306はいずれも正円形に加工されており、中心部に穿孔されている。両面ともに丁寧に磨かれている。当遺跡では、弥生時代中期前半以降に玉製品製の製作が行われており、紡錘車としての用途以外に、舞錐等の石器の穿孔具に使用された可能性も考えられる。

叩石

307は円板状に打ち欠いて成形している。主要作用面に打痕が集中しているが、端面全周にも使用痕が見られる。

砥石

309は断面台形で、主要作用面は凹上に窪んでいる。合計3面に使用痕が見られる。

石斧

310は太型蛤刃石斧の先端部付近の破片である。一部に敲打痕が残る。

図	遺物名	出土地	法 量				備 考
			長径 (cm)	短径 (cm)	厚 (長) (cm)	重 (g)	
264	有孔円板	SK6010	4.4	4.0	1.8	43.9	完形
265	有孔円板	SX6002	4.7	4.7	1.3	34.4	完形
266	有孔円板	SK109	4.0	4.0	1.2	13.4	
267	有孔円板	第6面	4.5	-	1.3	10.9	
268	有孔円板	第6面	4.4	-	1.4	23.3	
269	有孔円板	SD7001	9.2	-	1.4	69.6	
270	用途不明円板	第6面	5.7	-	1.0	20.3	
271	土器片転用円板	SD6003	8.1	7.5	1.1	90.6	完形
272	土器片転用円板	第6面	3.7	3.3	0.6	12.3	完形
273	土器片転用円板	SX6002	4.0	4.0	0.6	12.1	完形
274	土器片転用円板	SK109	4.8	4.6	0.8	25.1	完形
275	土器片転用円板	第6面	4.7	4.2	0.9	25.4	完形
276	土器片転用円板	第6面	5.8	5.0	0.8	31.3	完形
277	土器片転用円板	第7面	6.5	6.2	0.8	42.8	完形
278	土器片転用円板	第7面	8.8	8.0	0.9	79.4	完形
279	土錘	SK5004	4.1	4.0	3.9	61.8	完形
280	土錘	SB6001	3.2	3.0	6.1	61.7	

表3 第2次調査 土製品計測値

図	遺物名	石材名	出土地	法 量				比重
				長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	
301	石包丁	緑色片岩	第7面	4.6~	4.8~	0.5	16.9	3.02
302	石包丁	塩田石	第6面	5.8~	5.2~	0.8	43	2.4
303	石包丁	結晶片岩	SD7001	3.1~	3.4~	0.8	18.4	3.02
304	削器	緑色片岩	SK7002	8.9~	5.7~	0.9	53.8	2.79
305	紡錘車	緑色片岩	SK6010	6.8(長径)	6.8(短径)	0.5	50.8	2.97
306	紡錘車	緑色片岩	第7面	4.8(長径)	4.8(短径)	0.6	30.2	2.93
307	叩石	チャート	SD7001	6.9	6.0	2.4	112.8	2.64
308	擦石	砂岩	SX7001	5.5	3.3	3.3	77.3	2.54
309	砥石	砂岩 (緻密)	SD6005	8.7~	6.5	2.7	265	2.61
310	石斧	角閃岩	SK7003	9.1~	5.9~	3.5~	225.8	2.83

表4 第2次調査 石製品計測値一覧

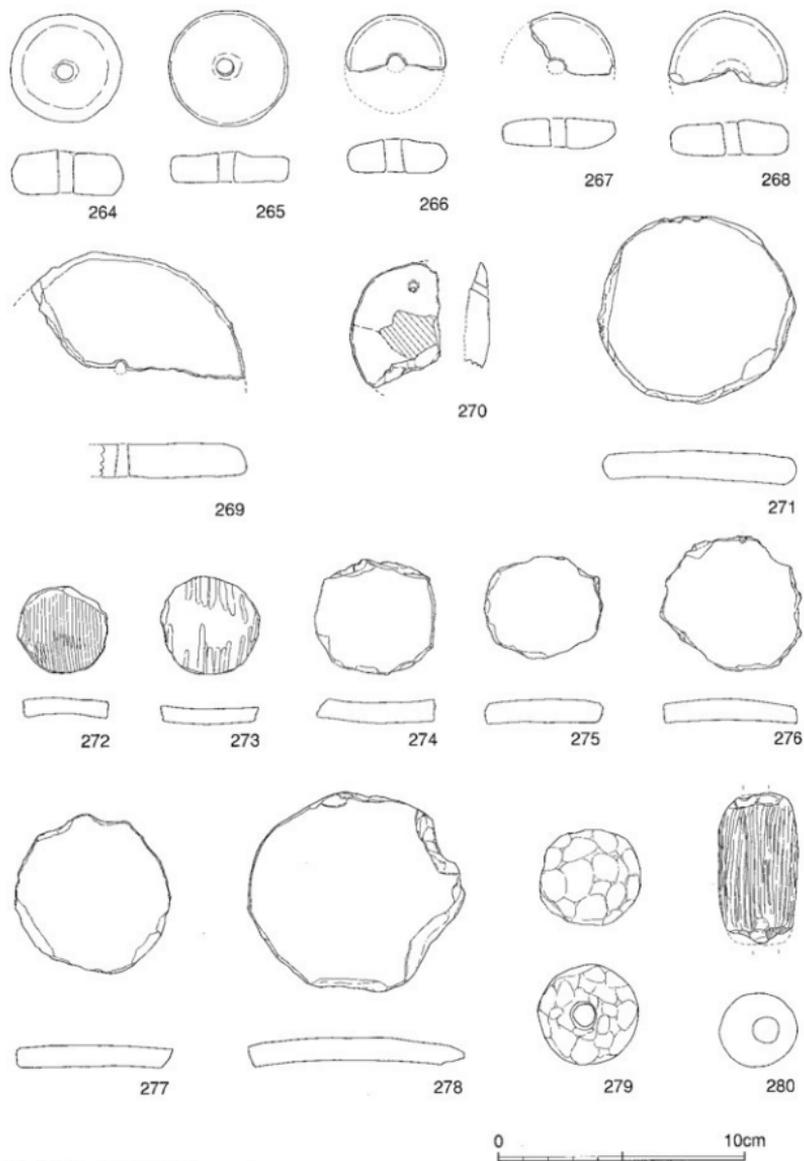


図74 第2次 土製品実測図

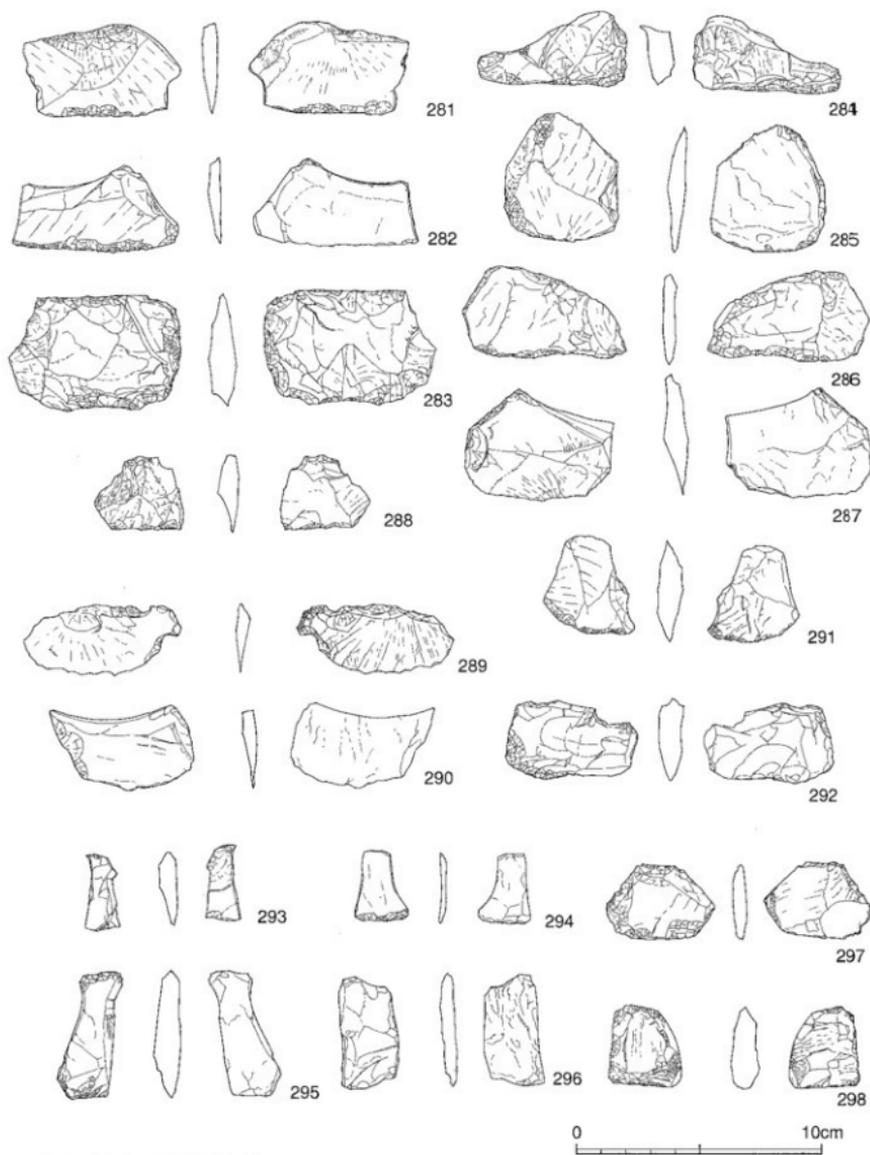


図75 第2次 石器実測図(1)

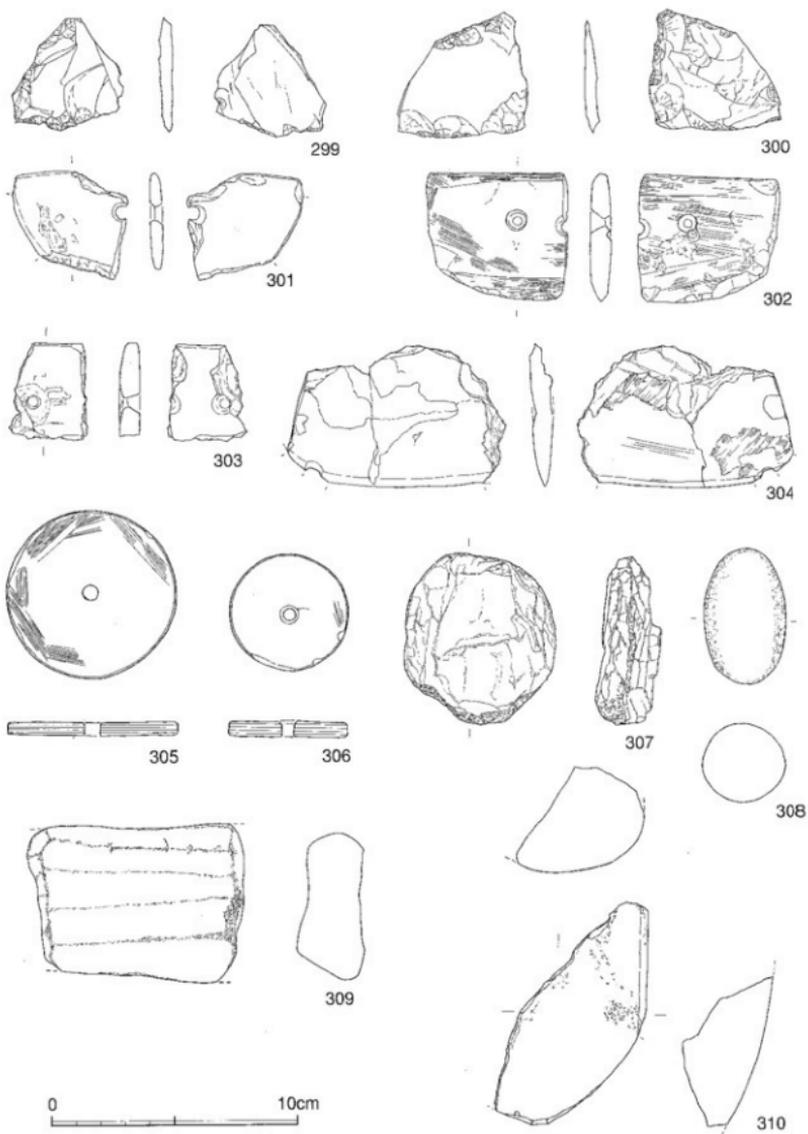


図76 第2次 石器実測図 (2)

第V章 第5次調査地点の調査

第1節 調査の概要

調査概要

第5次調査区は、第2次調査区の東側に隣接する調査区（7トレンチ）及び、南側に接続する調査区（8トレンチ）にあたる。7トレンチは弥生時代前期の遺跡の範囲を確認するため、事業予定地の東端に幅2mのトレンチを設定した。8トレンチは水路設置予定部分について、幅3mのトレンチを設定した。

第2節 7トレンチの調査

基本的な調査区の地形は北から南へ緩やかに傾斜している。調査区の北側部分では、現地表面下50cmで弥生時代前期の遺構面を検出した。野手西方地区における他の調査区の状況と比較すると、弥生時代前期の遺構面の標高が最も高く、地形的に安定した場所であると言える。しかし、生活域として適した立地が災いし、後世の整地等による影響を強く受けている。特に古墳時代中期には居住区として利用され、大きく削平を受けている。旧地形の標高が高い箇所では、弥生時代前期から古墳時代前半の遺構を、同一面で検出しており、層位的には各遺構の所属時期を確定できないものがある。それらの遺構は、重複する遺構の前後関係と遺構内出土遺物の検討を行い、所属時期を確定した。その結果、弥生時代前期の遺構は、大きく2段階に大別される。

前半段階は壺の調整に削出突帯を多様する時期で、段を有する資料は少ない。遺構は、柱穴、土坑等を中心とし、SX501・SK601・SK502・SK401・SK504等がこの段階に相当する。特に、SX501・SK601は層位的にも最も古い段階の遺構として捉えることができる。

後半段階は壺の調整に貼付突帯が出現する前後の時期で、ST402・ST403・SK404・SX401等の遺構がこの時期に相当する。概して遺構の数は少なく、墓域としての土地利用がなされたと考えられる。

1 第5遺構面

弥生時代前期後半以前の遺構面である。柱穴、土坑、区画溝等を検出した。

包含層

第4遺構面のベース層となる淡黄灰色粘質土は、調査区の北半部で検出された。

遺物

図示した遺物は、壺（311）、壺（312・313）である。

壺

311は如意形の口縁を持ち、頸部はキザミを施す。頸部下に2条の沈線を巡らす。体部内面にハケを施した後、横および斜め方向のミガキを施す。口径19.0cmを測る。

壺

312は頸胴界にミガキ押圧による不明瞭な段を持ち、胴部最大径部に沈線を巡らす。段と沈線間を2条の縦方向の沈線で区画し、右軸2条X形の木葉紋を施紋する。Xの交点は円形の刺突紋を施紋する。頸部に2条の縦方向の沈線を軸とする羽状紋を施紋する。内外面とも、横方向のミガキを施す。胴部最大径30.4cmを測る。

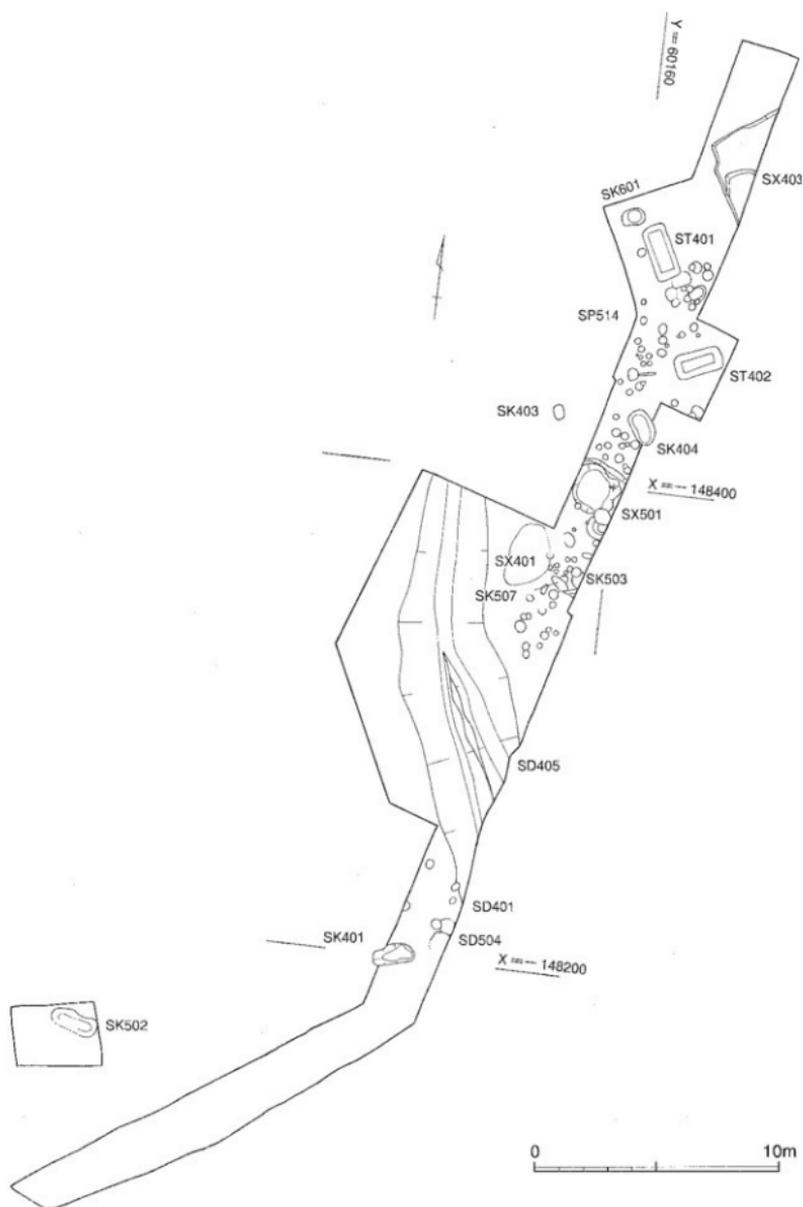


図77 第5次 7トレンチ平面図

313は球形に近い壺の体部で、頸胴界に段を持つ。段の下方と胴部最大径部に2条の沈線を巡らし、その間を1条の縦方向の沈線で区画し、有軸1条X形の木葉紋を施紋する。胴部外面は横方向のミガキ、内面はナデを施す。底面は凹む。胴部最大径25.3cmを測る。

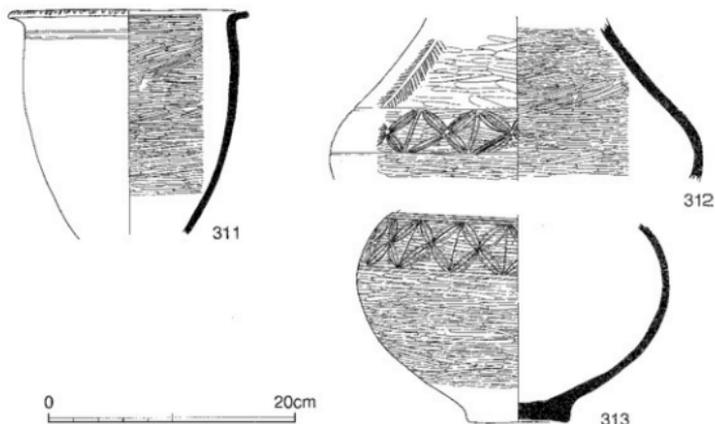


図78 第5次 7トレンチ第5遺構面包含層出土遺物実測図

(1) 区画溝

SD401

遺物

幅約200cm、最大深度120cmを測る溝状遺構で、南へ流下する。SD401とSD405はV字状に接続している。弥生時代前期後半から弥生時代中期前半まで継続する

多量の遺物が出土した。埋土及び遺物の出土状況は、大きく上下に2分できる。上層は弥生時代中期前半の遺物が大半を占め、遺物は、最終埋土層に一括して投棄されており、良好な一括性を示す。下層は底面付近を中心に、弥生時代前期後半の遺物を主体とする出土が見られたが中期の遺物の混入が見られ、弥生時代前期の単純層とは言えない。しかしながら、底面付近で前期の遺物の出土が多く見られること、接続するSD405が弥生時代前期の間に埋没している溝であることから、弥生時代前期後半から、弥生時代中期中葉まで機能していた溝であると考えられる。

今回報告する資料は下層から出土した資料を中心とし、上層出土の弥生時代前期の遺物も合わせて報告する。図示した遺物は、甕蓋314～317、甕336～343、壺318～334、鉢335である。

甕蓋

314は口縁部が強く外反する。外面は板ナデ後縦方向のミガキを施す。内面は板ナデを施した後、横方向および斜め方向のミガキを施す。つまみ部は凹む。口径21.1cmを測る。

315は口縁部が緩やかに外反し、端部に面を持つ。外面は縦方向のハケを施した後、縦方向のミガキを施す。傘部内面はシボリ痕が見られ、端部付近は横方向のハケを施す。つまみ部は凹む。口径22.5cmを測る。

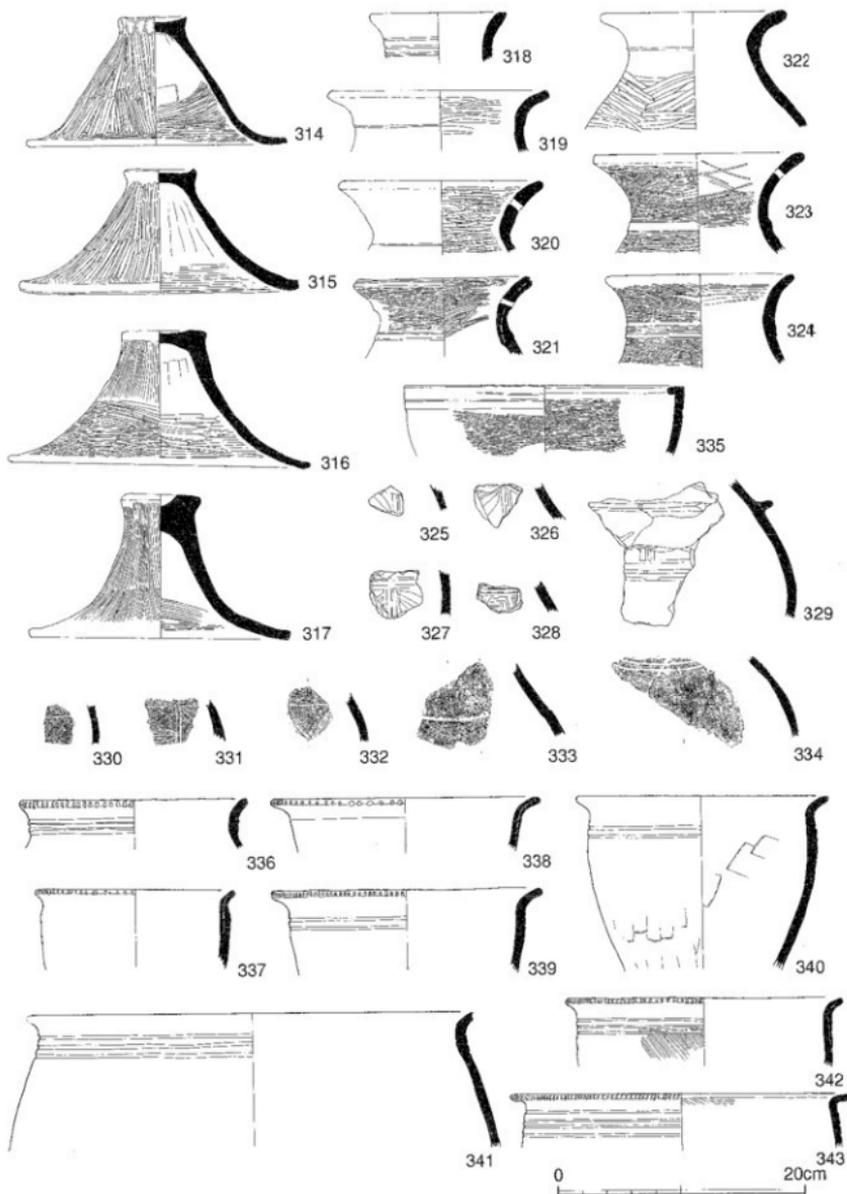


図79 第5次 7トレンチSD401出土遺物実測図

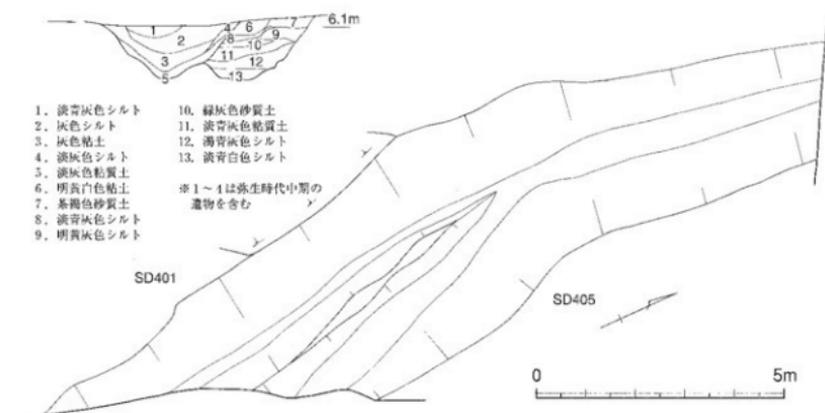


図80 第5次 7トレンチSD401・SD405平断面図

316は口縁部が緩やかに外反する。外面は縦方向のハケを施した後、横方向のミガキを施す。内面は縦方向の板ナデを施した後、横方向のミガキを施す。つまみ部は凹む。口径24.4cmを測る。

317は口縁部付近で強く外反し、端部は面を持つ。外面は縦方向のハケ、口縁部内面は横方向のハケを施す。つまみ部は球状に凹む。口径20.8cmを測る。

壺

318は頸部に4条以上の沈線を巡らし、口縁部は緩やかに外反する。口径10.4cmを測る。

319は口頸界に段を持ち、口縁部は強く外反する。口縁端部は面を持つ。外面はナデ、内面は横方向の粗いミガキを施す。口径17.3cmを測る。

320は口頸界に段を持ち、口縁部は強く外反する。頸部外面は横方向および斜め方向のミガキを施す。他はナデを施す。口径14.2cmを測る。

321は頸部下方に削出突帯を巡らし、口縁部は強く開く。口縁部に1箇所穿孔が見られるが、破片であるため穿孔の数、単位は不明である。外面はナデ、内面は横方向のミガキを施す。口径16.4cmを測る。

322は口頸界に削出突帯を巡らし、口縁部は強く外反する。口縁部に2箇所穿孔している。内外面ともに横方向及び斜め方向のミガキを施す。口径13.4cmを測る。

323は口頸界に削出突帯を巡らし、口縁部は強く外反する。口縁部に2箇所穿孔しており、口縁端部に1条の沈線を巡らす。外面は横方向のミガキ、内面は横方向および斜め方向のミガキを施す。口径16.4cmを測る。

324は口頸界に1条の沈線を伴う削出突帯を巡らし、わずかに外反して立ち上がる口縁を持つ。外面は横方向および斜め方向の丁寧なミガキを施す。口縁部内面は粗いミガキを施す。口径14.6cmを測る。

- 紋様 いずれも壺の頸胴部に、彩紋またはヘラガキによって施されている。
- 彩紋土器 5点検出された。壺の頸部および胴部に赤色顔料で彩色を施している。(325・326)は木葉紋と直線紋、(327)はネガティブな木葉紋と直線紋、(328)は直線紋と連続するクランク状の施紋を行っている。(329)は頸胴界に貼付突帯の上下に施紋しているが、紋様の詳細は不明である。
- 木葉紋 330は沈線の上下に有軸1条の木葉紋を施している。上下の軸は接しない。
331は有軸1条の+型とX型が連続して施されている。
332は5条以上の弧線でX型の木葉紋が描かれている。
- 重弧紋 333は頸胴界の段以下に3条の重弧紋と、段上方に5条の直線紋を施す。
334は頸胴界に段を持ち、段下方に2条の沈線を巡らす。沈線に接して3条の重弧紋を巡らす。
- 鉢 335は直口の口縁を持ち、口縁端部内側に粘上を貼り付け、上方に2条の沈線を巡らす。口頸部界は横方向のミガキによる押圧による段を持ち、上方にらせん状に1条の沈線を巡らす。内外面ともに横方向の丁寧なミガキを施す。口径32.6cmを測る。
- 甕 336は頸部に1条の沈線を伴う削出突帯を巡らす。突帯上方の削出は沈線で代用している。口縁部は直行ぎみにわずかに外方へ開き、端部にキザミを施す。口径17.8cmを測る。
337は口縁部を強いナデで外反させており、胴部より1段低くなっている。口縁端部にキザミを施す。口径21.0cmを測る。
338は短い口縁部が強く外反し、端部はキザミを施す。口径15.6cmを測る。
339は頸部下方に2条の沈線を巡らす。口縁部は強く外反し、端部はキザミを施す。口径21.4cmを測る。
340は頸部下方に2条の沈線を巡らす。短い口縁部が強く外反する。体部外面は縦方向の板ナデ、内面を横方向の板ナデを施す。口径20.1cmを測る。
341は大型の甕の口縁部である。頸部下方に3条の沈線を巡らす。口縁端部は欠損しているが、短い口縁部が強く外反する。口径35.8cmを測る。
342は頸部下方に3条の沈線を巡らす。口縁部は緩やかに外反し、端部はキザミを施す。体部外面に斜め方向のハケを施す。口径21.9cmを測る。
343は頸部下方に4条の沈線を巡らす。口縁部はほぼ直角に屈曲し、口縁端部はキザミを施す。屈曲部内面は斜め方向の粗いハケが残る。口径27.2cmを測る。
- SD405
- 遺物 弥生時代前期中段階から新段階まで機能していた清丈遺構で、幅2m以上、底面幅1.3m、深さ約1.3mである。断面形は逆台形を呈する。前述したSD401と接続する。断面形が逆台形を呈する点は、第2次調査で検出されたSD5003と同様であり、前期のうちに埋没する点も共通している。遺物は、特にまとまった分布を示さず、埋土全体から出土した。
- 遺物 図示した遺物は、突帯紋土器(344)、壺蓋(345~346)、甕蓋(347)、甕(348~357)、鉢(358)、壺(359~376)である。
- 突帯紋土器 344は外面に粘上を貼り付けて突帯を設けている。突帯部下端にキザミを施す。口縁端部にはキザミを施さない。

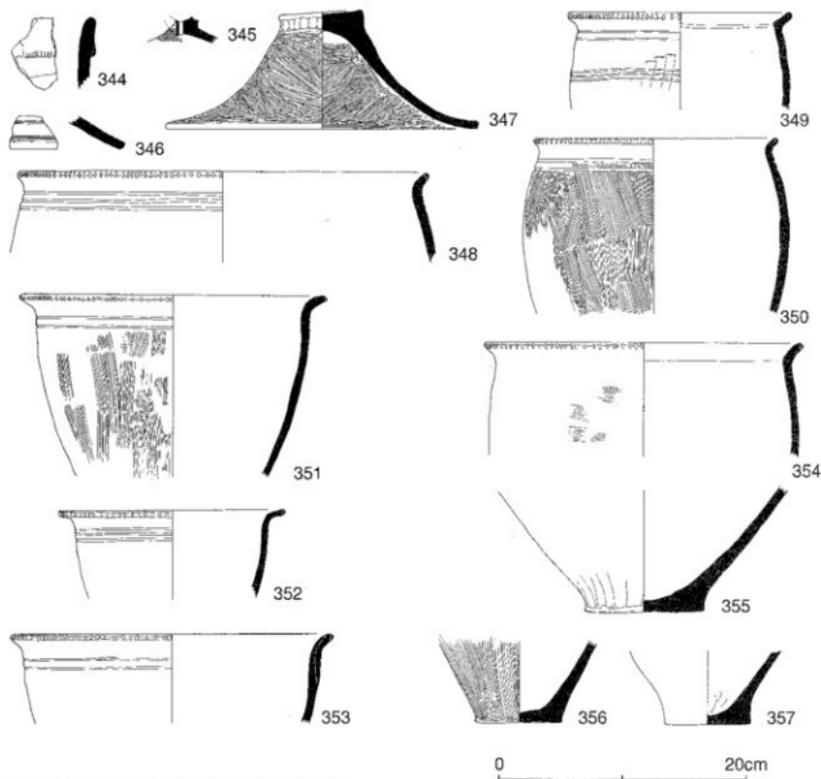


図81 第5次 7トレンチSD405出土遺物実測図(1)

- 壺蓋** 345は壺蓋のつまみ部である。蓋部頂部に穿孔している。外面にミガキ、内面にナアを施す。
346は直線的に開く口縁部を持ち、外面に3条と2条の沈線を巡らす。
- 甕蓋** 347は口縁部が強く外反する。つまみ部外面は指オサエ、他は内外面ともに横または斜め方向のミガキを施している。つまみ部はわずかに凹む。口縁端部内面にススの付着が認められる。口径25.2cmを測る。
- 甕** いずれも、端部にキザミを施す。胴部が張るタイプ(349・350・354)を含む。口縁部は強く外反し、屈曲部内面に稜線を持つもの(349)と、如意形を呈するものがある。体部外面は縦方向のハケ、内面はナアを施すものが多い。
348は大型の甕である。頸部に3条の沈線を巡らし、口縁部は緩やかに外反する。口縁端部は刻みを施す。口径32.7cmを測る。
349の口縁部は強く外反し、端部にキザミを施す。頸部下に2条、胴部最大径部上方に3条の沈線を巡らす。口径17.7cmを測る。

350は頸部に2条の沈線を巡らし、口縁部は緩やかに外反する。口縁端部は刻みを施す。胴部は張り、胴部径は口径を超える。口径19.2cmを測る。

351は頸部に2条の沈線を巡らし、口縁部は緩やかに外反する。口縁端部は刻みを施す。胴部外面は縦方向のハケを施す。口径24.3cmを測る。

352は頸部下方に3条の沈線を巡らし、口縁部は強く外反する。口縁端部は刻みを施す。口径18.0cmを測る。

353は頸部下方に2条の沈線を巡らし、口縁部は緩やかに外反する。口縁端部は刻みを施す。口径25.3cmを測る。

354は口頸部ド無紋の壺である。口縁部は強く外反し、端部にキザミを施す。胴部は口径程度に張る。胴部外面は縦方向のハケを施す。口径25.2cmを測る。

355～357は壺の底部である。外面は縦方向のハケやハケナデを施す。底面はいずれもわずかに凹む。底径は355が9.6cm、356が6.8cm、357が6.8cmを測る。

鉢 358は直口口縁の鉢で半球状の体部を持つ。口縁端部はわずかに外反する。底部は平坦面を持つ。口径13.1cmを測る。

壺 359は胴部が強く張る小型の壺である。内外面ともに丁寧な横方向のミガキを施す。底部はわずかに凹む。底径5.4cmを測る。

360は頸部に7条の沈線を巡らし、胴部最大径部に2条以上の沈線を巡らす。外面は縦方向のハケを施す。胴部最大径15.2cmを測る。

361は口頸部に削出突帯を巡らす。口縁部は緩やかに外反し、1箇所穿孔している。口縁端部は面を持つ。内外面は横方向のミガキを施す。口径15.4cmを測る。

362は口頸部に1条の沈線を伴う削出突帯を巡らす。口縁部は緩やかに外反し、端部は面を持つ。内外面ともに横方向のミガキを施す。口径17.1cmを測る。

363は口頸部に1条の沈線を伴う削出突帯を巡らす。口縁部は緩やかに外反し、端部は面を持つ。外面は縦方向のハケを施した後、横方向のミガキを施す。内面は横方向のミガキを施した後、縦方向の直線紋を4条施す。口径17.9cmを測る。

364は頸部界に1条の沈線と縦方向のキザミを伴う削出突帯を巡らす。口縁部は緩やかに外反し、端部は丸い。内外面ともに横方向のミガキを施す。口径17.1cmを測る。

365は長頸化した壺の上半部である。頸部下方と頸部界に2条の沈線を伴う削出突帯を巡らし、胴部最大径部上方に3条の沈線を巡らす。口縁部は強く外反し、端部は丸い。内外面ともに横方向のミガキを施す。

366は口頸部に2条の沈線を伴う削出突帯を巡らす。内外面ともに横方向のミガキを施す。頸部径10.6cmを測る。

367は大型の壺の口縁部である。口頸部界に2条の沈線を巡らし、口縁部は緩やかに外反する。口縁端部は面を持つ。胴部外面は縦方向のハケ、内面は横方向の粗いミガキを施す。口径28.2cmを測る。

368・369は粘土紐を貼り付けて紋様としている。368は口縁部内面に3条以上、369は胴部外面に両端を強く曲げた粘土紐を貼り付けている。

370～373は底部である。

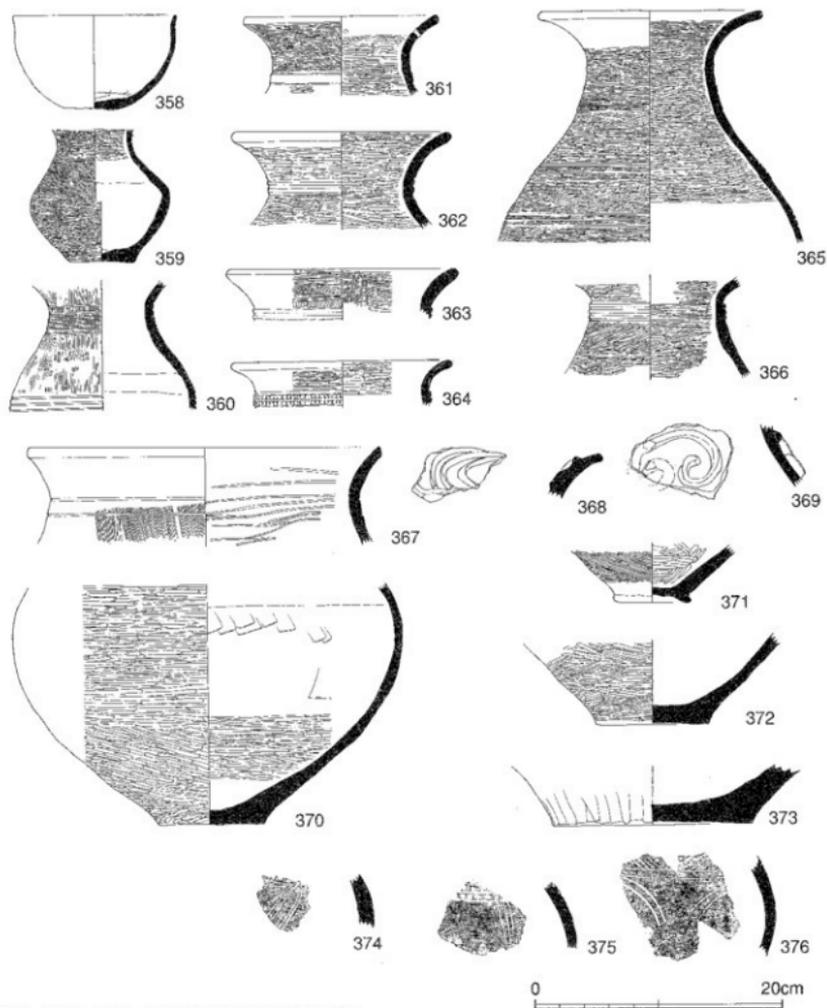


図82 第5次 7トレンチSD405出土遺物実測図(2)

370の外面は横方向または斜め方向のミガキを施し、内面は板ナデ、下方は横方向のミガキを施す。底部はわずかに凹む。底部径8.5cmを測る。

371は底面を強く窪める。内外面ともにミガキを施す。底径56cmを測る。

372は外面に横方向のミガキを施す。底径9.2cmを測る。

373は大型の壺の底部である、外面は縦方向のハケナデを施す。底面はわずかに凹む。

底径16.2cmを測る。

木葉紋 374は有軸2条の×木葉紋である。

重弧紋 375は胴部の紋様帯に施された3条の重弧紋である。紋様帯の上方の区画は、3条の沈線間に2条の円形の刺突紋を施している。

376は胴部最大径部に施された2条の重弧紋である。上方の紋様帯には4～5条の山形紋が施されている。

(2) 土坑

SK502

第8号人骨を搬出するための、作業用トレンチの調査で検出された。全長1.8m、幅85cm、深さ cmの土坑である。遺物は土坑底面から出土した。

遺物 図示した遺物は甕蓋 (377・378)、壺 (379～381)、甕 (382・383) である。

甕蓋 377はつまみ部が球状に凹む。蓋部外面は縦方向のミガキを施す。つまみ径5.6cmを測る。

378の口縁部は強く外反し、つまみ部上方はナデにより凹む。蓋部外面は縦方向のハケ後、ミガキを施し、内面下半はミガキを施す。口径23.7cmを測る。

壺 379は広口壺の口縁部で、1箇所穿孔している。頸部に1条以上の沈線を巡らす。端部は丸い。内外面とも横方向のミガキを施す。口径14.8cmを測る。

380は頸胴界に2条以上の沈線を伴う段を持つ。頸部は長くほぼ直線的に上方に細くなり、口縁部は強く外反する。口縁端部は丸い。外面頸部上半部は横方向のミガキ、下半部は斜め方向のミガキを施す。内面は横方向の粗いミガキを施す。口径15.4cmを測る。

381は壺または鉢の底部である。底面は未調整である。外面に横方向のミガキを施す。底径7.8cmを測る。

甕 382は口頸部下無紋である。口縁部は緩やかに外反し、端部下方に刻みを施す。外面は縦方向のハケを施す。口径19.8cmを測る。

383は甕の胴部下半部である。外面は縦方向のハケを施し、薄くススの付着が見られる。底面はわずかに凹む。底径7.7cmを測る。

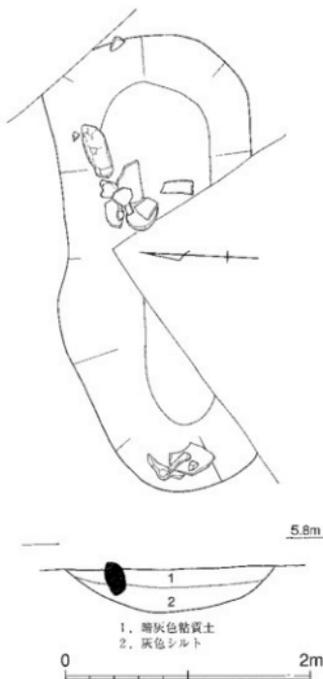


図83 第5次 7トレンチSK502平断面図

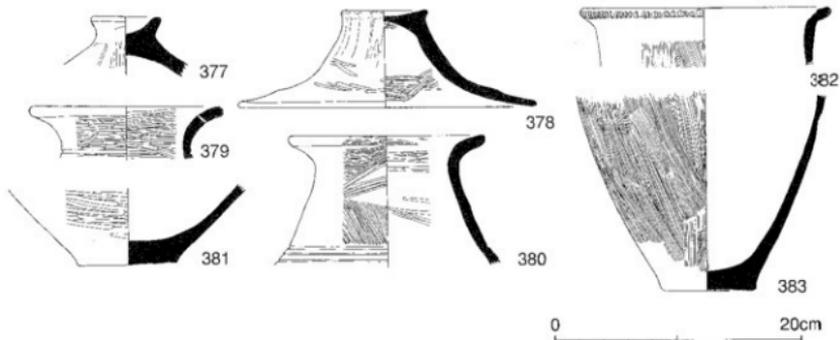


図84 第5次 7トレンチSK502出土遺物実測図

SK503

後世の攪乱により、形状は不明である。深さ15cm以上の土坑である。

遺物 図示した遺物は、壺 (384)、鉢 (385)、甕 (386・387) である。

壺 384は内外面をナデ後、横方向のミガキを施す。口径11.7cmを測る。

鉢 385は球形に内湾する口縁部を持つ小型の鉢である。外面にハケの痕跡が残る。底面は平坦である。口径8.7cmを測る。

甕 386は口頸部下無紋である。口縁部は緩やかに外反し、端部はキザミを施す。最大径部下方の外面はススが附着する。口径23.3cmを測る。

387は頸部下方と最大径部に10条の沈線を巡らす。口縁部は緩やかに外反し、端部は刻みを施す。端部は丸く収める。胴部外面は縦方向のハケ、内面を斜め又は横方向のハケを施す。口径25.7cmを測る。

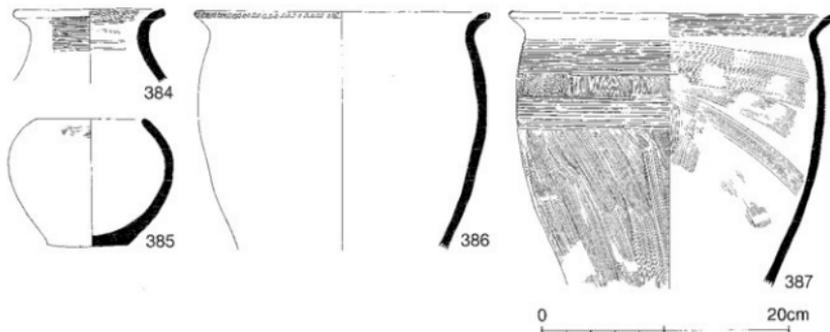


図85 第5次 7トレンチSK503出土遺物実測図

SK504

直径70cm以上の不定形の土坑である。近世の溝に切られている。

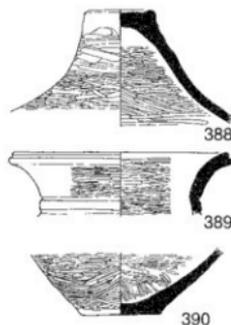
遺物 図示した遺物は、甕蓋 (388)、壺 (389~391) である。

壺蓋 388は緩やかに開く傘部を持ち、つまみ部の頂部は凹む。外面下半部は横方向のミガキ、上半部はヘラケズリ後未調整である。つまみ径5.7cmを測る。

壺 389は口頸部界に削出突帯を巡らす。口縁部は緩やかに外反し、端部に1条の沈線を巡らす。内外面ともに横方向のミガキを施す。口径16.7cmを測る。

390は壺または鉢の底部である。内外面ともにミガキを施す。底面は平坦である。底径6.3cmを測る。

木葉紋 391は胴部の紋様帯に施された有軸2条のX木葉紋である。



SK507

全長45cm、幅30cmの不定形の土坑である。

遺物 図示した遺物は、壺（392～394）である。

壺 392は頸部に工具押圧による段を持つ広口壺である。

口縁部内外面にミガキを施す。口径12.3cmを測る。

393は底部外面に4条の沈線を巡らす。外面に斜め方向のハケを施す。底径8.0cmを測る。

重弧紋 394は頸胴界の段下方に施された3条の重弧紋である。隣接する弧紋は切りあう。

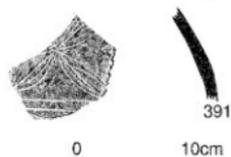


図86 第5次 アトレンチSK504 出土遺物実測図

SK601

全長100cm、幅50cmの不定形の土坑である。

遺物 図示した遺物は、甕（395～398）、鉢（399）である。

甕 395はいずれも如意形の口縁を持ち、端部はキザミを施す。頸部下方に1～4条の沈線を巡らす。

396は頸部に1条の沈線を巡らし、口縁部は緩やかに外反する。口縁端部下半部に刻みを施す。胴部外面は縦方向の板ナデを施す。口径19.6cmを測る。

397は頸部下に4条の沈線を巡らし、口縁部は緩やかに外反する。口縁端部に刻みを施す。口径20.6cmを測る。

398は甕の底部で、内面にタテハケを施す。底径6.8cmを測る。

鉢 399は上方に立ち上がる口縁を持ち、端部は緩やかに外反する。口縁端部は厚く、丸い。内外面とも横および斜め方向のミガキを施す。口径22.0cmを測る。

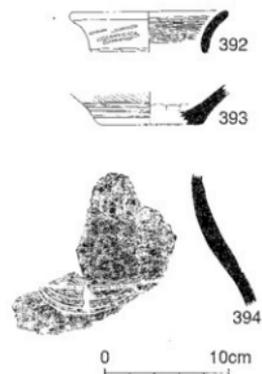


図87 第5次 アトレンチSK507 出土遺物実測図

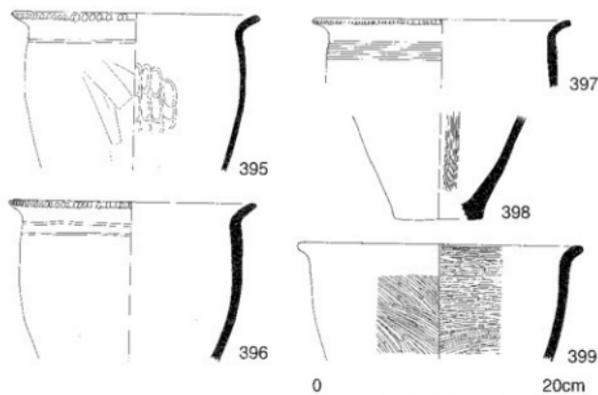


図88 第5次 7トレンチSK601出土遺物実測図

(3) 用途不明遺構

SX501

最大径2m、深さ20cmの不定円形の土坑である。北側に隣接して40cm程度の落ち込みがあり、当遺構に伴う可能性がある。

遺物

図示した遺物は、甕蓋(400)、甕(401・402)、鉢(403)である。

甕蓋

400はほぼ直線的に伸びる口縁部を持ち、内外面にミガキを施す。口径22.8cmを測る。

甕

401は頸部に1条の沈線を巡らし、端部にキザミを施す。体部外面に縦方向のハケを施す。口径22.4cmを測る。

402は口頸部下無紋で口縁は緩やかに外反する。口縁端部は丸く、キザミを施す。体部内外面にハケを施す。口径21.0cmを測る。

鉢

403は頸胴界にハケ押圧による段を持つ大型の鉢である。口縁は緩やかに外反し端部は丸い。内外面とも横方向のミガキを施す。口径48.8cmを測る。

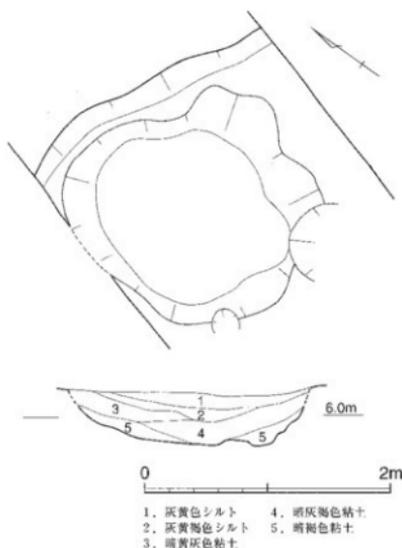


図89 第5次 7トレンチSX501平断面図

1. 深黄色シルト
2. 深黄色シルト
3. 暗黄灰色粘土
4. 暗灰色粘土
5. 暗灰色粘土

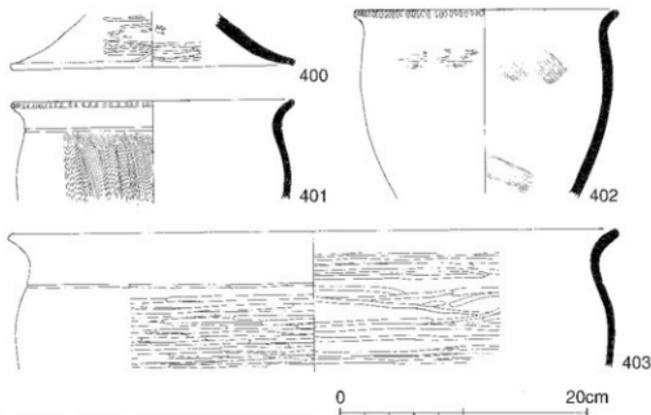


図90 第5次 7トレンチSX501出土遺物実測図

(4) 柱穴

数基検出されたが、建物として纏まるものはない。

SP514

遺物

直径30cm、深さ45cmの柱穴である。

図示した遺物は、甕（404～406）である。いずれも広口甕の口縁部である。外面を横方向のミガキ、内面をナデまたは横方向のミガキを施す。

404は頸部下方に2条以上の沈線を巡らす。口径15.0cmを測る。

405は頸部下方に1条の沈線を伴う貼付突帯を巡らす。口縁部に穿孔を施す。口径14.1cmを測る。

406は頸部下方に2条の沈線を伴う貼付突帯を巡らす。口径14.9cmを測る。

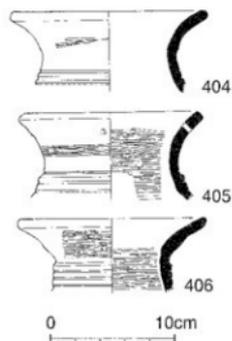


図91 第5次 7トレンチSP514出土遺物実測図

遺構に伴わない遺物

石剣

第5遺構面直上より有柄式磨製石剣（407）が検出された。

407は全長15.1cm、厚さ0.8cm、刃部幅3.8cm、重さ79.7gを測る。先端と柄部をわずかに欠損する。刃部は両刃であるが、片面のみ2段階に研ぎ出されている。刃部の平面形は先端部から約3cmの箇所から、先端に向かって角度が鈍くなっている。この刃部の形態は研ぎ直しによる可能性が高く、本来、刃部は直線的な形態であったと考えられる。石取りは、捩理面が明瞭な結晶片岩を用い、縮目が刃部に左右対称に現れるように研ぎ出している。

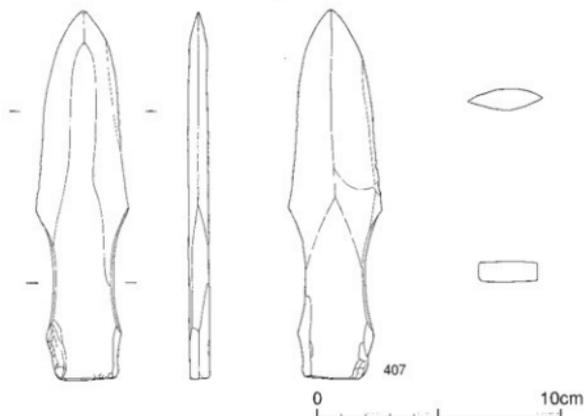


図92 第5次 7トレンチ石剣実測図

2 第4遺構面

弥生時代前期後半の遺構面である。区画溝、木棺墓2基、土坑、柱穴等を検出した。第5遺構面で検出された区画溝は当遺構面で検出されたものが含まれる。

包含層

暗灰色粘質土を基本とし、調査区のほぼ全域で検出された。一般的な在地の土器の他に、突帯紋土器、浮線紋系土器を検出した。

突帯紋土器

408は口縁端部から1段下がった部分に、突帯部分のみ三角形に粘土を貼付け、キザミを施す。口縁部は無紋である。

浮線紋系土器

409は緩やかに内湾する口縁部を持ち、強いナデにより3条の浮線を作り、以下は縦方向のハケを施す。口縁端部に押圧による施紋が見られる。

甕蓋

410は傘形の甕蓋で口縁は強く外反する。口縁端部の一部を上方に押し上げており、その部分のみ工具押圧によるキザミを施す。傘部外面は縦方向のハケナデ、つまみ部は指オサエで成形している。口径25.6cmを測る。

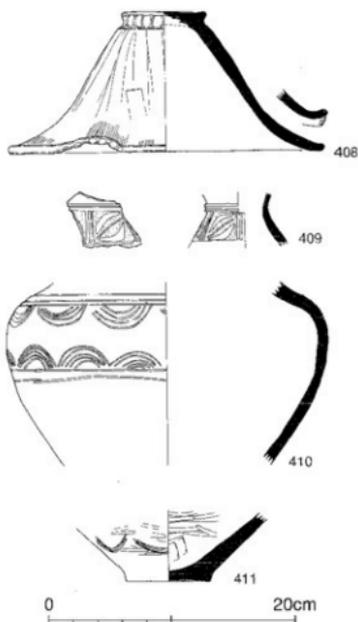


図93 第5次 7トレンチ第4遺構面包含層出土遺物実測

壺

411は頸部に1条の沈線を伴う貼付突帯を巡らす小型の壺である。頸部から頸胴界に赤色顔料による彩紋が見られる。有軸1条の+木葉紋半裁分をネガタイプに描く。

412は肩が強く張る壺の胴部で、頸胴界に段を持つ。最大径部に、2条の沈線で区画された紋様帯を設けている。紋様帯には上方は1条、下方は5条の重弧紋を施す。胴部最大径26.0cmを測る。

413は壺の底部で、3条の重弧紋を施す。底部内面は板ナデ、他は横方向のミガキを施す。底面はわずかに凹む。底径7.6cmを測る。

(1) 土坑

10数基の土坑が検出された。第2次調査の成果に比べると検出量は少ない。

SK401

長辺185cm、短辺85cm、深さ30cmの不定形の土坑である。遺物は土坑底より検出された。

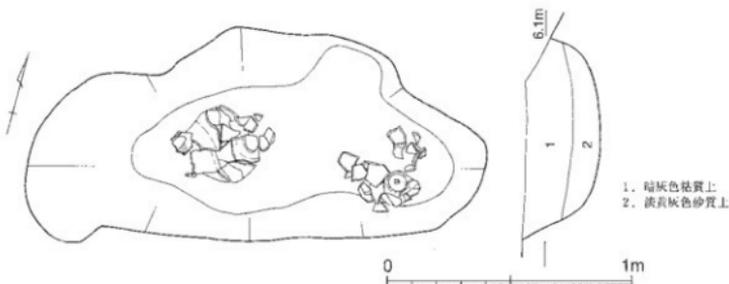


図94 第5次 7トレンチSK401平面断面図

遺物

図示した遺物は、甕蓋(414・415)、壺(416・417)、甕(418・419)、である。

甕蓋

414は強く開く口縁部を持ち、端部はナデによりわずかに凹む。内面にミガキを施す。口径21.5cmを測る。

415は直線的に開く口縁部を持つ。端部は丸く取める。内外面とも丁寧なミガキを施す。口径30.2cmを測る。

壺

416は口頸部にミガキによる段を持ち、口縁部は緩やかに外反し、外面および頸部以上の内面にミガキを施す。口径14.4cmを測る。

417は口頸部界に強いミガキによる段を持つ。口縁部は緩やかに外反し、端部に面を持つ。底面は平坦である。内外面ともミガキを施す。口径14.6cmを測る。

甕

418は頸部下方に3条の沈線を巡らす。口縁部は緩やかに外反する。口縁端部は丸く取め、刻みは施さない。体部外面はハケの痕跡が残る。口径20.5cmを測る。

419は頸部に3条の浅い沈線を巡らし、2条の列点紋を施す。口縁は直線的に外方に伸び、端部は断続的にキザミを施す。胴部外面はハケ後ナデを施す。口径21.8cmを測る。

420は頸部下方に3条の沈線を巡らす。口縁部は緩やかに外反し、端部にキザミを施す。

底部は焼成後に穿孔している。外面はナデ、内面下半はヘラナデを施す。口径25.1cmを測る。

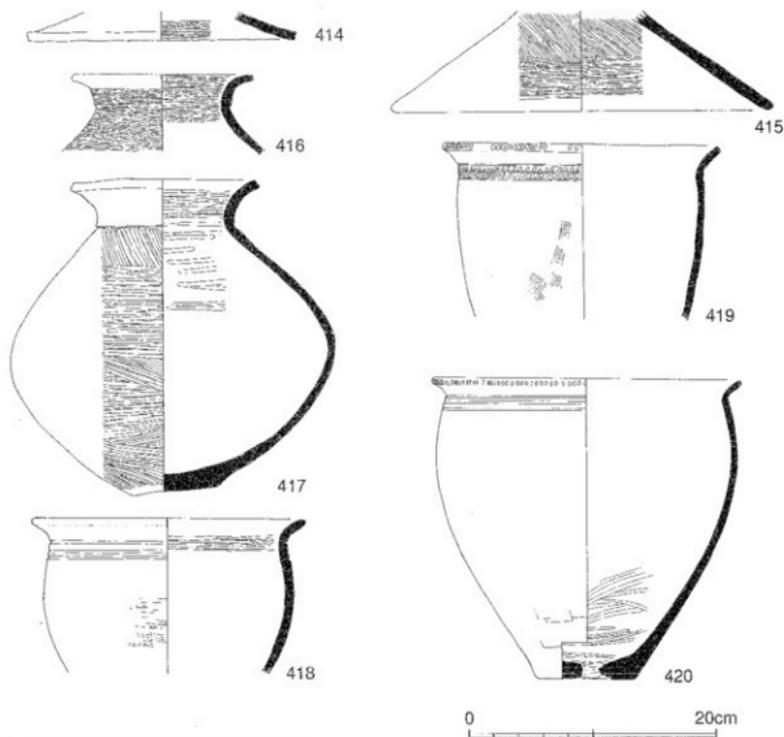


図95 第5次 7トレンチSK401出土遺物実測図

SK402

全長40cm、幅30cmの土坑である。

遺物 図示した遺物は、甕の施紋部（421）である。

木葉紋 421は胴部の紋様帯に施された木葉紋である。

小片であるが、無軸10条の×木葉紋と考えられる。

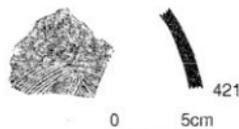


図96 第5次 7トレンチSK402
出土遺物実測図

SK403

全長35cm、幅30cmの土坑である。

遺物 図示した遺物は、甕（422）、甕（423）である。

甕 422は緩やかに外反する口縁を持ち、端部にキザミを施す。頸部に2条の沈線を巡らす。口径20.8cmを測る。

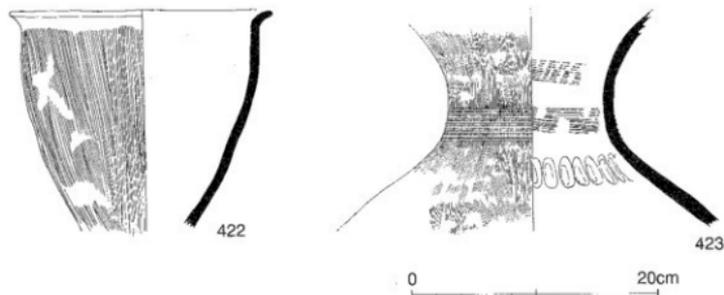


図97 第5次 7トレンチSK403出土遺物実測図

壺 423は長頸化した壺の頸部である。頸部に8条の沈線を巡らし、外面に縦方向のハケ、頸部内面に横方向のハケを施す。頸部径13.3cmを測る。

SK404

遺物 全長1.45m、幅40cm、深さ50cmの土坑である。

図示した遺物は、鉢(424)である。

424は緩やかに外反する口縁を持ち、端部に沈線を巡らす。内外面ともにナデを施す。口径35.7cmを測る。



図98 第5次 7トレンチSK404出土遺物実測図

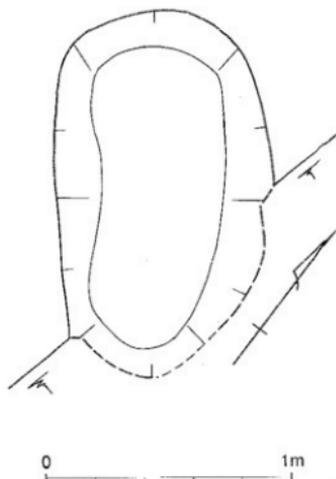


図99 第5次 7トレンチSK404平面図

(2) 土器集積遺構

SX401

遺構面直上の約2.5m×1.5mの範囲で、土器が集積した状況で検出された。強い被熱により焼土化した箇所が確認できた。土器も2次被熱を受けたと考えられる資料が多く、細片が多いことが特徴としてあげられる。遺物集積範囲には遺構が存在しないことから、屋

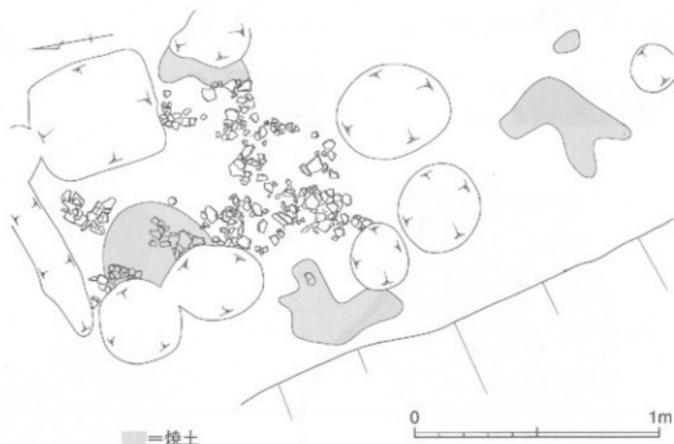


図100 第5次 7トレンチSX401平面図

外炉等、恒常的に野火を使用する場所であったと想定される。屋外炉と考えられる遺構は、第2次調査でも確認されているが、当遺構と比べて小規模である。

遺物

図示した遺物は、甕 (425・426)、壺蓋 (427)、壺 (428～436)、鉢 (437) である。

甕

425は頸部に3条の沈線を巡らし、口縁部は緩やかに外反し、端部は刻みを施す。調整は不明である。口径20.4cmを測る。

426は口頸界にハケ押圧による段を持ち、口縁部は緩やかに外反し、端部は刻みを施す。外面は縦方向のハケを施す。底面はわずかに凹む。口径25.0cmを測る。

壺蓋

427は傘部が緩やかに外反する三角錐形の蓋で、頂部は尖る。口縁部に2対2方向の穿孔が見られる。外面は縦方向のミガキ、口縁端部は面を持ち、端部および口縁部内側に横方向のミガキを施す。口径14.6cmを測る。

壺

428は緩やかに外反する口縁部を持ち、端部に面を持つ。口縁部に2対の穿孔が見られる。内外面ともに横方向の細かいミガキを施す。口径14.2cmを測る。

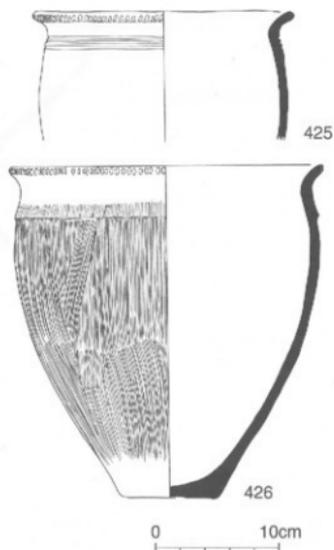


図101 第5次 7トレンチSX401出土遺物実測図 (1)

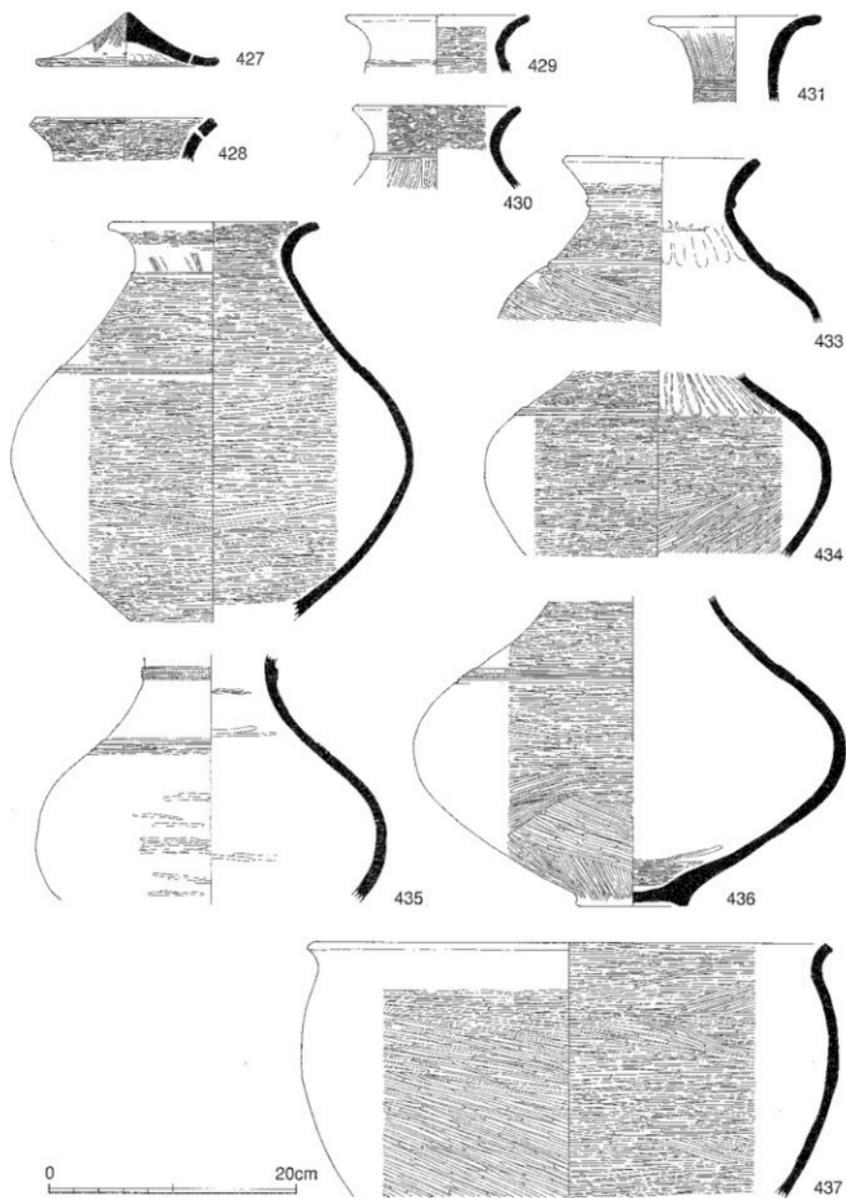


図102 第5次 7トレンチSX401出土遺物実測図(2)

429は口頸界に1条の細い貼付突帯を巡らし、口縁部は強く外反する。外面はナデ、内面は横方向のミガキを施す。口径14.4cmを測る。

430は口頸界に1条の細い貼付突帯を巡らし口縁部は緩やかに外反する。口縁部内外面に横方向のミガキ、頸部外面に縦方向のミガキを施す。口径13.0cmを測る。

431は口頸界に1条の貼付突帯を巡らし、頸胸界に1条の沈線を伴う削出突帯を巡らす。口縁部は強く外反し、端部は丸い。内外面ともに横方向のミガキを施す。口径16.0cmを測る。

432は頸部に6条以上の沈線を巡らし、口縁端部付近で強く外反する。外面は縦方向のハケ、他はナデを施す。口径13.3cmを測る。

433は口頸界と頸胸界に各1条の削出突帯を巡らす。頸胸界の変化は明瞭である。外面は縦方向および斜め方向のミガキ、内面はナデを施す。口径15.1cmを測る。

434は頸胸界にミガキによる削出突帯を巡らし、1条の沈線を伴う。外面を横方向のミガキ、胴部内面を縦方向および斜め方向のミガキを施す。最大径28.1cmを測る。

435は口頸界に1条の沈線を伴う削出突帯を巡らし、キザミを施す。頸胸界に2条の沈線を伴う削出突帯を巡らす。内外面ともに横方向のミガキの痕跡が見られる。最大径28.3cmを測る。

436は頸胸界に3条の沈線を伴う削出突帯を巡らす。胴部最大径部下方は斜め方向および縦方向のミガキ、胴部最大径部上方は横方向のミガキを施す。底部内面に横方向のミガキを施すが、他の内面の調整は不明である。最大径35.0cmを測る。

437は無紋の大型の鉢で、口縁は緩やかに外反する。口縁端部は面を持つ。内外面とも、斜め方向および横方向のミガキを施す。口径41.4cmを測る。

(3) 用途不明遺構

SX403

調査区北端部で検出された遺構で、全体の形状等は不明である。1辺3m以上の方形と考えられる落ち込みが確認された。その一部をさらに掘削しており、獣骨、土器等が検出された。

遺物 壺

図示した遺物は、壺(438・439)、壺(440～443)、鉢(444)である。

いずれも如意形の口縁を持ち、端部にキザミを施す。

438は頸部下方に、2cm程度の間隔をあけた沈線を巡らす。沈線下方は縦方向のハケを施す。口径22.8cmを測る。

439は頸部下方に2条の沈線を巡らす。沈線下方は斜め方向のハケを施す。口径24.6cmを測る。

壺

440は小型の広口壺で無紋である。胴部外面および、口縁部内面を横方向のミガキを施す。口径13.7cmを測る。

441は頸胸界から胴部最大径部下方にかけて、5条の貼付突帯を巡らす。突帯上にはキザミを施す。頸部外面は縦方向ハケ、胴部下半は横方向のハケを施す。底部は外面に粘土を

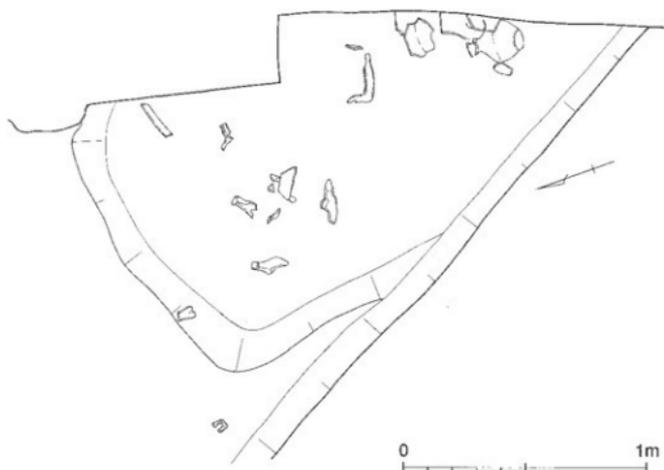


図103 第5次 7トレンチSX403平面図

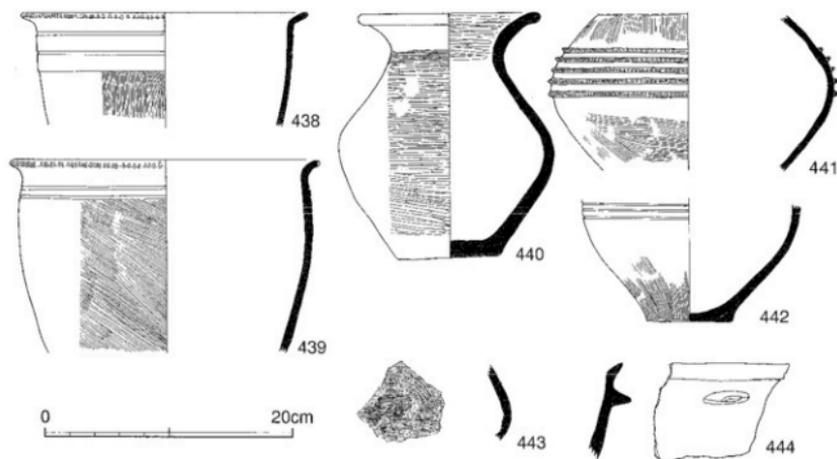


図104 第5次 7トレンチSX403出土遺物実測図

追加し、中央部はわずかに凹む。胴部最大径は22.8cmを測る。

442は球形の胴部を持つ壺の下半部である。胴部最大径部に3条以上の沈線を巡らす。底面はわずかに凹む。外面底部は縦方向のハケを施す。底径6.8cmを測る。

重弧紋 443は胴部に施された4条の重弧紋である。

鉢 444は口縁端部が明瞭に屈曲し、屈曲部下方に取手を貼り付けている。

(4) 木棺墓

2基の木棺墓が検出された。棺の木質は残されていないが、人骨の遺存状況は良好である。

ST401

幅100cm、長さ223cm、深さ20cmの隅丸方形の掘形が検出された。掘形内より木棺の痕跡が検出された。

木棺

掘形底面で、幅60cm、長さ192cmの木棺の痕跡が検出された。主軸はほぼ南北方向である。木質は確認できなかった。木棺底の南東角で備板の痕跡が確認でき、厚さ約8cmの板材が棺材に使用されていたと考えられる。

南端の小口部分に、長さ30cm、幅8cm、深さ6cmの凹みがあり、小口板を差し込んでいた痕跡であると考えられる。北端の小口には凹みは存在せず、頭位側のみ小口板が存在したと考えられる。

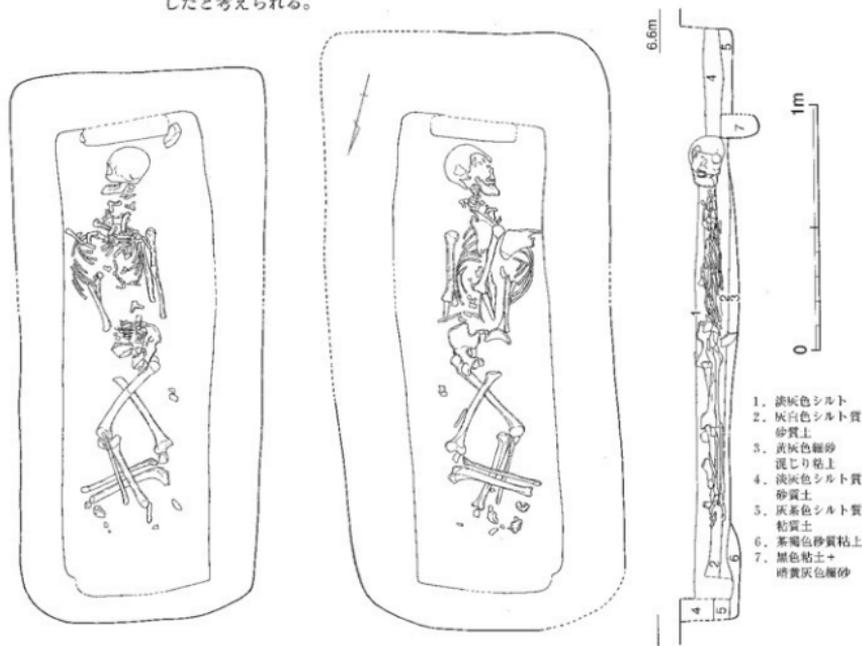


図105 第5次 7トレンチST401平立面図

12号人骨 木棺内より、埋葬時の姿勢を保った人骨（12号人骨）が検出された。身長157cm程度の男性の人骨で、伏臥の姿勢で埋葬されている。頭位は南である。通常の伸展葬とは異なり、上肢と下肢に特殊な姿勢が見られる。特に下肢は2箇所で交差し、類例のない姿勢である。

死亡年齢は壮年前半（20～30歳）と推定される。主な特徴として、縄文人骨に特徴的な骨格を持つこと、上顎左犬歯を抜歯している可能性が高いことが挙げられる。人骨の詳細な鑑定結果については、第VI章第2節を参照されたい。

赤色顔料 出土状況の上方側の右側頭骨には確認されず、棺底に接した下方側の左側頭部と顔面から数cm離れた棺底付近の上壤で、1mm程度の範囲で認められた。材質については、第VI章第1節のとおり、水銀朱であった。このような出土状況から、この顔料は、遺体を胸棺する直前に棺内への祭祀行為に用いられた可能性もある。あるいは遺体に直接付けられていた可能性もある。いずれにせよ頭部を意識していることが窺える。

遺物 掘形より壺胴部の破片(445)が出土した。木棺内より鹿角製の指輪6点(447~452)と石鏃(446)が1点出土した。

壺 445は頸胴界に段を持ち、下方に2条の沈線による紋様帯を区画している。紋様帯には4~5条の斜線を1単位とする山形紋を連続して施している。紋様帯の下方には2条の重弧紋を施している。破片であるため、全体の施紋パターンは不明であるが、重弧紋の施紋方向は一定ではない。胴部径23.2cmを測る。

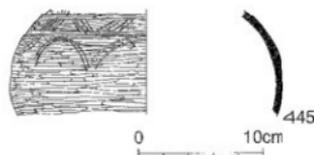


図106 第5次 7トレンチST401
出土遺物実測図

指輪 6点のうち、5点が右手指の基節骨に着装された状態で検出された。リング部の平面形は小判型で、立面形はリング部の上に三角形の突起を削り出している。突起部は、左右対称の三角形タイプと、左右非対称の三角形タイプの2種がある。突起部にはいずれも三角形の透かしを設けている。以下の記述では、第2指の指先側から第4指の掌側の順に、1号から6号と呼称する。各部位の名称と量量は、表5に示した。

	リング部					厚み (透かし下方)	突起部		透かし部	
	外径		内径		高さ		高さ	幅		
	前後径	左右径	前後径	左右径						
1号指輪	23.7 (26.6)	19.8	18.8 (19.6)	16.0	3.7	9.87	1.5	4.7		
2号指輪	19.1 (26.0)	19.2 (20.1)	13.4 (18.6)	16.0	3.4	10.3	4.5	10.4		
3号指輪	30.7	24.9	18.6	19.1	3.7	10.9 (11.8)	27	7.2		
4号指輪	30.0	25.1	18.2	20.1	3.1	11.76	3.3	9.0		
5号指輪	31.7 (32.4)	22.9 (26.4)	17.6 (18.8)	19.2	3.2	10.1 (11.9)	(4.4)	(14.0)		
6号指輪	32.2	21.8 (25.7)	19.8	13.3 (18.8)	3.1	11.1	4.0	14.1		

()は復元値 単位mm

表5 第5次調査 指輪計測値

- 1号 指骨から遊離した状態で検出された。第3指・第4指の着装状況から、第2指に2号指輪とセットで着装されていたと考えられる。
- 2号 第2指に着装された状態で検出された。1号指輪の形状に近い。
- 3・4号 リング部を接し、第3指に着装された状態で検出された。セットで使用されていたことが確認できる。2点共、突起部の弧状部分に左右非対称の鋭角の切り欠きを入れている。
- 5・6号 リング部を接し、第4指に着装された状態で検出された。リング部掌側の外角をややたくし、角を作り出している。5号は透かし部から派生し、リング部の内側に沿って挟りを入れ、リング部掌側の両角に深く切り込んでいる。

石鏃 人骨から遊離した状態で、サヌカイト製石鏃が1点検出された。446は凹基式の五角形鏃である。

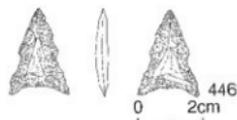


図107 第5次 7トレンチST401
出土石鏃実測図

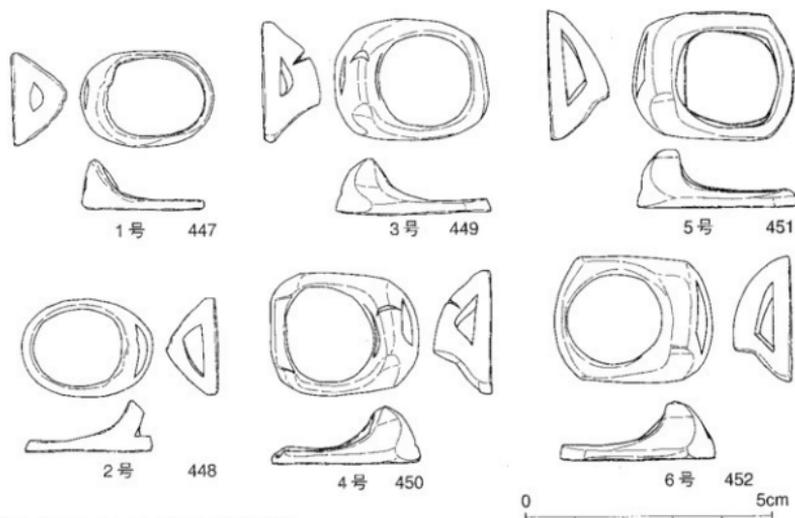


図108 第5次 7トレンチST401指輪実測図

ST402

幅95cm、長さ190cm、深さ20cmの隅丸方形の掘形が検出された。掘形内より木棺の痕跡が検出された。

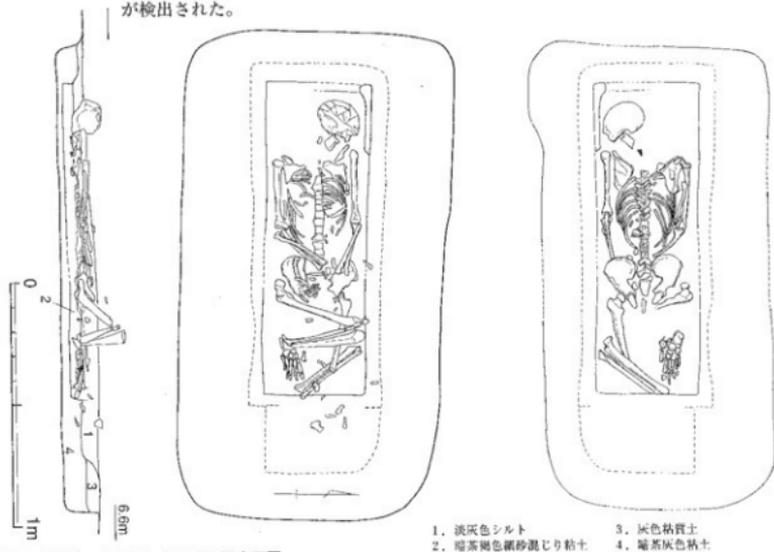


図109 第5次 7トレンチST402平面図

1. 淡灰色シルト
2. 暗茶褐色細砂混じり粘土
3. 灰色粘質土
4. 暗茶灰色粘土

木棺 掘形底面で、幅43cm、長さ127cmの木棺の痕跡が検出された。木質は確認できなかった。主軸はほぼ東西方向である。

木棺底の北西側の側板の痕跡により、3cm程度の厚さの板材が棺材に使用されていたと考えられる。

13号人骨 木棺内より仰臥屈葬の埋葬姿勢の人骨（13号人骨）が検出された。身長158cm程度の男性の人骨で、仰臥屈葬の姿勢で埋葬されている。頭位は西である。頭部前面と左足首以下を欠損するが、ほぼ全身の骨が良好に残る。死亡年齢は、熟年（40～60歳）と推定される。

主な特徴として、縄文人骨に特徴的な骨格を持つこと、腰椎や上腕骨の骨体部に病変が見られること棺底に接した左下顎骨に付着している。材質は12号人骨と同様に水銀朱であり、その出土状況は12号人骨と酷似し、頭部への施朱行為を読み取ることができる。

人骨の詳細な鑑定結果については、第VI章第2節を参照されたい。

赤色顔料 棺底に接した左下顎に付着している。材質は12号人骨と同様に水銀朱であり、その出土状況は12号人骨と酷似し、頭部への施朱行為を読み取ることができる。

遺物 木棺内より出土した遺物は、石鏃2点、イノシシ牙1点である。

石鏃 人骨より遊離した状態で石鏃が2点検出された。453は右膝の上10cm、454は下顎骨から5cm北側で、墓坑底より出土した。いずれも人骨とは遊離しており、被葬者に伴う遺物である確証はない。

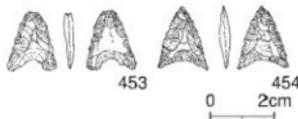


図110 第5次 7トレンチST402
出土石鏃実測図

イノシシ牙 右脛骨上方に接するように、イノシシ牙が1点検出された。残存状況は非常に悪く、外表面の硬質部が残っているに過ぎない。腰飾り等に加工されていた可能性はあるが、両端部が残存せず、加工痕は確認できない。出土状況から人骨との一括性は高く、埋葬時に遺体とともに埋められたことは確実である。

東端拡張区

調査区東端で木棺墓（ST402）の一部が検出されたため、調査区を拡張して調査を実施した。

遺物 ST402掘形プラン検出面の直上層で検出された遺物のうち、図示した遺物は、壺（455）、甕（456）である。

壺 455は短くやや外方に伸びる口縁を持ち、端部は丸い。頸部上方に焼成前穿孔を1対設ける。頸胴界に削出突帯を巡らす。口径11.1cmを測る。

甕 456は頸部下方に3条の沈線を巡らす。強く屈曲して外反する口縁を持ち、端部にキザミを施す。体部外面は縦方向のハケを施し、内面はナデを施す。口径21.7cmを測る。

他に逆L字状口縁を持つものが2点出土した。

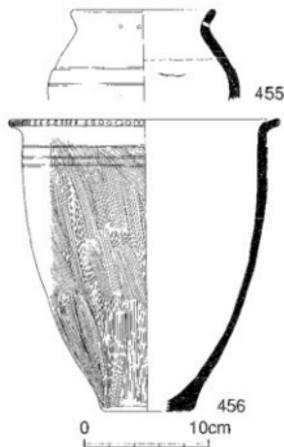


図111 第5次 7トレンチST402直上層
出土遺物実測図

第3節 8トレンチの調査

当調査区は、第2次調査地の南端部に接続するトレンチで、幅3m、全長55mの調査区である。計4面の遺構面が確認した。第3遺構面と第4遺構面から弥生時代前期の遺構が検出された。調査区南半部は緩やかに南へ傾斜し、遺構、遺物の存在が希薄である。

1. 第4遺構面

上坑・柱穴等が検出された。壺の紋様に貼付突帯の使用が見られる遺構面である。

(1) 上坑

SX401

調査区の中央部で検出した土坑である。幅約50cm、深さ約10cmを測る。調査区の制約により形状等は不明である。

遺物
壺

図示した遺物は、壺(457・458)、壺または鉢の底部(459・460)、甕(461~464)である。

457は口頸界に段を持つ。口縁部は強く外反し端部は丸い。口縁部は内外面ともナデ、頸部は内外面ともミガキを施す。口径12.6cmを測る。

458は口頸界に断面三角形の貼付突帯を巡らす。突帯以下に4条以上の沈線を巡らす。口縁部は強く外反し、端部は1条の沈線を巡らす面を持つ。調整は内外面ともにナデである。口径15.2cmを測る。

459は、壺または鉢の底部である。内外面ともに横方向のミガキを施す。底面はわずかに凹む。底径10.8cmを測る。

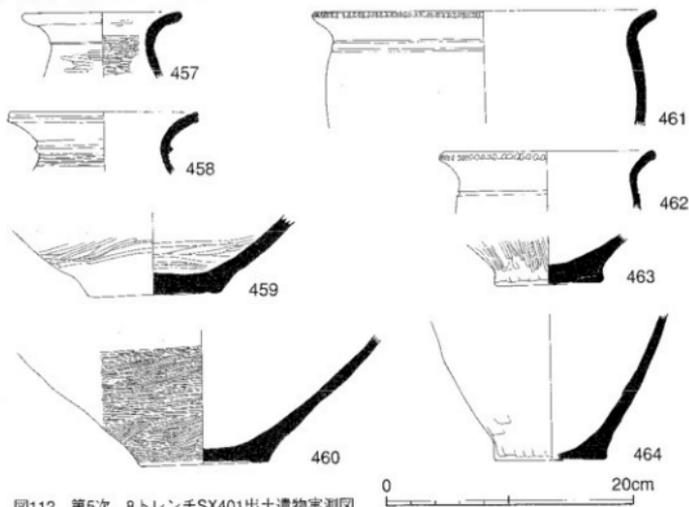


図112 第5次 8トレンチSX401出土遺物実測図

甕

460は、壺または鉢の底部である。外面を横方向および斜め方向のミガキを施し、内面をナデまたはミガキを施す。底面は凹む。底径10.3cmを測る。

461は頸部下方に2条の沈線を巡らす。口縁部は緩やかに外反し、端部にキザミを施す。外面はナデを施し、内面は不明である。口径27.4cmを測る。

462は頸部下方に1条の太い沈線を巡らす。口縁部は緩やかに外反し、端部下半部に棒状工具の押圧によるキザミを施す。内外面ともにナデを施す。口径17.0cmを測る。

463・464は甕の底部である。いずれも底面はわずかに凹む。外面を板ナデで成形したのち、縦方向のミガキを施す。底径は463が8.4cmを測る。464が9.1cmを測る。

(2) 柱穴

柱穴が若干検出されたが、建物としてのまとまりは不明である。

SP403

調査区の南側から検出した。幅約20cm、深さ約11cmを測る。弥生時代前期後半の遺物が出土した。

遺物
甕

図示した遺物は、甕(465・466)である。

465は頸部下に2条の沈線を巡らす。口縁部は緩やかに外反し、端部は丸く、キザミを施す。内面に斜め方向の板ナデの痕跡が残る。口径24.9cmを測る。

466は甕の底部である。調整は不明である。465と同一個体である可能性がある。底面中央部は凹む。底径8.4cmを測る。

2 第3遺構面

弥生時代前期から中期前半の遺構面である。北半部で竪穴住居1棟、溝内合葬墓1基、溝、土坑、柱穴等を検出した。南半部は遺構の分布は第4面同様に希薄である。南端部では、古墳時代の遺構面で見られたように、微高地から1m以上低湿地に落ち込み、居住域の南端付近に位置していることが確認された。

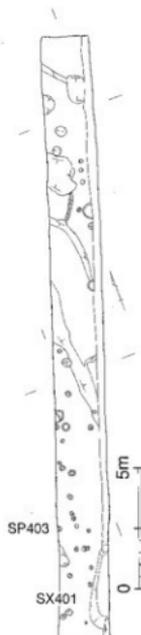


図113 第5次 8トレンチ 第4遺構面平面図

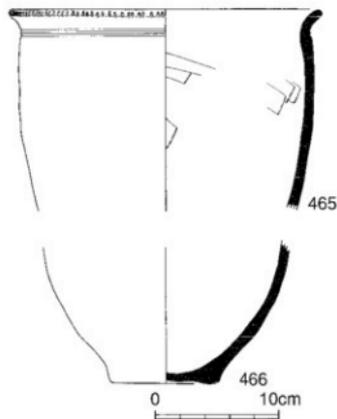


図114 第5次 8トレンチSP403出土遺物実測図

(1) 溝状遺構

SD301

幅約2.8m、深さ約1.3mを測り、ほぼ南北方向に延びる溝である。極細砂質シルトが堆積し、弥生時代前期から中期前半の土器が混在して出土した。弥生時代前期に掘削された可能性があるが、確定はできない。

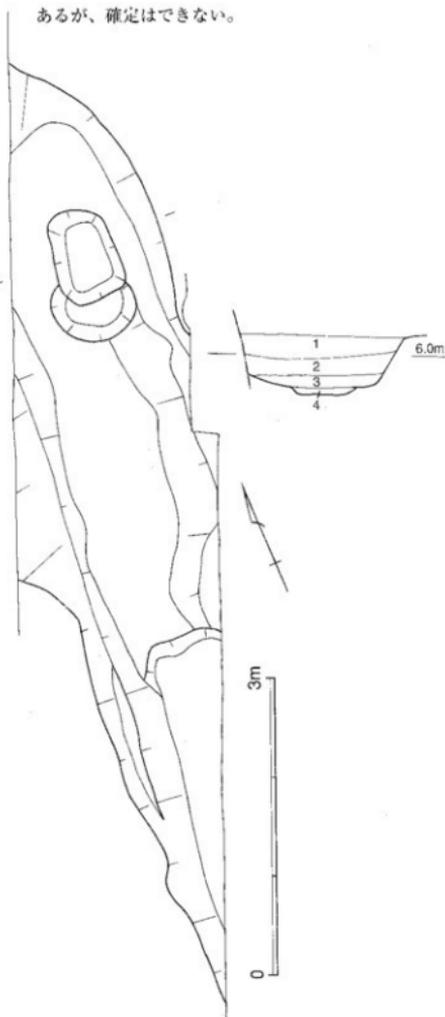
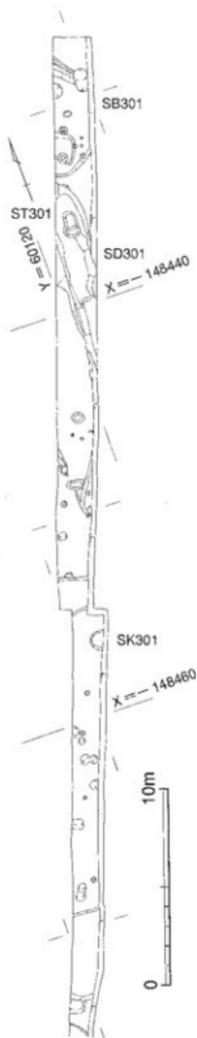


図116 第5次 8トレンチ SD301平断面図

図115 第5次 8トレンチ
第3遺構面平面図

(2) 土坑墓

ST301

SD301の溝底で、幅70cm、長さ98cm、深さ10cmの土坑墓が検出された。2体分の人骨が同時期に埋葬された状態で検出された。西側を第10号人骨、東側を第11号人骨とする。頭位は共に北である。残存状況は悪く、骨が土壌にプリントされた状態である。埋葬姿勢の復元は、残存状況が悪く詳細は不明であるが、少なくとも四肢の強い屈曲は認められ、屈葬の姿勢である。歯冠の咬耗は少なく、子供の骨格である可能性が高い。人骨の詳細については、第Ⅵ章第2節を参照されたい。層位的にSD301と同時期以前であり、弥生時代中期前半以前の遺構である。木棺の痕跡は確認されていない。

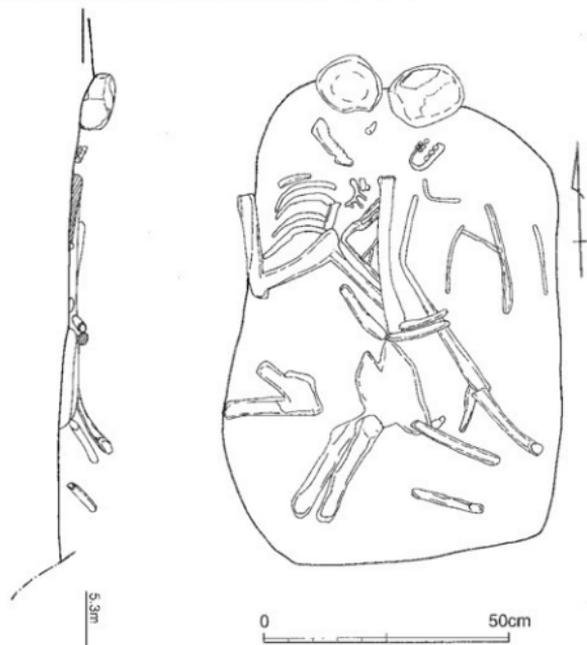


図117 第5次 8トレンチST301平立面図

(3) 土坑

SK301

全体の形状は不明であるが、長さ約120cm以上、幅約40cmを測る上坑である。

遺物
壺

図示した遺物は、壺(467)、鉢(468)、底部(469~471)である。

467は頸肩界に段を持つ。頸部は直線的に内側に伸び、口縁部は強く外反する。口縁端部は丸い。口縁部内面に横方向のミガキを施すが、他の調整は不明である。口径24.0cmを測る。

鉢

470は大型の鉢の口縁部である。口頸界に段を持ち、口縁部は強く外反する。外面頸部は横方向のミガキの痕跡が残るが、他の調整は不明である。口径39.4cmを測る。

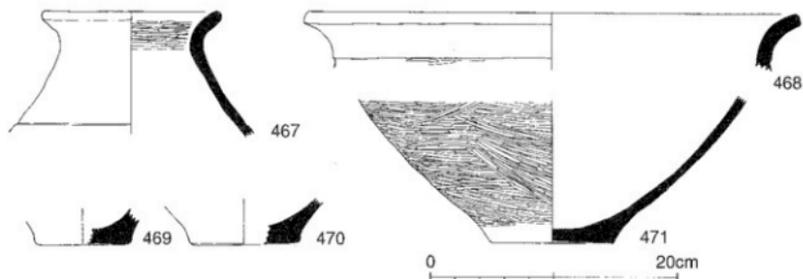


図118 第5次 8トレンチSK301出土遺物実測図

底部 469・470は壺または甕の底部である。ともに底面はわずかに凹む。調整は不明である。底径は469が7.8cm、470が8.9cmを測る。

471は鉢または壺の胴部下半部である。胴部は緩やかに内湾して立ち上がり、外面は横方向および斜め方向のミガキを施す。底面は凹む。底径10.0cmを測る。

(4) 竪穴住居

SB301

調査区の制約により、全体の規模、形状は不明であるが、直径約5.5mの円形竪穴住居である。南半部に1.6m×1m以上、深さ cmの土坑が掘り込まれている。深さ30cm程度の柱穴が5基検出された。深さ約25cmである。調査区の制約により支柱穴を特定できない。土器の他に、石棒や獣骨が床面直上で出土した。

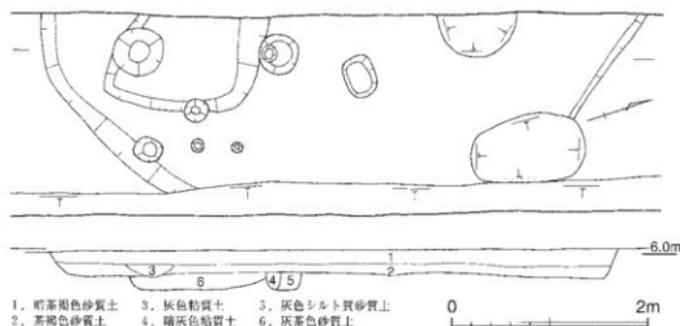


図119 第5次 8トレンチSB301平断面図

遺物
甕

図示した遺物は、甕 (472~477)、壺 (478~480)、鉢 (481)、底部 (482~490) である。472は頸部下に3条の沈線を巡らし、2列の竹管紋を伴う口縁部は緩やかに外反し、端部はキザミを施す。口径21.6cmを測る。

473は如意形の口縁を持ち、端部にキザミを施す。頸部下方に3条の沈線を巡らす。底面は平坦である。口径16.8cmを測る。

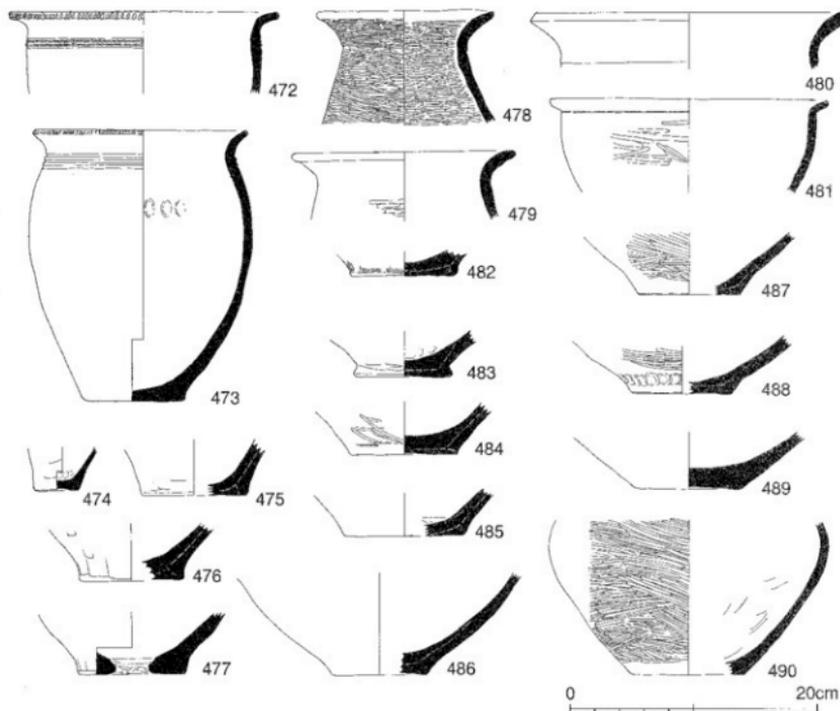


図120 第5次 8トレンチSK301出土遺物実測図(1)

- 底部** いずれも外面を縦方向のハケ、内面にナデを施す。
- 474はミニチュアの底部で、底面は凹む。外面は板ナデ後ナデ、内面はナデを施す。475は底面にわずかな凹みを持つ。476の底面は未調整である。477は焼成後に底部穿孔を行う。底径は474が3.7cm、475が8.3cm、476が8.3cm、477が8.6cmを測る。
- 壺** 478は口頸界にミガキによる段を持つ。口縁部は緩やかに外反し、端部は丸い。内外面とも横方向の丁寧なミガキを施す。口径13.6cmを測る。
- 479は壺の口縁部である。口頸部は無紋で、口縁部は緩やかに外反し、端部は丸い。頸部下方外面に、横方向のミガキを施す。口径17.4cmを測る。
- 480は口頸部に段を持つ。強く外反する口縁を持ち、短部は面を持つ。内外面ともナデを施す。口径24.6cmを測る。
- 鉢** 481は半球状の体部から、短い口縁部を強く外方に折り曲げている。体部外面は横方向のミガキを施す。口径22.0cmを測る。
- 底部** 底部は、壺と鉢の峻別が困難である。両器種とも外面にミガキを施すものが多く、底部から胴部への立ち上がりは、甕に比べて、大きく開くものが多い。底面の凹みは甕に比べ

487が8.2cm、488が7.8cm、489が8.4cm、490が9.1cmを測る。

山形紋 491は壺胴部に施紋された山形紋である。2条の沈線で区画された紋帯中に施紋されていると考えられ、2条の斜線で描かれている。

垂弧紋 492は壺胴部に描かれた2条の垂弧紋である。紋位置区の上方に1条以上の沈線を廻らす。

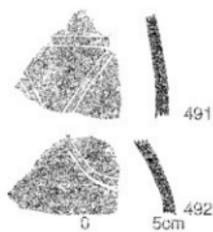
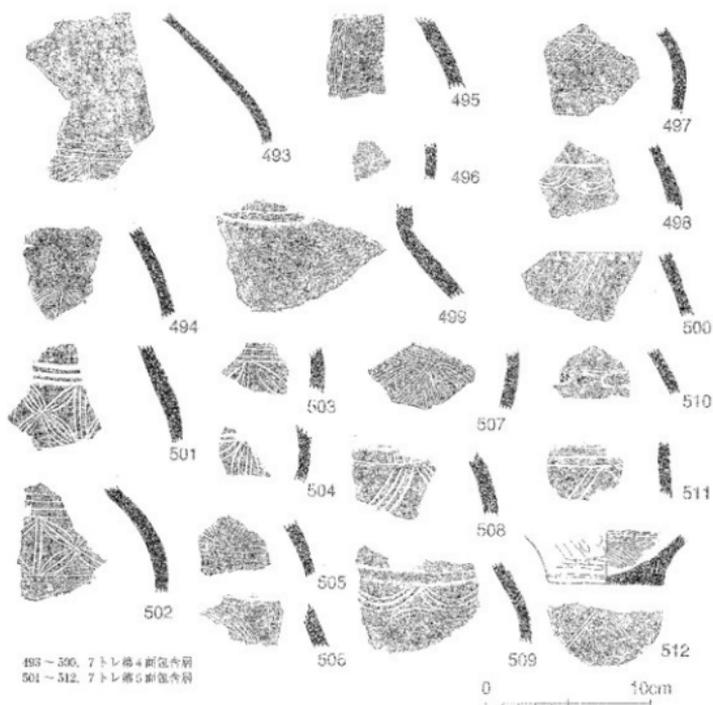


図121 第5次 8トレンチSK301
出土遺物実測図 (2)

第4節 紋様

遺物包含別より、施紋された土器片が多数出土した。

主な遺物を下記に示す。



493～506、7トレンチ4新包内容
501～512、7トレンチ5新包内容

図122 第5次 包含層出土遺物実測図

第5節 石器

第5次調査で出土した主要な石器を下記に示す。

No.	遺物名	出土地	法 量				比重	石材名	備 考
			長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)			
493	石鏃	最終面直上	5.3~	3.3	0.7	30.2	2.58	サヌカイト	打製、使用痕あり
494	石鏃	古墳時代包含層	25.0	4.7	1.5	230.7	2.56	サヌカイト	磨製、使用痕あり
495	石棒	8トレSB301	20.6	4.9	2.3	393.3	2.60	結晶片岩	
496	礫石	SK503	7.9~	5.5	5.5	397.5	2.34	砂岩	
497	叩石	SD4001下層	13.9~	8.8	3.2~	522.2	2.41	砂岩	
498	叩石	SX403	8.5	7.3	5.2	518.9	2.85	角閃珪岩	
499	叩石	SD405	10.9	8.4	6.2	888.7	2.84	珉レイ岩	
500	擗石	8トレSK302	14.7	11.8	5.8	1696.7	2.92	珉レイ岩	

表6 第5次調査 石器一覧

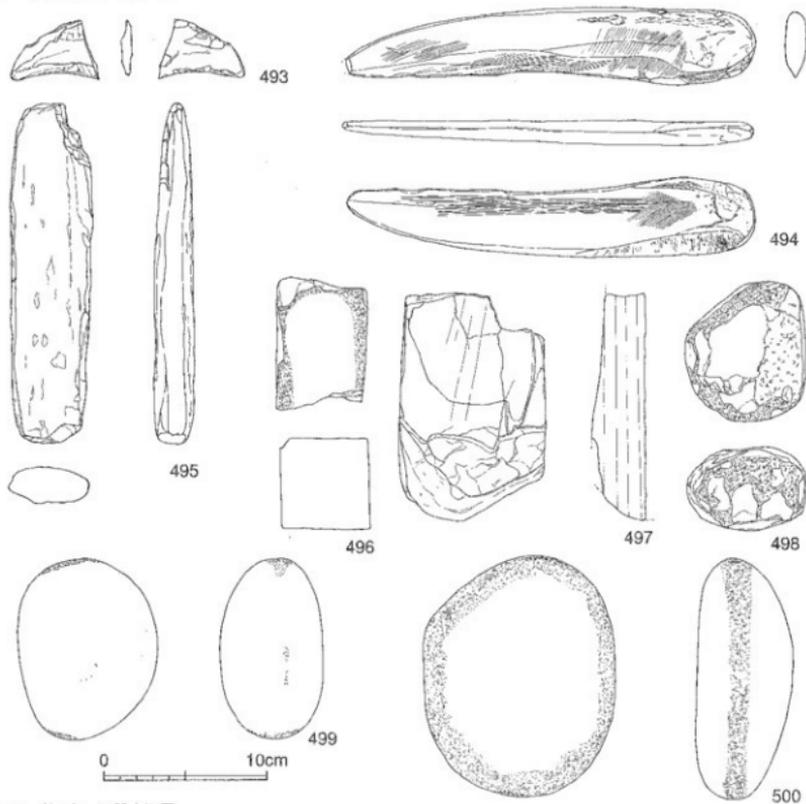


図123 第5次 石器実測図

第6節 弥生時代中期以降の人骨

野手西方地区の調査では、弥生時代前期の人骨以外に、3体の人骨が出土している。出土状況、出土遺物等についての詳細は改めて本報告する予定であるので、ここでは、各人骨の概略について記述する。人骨の形質人類学的な分析については、第VI章第2項を参照されたい。

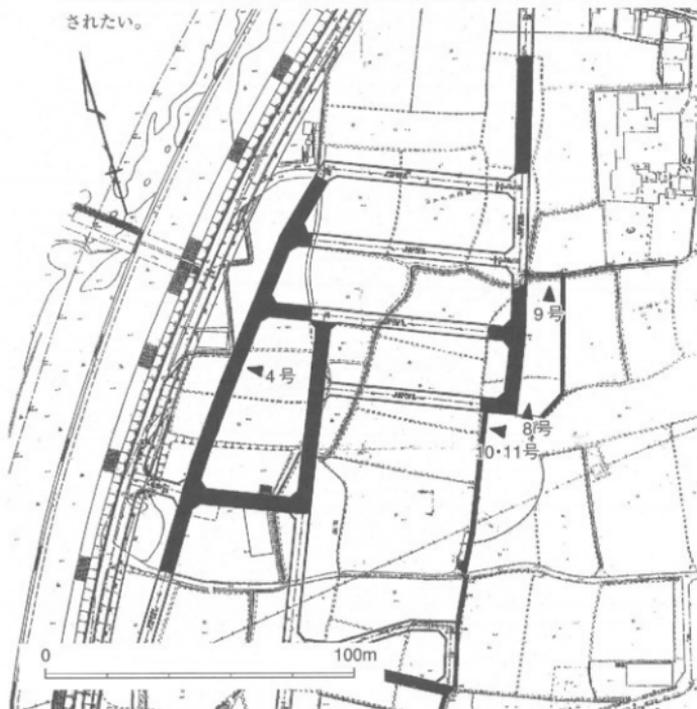


図124 弥生時代中期以降の人骨出土位置図

4号人骨

第1次調査で検出された人骨である。

出土状況

2号トレンチ南半部で、方形周溝墓の2辺の周溝が検出された。北側の周溝は、幅2.3m、深さ80cm程度であり、埋土より完形の大壺などの遺物が検出された。壺の真下の周溝底で、幅50cm、長さ155cmの木棺の痕跡と考えられる方形のプランが検出され、その内側で人骨の痕跡が確認された。骨の遺存状況は非常に悪く、かろうじて頭骨と長骨の存在が確認できるに過ぎない。頭位は東である。埋葬姿勢は不明であるが、木棺のプランと長骨の位置より、伸展の姿勢であったと考えられる。

時期

人骨に直接伴う遺物は出土しなかったが、周溝内より出土した遺物は供献土器と考えられ、弥生時代中期中葉から後半の人骨である。

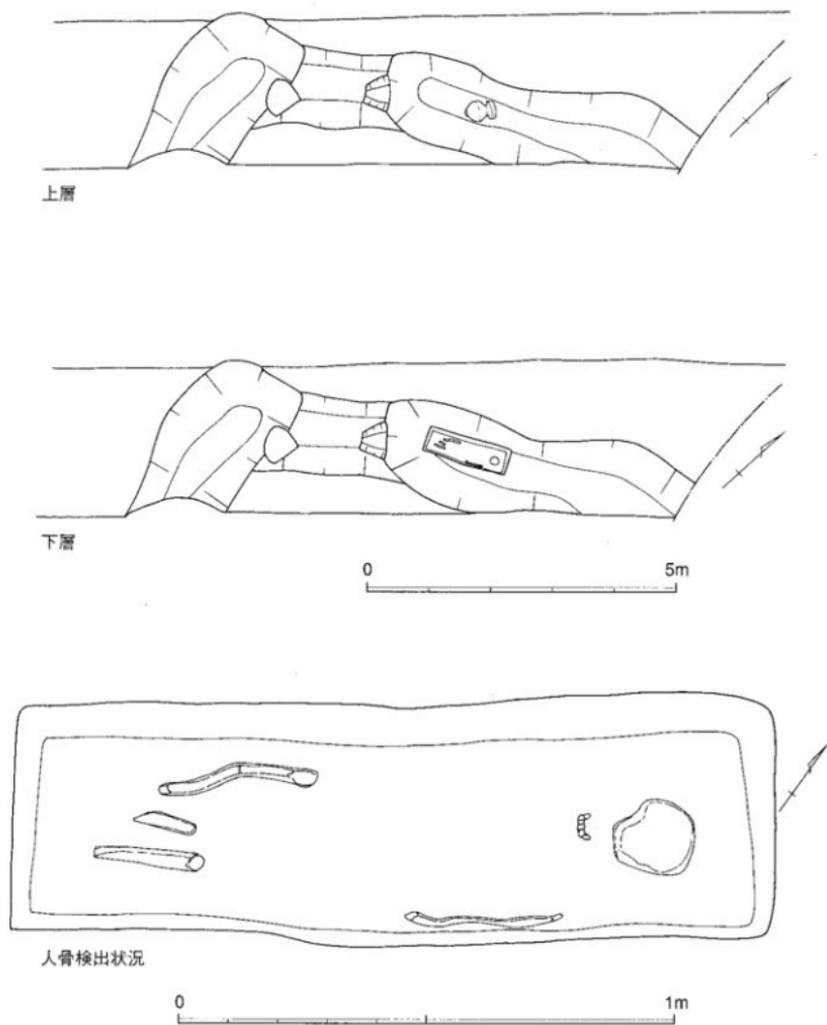


図125 第1次 4号人骨平面図

8号人骨

第5次調査で検出された人骨である。

出土状況

7トレンチ南端部の第3遺構面（古墳時代中期）で検出された木棺墓である。長さ150cm、幅75cmの掘形から、長さ110cm、幅50cmの木棺の痕跡が検出された。木棺の痕跡内よりほぼ全身の骨格が残る人骨が検出された。頭位は東である。身長145～150cmの女性の人骨で、死亡年齢は熟年（40～60歳）と推察される。左下顎の小白歯、大白歯の中央部が靴状に磨り減る異常な咬耗がみられ、歯が咀嚼以外の用途に使用されていたことが想定される。また、弥生時代前期の人骨との相違点は、抜歯の痕跡が確認できないことである。1・2・12号人骨では、大歯が生前に抜かれていた可能性が高く、上顎の犬歯に関しては、確認できるものはすべて歯槽閉鎖が見られる。しかし8号人骨は、左上顎の犬歯は抜け落ちているものの歯槽が開放しており、弥生時代前期の抜歯年齢と異なるパターンを示している。

時期

確実に埋葬に伴う遺物は無く、時期の特定は難しい。掘形内および木棺内より弥生時代前期から古墳時代中期の遺物が少量出土しているが、弥生時代前期の遺物が大半を占める。放射性炭素年代測定を試みたが、測定年代を決するには至らなかった。（第Ⅵ章第1項参照）しかしながら、8号人骨が検出されたレベルと弥生時代前期の遺構（SK502）の検出レベル差が約60cmあること、弥生時代前期の抜歯パターンと異なることから、弥生時代前期の遺構とは考えがたい。

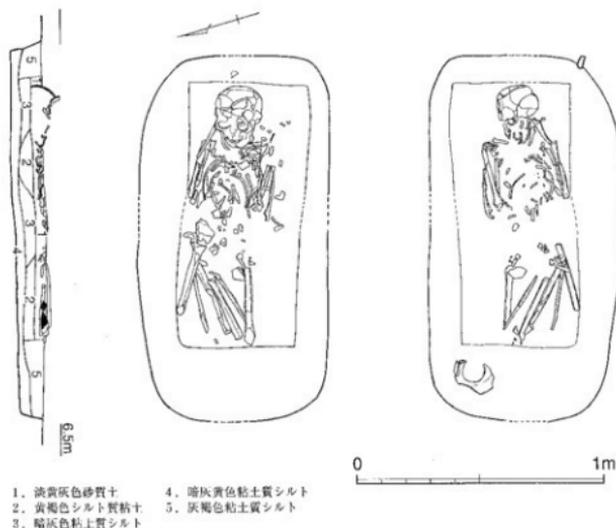


図126 第5次 8号人骨平立面図

- 9号人骨 第5次調査で検出された人骨である。
- 出土状況 7トレンチ北端部の第3遺構面（古墳時代中期）で検出された人骨である。後世の削平を受け、掘形等のプランが明瞭ではない。検出された人骨は男性の可能性が高いが、左右の上腕骨、尺骨、橈骨で交連した状態で検出された。
- 時期 確実に埋葬に伴う遺物は無く、時期の特定ができない。検出状況から古墳時代中期以降であると考えられるが、判然としない。

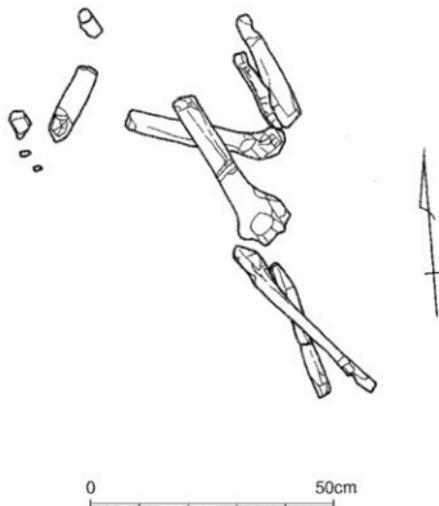


図127 第5次 9号人骨平面図

第Ⅶ章 人骨と動物遺存体の調査

第1節 人骨と動物遺存体

脆弱な遺物の 取り上げ

発掘調査において遺物が出土した場合、通常の物は手で直接取り上げることが多い。しかし劣化が進行し、手で持つと崩壊しかねないほど弱くなったものを脆弱遺物と呼んでいる。今回の人骨や獣骨もまさにこうした脆弱遺物であった。そのため、切り取りの手法を用いて出土状況のまま取り上げを行った。

この手法を用いた理由としては、人骨の場合は、第1には、それ自身が脆弱であることによる。第2は、石鏃や骨角器が共存しており、それぞれを個別に取り上げるよりは、セットとしてその出土状況を維持することによって、これらの情報を保存することが必要であったためでもある。

獣骨についても、特に、骨の薄い部分が極めて脆弱になっているものもあり、切り取りの手法により、できるだけ形状を壊さないように取り上げることに努めた。



挿図写真1 切り取る範囲の設定



挿図写真2 砂・アルミホイルで骨を保護する



挿図写真3 保護の終わった状態



挿図写真4 ウレタンを吹き付ける

硬質発泡ウレ

タンフォーム この方法で取り上げる場合、資料の材質や大きさや、劣化状況などにより、使用する材
料による取り上 料や細部の工法は異なる。しかし、基本的な流れは、以下の通りである。

げ方法 まず現地において必要な記録として写真撮影、出土状況図の作成を終えた後に、切り取
り範囲を設定し、人骨の場合はその周囲を深さ約1m掘削する。切り取り範囲の表面に硬
質発泡ウレタンフォームが接着しないように、和紙やアルミ箔などの離型材を貼り、遺物
を保護する。次に切り取り範囲の上面と4側面に、硬質発泡ウレタンフォームを吹き付け、
あるいは充填する。次に下部の切り離しのために、トンネルを掘り、そのトンネルに硬質
発泡ウレタンフォームを順次充填し、切り取り範囲全体を梱包する。重量に合わせて、補
強材と硬質発泡ウレタンフォームによる補強を再度行い、クレーンなどで吊り上げると現
地での取り上げが終了する。

他の動物遺存体の場合は、すでに解体されているため、下顎骨などが単独で出土してい
る。その結果、切り取る規模が小さいため重量も軽く、周囲の掘削も浅く、10~20cm程
度で切り離しが可能であった。



挿図写真5 トンネルを掘って地面から切り離す



挿図写真6 パワーショベルで吊り上げる



挿図写真7 反転させる



挿図写真8 裏側の余分な土を取り除く

次に硬質発泡ウレタンフォームで梱包したものを、天地をひっくり返して室内に運び込む。つまり、現地でトンネルを掘った面を上面にする。そしてこの硬質発泡ウレタンフォームを割がすと、切り取り範囲の裏側の土が現れる。この土を掘っていくと、対象遺物の裏側が現れるのである。つまり、現地の地中側から遺物を観察していることになる。この後は、この遺物をどう保存処理するか、あるいはどう展示・保管するかによって、次の工程は変わってくる。

現地作業

1号、2号、3号、8号、10・11号、12号、13号人骨について、発泡ウレタンによる梱包により取り上げを行った。2号、10号以外は、切り取り範囲が大きく、大量の硬質発泡ウレタンが必要であったため、専用の機材と経験を持つ、専門会社（株式会社 近畿ウレタン工事）に依頼して行った。基本的には先の項目で述べた工法によっている。

その工程の中で特に注意した点としては、人骨が薬品などで汚染されないことと、人骨が大変脆弱であるにもかかわらず、各部位が立体的であり、かつ骨格が複雑であるため、



挿図写真9 ウレタンを裏側から開梱する



挿図写真10 裏側から遺構基盤層を掘削する



挿図写真11 人骨を裏側から精査する



挿図写真12 形質人類学の調査を行なう

硬質発泡ウレタンフォームをどの程度圧着させるかが問題であった。人骨に対して、硬質発泡ウレタンフォームが複雑に圧着しすぎたり、逆に空間が空きすぎると、梱包後に回転させる時に人骨が潰れたり、位置がずれる可能性が高かったからである。特に13号人骨は立体的に複雑な出土状況にあったため、その養生には細心の注意を必要とした。人骨だけでなく、1号や3号に共伴する石鏃についてもこうした移動を防止するために、人骨に直接あるいはアルミ箔をあててから、湿らせた砂を人骨の周囲に置き、人骨や石鏃の安定を図った。また、一部では、医療用ギプスによる固定も行った。実際には、これらの方法を状況に応じて組み合わせている。

取り上げ時の梱包した時の重量はいずれも3~4トンであったが、2トン弱まで現地で裏側の余分な土壌を取り除き、再度梱包し、埋蔵文化財センターに搬入した。

他の動物遺存体については、出土状態の記録を終えてから、調査担当者によって随時に梱包を行い、取り上げを行った。その際に、発泡ウレタンは硬質のものではなく、携帯型スプレタイプ（商品名 インサルパック#45）を多くの場合用いた。ただし、一辺がおおよそ50cmを超える範囲のものは、硬質発泡ウレタンを用いている。



挿図写真13 裏側検出状況の記録撮影をする



挿図写真14 裏側検出状況の図化作業



挿図写真15 合成樹脂で裏面を補強する



挿図写真16 底面をウレタンで再梱包する

室内での調査

埋蔵文化財センターに運ばれた硬質発泡ウレタンフォームに包まれた人骨や他の動物遺存体は、現地とは上下を逆さにし、裏側から発掘調査を行なった。この調査では気象条件にほとんど影響されない環境が可能になった。

土壌と人骨が急激に乾燥しないように、純水を塗布しながら土を取り除いていくと、8・12・13号については、まず墓壇の底のプランが見え、次に木棺の底板の痕跡と推定される土壌の変化が見られた。1・2号についても、木棺底板の痕跡のような土の変化が見られたが明確ではなかった。また、12号人骨の頭側の小口板を埋めた穴も確認された。3号人骨については、表側からは見つけられなかった石鏃が1点も見つかった。また、12・13号人骨の顔面には赤色顔料がわずかに付着していることも判明した。赤色顔料は顔面から10cm以内の範囲に散点認められた。重量は、両者とも数gと推定できる。

さらに、12号人骨右腰の寛骨の下（裏側からは上）から指の骨が良好に見つかり、その内の3本の指に2個一對の指輪をはめていたことがわかった。

調査に伴い、土壌のサンプリングも行った。表側では腹部、頭部の骨に近い部分、裏側



挿図写真17 ホイストクレーンで正位に戻す



挿図写真18 ウレタンを開梱する



挿図写真19 表側をクリーニングし樹脂で強化する



挿図写真20 収納ケースを組み立てる

は、長軸と短軸の中央付近で、掘り方、棺外、人骨直下の各段階で土壌を採取した。人骨以外の部分の土壌は、約2~5cm程度はオリジナルな土壌を残している。室内での調査の各段階で、現地での発掘調査と同様に、遺構・遺物の実測図の作製と写真撮影を行った。また、片山氏らによる観察や計測作業を実施していただいた。

放射性炭素年代測定

なお、人骨の年代、特に、8号人骨については検出状況からは所属年代が確定しにくかったため、放射性炭素年代測定の手法による測定を行った。試料に供したのは、1号、8号、12号、13号の接合できない頭骨、肋骨の一部で、アクリル系合成樹脂を塗布してしまったものと、まったく無処理の試料がある。測定には、名古屋大学年代測定総合センターの中村俊夫氏、小田寛貴氏のご協力を得た。しかし、十分なコラーゲンが抽出できなかったことや、合成樹脂の影響により、測定年代を決するにはいたらなかった。このことは、これ



挿図写真21 獣骨をウレタンで梱包する



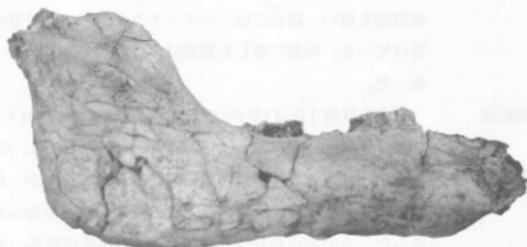
挿図写真22 室内で開梱しクリーニングする

らの人骨が、外観上は、保存状態が良好に見えても、物性的には、分解がかなり進行していることを反映している可能性がある。

強化と補強

人骨及びその他の動物遺存体の強化方法としては、アルコール脱水とアクリル系合成樹脂の塗布と含浸による手法を用いた。まずエチルアルコールで十分に脱水を行い、その後アクリル系合成樹脂（商品名：バラロイドB72）の5%溶液を、筆あるいはスポイトによる塗布を数回行った。塗布量は部位の分解程度により異なるが、塗布を数度繰り返すことによって、表面に合成樹脂が溜まる時点を塗布限界の目安とした。人骨については、まず裏側の調査後に塗布を行い、正転後に表側から塗布を行った。

人骨の周囲の土壌については、裏側から強化材（商品名：OM25）を1㎡約2kg塗布しさらに正転後、ほぼ同量を塗布し強化を図った。10・11、12、13号については、裏側からの塗布を省略している。裏側からの上記の合成樹脂塗布後、約2週間以上経過してから、そ



挿図写真23 保存処理終了後（外側）



挿図写真24 保存処理終了後（内側）

の上にエポキシ系合成樹脂（主剤 商品名：アララタイト2400）、ガラスクロス、エポキシ系充填材（商品名：Kモルタル）を用いて、厚さ約2~4cmのFRP層を全面に形成させ、土壌の裏側の支持盤とした。その支持盤の上に、キャスト付の木製展示台を上記のエポキシ系合成樹脂などで接着し、さらに荷重の安定化を図るため、硬質発泡ウレタン樹脂を充填した。この充填に際しては、現地で梱包した硬質発泡ウレタンと必ず接着するようにしている。このことにより、次の正転時の分解を防いでいる。

正転後は、現地での梱包用および正転用の硬質発泡ウレタンを取り除き、最終寸法を決定する。その寸法からはみだした余分な土壌と合成樹脂層（FRP層）を切断し、収納用パネルを備面に固定している。

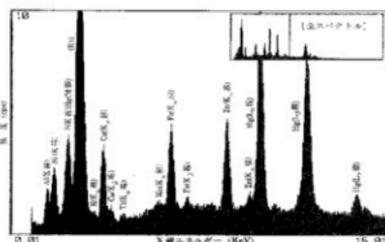
その他の骨については、周辺の土壌を残す必要がないため、すべて取り除き洗浄を行った。強化方法は人骨と同様である。この強化により手で持つことのできるものは、これで処理を終えた。しかし、一部については、骨の薄い部分が埋藏中に砕けてしまい、持ち上げることができないものがあった。これらについては、同定・計測や展示の今後の要素を踏まえ、必要性の高い面をそのままにし、低い面をガーゼや薄いガラスクロスとともに上記のアクリル系合成樹脂により裏打ちを行った。なお、欠損部の充填には、エポキシ系充填剤を用い、接合には、シアノアクリレート系接着剤、セルロース系接着剤を適宜使い分けている。作業に要した期間は、1、2号で約1年間、8、10・11、12、13号で約1年半であった。

収納状況

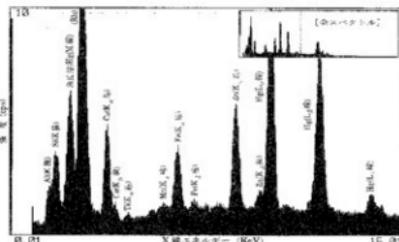
現在の収納寸法は1号が $215 \times 119 \times 71$ cm、3号が $221 \times 189 \times 94$ cm、8号が $188 \times 103 \times 81$ cm、10・11号が $110 \times 85 \times 76$ cm、12号が $252 \times 147 \times 75$ cm、13号が $227 \times 133 \times 87$ cmである。

赤色顔料同定

12・13号人骨の場合は、顔面に塗布されていたか、棺内に撒かれていたものかはには決しがたい。今回の例は、この時期の埋葬行為における赤色顔料利用の貴重な資料となった。この赤色顔料は、蛍光X線分析調査の結果、水銀が強く確認できたこと、および実体顕微鏡、金属顕微鏡観察から、水銀朱と判断した。分析には、株式会社パレオ・ラボのエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA-2001L（セイコー電子工業（株）製）を用いた。X線管球のターゲットはロジウム（Rh）、ベリリウム（Be）の窓、X線検出器はSi（Li）半導体検出器である。測定条件は、測定時間100秒、照射径3mm、電流自動設定（ μ A）、電圧50kV、試料庫内は大気である。



12号人骨赤色顔料-3（左側頭部）



13号人骨赤色顔料-1（左下顎）

図128 蛍光X線分析スペクトル図

第2節 新方遺跡の弥生時代人骨

京都大学霊長類研究所

片山一暎・大藪由美子

1. はじめに

新方遺跡(野手西方地点)は明石川のほとりにあり、低地平野の田圃の下に広がる。

そこで1997年と1999年のこと、神戸市教育委員会により発掘調査が行われた際、何体分もの人骨が出土した。この両年ともに複数個体の人骨が発見された。近畿地方では発見例が少ない弥生時代の人骨がまとまって見つかり、しかも全国的にも珍しい弥生時代初期の人骨であることから、たいへん貴重な第一級の学術資料と言える。おかしな姿勢で埋葬され、ただならぬかたちで死をむかえた人たちの遺骨であるらしいことにも興味をそそられるが、ともかく、縄文時代から弥生時代に移る頃には生きとし人びとの人物像を描くため、あるいは当時の近畿地方に在住した人たちの生きざま死にざまを探るために、かけがえのない情報を提供してくれよう。

新方遺跡そのものの考古学的な意義、そのときの発掘調査のこと、人骨の出土状況、その年代推定などについては、第Ⅲ章・第Ⅴ章で詳しく述べられているので、ここでは割愛する。

ここで報告するのは、その両年度に出土した人骨に関する観察所見と、人類学的あわせて考古学的な意味についてである。別々の年度に発掘された人骨を一括して記載するのは、それらが同じ遺跡の近接した地点で見つかったことにくわえ、多くが埋葬時期までも重なることが理由である。

2. 新方人骨発見の意義

新方遺跡が作られた時代、および時期については第Ⅲ章・第Ⅴ章で述べられる。ここで出土した人骨群は一括して新方人骨と称するが、それらが出土したのは弥生時代前期から古墳時代中期に相当する層位からである。なかでも大半の人骨は、弥生時代前期の遺物とともに発見された。

北部九州地方の諸遺跡と中国地方西部の砂丘遺跡をのぞくと、ことのほか発掘例が乏しい弥生時代の人骨が発見された。それも何人分かがまとまって、待望久しい弥生時代の黎明期に該当する人骨がついに出土した。それゆえ日本人の成立の問題を考える人類学的な文脈で、おおいに注目できる。さらに、あまり類例をみない方法で埋葬されていたり、風習抜歯などが施されていたり、それぞれの人骨に縄文人を彷彿とさせるような形態特徴が認められたり、石鏃を射こまれた死者の遺骨であることが確認されたり、珍しい装身具を装着した状態で見つかったりしたことで考古学的な意義もはかりしれない。世間の耳目を集めるゆえんである。

1997年度に4体分の人骨（第1号～第4号人骨）、1999年度に6体分以上の人骨（第8号～第13号人骨）と、合計10体分以上の人骨が発見された。これら遺骨は、いずれも保存状態がはなはだ芳しからず、通常の発掘のように人骨だけを抜き取るには骨を破損するリスクが大きすぎるため、発掘現場での取り上げは断念せざるをえなかった。それで周囲の土を切り取り土壌に埋もれたまま神戸市埋蔵文化財センターに収納された。その作業の詳細については、第IV章第1節を参照されたい。

人骨の保存状態については、まだしも1999年度分のほうが良かった。1997年度分のは、いわゆる「湿地の古人骨」の状態、およそ半分ほどは土に還ったような有様であり、いささかでも乾燥すれば骨そのものが粉々に瓦解するのが目にみえた。そのために、骨の遺残物を周囲の土壌に封埋するかたちで保存処理を施すしか、なす術がなかったような次第である。

かくして、第1号～第4号人骨についての観察は、土ごと固めて保存処理した状態であるのと、現場で発掘時に行うことしか、かなわなかった。さいわいにして発掘時に何度か現場に赴き、できるかぎり周到に観察した記録を残していたので、ある程度の記載は可能であった。実際には、土ごと封埋したあとよりも、現場で露出したばかりの頃のほうが得られた情報量が多かった。それに確実性もあったように思う。多量の水分を帯びて埋もれていた骨が、だんだんと乾燥していく過程で徐々に劣化したためである。したがって、これらの人骨について本稿で記載することの多くは現場で残した記録に拠っている。

3. 反転発掘

1999年度に発見された第8号から第13号の人骨については、それらの保存状態に非常にばらつきがあった。このうちの第8号、第12号、第13号人骨については比較的相対的に良好な保存状態を留めていたが、その他のものについては、いかんともしがたい最悪の保存状況であった。

その第8号、第12号、第13号の人骨にしても、水漬けの軟弱な骨質となっているため、泥のなかから骨を選り分けて取りあげるのは難しそうなので、土に封埋して取りあげた。その後、神戸市埋蔵文化財センターに収容したのちに、たゆまぬ努力と時間をかけて逆さほりすることになった。つまり、骨を封埋したブロックを反転させ、地表側からではなく、通常の発掘とは逆の地中側から周到に人骨を露出させることになった。

さいわいなことに、その作業はうまくいき、現場で地表側から発掘するよりも骨を損ねず露出させ、はるかに多くの情報を得ることができた。したがって、これらの人骨についての記載は、発掘時の観察記録、土ごと固められた後の観察にくわえ、埋文センターの研究室で反転発掘されたときの観察記録を参考することができた。

それでも、骨だけを取りあげた場合と違い、観察作業や分析作業が大きく制限されるのは言うまでもない。ことに詳細で客観的な計測分析は不可能である。たとえ周径とか断面径などを計測できそうな骨であっても、実際にはそれがかなわない。また長径なども基準

通りの計りかたができないために、たいていは概測値としてでしか求められない。

それから肉眼観察しかかなわず、顕微鏡観察などができないことも非常に大きな制約である。肉眼観察にしても、あくまでも平面的な観察の域を出ず、立体的な構造物として裏と表から同時に骨を検査できないのが、欲求不満をかきたてる。それに上に埋もれたままて観察できない部分があることも、なんともやりきれない。将来的には大型のX線装置などを使うことを考えるべきだろう。

ともかく、このような「湿地の古人骨」の場合、いささかでも形をとどめた状態で保存しようとするなら、土ごと固めて取りあげるほかに、そうなると、骨そのものの形態的な分析はおおいに制限されるわけである。よりよい状態で保存処理することと、より緻密な情報をうることは、このような人骨資料では、あくまでも二律背反の関係にあることを強く実感したような次第である。

考古学の遺跡で出土する古人骨は、当然のことながら、埋蔵文化財の一部であるわけだ。よりよい状態で現状を保持すべく最善の保存処理を施すことのほうが、それを詳細に調べることよりも優先されるのは仕方あるまい。今後も、本人骨のようなかたちで保存処理を計られる例は珍しくないだろう。発掘現場で周到な記録を残すこと、できれば時間をかけて、反転発掘を試みることに、その都度、可能なかぎり詳細な観察をして計測作業なども心がけるよう推奨したい。

4. 各人骨についての記載

まず人骨ごとに求めた所見について、できるかぎりのことを記載する。おおむね、遺骨全体の残存状況、各骨の出土時の位置関係、各骨の形態特徴、性判別、死亡年齢の推定、病変や傷痕、その他の特記事項などの順に列記していく。各人骨の番号も順不同て記載していく。

発掘現場での観察所見、室内で反転発掘したときの観察所見、保存処理を施され土壌ごとて封埋された状態で再観察して求めた新たな所見に基づき総合的に記載する。発掘時の観察には時間的な制約があった。また保存処理後の観察は骨が劣化していることによる制約がある。いちばん観察しやすいのは反転発掘時であったが、それでも土に埋もれたままの状態であるから数値化したデータを集めるのは容易でなかった。それと今となっては、現場の発掘時と反転発掘時の観察は写真でしか追試できない。それらは、できるだけ写真を用いて記載を補強したい。

ひととおり各人骨の記載を終えた後で、埋葬の方法や姿勢、各人骨から推測される人物像、病変や傷痕、その他の項目ごとて総括してみたい。

第1号人骨

一般的所見

ほぼ全身の骨格が残るが、どの骨も完形をとどめない。頭蓋骨、下顎骨、左右の上腕骨、

左右の前腕骨、左右の大腿骨、左右の脛骨などが相対的によく残るが、どの骨のどの部分も信頼にたえる計測検査ができるだけの状態ではない。ほかに右の肩甲骨と鎖骨、左右の腰骨、第1頸椎（環椎）と第2頸椎（軸椎）、下位の胸椎、腰椎なども存在することが確認できるが、いずれも断片化しており、また表面が崩れたりしているので、くわしい検査は不可能である。一般に体幹部の椎骨や肋骨、それに足骨や手骨は保存が一段と悪く、一部の骨をのぞき完全に上と化したような状態となっていた。

ただ一人分の骨しかないのは確かである。どの骨もみな、俯せに身体を伸ばした姿勢、つまり俯臥伸展の姿勢で解剖学的位置関係を留めた様子で並んで見つかった。とくに不自然な位置に外れる骨はなかった。右の肩関節、左右の肘関節、左右の股関節、左右の膝関節、頸椎や腰椎での関節部分などは、しっかりと交連状態を保ったままで見つかった。このことは、これらの骨が土坑墓に一次埋葬された者の遺骨であることを物語る。左右の腕が不自然に開いた状態で並んでいたことから、あるいは人為的に腕を広げられた状態で押し込まれるようにしていたのかもしれない。

頭蓋骨は後頭骨などの一部、前頭骨の眼窩周縁の破片が少々、上顎骨の歯槽部などが残存する。脳頭蓋は全体に骨壁が厚く、側頭縁や外後頭隆起、乳様突起や後頭部の頂面などの筋肉の付着に関係した構造が頑丈なのが特徴である。脳頭蓋の大きさは中等度であり、ちなみに頭蓋最大幅は138mmばかりである。特記すべきこととして、上顎骨口蓋に開く切歯孔が大きい（7×5mm）ことがあげられるが、あるいは何かの病変かもしれない。

下顎骨は全体に小ぶりである。下顎体は低いものの厚くて頑丈である。いわゆるロック状の下顎骨であり、まったく角前切痕がない。筋突起は大きめで頑丈である。強い咀嚼と関係した側頭筋がよく発達していたことをうかがわせ、後で述べるように歯の咬耗が非常に強いことと関係しているのであろうか。

上腕骨や前腕骨、大腿骨や下腿骨ともに、骨体部分は特に長いわけではないが、いずれも太く頑丈で湾曲が強い傾向にある。たとえば右上腕骨は最大長が295mmほどなのに、骨体中央部の最大幅は24mmで最小幅17mmほどもある。そして大腿骨は骨体長が273mmなのに、骨体中央部の横径は26mm、上骨体の横径は30mmある。大腿骨の骨体の柱状性や上骨体の扁平性は中等度、脛骨の扁平性は弱い。腓骨の骨体が巨大である。

この人骨の歯の遺残状態は別表1で示すとおりである。

特記すべきは、左右上下の犬歯が4本ともに存在しないことであろう。いずれの歯槽も完全に閉鎖していることから、すでに生前に抜けていたのは明らかである。すべての犬歯が虫歯等の疾患により抜け落ちるのは、いかにも不自然であり、風習抜歯によって人為的に抜かれていたと考えるのが妥当である。

歯が全体に非常に不健全なこと、かなり咬耗が強いのが特徴である。虫歯や歯槽膿漏については後で述べる。咬耗は後歯よりも前歯のほうで強い傾向があり、ことに切歯はすべて、歯冠の四分の三から半分程度が咬耗で失われているのに、後歯は象牙質を面状に露出させる程度である。わずかながら歯石が沈着しているのが認められる。

上顎の切歯はシャベル状となる。咬耗が強いため中切歯は確かでないが、側切歯の舌側には、はっきりとしたシャベル状の窪みが認められる。上顎の左大臼歯には頬側に見事なカラベリー結節がある。上下の切歯は生前、鉗子状に咬合していたのは間違いない。

性別

骨盤は原形をとどめないほどに腐食、瓦解しているので、高い確度で性別をすることは難しいが、おそらくは男性の骨格であろう。頭蓋骨の乳様突起が非常に大きく頭丈なこと、外後頭隆起や側頭線が非常に発達していること、さらに肘の部分などの関節部が骨体よりも相対的に大きめであること、四肢の長骨がいずれも骨太で頭丈、筋附着部がよく発達していることなどが男性の骨と判定する理由である。

死亡年齢

いささかでも死亡年齢の推定に寄与するのは、腰椎の関節や肘関節や歯などしかなく、それらの加齢状態を観察するほかない。第3大臼歯が上下顎ともに放出し、しかもかなりの程度で咬耗が認められることから、すでに成人段階に達していたのは確かである。どの歯も咬耗が非常に進行し、ことに切歯などは歯頸部あたりまで水平に咬耗する。それに虫歯などで脱落した歯があることや、歯槽膿漏が進行していることだけを勘案すると、もう熟年(40-60歳)の年齢には達していた可能性が高いと考えざるをえないが、顎関節も含めて各関節の加齢現象は極めて弱く、実際には壮年(25-40歳)あたりの年齢で死亡したと考えるのが妥当ではなかろうか。おそらくは縄文人の場合で知られるように、常食していた食物のせいか、あるいは歯を道具使用していたために年齢不相应に強く歯が磨り減っていたと考えるのが妥当だろう。

身長などの身体特徴

発掘時に右大腿骨の最大長は430mmばかり、右上腕骨の最大長が295mmほどと概測できた。これらの計測値に藤井式を適用すると、この男性の生前の身長は、それぞれ161.0cmと155.6cmと推定できる。おそらく155-160cmほどの身長であったのだろう。したがって、男性としては高くない。

頭蓋骨は全体に厚めで、外後頭隆起の部分では20mmもの厚さがある。四肢の長骨は、いずれも骨体が太く頭丈であり、それにも増して各関節部は大きく見える。おそらく相当に骨太の体格をした人物の骨格であろう。巨大腓骨であることに喚起をうながしたい。

骨病変

各骨の残存状態が芳しくないために、どの骨も十分に病変などを調べることはできない。すくなくとも観察可能な骨については、なんらかの疾病を疑わせる変化は認められない。

全体に歯列が非常に不健全であり、大多数の歯が虫食い症状を呈するばかりか、上下顎

ともに歯周症による軽度な歯槽吸収が認められる。どの歯にもエナメル質減形成の兆候があり、なんらかの原因による栄養失調状態を幼小児期に経験したものと推察できる。

下顎の右第2大白歯と上顎の右第2小臼歯は生前に脱落しているが、これは虫歯が悪化したことに起因する可能性が高い。同じく下顎の左第2大白歯は虫歯で歯冠の全体を失い遠近心の歯根を残すだけである。この他にも、上顎の左第2大白歯と第3大白歯の相対する隣接面に大きな虫歯があり、その第2大白歯の歯冠の頬側面には陥没状の虫歯がある。さらに上顎では左右の中切歯と側切歯、右の第3大白歯、左の第1小臼歯から第2小臼歯をのぞく後ろの4本の歯、下顎では右の第1大白歯と第3大白歯、左の第2小臼歯と第1大白歯と第3大白歯の歯頸部に軽度の虫歯が認められる。なんらかの虫歯状の疾患の跡が合計14個の歯で認められるわけで、25本の残存歯の過半数を占めることになる。縄文人で顕発する歯頸部の虫歯だけでなく、弥生時代以降の人骨で多くなる歯冠の虫歯もある。

その他の特記事項

下位の胸椎、または腰椎に接触したような位置でサスカイト製の石鏃が見つかった。発掘状況から推察するに、それが腰の上部に射こまれていたと考えてよからう。

第2号人骨

一般的所見

そもそもは全身の骨格が土壌のなかに存在していたようである。しかしながら、ともかく骨の保存状態は最悪、粘土質の土のなかにボロボロに腐食した骨の残骸がプリントされたように残るだけである。どの骨も激しく分解しており、頭蓋骨、四肢長骨などの輪郭が微かな跡として粘上中にうかがえるほどでしかない。

大腿骨や上腕および前腕の長骨の輪郭像でみると、この個体もまた第1号人骨と同様、俯せの伸展姿勢で葬られていたようである。

歯だけが上に帰することなく残る。下向きになった上下顎骨の印影のなかに上下顎の歯列が、それぞれの歯槽に釘植したように並んだ状態で残る。歯の遺残状態は別表7を参照されたい。

まったく歯冠が壊れずに残る歯が全部で8本あり、それらは上顎右側の両小臼歯と第1および第2大白歯、下顎右側の同じく両小臼歯と第1および第2大白歯である。この他に、歯冠が壊れているが、上顎では2本の切歯、右の第2小臼歯、下顎では4本の切歯と左の第1および第2小臼歯と第1大白歯などが認められる。

このように上下顎とも、歯冠が瓦解するかどうかはともかく、多くの歯が残るのに、犬歯だけがまったく見あたらない。もちろん遊離歯としてもない。ことに右の上下の犬歯は歯槽が閉鎖していることから、生前に脱落していたのは間違いない。右側も下顎では、その前後の歯は存在するのに、犬歯だけが見あたらない。それに少なくとも右の下顎につい

ては、犬歯の後ろに隣接する第1小臼歯が歯軸の方向を変え前に移動したような状態にあることを勘案すると、第1号人骨と同様、すべての犬歯は生前すでに抜け落ちていた可能性が非常に高い。となると、第1号人骨と同じように上下顎左右の全犬歯が風習的に抜歯されていたと考えるのが妥当ではなかろうか。このことは大いに注目すべきである。

歯冠が壊れずに残る8個の歯には、かなり鮮明なエナメル質減形成が認められるものの、まったく虫歯の痕跡などはない。

歯しか観察できないような貧弱な保存状態なので、この人骨の性別を判定することはできない。死亡年齢については、残っている歯から、ある程度のことか推定できる。上下顎ともに第3大臼歯は見つかっていないが、第2大臼歯の遠位の隣接面、つまり第3大臼歯と接合する面が摩耗していることから、すでに第3大臼歯が萌出していたのは間違いない。したがって、すくなくとも成人の年齢に達していたと考えてよい。さらに第1号人骨と各歯の咬耗の程度を比較することにより、もっと大胆な推理も可能である。ことに後歯については、どの歯種の歯についても咬耗の程度は第1号人骨と大差なく、ほんの心もち弱い程度である。このことから第1号人骨と同程度か、やや若い年齢、つまり若年から壮年にかけての年齢(20-40歳あたり)で死亡したと考えても、あながち的はずれではなかろう。

当然のこと、病痕や受傷痕のようなものがあったかどうか、そんなことを調べる余地はない。しかしながら、この個体の骨格が広がる範囲内でサヌカイト製の石鏃が見つかっており、その位置は胸部の肋骨などがあるべきところである。おそらく、第1号人骨と同様、身体に石鏃を射こまれた状態で埋葬されていたのであろう。

第3号人骨

一般所見

この人骨の保存状態も芳しいものではない。第2号人骨よりは勝るが、第1号人骨に比べても劣る。それでも頭蓋骨、下顎骨、まっすぐ下半身のほうに伸ばした左右の上肢骨、腰骨、伸展した左の下肢骨などについては、それぞれの骨の位置や方向、ある程度の大きさや形が確認できる。右の下肢骨は完全に消失しているが、おそらく後の時代に掘りこまれて攪乱されたためだろう。

あきらかに仰向けに体軸を伸ばした仰臥伸展姿勢で、ただ一人分の骨格だけが並ぶ。左右の肩関節と肘関節、左の股関節と膝関節、さらに左の足首、足根、中足骨などの関節は完全に交連した状態にあることから、土壌に一次埋葬された者の遺骨であるのは確かだ。

発掘現場で観察したときは、まだ頭蓋骨や下顎骨は比較的良好に残っていた。そのとき次のような特徴が観察できた。まず頭蓋蓋についてだが、その大きさは十分に計測できないものの、全体に骨が厚く頑丈なことが目だつ。顔面頭蓋は完全に瓦解するが、こゝ下顎骨については、まったく角前切痕がない典型的なロッカー状の下顎骨であり、い下切痕が認められオトガイ隆起が大きくて、下顎体は低い非常に厚く、下顎枝は小さめだが筋突起

などが非常に頑丈である（巻頭写真図版2）。

歯は下顎骨に釘植する右の第1大白歯と第2小臼歯しか観察できないが、この両歯には非常に強い特徴的な咬耗が認められ、舌側から頬側に傾斜する過咬耗の状態となっている。その前後の歯の咬耗状態が定かでないので推定の域を出ないが、こうした後歯の異常咬耗は食物を咀嚼すること以外の用途、たとえば獣皮をしごくためなどの用途で歯を酷使したことに起因するのではないかと考えられる。つまり、あちこちの縄文人骨で報告されているのと同じではないか。この第1大白歯の後ろの歯槽は完全に閉鎖しており、すくなくとも第2大白歯、そしておそらくは第3大白歯も生前に脱落していたようだ。

下肢の骨格については、いくつかの特記すべき特徴が観察できる。まず大腿骨であるが、骨体の湾曲が非常に強く、頭体角が大きい。また柱状構造が発達しており、そして骨体上部は扁平さみである。脛骨ではヒラメ筋線や後縁がよく発達しており、いわゆる扁平脛骨の傾向を示す。腓骨は骨体が太く凹凸に富み、いわゆる巨大腓骨の特徴を示しており、骨体中央部の最大径が19ミリばかりある。脛骨や腓骨の長さは計れないが、大腿骨との割合で脛骨や腓骨が相対的に長い傾向にあるようだ。これら下肢骨の特徴は縄文人の骨では一般的に認められるものであるが、腓骨だけでなく、大腿骨や脛骨も骨体が相当に太い点では、縄文人の下肢の骨格とは趣を異にする。

性別

大腿骨の骨頭が非常に大きく、精確な計測はできないが、だいたいのところ直径が50mmちかくある。足首の関節も相当に大きく、四肢の長骨もみな太く頑丈で、下顎骨の骨体がまねにみるほど太く頑丈であることなどの理由で、男性の骨格と判定してよからう。

ひどく壊れるが、前頭骨の眉間部から右眼窩上縁部あたりの骨が残っており、骨が厚く、いかにも頑丈であり、ことに眉間が突出するなど、男性的な特徴が濃厚である。ともかく、この人骨が男性のものであることは間違いないであろう。

死亡年齢

大腿骨、上腕骨、中足骨などの骨端線が完全に消えているので、成人の骨であるのは確かだが、それ以上に絞るこむのが難しい。すでに第2大白歯（おそらくは第3大白歯も）が抜け落ちていたこと、歯の咬耗が強いことから、壮年の後半あたりには達していた可能性はある。と同時に、どの骨にも骨量を減じるような兆候は、いささかも認められないので、老人の年齢に達していたとは考えにくい。死亡年齢は壮年の後半から熟年にかけての年齢（30-60歳）と、大ざっぱに推定しておくしかない。

身長などの身体特徴

発掘現場で左大腿骨の最大長を概測したところ、430mmほどであった。この値から生前の身長は160cmを少しだけこえる程度と推定できる。それに発掘現場で、頭蓋冠の最頂部

と左脚の踵部分の距離を計ったところ、実際にも160cmばかりあった。いっばいに身体を伸ばした姿勢で埋葬されていることを勘案すると、この骨格の主は生前、160cm超の身長であった可能性が強い。

第1号人骨と同程度かそれ以上に、頭蓋骨も下肢骨も上腕骨も頑丈性に富んでおり、おそらくは相当な無骨者の骨のようだ。また、実測はできないものの、下腿骨が大腿骨に比べて相対的に長めの下肢骨であったことがうかがえる。

病変と傷痕

この人骨と一緒に実に17個もの石鏃が発見された。骨の保存状態が芳しからぬため、実際には骨に傷痕を探ることなどできない。しかしながら、石鏃の多くが胴部の骨格部分で集中的に見つかったことや、その他の石鏃も上腕骨の肘の部分や肩甲骨、あるいは頭蓋骨に沿うように見つかることから、骨に貫通していたか否かはわからないが、実際に死者の身体に多数の石鏃が射こまれた状態にあったのではなかろうか(巻頭写真図版2)。

12号人骨

一般的所見

ほぼ全身の骨格が残り、保存状態はよいほうである。ことに足骨や手骨などは、ほとんど完全に交連したままの状態で出土。「肉づき」の状態で埋葬された遺体が、骨だけとなり、そのまま今日まで土中に埋もれていたことは疑うべくもない。

俯せに全身を伸ばしたような姿勢で埋まり、一見すると俯臥伸展骨のようであるが、それにしては下肢上肢ともに非常に奇異な格好で骨が並んでいる。すなわち、左右の下肢は大腿部と下腿部の二箇所で水平に交差し、上肢については、右腕は自然に垂らしたように手骨が腰骨の下側に並んでいるが、左腕は上腕骨を体軸に添わせるも、肘の部分で下側に180度ちかく回転させており、前腕骨が上腕骨に並行して位置する。そして、手骨が左肩の下に潜りこむ(写真図版29)。

このように左右の脚を交差させる姿勢は、生身のときはもちろんのこと、屍となったのちも、なんらかの強引な処理を施さねば、絶対に(!)とれないだろう。左右の大腿を股関節で内側に非常に強く折り曲げ、さらに膝関節で逆方向に下腿を聞くように非常に強く折り曲げたのではないか。同じように左腕のごとき格好にするのも、屍となったのちでは相当に難しいはずだ。もちろん日本のどの時代でも、こんな格好に両脚を組ませて死者を一次埋葬した例は、寡聞にして聞かない。

こんなアクロバットな姿勢で両脚と左腕の骨格が並ぶには、ふたつの場合が可能性として考えうる。その一つは骨となったのちに改葬する二次埋葬の場合。もう一つは死者の脚と腕を人為的に強引に折り曲げた場合である。

本人骨については、先に述べたように足や手の骨は見事なまで完璧に交連しており、い

くつかの脊椎骨をのぞくと、どの骨も相互に解剖学的位置関係をとどめたまま並ぶから、この場所に一次埋葬された者の遺骨と考えるほかない。となると、ひどく乱暴に足と腕をへし折られて埋葬された、と考えるほうが理屈にある。実際、四肢骨の保存状態が十分でないために、解体痕のようなものを調べることはできないものの、ことに右脚では股関節と膝関節が間伸びしたようになっている。同じく左腕の肘は尺骨と橈骨が外れたような位置にある。もしかすると、本来は俯せかげんに屈葬ぎみに置かれた遺体に加工して、上側になった右脚の股関節と膝関節を窮屈に折り曲げたために、両脚を交差させたような特異な姿勢になったのかもしれない。

では、なぜ遺体を毀損して埋葬したのか。もちろん人骨だけを詳しく調べても、謎は解けないだろう。後述する第8号人骨でも、両腕と、両脚もしくは片脚だけを毀損したような状態で埋葬された奇怪な様子がうかがえる。その人骨と本人骨が同時期のものか、まだ最終的に解決していないようだが、あるいは、この地方に限定された独特の遺体処理のスタイルがあったのかも知れぬ。

性別判定

男性骨と考えてよいだろう。いくつかの主要な根拠を挙げれば十分である。まず、側頭骨の乳様突起が非常に大きく外に張り出したように突出するとともに乳突上稜が発達し、その内側にある乳突切痕が非常に深く切れこむこと。それに、前頭骨の眉間のあたりが重量感いっぱい影に影らむことと、下顎骨のオトガイ隆起が非常に大きいこと。さらに、腰骨の大坐骨切痕が鋭角で切りこんだような男性骨に独特な形態を成すこと。その他の骨についても、男性骨と判定することに疑義をはさむにたる形態特徴は見あたらない。

死亡年齢

死亡時の年齢は壮年の段階であったろう。おそらくは、その前半（20-30歳）であったかもしれない。このことを強力的に示唆するのは、なによりも歯の咬耗である。ことに左側の歯列については、上下顎にある各種の歯の咬合面が観察できるのだが、どの歯も咬耗はエナメル質にとどまる程度で弱い。第1大臼歯も第2大臼歯も最も弱い1度の咬耗度（ブローカの咬耗度）で、象牙質が点状に、あるいは一部面状に露出する程度である。第3大臼歯にいたっては、咬耗はあるが、かすかに認めうる程度。この歯が萌出したのちに齢を経ずに死した者の歯であることを意味する。

この遺跡で出土した他の人骨が、おしなべて咬耗の強い歯をもつことは好対照である。非常に若くして死亡したと考えるほかない。しかしながら、すでに第3大臼歯が上下顎とともに萌出して咀嚼機能を果たしていたことを考えると、未成年者の骨格とは考えにくい。実際、四肢の長骨や腰骨の腸骨翼では、いっさいの骨端線が消失している。これらの骨が成長を完了していたことを物語る。ちなみに鎖骨は残存するが、左右ともに胸骨端が壊れているので、骨端の癒合のほどを確かめることはできない。

身体特徴

左大腿骨の自然転子長は391mmほど、左右の脛骨の全長は330mmと332mm、左右の腓骨の最大長は約331mmと約334mmと計測できた。これらの値を藤井式に適用すると、生前の身長は156.8cm、156.6mm、158.0cm、157.3cm、157.8cmと推定できる。さらに左の橈骨と尺骨の最大長は、それぞれ約225mmと約247mmであるから、これらの値から生前の身長を推定すると、157.7cm、159.5cmとなる。下肢骨と上肢骨で求めた推定値は、なかなかよく整合すると言えよう。この遺骨を残した人物の生前の身長は157cm前後であっただろうと推定できる。男性としては低身長の種類だが、あとで述べる第13号人骨とよく似た値であるのは偶然だろうか。

上腕骨の最大長を求めることができないので、上肢の近位骨と遠位骨の長さの相対比、上下肢骨間の相対比などの目安をえることはできないが、相対的に上肢が長く、ことに遠位にある前腕骨が長いプロポーションをしていたのではないかと印象をいだかせる。

頭蓋の頭骨最大長は約181mmあった。眉間が強く盛り上がり、前頭骨鼻縫合で段差となる。また前頭骨の眼窩上外側部が平坦で、ここに眼窩上三角が認められる。この特徴については、第13人骨のところで再び触れる。

顔面頭蓋では顔高、オトガイ高、上顔高、鼻高、左の眼窩高と眼窩幅、鼻骨最小幅などが計測できた。上顔高は約67mm、オトガイ高は約30mm、顔高は約110mmであった。また鼻高は約47mm、梨状孔の幅は概測で26mm、眼窩幅は約45mm、そして眼窩高は約33mmであった。上顔高とオトガイ高がともに低く、そのため当然のこと、顔高は低い。鼻高も小さい。眼窩高が小さく、眼窩幅は大きめであるから、眼窩示数は小さく、73.3の値となる。顔高、鼻高、眼窩高が低いのは、縄文時代人骨でよく見られる特徴であり、北部九州などの弥生時代人骨とは異なる特徴として俎上に載せられることが多い。眼窩は内側より外側のほうが下がり、いわゆる垂れ眼となる。

特記すべきは鼻骨が目だつほど大きいことである。その最小幅は12mmある。これについての詳細な比較は割愛するが、この計測値が10mm以上となるのは、縄文時代の人骨では珍しくないが、弥生時代の人骨では北部九州で出土したもので山門塚の土井ヶ浜遺跡で出土したもので、きわめて稀であることだけを記しておこう。それに鼻骨が、かなり強い角度で前方に突出することも付記しておこう。

頬骨は大きく骨太で、よく外側に張り出している。おそらく頬骨弓幅は大きい値を示しただろうが、その計測はかなわぬ。上顎中切歯の咬耗から判断するに、前歯が鉗子状に咬合していたのは明らかである。すくなくとも上顎の左犬歯の歯槽は閉鎖しており、この歯が生前に脱落していたのは間違いない。かなり若い年齢で死亡したことを鑑みると、犬歯が人為的に抜歯されたのである可能性は高いと言える。上顎の中切歯にはシャベル状の特徴が認められる。

下顎骨は全体に厚く重量感あふれる外観を呈する。とくに骨体は、第2大臼歯の位置での高さは27mmと低いが、その厚みは相当なものである。筋突起と下顎突起は頑丈である

が、下顎枝は大きいとは言えず、右の下顎枝高は58mm、下顎枝幅は31mmである。下顎底は水平で角前切痕がない。したがって典型的なロッカー状の下顎骨ではないが、現代人などの下顎とは、いささか趣を異にする。

鎖骨が太くて長い。最大長は計れないが、骨体中央部の最大径は17mmもある。上腕骨の骨体は太いとは言えないが、三角筋粗面は発達しているほうである。

大腿骨は中等度の柱状構造をなし、骨体の湾曲が相当に強い。脛骨ではヒラメ筋線と後稜がよく発達しており、弱いながらも扁平脛骨の特徴を示す。骨体は太めであるが、同時に短めである。腓骨は骨体が太く、骨間線が発達している。あきらかに巨大腓骨と言えるような特徴がうかがえ、骨体中央部の最大径が18mmほどもある。左右の膝蓋骨は、それぞれ最大高が41-44mm、最大幅が43-44mm、最大厚が19mmほどある。大きくもなく小さくもなく、とくに頑丈なわけではない。

どの四肢の長骨も骨体が太めで関節部が大きめである。上腕骨の三角筋粗面、大腿骨の殿筋粗面、脛骨の各筋附着面がよく発達している。尺骨の骨体が大きく頑丈であることが目をひく。かなり骨太の体格をした人物の骨格であろう。

すくなくとも上顎の左犬歯は、その歯槽が閉鎖していることから、すでに生前に脱落していたのは間違いない。こんな若齢の若で犬歯が抜けているのは、いかにも不自然ではなからうか。なんらかの風習により抜歯された可能性は大である。この個体についても、いっさいの犬歯が見つかってない。しかしながら、下顎の右犬歯は歯槽が開放しているように見える。つまり、まだ死亡時には生えていた可能性が高い。上顎の右と下顎の左の犬歯については、歯槽部分が壊れているので、歯槽が閉鎖しているか開放するか定かではない。もしかしたら犬歯を抜歯していたのは、上顎の左のみ、あるいは上顎だけだったのかもしれない。それとも、つぎつぎと抜歯していく過程にあったか、まさに下顎でも犬歯を抜いたばかりだったのかもしれない。いずれにしても、この個体でも風習的な儀礼により犬歯が抜かれた可能性は大きい。

病変や傷痕

骨病変や骨損傷のようなものの痕跡は認めがたい。というよりも、くわしく調べるのが難しい。歯は健全そのもの、すくなくとも観察できる歯については、いっさい虫歯や歯周症の兆候は認められない。エナメル質減形成も見あたらぬ。

その他の特記事項

非常に珍しい装飾品が完全に身体に装着された状態で見つまっている。六個ほどの鹿角製の指輪であり、腰の下にまわされた右手の第2指、第3指、第4指の基節骨にピッタリと装填されたままで発見された。これらは肉づきのときに現代の指輪と同じようにして指に填められていたのが、そのまま骨とともに残った物である。この鹿角の指輪については、第V章第3節を参照されたいが、かなり大きな見事な指輪であり、生きていたときに填め

ていたとすれば、かなり指の行動が制限されたはずである。あるいは、死化粧として装填されたのかもしれない（巻頭写真図版4）。

第13号人骨

一般的な所見

このシリーズの人骨のなかでは、もっとも保存状態が良い。現場での発掘時に損壊して失われた骨はあるが、ほぼ全身の骨が残っている。そのすべては解剖学的な位置をどとめて整然と並んでいる。なかでも脊柱や胸郭の骨格、それに手足の骨格は完全に交連しており、肩関節、肘関節、股関節などに関係した骨も交連した状態で見つかった。直埋葬された場所で、そのままの姿勢で遺骨が残っていたのは疑うべくもない。

腰骨より上にある骨格は自然の状態で上向くが、下肢骨が膝のところで右側に強く折り曲げられた配置状況である。いわゆる仰臥屈葬の姿勢で埋葬され、上半身は仰向け、下半身が曲げられていたようだ。しかし膝は自然に曲げられたというより、むしろ無理矢理、膝と足首のところで曲げられていたのであろう（巻頭写真図版5）。おそらくは木棺に収めるとき、立て膝のまま強引に押しこまれたのではなかろうか。その様子は、反転発掘したときの写真によって、よくわかるだろう。

性判別

腸骨の大坐骨切痕は大きめに開くが、その最深部から耳状面までの距離が小さい。それに耳状面の前に溝や窪みのようなものはない。腸骨の弓状線は太く明瞭であり、それと大坐骨切痕深部の間の距離も小さい。恥骨の上肢と下肢の基部は太い。仙骨は外側翼の突き出しが弱く、骨体の前面の湾曲が弱い。大腿骨の骨頭は大きく、45-46mmばかりある。上腕骨頭や尺骨肘頭など、四肢長骨の骨端部はいずれも大きめである。頭眼高上縁部が鋭角的な観がするのだが、眉間の隆起が強く、前頭骨の頬骨突起が幅広いため、いわゆる眼高上三角が発達するためであろう。はっきりとは前頭結節が認められない。鎖骨は細めだが、同時に長め（右鎖骨は最大長が約139mm）である。これらの特徴から、男性の遺骨である可能性のほうが高いと判断できる。

たしかに側頭骨の乳様突起は、基部の幅が32mmばかりあり、垂直高が27mmほどもあるなど、かなり大きく大きめである。乳突切痕も深い。また眉上隆起や側頭線や外後頭隆起などの特徴が、はっきりと認められる。それに下顎骨は頑丈そうで、第2大臼歯付近の下顎体厚は14mmばかりある。下顎枝が高く大きめで、下顎枝高と下顎枝幅は67mmと33mmほどあり、下顎突起幅が20mmはある。各肋骨はなかかか大きく、頬骨も小さめだが頑丈そうで骨太と言えよう。

このように男性骨である可能性のほうが高いが、ことさらに男性的で骨太というほどの骨格ではない。おそらくは男性的特徴が目立たない中格の骨組みをした男性だったのであろう。なお、本人骨については、『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』（平成14年3月、神

戸市教育委員会発行)の「人骨一覧」(249頁)には、女性人骨である旨が記載されているが、これは単純な誤載と思われる。「女性人骨の可能性」とでも記すべきところが、間違っ
て載せられたのではなかろうか。

死亡年齢の推定

頷骨の胸骨端は完璧に癒合しており、いささかも骨端線の跡は認められない。それに四肢長骨の遠位および近位骨端や腰骨の腸骨翼でも骨端線が完全に消失しているの
で、すでに成人段階に達した者の骨格であるのは確実である。

腰骨は残るが、残念ながら恥骨結合部は残らない。仙腸関節耳状面には、その周縁にぐ
るりと加齢性変化によるリップングスが形成されているが、耳状面そのものは平滑であり
多孔性になるなどの変化は認められない。頭骨の冠状縫合は、内板では消えかかっている
が、外板では縫合線が残る。矢状縫合は内板では癒合するが、外板ではプレグマ部をのぞ
き、はっきりと残っている。観察可能な骨の関節部には、多かれ少なかれ壘堤状の骨増殖
が認められる。ことに尺骨の滑車周縁には見事なリップングスが形成されている。同じく
尺骨の下関節面、大腿骨や橈骨の近位遠位の関節面にも、ほどほどの程度ではあるが、は
っきりとリップングスが認められる。左右上腕骨の遠位関節部には、上腕骨小頭が前面上
方に伸びるような様子で十分に肉眼で観察できるほどの凸凹の異常骨増殖が認められる。
これは明らかに病的な変化である。あとで井上康二氏の病理学的な所見で再度、触れられ
る。これらの骨変化は、すでに熟年くらいの年齢には達した人物の遺骨であることを示唆
するものばかりだ。

調査時に顔面顎蓋が完全に破損しており、まったく歯が観察できない。年齢推定に歯の
咬耗を参考にできないのは、残念至極である。

下部の脊椎骨には、老人性の骨変化を思わせる特殊な変化が認められる。ことに腰椎に
は尋常とは思えないほど骨増殖が進行している(写真図版34-1)。すなわち腰椎の骨体の
前面や側面に大型で不定形な骨増殖があり、最下位の胸椎から腰椎にかけての椎骨の棘突
起に弱いながら強直性関節症状の変化が認められる。これらの骨変化は老齢に達した者の
骨ではないかとの疑念をいだかせる。

しかし実際には、こうした腰椎などの異常骨増殖は、死亡年齢を推定するには参考にし
ないほうがよかろう。なぜならば、あきらかに老化による退行性の変化ではなく、局所的
な病的変化だからである。なんらかの難病を患ったことに起因するものと考えられる。実
際に頸椎や多くの胸椎には、そんな変化はなく、それに腰椎も骨体の全面ではなく、側部
や前部の一部だけが肥大するのである。この腰椎などの病的な変化については、後の井上
康二氏の病理学的な記述を参照されたい。ちなみに井上氏によれば、OALLは現代人では
熟年から初老の年齢で顕発するようである。

以上のことなどから総合的に判断して、この遺骨を残した人物が死亡したのは、熟年
(40-60歳)あたりの年頃であった可能性が高いとみたい。

身体特徴

地表面側にあった頭蓋骨の右半分は完全に破壊されるが、地中側の左半分は脳頭蓋がよく残る。でも顔の部分は壊れている。脳頭蓋は大きめで長く、頭骨最大長が190mm前後ある。かろうじて左の眼窩が部分的に計測可能であるが、その眼窩高は32mmしかなく、かなりの低眼窩と言え。頬骨が外れて残るが、この骨は小さくも頑丈な趣がある。

ひとつ注目すべき点をあげておこう。すでに述べたように眼窩上三角の特徴が明瞭に認められることである。これは縄文人頭蓋骨で特に目につく形質と考えられており、前頭骨の眼窩直上の外側部分が三角形に平坦となるか、むしろ心もち凹みを示す特徴である。眉間が強く膨隆して、頬骨突起が幅広く、側頭線が発達することにより複合的に生じる特徴である。

下顎骨は左の下顎枝がよく残る。その大きさは中等度というところ。筋突起は太く大きい。下顎枝高は67mmばかり、そして下顎枝幅は33mmである。

肩甲骨、鎖骨、上腕骨、尺骨、橈骨ともに、とくに太く大きいわけではなく、むしろ小さいほうだろう。右鎖骨の最大長は、およそ139mmである。左上腕骨は最大長が294mmあり、右上腕骨では約292mmである。右の橈骨の最大長は237mm、右尺骨の最大長は256mm以上ある。右第2中手骨の最大長は66mmである。この人骨の骨格は一般に上肢帯や上肢の骨が細い傾向にあるが、肋骨だけは太く大きめである。

ちなみに、左上腕骨は骨頭の最大幅が44mmよりも大きく、左右の上腕骨で骨体中央部の横径は19mmと18mmである。左右の上腕骨ともに三角筋粗面は凹凸に富み、よく発達しているほうである。左右の橈骨の下端幅は32mmと31mmである。また左右橈骨の外側中央部がゴツゴツして非常に強く盛りあがっている。長拇指外転筋の付着部にあたる部分で、この筋肉がよく発達していたのであろうが、その理由は見当つかない。

右大腿骨は最大長が約420mm、自然転子長は402mmほどである。左右の大腿骨の骨頭は幅径が46mmと45mmほどもあり、大きいほうである。骨体は中央部の横径が26mm、上部の横径は29mmと細いが、柱状構造は中等度に発達しており、殿筋粗面も発達している。骨体上部の扁平性はかなり強いほうである。左脛骨の最大長は大略343mmであり、生理長は338mmほどである。脛骨の骨体には弱いながらも扁平性が認められる。右脛骨につき栄養孔部の矢状径は33mm、中央部の矢状径は29mmだから、むしろ骨体は細い。左右の腓骨の最大長は、それぞれ336mmと333mmばかりある。左腓骨は骨体部分がよく観察でき、中央部の最大幅が17mmと大きく、相当なる巨大腓骨の様相を呈している(写真図版34-3)。右腓骨も中央部の最大幅は約19mmほどもある。

足骨は相当なる大きさであり、左の距骨は距骨長が49mm、最大長が52mm、距骨幅が31mmである。また右踵骨の最大長は約72mm、第1中足骨から第4中足骨の長さは、それぞれ61mm、72mm、74mm、70mmである。

藤井式を用いて身長を推定すると、つぎのようになる。まず上肢の長骨からであるが、左右の上腕骨、右橈骨、右尺骨の推定最大長から推定すると、それぞれ156.1cm、154.7cm、

160.8cm、161.7となる。また下肢の右大腿骨の最大長、左脛骨の生理長、左右の腓骨の最大長からは、それぞれ158.6cm、158.5cm、157.5cm、158.7cmとなる。上肢骨からの推定値にはバラつきがあるが、下肢骨を使った推定値は整合性がある。一般に大腿骨、下腿骨、上肢骨の順に信頼できる身長推定値を求めるとされることから、この遺骨を残した人物の生前の身長は、おおむね158cm前後であったと推定してよいだろう。

下肢骨については判然としないが、上肢骨については身長推定値で分かるように、あきらかに遠位にある腕骨や尺骨のほうが近位の上腕骨よりも相対的に長い。つまり前腕のほうが上腕よりも相対的に長いプロポーションをしていたのではなかろうか。

病変と傷痕

歯は咬耗が激しいものの、虫歯や特に顕著な歯周症の痕跡は認められない。

先に述べたように、ことに腰椎の骨体部には病変が認められ、下位の椎骨の棘突起や上腕骨遠位の関節面の周縁にも異様な骨増殖がある。これらについては、井上康二氏による病理学的な所見を参照されたい。

とくに傷痕のようなものは認めがたい。まったくないかどうか定かでないが、観察可能な骨とその部位については認められない。

その他の特記事項

右の腰骨、腸骨の直上でイノシシの大きな牙が発見されている(写真図版34-2)。人骨との関係で言えば、まさに直上にあり、のちの時代のものが付随したのではなく、ときを同じくして埋まった可能性が非常に高い。となると、副葬品か装飾品の一部であることが考えられる。腰に紐でぶらさげられていたのかもしれない。この遺物については、くわしくは第V章第3節の項を参照されたい。

この人骨に伴った状態で、胸郭から首にかけての骨格の背面に当たる位置、それに恥骨や右大腿骨の骨体があった近くで、それぞれ1点ずつ石鏃が出土したという。くわしい出土状況を知らされていないので、それらが人骨に伴うものかどうか、なんらかの解釈を加えるには、いかにも悩ましいところである。というのは、出土時の記録が定かでないので、その判断に迷うのだ。もしかししたら、第1号、第2号、第3号の人骨と同様、体内に射こまれていたのかもしれない。そう考えるのが、状況的には妥当だろうが。

第8号人骨

一般的な所見

ほぼ全身の骨が残っている。しかし体幹部の骨格、ことに脊椎骨、肋骨、肩甲骨、骨盤の骨は相当に腐食が進み、バラバラに壊れて乱れており、そのあたりの輪郭が見え隠れするだけの状態である。頭蓋骨の顔面部も壊れており、顔面の計測値を求めることができないのも残念である。

それでも、どの骨も解剖学的な位置関係はよくとどめており、いくつかの肋骨、右尺骨、右大腿骨をのぞくと、ひどく外れた位置にある骨はない。それら肋骨などにしても、わずかだけ原位置からずれるだけで、白骨化した状態で木棺のなかで動くなどしたのかもしれない。それに脊椎骨や上下顎骨は見事に交連した状態にあり、さらに、肩甲骨と上腕骨は肩関節で、右大腿骨と腰骨も股関節で、左の大腿骨と脛骨も膝関節で交連した位置にある。直埋葬された死者の遺骨であるのは間違いない。

いささか埋葬姿勢は奇妙である。骨盤から上の上半身は仰臥の体勢にあるが、下肢骨が不自然なかたちで並ぶ。両脚ともに膝の部分で非常に窮屈に押し曲げられたようになっている(写真図版41-3・4)。不十分な長さの木棺に収容するために、両脚を坐葬の姿勢にして、さらに下腿に力を加えて無理矢理、折り曲げたのかもしれない。いずれにしても遺体に手を加えて、下腿ないし下肢全体を強制的に下方に屈曲しているようだ。同じように、両腕が肘のところで強く前上方に押し曲げられている。木棺に収納する際に手が増えられたのであろうか。あるいは肘や膝のところで切断されていたのかもしれない。

性別別

頭蓋骨の眼窩上縁部は非常に鋭くなっており、前頭結節が目だち、乳様突起が非常に小さい。外後頭隆起は目立たない。鎖骨や上肢骨なども、他の人骨に比べて、はるかに小さく華奢である。

それに各骨の遠近位端が相対的に小さいことも特徴である。たとえば下顎突起が小さく、その幅は18-19mmしかない。大腿骨の骨頭も、おおよそのところ40mmあまりしかないように、非常に小さい。

これらのことから女性骨とみて間違いなからう。

死亡年齢の推定

腰骨などは壊れているので、たいして参考にはならない。歯の咬耗の程度とか、頭蓋骨の三主縫合の癒合度、各骨関節部の骨棘形成の状態を参考にするほかない。

歯の咬耗が進んでおり、どの歯もエナメル質を面状に露出する。ことに下顎骨の左歯列では小臼歯から大臼歯まで歯冠の四分の三程度を咬耗で失うほどである。しかも中心部が鞍状に強く磨り減るなど、あきらかに異常咬耗の様相を呈する(写真図版42-2)。おそらくは咀嚼以外の用途に左側の歯列を酷使したために、特別に強く咬耗したのではなからうか。繊維性の外物をしごいたり、獣皮等を処理するためなど、なんらかの道具として歯を日常的に使っていた跡なのであろう。

頭蓋骨の矢状縫合は外板までもが完全に癒合する。冠状縫合もごく一部をのぞき、おおむね癒合している。しかし、人字縫合は左右ともにかすかに残る。下顎骨の関節突起は潰れたように低くなり、かなりの骨増殖が生じており、関節面に小孔が多く見られる。かなり下顎を酷使していた状況がうかがえる。上腕骨の肘関節面や尺骨の関節面の周縁には弱

い骨増殖が認められる。

これらの所見を総合するに、おそらくは熟年あたりの年齢（40-60歳）で死亡した者の遺骨とみなすのが妥当であろう。

身体特徴

ほとんどの骨が中途半端に壊れ、地表面からも地中面からも一個の骨として丸ごと見られる状況にはないため、できるだけ詳しく言葉で記載するほかない。

非常に雑ではあるが、大腿骨と尺骨の最大長を求めることができた。それぞれ390mmと220mmばかりであったから、藤井式を適用すると、牛前の身長は145-150cmであったろうと推定できる。実際、どの骨も小ぶり、しかも各骨の骨質も骨細の印象、かなり華奢で小柄な人骨である。また、どの骨についても、総じて筋付着部の発達が弱い。

かなり小柄な女性だったようだが、その割に頭蓋骨は大きめであり、いざさかアンバランスな観が否めない。その頭蓋骨も実際には現代人の平均サイズより小さく、頭蓋板は薄手である。右頭頂骨の後頭骨隣接部の厚さは7mmほどしかない。前頭骨の頬骨突起が幅広く外側に張り出すので、眼窩上縁部の外側が平坦となる。この点、男女の違いはあるようだが、第13人骨と共通するので興味深い。顔面頭蓋については、顔が低い割に頬骨が側方に張り出しているなど、全体にすづまりの印象が強くなる。左の眼窩高は32mm、眼窩幅は概測だが44mmである。また鼻骨最小幅は約11mm、梨状孔の幅は26mm、上顔幅と下顔幅は概測だが119mmと99mmほどである。いずれにせよ、鼻骨は大きく、高径のわりに幅径が大きめに写るのが本人骨の特徴と言えよう。それに頬骨が大きめで重量感に富むのも特徴である。

下顎骨は骨体が低く、下顎枝も小さめで、左右の下顎枝高は60-61mm、下顎枝幅は30-32mmである。第2大臼歯のところでの下顎体の厚さは14mmである。完璧なまでのロッカ一状の下顎骨であり、まったく角前切痕がない（写真図版42-1）。

鎖骨は小さく細く、非常に華奢な外観をしており、最大長は98mmばかり、中央最大径は左右ともに9mmほどしかない。上腕骨も華奢、三角筋粗面は目立たない。三角筋粗面直下の骨体の最大径は右上腕骨が14-15mm、左上腕骨大腿骨が16mmである。尺骨の滑車は幅が22mm、高さが33mmほどある。

大腿骨は骨体が細く、その上部の最大径が31mm程度。そして湾曲も捻転も弱く、粗線も目立たない。しかし殿筋粗面は中等度に発達する。脛骨は華奢で短く、ヒラメ筋線は目立たないが、骨体の扁平性は相当なものである。後稜ははっきりとしており、現代人の骨格に比べたら、はるかに扁平と言える。腓骨は細くたおやかで、けっして巨大腓骨と言えるような趣はないが、左腓骨の骨体中央部の最大径は14mmある。

病変や傷痕

いずれの骨にも、病変や傷痕を思わせるような変化は認められない。上記したように、

ことに後歯で片減りが目だつ。しかし、これは病的な変化などではなく、片方の歯列だけを酷使するような生活のたまものである。

第10号および第11号人骨

骨の保存状態は最悪である。実際には骨として残っているわけではなく、泥田中に骨格の残骸の跡が視覚できる程度である。

その輪郭からすると、そこに土壌があり、人間の骨格が横たわっていたことは間違いない。しかも二人分の骨格が互いに抱き合うようにしていたのは確かである。二カ所にポロポロに壊れた人間の歯がかたまりとしてあるからだ。いずれの歯も粉々となっているため、確信をもって述べるのははばかられるが、どちらも子供の歯のようである。

実際に骨格の残骸とおぼしき変色土で見る全体の輪郭も小さく、成人の大きさではない。さりとて幼児の大きさでもない。おそらくは、二人分の子供の遺体が抱き合うようにして埋葬されていたにちがいない。

第9号人骨

なぜだか左右の上腕骨、尺骨、橈骨のみが、肘の部分を中心に残存する。これらは肘関節で交連した状態にあり、左腕は肘を強く曲げ、その上に右腕を伸ばした格好で見つかったという。おそらく、そもそも他の骨もあったのだろうが、埋葬された後に攪乱されたのであろう。また、第8号人骨や第12号人骨と同様、すくなくとも左腕は肘のところで埋葬時にへし折られていたのかもしれない。

左上腕骨は遠位の二分の2ほどが残るが、滑車や内側上顆を破損する。右の上腕骨は遠位の半分ほどが残っており、小頭部が壊れている。これら左右の上腕骨が同一人物のものであるのは間違いない。三角筋粗面はほどほどに発達するが、橈骨神経溝は日だたない。三角筋粗面直下のところでの骨体の最大径は23mm、最小径は18mmである。骨体はためて、滑車も小頭も骨太で大きめであることから、どちらかといえば、男性の骨である可能性が高い。

左右の尺骨は、どちらも骨体の上部しかなく、肘頭や鈎状突起を破損する。回外筋腱や尺骨粗面が大きく頑丈であること、骨間縁が立派で、栄養孔周辺の横径と矢状径が17mmおよび15mmと大きいことから、男性の尺骨である可能性が高い。

左の橈骨は近位の10センチほどの断片、右の橈骨は骨体の中央部分が残る。橈骨頭の最大幅は25mmもあり、橈骨粗面も大きく、高さ26mm、幅17mmもある。骨体中央部の横径が18mm、矢状径が13mmほどある。かなり大型骨太の橈骨と言えよう。

これら上腕骨、尺骨、橈骨は同一の成人のものであるのは間違いない。そして、男性の骨である可能性が高い。

第4号人骨

この番号で取りあげられた骨性の遺物は3点ほどの大きな塊りと、いくつかの小さな破片である。なにか骨がドロドロに溶けたように見え、いわゆるいいがたき状態となっている。はたして人骨であるのかどうか、自信をもって言えるような代物ではない。

大きな塊りの一つは丸みを帯び板状である。人骨の頭蓋冠のようではあるが、どの部分なのか、たしかなことは言えない。他の2点は長骨のようであり、脚の骨か上腕の骨のようであるが、それ以上のことはわからない。

5. 総論

埋葬法

多くの骨が識別でき、それらの配列がわかる状態で残った人骨については、いずれも一次埋葬されたものであることは間違いない。つまり、第1号から第3号、第8号、第12号と第13号の人骨については、一次埋葬であると断言してよい。それにおそらく第9号人骨もそうであるし、第10号と第11号の合葬人骨も一次埋葬である可能性が高い。となると、どの人骨も出土場所に直埋葬された人の遺骨と考えてよいだろう。

埋葬方法は土坑墓と木棺墓に分かれる。すなわち、第1号から第3号の人骨は確実に土葬墓であるが、第8号と第12号と第13号の人骨は周囲に木棺の跡が確認できるそうである。それに第9号から第11号までの人骨も土坑墓の可能性が高いと言う。

土坑墓と木棺墓が混じるのはなぜか、それについて、人骨の調査からは何もヒントはえられない。あるいは、それぞれの埋葬、ことに第1号から第3号までの人骨とその他の人骨との間、あるいは1999年に発掘された人骨の間でも時期差があるのかもしれない。あるいは、たまたま別々のグループが同じ場所に死者を埋葬したためなのかもしれない。いずれにせよ、人骨の観察だけでは、それに対する解答は求められない。

埋葬姿勢

どの時代どの地域でも、ひとつの集落に伴う墓地であれば、同じ姿勢で同じように埋葬された人骨が多いのが道理である。それに一般には、縄文時代であろうと弥生時代であろうと一次埋葬なら、なんらかの加工を遺体に施したのちに葬った例は少ないようである。

しかるに、ここで記載した人骨の埋葬姿勢は一様でない。すなわち第1号と第2号の人骨、それに第12号人骨は身体を俯臥の姿勢で埋葬されているのに対し、すくなくとも第3号と第8号人骨と第13号人骨は仰臥の姿勢で埋置されていたのは間違いない。そして第8号、第12号、第13号の人骨は、脚だけ、あるいは脚と腕の両方を折り曲げられたりする人為的な処置が施されているようである。

ことに第12号人骨は、おそらくは股関節と膝関節に手を加えたためであろうが、大腿部と下腿部で下肢を奇妙に交差させた格好で見つかっている。そんな特殊な姿勢で埋葬され

た人骨は、おそらく日本では他に類例がないだろう。第13号人骨は屈葬に近い姿勢、そして第8号の人骨は坐葬とも見えそうな非常に窮屈な姿勢で出土した。しかし第12号人骨は屈葬のようではあるが、縄文時代の埋葬例でみられるよりも膝の曲げかたが強引すぎるように見える。また第8号人骨は実際には、おそらく坐葬ではなかったろう。上半身が水平になりすぎているからだ。第12号人骨と第13号人骨は木棺に押しこめられたためなのかもしれないが、いずれにしても、ひどく窮屈に下肢や上肢を折り曲げたさまは尋常ではない。ましてや第8号人骨は土抗墓のようだから、それほど完璧に下肢を折りこんだ姿勢は、ただ自然に遺体を曲げただけと想像するのは難しい。

これら第8号、第12号、第13号の人骨のように窮屈な姿勢で埋葬するには、なんらかのかたちで死者の肉体に手を加えなければならなかったのではなかろうか。実際、第12号人骨は左腕、そして13号人骨は両腕が肘のところでへし曲げられた格好になっている。これも強引に処理を施されたためと考えられる。となると、脚だけでなく腕も人為的な処理を施されて埋葬された可能性が濃厚である。

では、なぜそんなことが行われたのか。もちろん埋葬方法や風習の問題であり、当の人骨の検査をするだけでは、なにもわからない。各地の各時代の埋葬例を詳しく調べて、類例を検索していくほかあるまい。本報告書は、そのための事例を提示するにとどめたい。

このように各人骨の埋葬姿勢は一樣でない。日本では珍しい俯臥の姿勢で埋葬された人骨が、すくなくとも3例ある。他に類例をみないような下肢を交差させた姿勢で埋葬された人骨もある。なんらかのかたちで死体に処理を加えた埋葬もある。さらに第1号から第3号の人骨のように、同じ溝に1列に埋葬されたものもある。これは同時に、すくなくとも3人の者が死亡したことを意味する。

以上のことから考察するに、ただの集落墓地ではなかった可能性を強く示唆する。埋葬姿勢がバラバラであることにくわえて、このあとで再び指摘するように石甌を体内に射こまれたままで死したとおぼしき者の遺骨が少なくないこと、同じときに埋葬された遺骨があることなどからみて、なんらかの尋常ならざる状況で死んだ者たちの遺骨が埋葬されていたという可能性を考えざるをえない。

石甌を伴う人骨

ただならぬ状況で死んだ者たちの遺骨であることを暗示するのは、ただ埋葬姿勢だけではない。多くの人骨について、まるで体内に石甌が射こまれていたような状況で、いずれかの骨に石甌が近傍して発見されたことも異様ではある。

ともに石甌が出たのは、第1号、第2号、第3号、第12号、第13号の人骨である。過半数にのぼる人骨で石甌を伴うわけだ。ことに第3号人骨の場合、上半身の骨格に散らばって、合計17個のサマカイト製の石甌が見つかった。

骨で外傷を調べることができないような保存状態のときは、体内に射入された石甌なのか、副葬品として置かれたものなのかにつき、断定的に述べることは難しい。しかし新方

人骨の場合、ことに第1号人骨と第3号人骨の場合、それぞれの骨格と石鏝との間の生々しい位置関係から明らかに体内に射こまれていたものであろうとの判断ができる。これらは遺体の側に副葬品のように置かれた石鏝が後に人骨に混じったのではなく、まさに遺体の肉体に陥入したままで骨とともに残されたのであることは間違いないなかろう。どの人骨も骨周りの腐食が進んでいるため、石鏝による骨損傷は検出できないもの、おそらく実際には傷を受けた骨も存在していたのではなかろうか。

第1号人骨の場合は下位の胸椎か腰椎に当たるところ、第3号人骨の場合は胸部や椎骨や上腕骨や肩甲骨などに直接に当たるところで、それぞれ石鏝が出ているので、それらが体内に入った状態で一定期間にわたり生存できたとは考えにくい。死亡時に刺さったものと考えるのが自然である。ならば第2号や第13号の人骨についても、そうであった可能性が高いのではなかろうか。

この遺跡で見つかった人骨の多くが、あるいはすべてが、なんらかの争いごとで傷ついて死をむかえた人たちの遺骨である可能性は大いにあろう。

儀礼的抜歯された人骨

たとえ人骨とともに歯が見つからなくとも、それが生前に脱落していたものと認定することはできない。しかし歯が植わる歯槽のソケットの部分を観察すれば、死亡時に抜け落ちていたかどうかの判定は可能である。

歯が抜ければ、ソケットの部分の歯槽骨が吸収され、その穴が閉鎖するからである。したがって、よほど死の直前に抜けたのでなければ、脱落歯のソケットは完全に塞がっているか、塞がりつつある。

新方人骨では、すべての個体について、上下顎骨の歯槽と歯が十分に観察できるわけではない。それでも、第1号、第2号、第8号、第12号の人骨で多くの歯と歯槽骨の状態を観察できた(別表1)。ここで注目すべきは、犬歯についてである。犬歯は歯根が非常に大きくて、たとえひどい虫歯や歯槽膿漏となっても、めったに抜ける歯ではない。多くの歯が抜けていないのに、この歯だけが抜けることは珍しい。ましてや上下の犬歯、あるいは左右の犬歯が揃って抜け落ちることは、ほとんどありえない。たとえ事故などでも、犬歯だけが揃って抜けることはないだろう。

それなのに第1号人骨では、上下左右の犬歯のすべてが生前に脱落していたことが明らかである。第2号人骨でも、左側は定かでないが、右側は上下の犬歯が揃って生前に抜けていた跡を残す。この2体分の人骨については、それらの犬歯は自然に抜けたというよりも、西日本の多くの縄文時代人骨などで指摘されるような儀礼的な抜歯として人工的に抜かれたと考えるのが妥当だろう。

第12号人骨については、上顎左の犬歯は歯槽が閉鎖していることから生前に離脱していたのは間違いない。でも上顎の右と下顎の左の犬歯については歯槽が壊れており、それらが残っていたかどうかは不明である。そして下顎の右の犬歯は歯槽が開放したままなので、

抜けてはなかった可能性のほうが高い。したがって、この個体の場合は抜歯が施されていたと断定はできない。しかし若い成人の年齢で死亡した人であることを考えれば、まさに犬歯の抜歯が施されている途中であったとみるのが妥当ではあるまいか。実際、西日本の縄文人では上顎左右の犬歯が成人儀礼として最初に抜かれていたと考察する論文もあるからだ。

いずれにしても、新方人骨には儀礼的に抜歯を施された個体があるのは間違いないだろう。それも上下顎の犬歯を抜く、いわゆる縄文時代人タイプの抜歯なのであって、下顎の犬歯は抜かない北部九州地方や土井ヶ浜遺跡の弥生時代の人骨にみられるタイプではない。しかし、すくなくとも第8号人骨では抜歯の跡はみられない。なぜ抜歯された個体とされない個体が混じるのか。その前者と後者は時期を異にするためのものか、男女の違いなのか、あるいは別の理由によるものなのか、今後の検証がまつれる。

人骨ごとの性別と死亡年齢

新方人骨について、それぞれの性別と推定死亡年齢を再掲してみよう。

- 第1号人骨：男性、壮年（25-40歳）
- 第2号人骨：性別不明、若齢の壮年（20-40歳）
- 第3号人骨：男性、壮年から熟年（30-60歳）
- 第4号人骨：性別不明、死亡年齢不詳
- 第8号人骨：女性、熟年（40-60歳）
- 第9号人骨：男性？、成人の年齢
- 第10号人骨：性別不明、少年の年齢
- 第11号人骨：性別不明、少年の年齢
- 第12号人骨：男性、若年の壮年（20-30歳）
- 第13号人骨：おそらく男性、熟年（40-60歳）

男性の人骨が、いくらか多いようであるが、女性人骨もある。それに性別を特定できない人骨もある。死亡年齢についても、ある年齢階層に集中しているとは思えない。いずれにしても、そもそもサンプル数が少なすぎることもあり、性別と死亡年齢から特別な解釈を引き出すのは難しかりう。

被葬者たちの身体特徴：顔立ちと体形

新方人骨が縄文時代から弥生時代に移行する弥生時代の前期に当たるなら、それら埋葬人骨を残した人たちの身体特徴が、縄文時代の人骨に似るのか、はたまた弥生時代中期頃の人骨に相似するのか、はなはだ興味深い。さらに個体ごとにバラつきがあり、その両者にまたがるような形態特徴をもつ人骨があるか否かも興味をそそる。

おおむね新方人骨は骨の残存が芳しからず、保存処理のためにもあって、土に封印されたままでも取り上げられた。そのために最小限度の計測しかかない。また、こまかく決め

られた計測法にそって非常に精確な計測値を求めるのが難しい。

それにそもそも、縄文人骨はともかく、近畿地方では弥生時代人骨の出土例が少ないから、こと細かく比較するためには役者不足の感が否めない。ここでは、主に各骨について記載した特徴を材料にして、岡山県津雲遺跡の縄文人骨（清野と宮本、1926）、大阪府国府遺跡の縄文時代人骨や弥生時代中期人骨（池田、1988）、や奈良県長寺遺跡の弥生時代中期人骨（片山、1996）、北部九州地域や山口県土井ヶ浜遺跡で出土した弥生時代人骨（九州大学医学部解剖学第二講座編著、1988）などを念頭におきながら、新方人骨の身体特徴を探ってみたい。

まず身体サイズの目安として推定身長を考えてみたい。それは第1号人骨（男性）で155-160cm、第3号人骨（男性）で160cm強、第12号人骨（男性）で158cm前後、第13号人骨（男性？）で158cm前後、第8号人骨（女性）で145-150cmである。男性人骨で均一性が強いのが興味を引かないでもないが、男女ともに低身長に傾く。土井ヶ浜弥生人骨、津雲縄文人骨、国府弥生人骨の男性の平均値が、それぞれ163cm、159cm、157-161cmばかりであるのと比較すると、津雲遺跡の縄文人骨や国府遺跡の弥生人骨のほうに近い値と言える。

以下、順不同ではあるが、特に注目すべき特徴だけにかぎって論じてみよう。

まずは下顎骨の形態である。角前切痕がないロッカー状をした下顎骨だが、縄文人骨では多いが、土井ヶ浜の弥生人骨や後の古墳時代以降の人骨では非常に少ない。新方人骨の場合、まったく角前が認められない典型的なロッカード顎の特徴が、第1号、第3号、第8号の人骨で観察できる。第12号人骨も典型的なロッカード顎ではないが、角前切痕は認められない。つまり下顎骨の下顎角から下顎体にかけての部分が観察できる全部の人骨が、典型的であれ、擬似的であれ、ロッカー状下顎骨の特徴を有しているわけである。縄文人骨を彷彿とさせるゆえんである。

前頭骨から顔面頂蓋にかけての特徴でも、国府遺跡の縄文人骨や弥生中期人骨に類似すると考えるべき点が少なくないので列挙しておく。もとより精確な計測値では比較しにくいので、特に注目すべき点だけを記載するととどめる。

まず鼻骨最小幅が非常に大きいこと。第12号人骨と第8号人骨で、それぞれ12mmと約11mmもあり、その値が10ミリをこえることが少ない土井ヶ浜弥生時代人骨や、わずかに5ミリしかない長寺弥生時代人骨などの小さな鼻骨とは、はなはだ異質である。

同じく第12号人骨と第8号人骨、それに第13号人骨では、かなり顔が低く、低眼窩の傾向が認められる（たとえば第12号人骨の眼窩示数は73.3）が、こうした点でも一般に縄文時代人骨のほうに似る。さらに、これらの人骨では前頭骨の頬骨突起が幅広く大きく、眉間が膨らむなどのため、眼窩上縁の外側部が平坦な外観を呈することで共通する。これは縄文時代人骨で特徴的な点としてあげられており（鈴木、1983）、興味深い。

下顎骨の前部が観察可能な第3号、第12号、および第8号の人骨では、いずれも下顎体が厚くて頑丈、オトガイが低いなどの共通した特徴が認められる。これは国府遺跡の弥生中

期人骨で指摘された点である。下顎枝が観察できる第3号、第12号、第13号、第8号の人骨では、いずれも下顎枝高は大きめ、下顎枝幅が小さめ、さらに筋突起が太く発達した傾向が認められる。これらは北部九州などの弥生時代人骨よりも、どちらかというと言葉縄文時代人骨のほうに似た印象を与えよう。

歯の大きさを比べたのが別表の2と3である。それぞれの人骨の歯冠の計測値をブレイスと永井(1982)が求めた縄文人骨と弥生人骨の平均値と比較するものである。ちなみに上下顎ともに左右の歯の平均値を示す。もちろん計測できる歯に限られるので、詳細な比較はできない。比較的多くの歯が計測可能な第1号人骨については、上下顎ともに、前歯と小臼歯は縄文人の平均値なみに小さいが、大臼歯は両者の中間の値を示す。このことは別表4でよく分かる。

上下肢骨について、もっとも注目すべきは、第1号、第3号、第12号、第13号人骨の男性人骨ではいずれも腓骨の骨体が大きく凹凸に富む。いわゆる巨大腓骨の特徴(鈴木, 1963)を示すことであろう。この特徴は縄文人骨で指摘されることが多いのだが、なぜ新方人骨で、この特徴が目だつのか、その理由は定かでない。しかし、大腿骨の柱状構造と脛骨の扁平性は、現代人の骨よりは格段に発達していると言えようが、いずれの人骨も非常に強いというわけではない。第3号と第12号の人骨で大腿骨の骨体の湾曲が強いことも縄文人骨に似た特徴と言えよう。第12号人骨でみるかぎり、前腕のほうが上腕よりも長いプローションをしていたようで、縄文人骨との類似で興味深い。

その他、ことに注目すべき点をピックアップしておきたい。

中切歯などが観察可能な第1号人骨と第12号人骨では、それぞれ上下の切歯、上顎切歯の咬耗の様子から前歯が鉗子状咬合をしていたことがうかがえる。これは縄文時代人骨だけで特異に多く観察される特徴であることを述べたい。

第1号と第12号の人骨では、それと同時に上顎切歯の舌側面にシャベル状の窪みが顕著に認められる。このシャベル状切歯は弥生時代以降の人骨では、ほとんどすべての個体で見られるが、縄文人骨でも頻度は減るものの、かなりの個体で認められる。

歯の異常咬耗

もうひとつ新方人骨の歯で特徴的なのは、ある歯だけが過度に咬耗する過咬耗や斜めに咬耗するなどの異常咬耗の状態を呈する個体が多いことである。

一般に食物を咀嚼することによる咬耗なら、どの歯も均等に平らに規則的に磨り減っていくものだが、そうではない。ある歯列の部分や左右の歯列のいずれかの歯冠が過度に咬耗したり、傾斜をなしたり、中央が凹んだ輪状に磨り減る歯が目だつのである。

そうした原因は様ざまであろうが、いずれにせよ食物をかみ砕くために何らかの道具として歯を酷使していたことを物語る。よく俎上にのぼるのが、北米イヌイットの動物の皮革加工であり、あるいは苧麻(カラムシ)がみなどの繊維性植物の加工であるが、歯で支えた生肉を石器などで切断したり、縄づくりのための用材を固定したりと、いろいろ

な原因が考えらよう。

新方人骨の場合、第1号人骨では切歯だけが異常に強く磨り減り、第3号人骨では下顎右側の後歯が舌側から頬側に向けて過咬耗した状態となり、さらに第8号人骨では下顎左側だけ後歯が鞍状に過咬耗する。おそらく他の人骨でも、そんな異常咬耗をした歯があったかもしれないが、残念ながら歯の観察がままならない。

このように新方人骨では過咬耗や異常咬耗をした歯が認められるが、個体によって異なったパターンを示しており、とても定型的なものとは言えない。それがいささか奇妙ではあるが、いずれにしても通常の咬耗とは思えない磨り減りをした歯を持つ個体が多い。おそらくは食物を咀嚼すること以外の目的でも歯を激しく使っていた人たちの骨であると考えられる。どんな目的で歯を酷使していたのか、それについては、歯を詳細に顕微鏡検査することはできないので、なにも具体的なことは推察できない。

ちなみに北部九州や土井ヶ浜遺跡の人骨では珍しいが、縄文時代人骨では多くの遺跡で出土したもので異常咬耗のことが報告されており（鈴木、1963）、なんとなく縄文人の歯を彷彿とさせられる現象ではある。

病変と傷痕についての特記事項

すでに記したように、第13号人骨の下位の椎骨や左右の上腕骨に特記すべき病変が認められる。それにつき、古人骨で関節炎などの骨病変を研究している整形外科医師の井上康二博士に詳しい鑑定を依頼した。そのときの病理所見と鑑別診断の結果を本稿の最後に付記として掲載する。

現代人では珍しい疾病であるが、非常に珍しいというわけではないらしい。しかし古人骨では、ほとんど報告がなく、ことに日本列島では最古のケースである。今後の詳細な古疫学的な検討が待たれる。

第1号人骨について、全体に歯が非常に不健全であることも注目する必要がある。上下顎ともに歯槽突起が歯周症に冒されており、過半数の歯で虫歯の痕跡が認められる。すなわち、ある大臼歯は歯冠全体がう蝕され、あるいは陥没状にう蝕され、ある大臼歯は隣接面に大きな虫食いがあり、そして切歯や小臼歯などでも歯頸部が線状に虫ばまれている。生前に脱落していたことが明らかな大臼歯や小臼歯も虫歯が悪化したためである可能性が大である。まだ壮年あたりの年齢で死亡した個体であることを考慮すると、生前、歯が異常に不健全であったことは明らかである。

一般に縄文人では、おそらくは食習慣のためであろうが、歯頸部の虫歯は稀ではないが、歯冠部の虫歯は珍しい。この個体では虫歯は大多数の歯で歯頸部だけで生じているが、歯冠部にもある。歯冠部の虫歯が多く認められるようになるのは、弥生時代以降の人骨である。食性的変化が生じていた時代の人骨であることを象徴するようである。

6. まとめ

神戸市の新方遺跡で出土した人骨群は、弥生時代の前期のものであることで非常に資料価値が高い。また、ただごとならざる状況で死し、ほかに類例をみない方法で埋葬された死者の遺骨でありそうなことから、当時の社会情勢に関わるヒントをえるために興味がつきない。すくなくならずの石鏃が体内に射こまれた状況で出土したことは、なんらかの諍いごとで不慮の死をとげた者の遺骨であることを想起させずにはおかない。それら遺骨を残した人たちの身体特徴は、北部九州や山口県土井ヶ浜遺跡で出土した弥生時代人骨によりも、むしろ縄文時代の人骨のほうに類似する点が少なくない。このことも大いに注目すべきであろう。なぜなら、弥生時代に入り大陸方面から大勢の人間が渡来して来て、そうした人たちが縄文人に変わり、北部九州から近畿にかけての地方の住民になったとする従来の単純なモデルを再考する契機となるべき人骨資料かもしれないからだ。

参考文献

- 春成秀爾(2000) 哀悼抜歯—アジア・アメリカ・ポリネシアをつなぐ習俗—, 『国立歴史民俗博物館研究報告』第83集, 1-59頁。
- 藤井 明(1960) 四肢長骨の長さとの関係に就いて, 順天堂大学体育学部紀要, 第3号, pp. 49-61.
- 池田次郎(1988) 河内・国府遺跡の人骨, 『橿原考古学研究所論集 第十』(橿原考古学研究所編)所収, 吉川弘文館, 425-449頁。
- 池田次郎(1988) 東海西部・近畿・瀬戸内の弥生時代人骨, 『日本民族・文化の生成①永井昌文教授退官記念論文集』所収, 六興出版, 19-34頁。
- 片山一道(1996) 天理市長寺遺跡で出土した人骨、弥生人の遺骨か? 『長寺遺跡の弥生人骨—第10次調査に伴う中間報告書—』所収, 天理市教育委員会, 18-30頁。
- 片山一道(1998) 新方人骨, 『縄文人と弥生人—その時代を生きた人々の表情—』所収, 神戸市教育委員会, 9-12頁。
- 片山一道・毛利俊雄(1998) 縄文人と「弥生人」, 『縄文人と弥生人—その時代を生きた人々の表情—』所収, 神戸市教育委員会, 1-6頁。
- 清野謙次・宮本博人(1926) 津雲貝塚人骨の人類学的研究, 人類学雑誌, 41巻, pp. 95-140, 151-208.
- 清野謙次(1926) 国府石器時代人骨の人類学的研究, 人類学雑誌, 41巻, pp. 339-381.
- 神戸市教育委員会(編著)(2002) 『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』, 249頁。
- 九州大学医学部解剖学第二講座(編著)(1988) 『日本民族・文化の生成②九州大学医学部解剖学第二講座所蔵古人骨資料集成』, 六興出版。
- 鈴木 尚(1963) 『日本人の骨』(岩波新書477), 岩波書店
- 鈴木 尚(1983) 『骨から見た日本人のルーツ』(岩波新書220), 岩波書店

付記、第13号人骨の腰椎でみられる骨病変

井上康二

(大阪リハビリテーション病院、七川記念リウマチ骨関節症センター)

第二腰椎および第三腰椎椎体右前方に椎体中央部からのびる嘴状の骨形成がみられる。第三腰椎および第四腰椎椎体右前方にも骨形成がありこの部で形成された骨は連続し、架橋を形成している。また第三腰椎と第四腰椎椎体前方は著しく隆起しており、本来の椎体前縁に新生骨が添加されたものと思われる。四肢骨のなかで比較的保存状態のよい右上腕骨遠位前方にも不整な骨形成が認められた。

これら腰椎にみられた骨形成は前縦韧带骨化症 (ossification of the anterior longitudinal ligament: OALL) と診断され、変形性脊椎症でみられる骨棘とはつぎの点で鑑別される。骨棘は椎体の上縁あるいは下縁から起こるのに対し、OALLでは骨形成が椎体中央部より起こる。また、OALLは椎体右方に骨形成が起こりやすいことも本例の所見と一致する。OALLが複数の連続する椎体間(連続3椎間以上)に生じそれが完全に連続した架橋形成をしめす場合、特にそれをForestier病あるいはDISH (diffuse idiopathic skeletal hyperostosis) とよばれる。このような病態において骨形成は単に脊椎前縦韧带のみならず全身の腱や韧带の骨付着部に起こりやすい。本例では1椎間のみに架橋形成を認めたが、その他の脊椎骨の保存状態から考えてDISHといえるかどうかは定かでない。しかし、右上腕骨遠位にみられた骨形成所見から考えて本例はDISHの可能性がある。

1号人骨

$$\begin{array}{cccccccc|cccccccc} // & M & P & P & - & I & I & I & I & I & - & P & P & M & M & M \\ \hline M & - & M & P & P & - & I & I & I & I & - & P & P & M & M & M \end{array}$$

○: 歯槽開放
-: 歯槽閉鎖
/: 破損
?: 不明
(): 遊離歯

2号人骨

$$\begin{array}{cccccccc|cccccccc} M & M & P & P & - & ? & I & I & ? & ? & ? & (P) & (M) & (M) \\ \hline M & M & P & P & - & I & I & I & I & ? & P & P & M & (M) \end{array}$$

3号人骨

$$\begin{array}{cccccccc|cccccccc} - & M & P & & & & & & & & & & & & & \\ \hline & & & & & & & & & & & & & & & \end{array}$$

8号人骨

$$\begin{array}{cccccccc|cccccccc} M & / & / & / & / & / & / & / & / & / & \circ & / & P & / & / & (M) \\ \hline M & M & P & P & C & \circ & / & (I) & / & P & P & M & M & & & \end{array}$$

12号人骨

$$\begin{array}{cccccccc|cccccccc} // & / & / & / & / & / & / & I & I & (I) & - & P & P & M & M & (M) \\ \hline // & / & M & P & P & \circ & (I) & / & / & / & (P) & P & M & M & M \end{array}$$

表7 新方遺跡人骨歯式

	1号人骨 男性			2号人骨 男性			縄文人骨 男性*			弥生時代人骨 男性*		
	MD	BL	MD+BL	MD	BL	MD+BL	MD	BL	MD+BL	MD	BL	MD+BL
上顎												
中切歯	(7.9)	(7.4)	(15.3)									
側切歯	(6.3)	(6.7)	(13.0)									
第1小臼歯	6.9	9.3	16.2	7.5	9.7	17.2	6.9	9.3	16.2	7.5	9.8	17.3
第2小臼歯	6.2	8.6	14.8	7.2	9.3	16.5	6.4	9.0	15.4	7.0	9.5	16.5
第1大臼歯	10.7	11.9	22.6	10.2	11.4	21.6	10.1	11.7	21.8	10.6	12.0	22.6
第2大臼歯	10.3	11.0	21.3	9.7	11.8	21.5	9.3	11.3	20.6	10.1	11.8	21.9
第3大臼歯	9.2	10.5	19.7				8.5	10.8	19.3	8.9	10.8	19.7
下顎												
中切歯	(4.7)	5.8	(10.5)				5.2	5.9	11.1	5.5	6.1	11.6
側切歯	(5.2)	6.1	(11.3)				5.8	6.2	12.0	6.2	6.6	12.8
第1小臼歯	7.1	7.8	14.9	7.6	7.6	15.2	6.8	7.7	14.5	7.3	8.3	15.6
第2小臼歯	7.2	8.3	15.5	8.0	8.7	16.7	6.8	8.2	15.0	7.5	8.6	16.1
第1大臼歯	11.8	11.1	22.9	11.8	11.1	22.9	11.4	11.3	22.7	11.8	11.5	23.3
第2大臼歯				10.6	10.9	21.5	10.8	10.5	21.3	11.4	11.0	22.4
第3大臼歯	10.6	10.7	21.3				10.6	10.1	20.7	11.0	10.4	21.4

MD:近縁心径

BL:頬舌径

*: C.L.Brace and Masafumi Nagai (1982) より引用

表8 新方遺跡男性人骨の歯径計測値 (mm)

	8号人骨 女性			縄文人骨 女性*			弥生時代人骨 女性*				
	MD	BL	MD+BL	MD	BL	MD+BL	MD	BL	MD+BL		
下顎											
中切歯	5.1	5.6	10.7	5.4	5.7	11.1					
側切歯	5.6	6.0	11.6	6.0	6.1	12.1					
第1小臼歯	6.8	7.7	14.5	6.6	7.5	14.1	7.0	7.8	14.8		
第2小臼歯 (6.0)	8.4	(14.4)		6.7	7.9	14.6	7.0	8.0	15.0		
第1大臼歯 (10.0)				11.1	10.9	22.0	11.3	11.0	22.3		
第2大臼歯				10.4	10.6	20.5	10.7	10.4	21.1		
第3大臼歯				10.2	10.9	19.9	10.6	10.2	20.8		

MD:近縁心径

BL:頬舌径

*: C.L.Brace and Masafumi Nagai (1982) より引用

表9 新方遺跡女性人骨の歯径計測値 (mm)

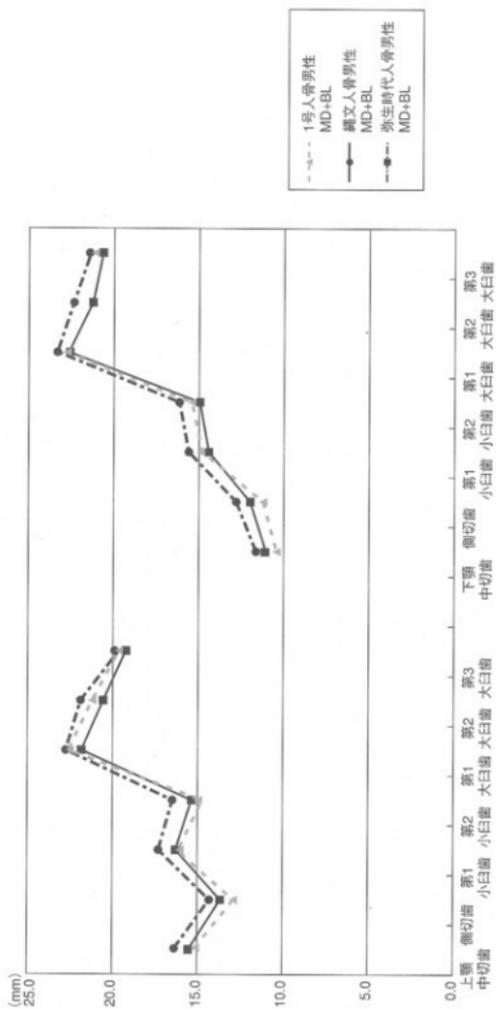


図129 新方遺跡歯冠計測値比較図

第3節 新方遺跡出土古人骨の炭素・窒素同位体分析による食性解析

北海道大学大学院地球環境科学研究科

南川 雅男

コラーゲンに含まれる炭素と窒素の安定同位体分析をおこない、その同位体組成から個体の食性の特徴を知る目的で遺跡出土の古人骨2体をの解析を行い、当時の人々の食生活の復元を試みた。人骨に残留したタンパク質（コラーゲン）の炭素・窒素同位体組成は生前の食生活の中で取り込まれた食糧資源の組成を反映していることが知られている。そこで出土した人骨から逆に利用された食糧の構成を求めた。この方法で解析するためには、対象となる人骨の分析だけでなく、同時代、同地域の食糧資源の同位体組成を用いることが望ましいが、この地域での自然食品の同位体分析やその復元は行われていないので、今回は縄文時代の食糧の同位体組成として主として関東地方で求められた平均的同位体分布を適用した。

試料

分析に用いたのは次の2個体からの破片骨である。

第12号人骨：弥生時代前期、男性の破片骨（約82g）

第13号人骨：弥生時代前期、壮年から熟年、性別不詳、破片（約9.0g）

同位体分析の方法

骨試料は分析前に脱イオン水で水洗し、土壌を極力取り除いた。試料を砕いた後、0.1N水酸化ナトリウムにより腐植質を溶解し取り除いた。溶液が無色に近くなるまで水洗とアルカリ処理をくり返した。一旦乾燥後、クロロホルム、メタノールで溶解性の有機物を除去した。乾燥後、希塩酸で炭酸処理を行った。脱イオン水を加え、95℃で12時間加熱した。溶液をガラスフィルターでろ過し、濾液を凍結乾燥した。得られた固形物を回収し、分析用試料とした。その一部を錫製の容器に採取し、FISONS N1500型元素分析計で炭素、窒素元素含量を測定した。分析計内で生成したCO₂とN₂ガスは、ヘリウムガスでサーモキエスト製CON-FLOII導入装置をととして同位体比質量分析計（フィニガンMAT252）に導入し¹³C/¹²C、¹⁵N/¹⁴Nを分析した。分析方法の詳細は文献（1）によった。分析誤差は $\delta^{13}\text{C}$ は $\pm 0.1\%$ 、 $\delta^{15}\text{N}$ は $\pm 0.1\%$ である。

元素分析の結果

兩人骨試料とも著しく風化もしくは土壌中の有機酸による溶解を受けており、化学成分の保存状態は必ずしも良好とは言えない。分析に供した骨片は人類学的な調査に適さない部分骨を集めたものであり乾燥重量にして約9gであった。夾雑する有機成分をできるだけ除くために化学的前処理を念入りに行った。得られたコラーゲン分画の重量は約65～98mgであったが、その大部分は無機塩であり、有機物の回収量はきわめて低かった。回収した有機物の元素分析は1個体について2度測定した。結果は表1に示した。コラーゲンの残存状態や夾雑有機物の有無を判断する指標であるC/N比は12号では5.3、13号で4.0と高く、骨コラーゲンの標準値 3.2 ± 0.5 の範囲からややはずれることがわかった。試料の風化進んだため骨のタンパク成分の分解も進み、相対的に土壌有機物などの汚染が生じていると判断される。

同位体比測定の結果

同位体分析は通常のコラーゲン分析と同様に行った。同位体分析の結果は表1に示したとおりである。しかし、元素分析の結果から今回分析したゼラチン分画は土壌有機物の汚染を受けていた可能性が明らかだったので、同位体分析の結果は参考程度に扱うこととする。ただし、土壌有機物は炭素含量が高いので、汚染の影響は窒素同位体より炭素同位体が大きく受けていると考えられる。

今回の分析結果を評価するために、すでに報告されている弥生時代および同地域の縄文後期中葉の人骨(無遺跡)の結果(●)とあわせて図130に示した。人骨コラーゲンと利用した食物の同位体比との間には同位体分別による違いがあるので、現代日本人について得られた分別値を加えて、それぞれの個体が当時利用した食物の同位体比を復元したのが上辺と、右辺の軸により示されている。新方遺跡の古人骨は、弥生時代の個体(土井ヶ浜、北九州覚棺)あるいは北海道の続縄文(有珠)などに比べて左辺下方に位置する。また、古墳時代や江戸時代などの穀類利用集団と比べても炭素窒素とも低い値となった。

食糧資源との関係を知るために、人骨コラーゲンと食資源の同位体組成を図131に示した。この結果から、新方遺跡の人骨コラーゲンの分析結果が示す傾向は、植物資源、特にC3型光合成植物(堅果や根菜、コマなどが含まれる)の同位体の影響を強く受けていることがわかる。仮に、汚染の影響が無かったと仮定すると、この集団の植物利用の度合いは、稲作を生業とした弥生人の中でもさらに、植物資源への利用度を高めた集団だったと推定される。また水産資源の利用度は低かったと考えられる。

さらに、同地域の縄文後期の人骨に比べると、新方遺跡人は植物資源の利用度の高い結果を示した。一方、稲作を行っていたとされる十井ヶ浜弥生時代人や四国の古墳時代の人骨に比べると $\delta^{15}\text{N}$ が低く、一般にこの傾向は耕作で収穫した植物よりは自然植物の利用を伺わせるものである。しかし、この結果が試料への有機物汚染の影響によるのか、実際の新方遺跡人の食性を表すのかは今は判断できない。今後十分なコラーゲンの回収を試みて再度分析した上で確認する価値がある。

以上のとおり、今回の得られた分析結果はコラーゲンの回収状況が悪いため正確だったとは言い難い。分析した2個体で同位体比の結果も大きく異なった。このため同位体比を使った利用資源の数理解析を行うにはこれらの分析結果だけでは不十分であると判断される。今後、さらに分析例を増してコラーゲンの残存率の良い個体を見つけ、より正確な分析結果を得ることが課題である。その上で食生活の個体差や性差などについて検討すべきと考える。

コード	人骨 番号	試料重量 (g 洗浄前)	試料重量 (g 粉末洗浄・ 洗浄前)	コラーゲン 分画 (mg)	C%	N%	$\delta^{13}\text{C}\%$	$\delta^{15}\text{N}\%$	C/N
SIN-1	第12号	12.29	8.15	65.53	1.4	0.32	-21.25	6.35	5.26
SIN-2	第13号	12.39	8.97	97.92	1.6	0.47	-19.75	9.25	4.01

表10 新方遺跡出土人骨の元素分析および同位体分析の結果

参考文献

- (1) アイソトープ食性解析法、南川雅男、「第四紀試料分析法」第四紀学会編、東京大学出版、404:174 (1993)
- (2) 炭素窒素同位体分析により復元した先史日本人の食性、南川雅男、「国立歴史民俗博物館研究報告」第86集、333~357頁 (2001)
- (3) 先史人は何を食べていたか、南川雅男、「考古学と化学をむすぶ」、馬淵久夫、富永健編、東京大学出版、195~221頁 (2001)

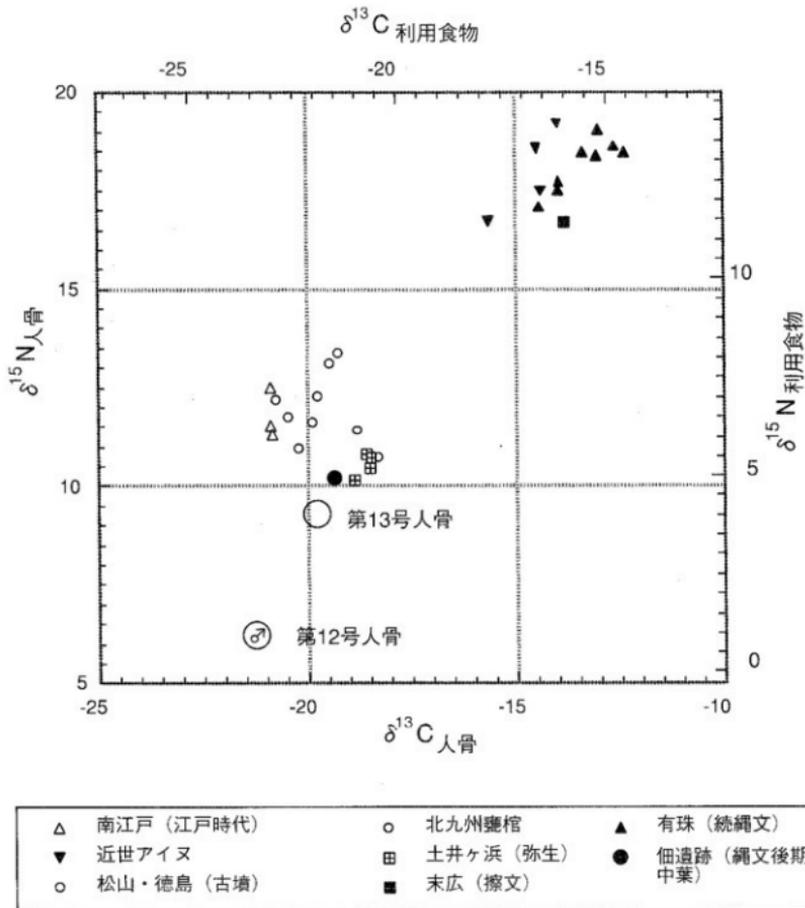


図130 新方遺跡人骨と他の遺跡人骨との比較

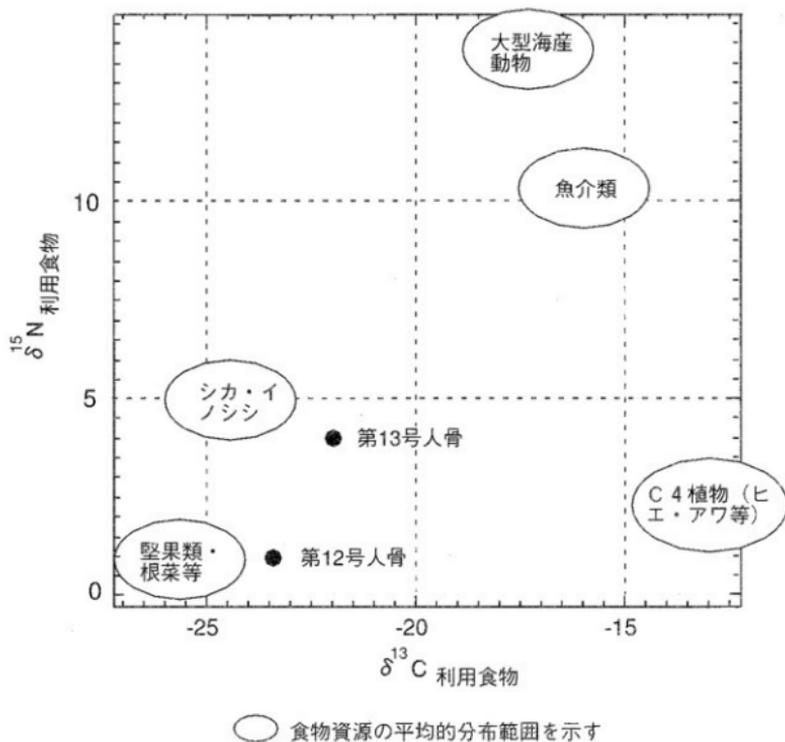


図131 食物資源および新方遺跡人の利用食物の同位体組成

第4節 新方遺跡（野手・西方地区）出土の動物遺存体

独立行政法人奈良文化財研究所 松井 章
京都大学大学院 丸山 貞史

1 概要

新方遺跡は、神戸市西区の明石川下流域に所在する弥生時代前期を主体とする集落遺跡である。今回、報告するのは、本遺跡の野手・西方地区、第1次、2次、5次調査で出土した動物遺存体である。大部分が弥生時代前期に属するもので、その他は弥生時代中期や古墳時代、近世の遺構から出土したものが含まれる。搬入された試料は、ほとんどが動物骨で、その破片数は2000点を越え、そのうち種名と部位が同定できたのは903点にのぼる。本論では必要のあるとき以外は、遺構別または弥生前期とそれ以降と分け、必要に応じて一括して記述をすすめる。

出土した動物遺存体で最も多いのは、イノシシで434点、全体の50%を占める。イノシシに次ぐのはニホンジカで、枝角の破片を除くと381点にのぼり全体の44%を占める。ただし、ニホンジカの骨格の破片数に、枝角の破片126点を合わせると507点を数え、点数の上ではイノシシをしのぐ(図132)。その他、種が同定できたものはウシ19点、ウマ10点、イヌ4点、タヌキ1点、鱧脚類1点、クジラ類12点、ニホンザル?1点、マガイが12点、スズキ3点、サメ類1点、エイ類1点、スッポン1点である。また、骨髄や紡錘車などの骨角器が11点とその廃材が出土している。その他にト骨が1点、イノシシのド顎骨に穿孔したものが3点みられる。

2 出土動物遺存体の種別の特徴

貝類

属種不明

土坑SK704埋土(古墳以前)から、貝殻内面の光沢の破片が出土している。また、攪乱土中より二枚貝が出土している。いずれも遺存状態に恵まれず、種の同定には至らなかった。

魚類

サメ類

堅穴住居址覆土SB801(古墳以前)から椎骨が1点出土している。椎体の中心部が人為的に穿孔されている可能性がある。しかし、サメやエイの椎骨の中心部は孔があきやすいことから、すぐには人為的穿孔とは断定できない。

エイ類

軟骨魚類特有の円筒形の椎骨のうち、小型のものをエイ類と同定したが、実際は椎骨の大きさとサメ類とエイ類とを区別するのは困難であり、分類学上もサメ類とエイ類には明確な区分がない。本遺跡からは、溝SD4001(弥生前期から中期)から椎骨が1点出土したのみである。

スズキ

堅穴住居址覆土SB201(焼土ピット、時期不明)から椎骨、出土地点不明の前上顎骨が出土しており、い

ずれも火熱を受け白色に変化している。スズキは成長にしたがい名前が変わる、いわゆる出世魚である。椎骨は成魚のスズキに相当し、前上顎骨は体長2、30cmの若いセイゴクラスであろう。

マダイ

本遺跡から出土した魚種のなかで12点と最多を占める。七坑SX401（弥生前期）から出土した上後頭骨は、火熱を受け白色に変化している。また、土坑SX501（古墳以前）から出土した上後頭骨には、深く鋭い切り傷がある。そして、堅穴住居址覆土SB801（古墳以前）から出土した椎骨棘突起部には瘤が見られる。これは、潮流の速い環境で育ったタイ科によく見られ、骨折が治癒した痕跡といわれる。新方遺跡からも臨むことができたであろう、明石海峡産のマダイもこうした瘤が多いことで有名である。小さくとも体長40cm以上の個体ばかりで、なかには1m近い個体も含まれる。

タイ科の一種

マダイ、クロダイ、ヘダイなどタイ科特有の先端に丸みのある臼歯状の遊離歯が、複数出土している。また、種の同定に至らなかった歯骨や前上顎骨も複数出土している。瀬戸内海に分布するタイ科には、マダイのほかクロダイがあるが、本例からは同定に至らなかった。

ニシン亜目の一種

マイワシ、サッパ、コノシロなどイワシのなかまでである。魚体自体が小さい上、骨が薄く遺存しにくい。ふるいを使わない手掘りの発掘調査では見逃される可能性が非常に高い。搬入された試料に含まれていたのは、土坑SX6002（弥生前期）から出土した椎骨のみで種の同定には至らなかった。そのうち5点は、明白に火熱を受け白色に変化している。

爬虫類

スッポン

遺物包含層（古墳以前）から、背甲の一部が1点のみ出土している。解体痕は見られず、遺構との関連もない。西日本の遺跡では、縄文時代早期の滋賀県石山貝塚以来、スッポンの出土は珍しくなく、大阪平野の弥生遺跡では普通に見られる。四肢骨よりも甲板が多く見られる傾向がある。

鳥類

スズメ目

土坑SX6002（弥生前期）から指骨と足根中足骨が出土している。すべて火熱を受け白色もしくは黒色に変化している。小型鳥類は種類が多く、科、属、種の同定には至らなかった。

属種不明

土坑SX6002（弥生前期）から、火熱を受け白色に変化した脛骨が出土している。大きさはキジバトと同じくらいである。また遺物包含層（古墳以前）から肋骨が出土したが、種の同定はできない。

哺乳類

イノシシ

総破片点数は434点で、種類別では最も多く出土した種である。出土数を部位別にみると、下顎骨が最も

多く、左右が結合したものが5点出土している。下顎枝が人為的に穿孔された可能性があるものは弥生時代前期のものが5点、時期不明(古墳以前)のものが2点で、明確に穿孔されているものは溝SD5003とST401堀方(ともに弥生前期)出土のもの3点である。いずれも第3後臼歯が咬耗した成獣である。下顎体部に比べ下顎枝は薄く破損しやすい部分であり、自然に孔があく可能性があるため、十分な観察が必要である。また、犬歯付近の下顎体が割られているものがある。これらは、装飾品の材料となる犬歯を抜き取りやすくするために人為的に割られたことを示している(金子1980)。犬歯以外のところで割られているものは、骨髓を取り出すために割ったものと思われる。その他の部位は、肋骨と腓骨を除き一様に出土している。肋骨は破片ではニホンジカとの区別が難しいため同定できず、腓骨は細く薄いために遺存しにくい。弥生時代に共通してみられる傾向は、上腕骨や大腿骨が多く出土することである(松井1986)が、本試料では、上腕骨や大腿骨よりも肩甲骨や寛骨が多く出土している。四肢骨は尺骨を除いて全て近位部よりも遠位部の方が多く同定された。

遺構別にみると、溝SD405やSD7001(ともに弥生前期)、竪穴住居址覆土SB801(古墳以前)が多い。それ以外では、溝SD6001(弥生前期)では頭蓋部が多く、土坑SX501(古墳以前)では下顎骨の出土が多い傾向がみられる。

火熱を受け変色しているものは17点で5%を占め、多くは白色に変化している。人為的な解体、加工痕があるものは51点で13%であり、切り傷と切断の両者がある。鋭い切り傷は、石器と金属器のどちらによるものか判断できないが、切断痕は切り口の鋭さから金属器を使用している。イス等の動物の咬痕があるものは51点で13%を占め、関節付近や割れ目に痕跡が集中する傾向がある(図134)。

下顎第3後臼歯の萌出と咬耗状態から年齢査定すると、未萌出段階の幼獣6、萌出中の若獣3、萌出後咬耗が始まった成獣22という構成になる(表12・図135)。また、骨端部の癒合の進行状態では、癒合が終了した成獣の割合が高い。弥生時代になると、特に河内平野では幼弱獣が多く見られる傾向が強くなる(松井前掲書)、新方遺跡とは様相が異なる。

ニホンジカ

総破片点数で507点が出土しており、種類別では2番目に多い。出土数を部位別にみると枝角が最も多く、破片数で126点出土しており、ニホンジカの破片数の25%を占める。そのうち、人為的な加工痕が見られるものは38点で30%を占める。これら加工痕の特徴は、鋭い刃物で削ったもの、叩き切ったもの、振り切りのものがある。また、火熱を受け変色しているものは48点で38%を占める。角座が残るものは、落角が8点、前頭骨から切り離されたものが5点である。枝角に次いで多いのは椎骨である。椎骨が多く出土することは珍しいが、骨格の中で最も数の多い部位であることから、全身をまとめて廃棄したと考えれば自然である。次に多いのは中手骨、中足骨である。中手骨と中足骨も骨角器の材料となる部位である。そのため細片となっていることが多い。ここでは中手骨と中足骨あわせて45点のうち加工痕が見られるのは8点で17%である。数字上少なく見えるのは、実際は骨角器になったものや細片になっていることが想定されることから、骨角器の材料として使用されなかったものや廃材を多く同定したと考えられる。加工痕の特徴は振り切りが多く、枝角に見られた削りや叩き切ったものは見られない。次に多いのは、肩甲骨と寛骨である。これらは、イノシシと同様に上腕骨や大腿骨よりやや多く出土している。また、四肢骨では橈骨を除き、近位部より遠位部の方が多く出土している。それ以外に溝SD405下層(弥生前期)から頭蓋骨後部が出土している。側頭骨と後頭骨が残っており、脳を取り出すために割られたものと思われる。

遺構別にみると、溝SD405やSD7001(弥生前期)、竪穴住居址覆土SB801(古墳以前)から多く出土し、

イノシシと同様の傾向がみられる。土坑SK6010（弥生前期）では、枝角の出土比率が高い。

枝角と中手骨、中足骨の加工痕を除いて、解体痕、加工痕が見られるものは19点で5.6%と多くない。枝角を除いて火熱を受け変色しているものは9点で2.4%と少なく、ほとんどが黒色もしくは茶褐色に変化しておりイノシシとは異なる。イヌ等の動物の咬痕は32点で9.5%を占め、イノシシと同様に関節付近や割れ口に痕跡が集中する（図134）。

下顎第3後臼歯の萌出と咬耗状態から、幼獣3、若獣0、成獣5の年齢構成を示す（大森司1980）（図135）。骨端部の癒合の進行状態も、癒合の終了した成獣の方が割合として多く、イノシシと同様の傾向を示した。

イヌ

溝SD5003、SD7001（ともに弥生前期）から前頭骨と下顎骨が1点ずつ、溝SD405（弥生前期）から下顎骨と上腕骨が1点ずつ出土している。下顎骨にはいずれも切り傷が見られ、溝SD7001出土のものは、関節突起外側部が切断されている。これらは、イヌを食用として解体した痕跡である。

溝SD405から出土したイヌの大きさを従来の出土データ（茂原・松井1995）と比較したところ、弥生犬の平均と比べ、下顎骨全長がオスより小さく、メスより大きい。また、縄文犬オスの平均よりも小さい個体である。長谷部の型区分（長谷部1952）にあてはめると、溝SD405出土のイヌは小中型に含まれる。溝SD7001出土のイヌは部分的にしか遺存しておらず計測はできないが、見た目では溝SD405出土のものより一回り大きい。本遺跡では、亀井遺跡で見られるように（宮崎1982）縄文犬には見られない大きな個体が存在しなかったと考えて良い。

イヌ/キツネ

土坑SK104（古墳以前）から、小型のイヌ科の下顎骨が出土している。部分的であるためイヌとキツネで区別が困難で、種の同定には至らなかった。

タヌキ

土坑SX6002（弥生前期）から頸椎が1点出土している。また、土坑SK6002（弥生前期）からタヌキと思われる腰椎が出土したが、骨の表面が磨滅しており明確ではない。縄文時代に比べ弥生時代の出土量は少ない。これは、縄文人が広い範囲の資源を獲得しようとしたのに対し、弥生時代の人々は効率を重視した資源利用を行ったためと考えられる。

ウシ

竪穴住居址覆土SB801（古墳以前）から頭蓋骨と四肢骨が計7点出土している。脛骨や橈骨はいずれも骨端が化石化していない若い個体である。また、遊離歯がSP4050埋土（古墳以前）から複数個出土している。それ以外に、近世の井戸から橈骨1点のみが出土している。

ウマ

土坑SX501（古墳以前）から遊離歯1点出土している。これ以外に遺構からの出土はなく、遺物包含層（古墳以前）から距骨、基節骨、末節骨が出土している。

ニホンザル?

溝SD405（弥生前期）から大腿骨が1点出土している。近位端、遠位端ともに破損しており、明確に同定

できないため「？」をつけた。縄文時代に比べると出土遺跡数は少ないが、弥生時代においても珍しくはない。坪井・大福遺跡では、ニホンザルの顔面を利用したと思われる遺物が出土しており（松井・官路2000）、顔面を整形したニホンザルは、何らかの精神的扱いを受けていた可能性がある。

鯨類

溝SD4001（弥生前期から中期）から指骨（趾骨）が1点出土している。瀬戸内海の遺跡から出土する数は少ないが珍しくないことが最近判明しつつある。それは、愛媛県阿方貝塚や関門海峡付近の山口県綾羅木郷遺跡、宮前川遺跡群からニホンアシカが出土している。日本海沿岸の各遺跡や長崎県杵岐の原の辻遺跡でも珍しくない。関門海峡を通過してきたものを捕獲したと考えられる。

クジラ類

遺物包含層（弥生時代）と堅穴住居址覆土SB801、土坑SX401（ともに古墳以前）から椎骨が出土している。いずれも、大きさは小型クジラのハナゴンドウと同じくらいである。また、溝SD4001（弥生中期から後期）から部位不明のクジラ類の骨片が出土している。これには、何度も鉄器で骨に加撃した痕跡がある。それ以外に、遺物包含層（古墳以前）からは、イルカの下顎骨が出土している。

属種不明

溝SD405（弥生前期）から小型哺乳類の桃骨が左右1点ずつ出土している。これらは同一個体で、大きさはテンと同じくらいである。

3 骨角器

骨鏃

溝SD405（弥生前期）からニホンジカの中手骨もしくは中足骨を利用した未製品が出土している。うち割られた破片から擦り切りにより長さを整え、研磨により先端部を成形している。それ以外の部分は、まったく調整されず、全長は48.5mmである。土坑SX401（古墳以前）からは、鹿角の先端部を利用したものが出土しており、研磨によって成形されている。全長は51.5mmである。

工具の柄

御溝から1点と堅穴住居址覆土SB801（ともに古墳時代以前）から2点出土している。鹿角の表面を研磨し筒状に仕上げている。いずれも破損しており完形のものはない。SB801から出土したものは破損しているが、全容が推定できる。尾部の約1/3あたりから、鹿角本来の湾曲が残っている。差込口は楕円形であり、口縁部に切れ込みがある。奈良県唐古・鍵遺跡や大阪府亀井遺跡に類例がある。

紡錘車

遺物包含層（古墳中期以前）から1点のみ出土している。クジラ類の椎骨もしくは椎間板を利用したものである。全体を丁寧に研磨し円形に整え、中心部に孔を穿ったものである。鳥取県青谷上寺地遺跡などではクジラ類の骨を利用したものがあり、大阪府亀井遺跡や奈良県唐古・鍵遺跡、愛知県朝日遺跡などでは鹿角製のものが出土している。

ヘラ状加工品

遺物包含層（古墳中期以前）から1点が出土している。部位は明確ではないが、イノシシもしくはニホンジカの四肢骨を利用したものと思われる。骨をうち割った後、内面の一部に丁寧な研磨を施している。それ以外に溝SD7001（弥生前期）からニホンジカの尺骨を利用したものがある。遠位部を研磨しているが、成形はされていない。滑車切痕部が破損しており、全容は不明である。

用途不明品

溝SD405（弥生前期）からニホンジカの下顎骨を利用したものが出土している。下顎骨を第2後臼歯と第3後臼歯の間で切断し、下顎体部と切断面を丁寧に研磨している。下顎骨前方部は破損しているため、どのような形であったか不明である。また、下顎体には体軸に対し垂直に2本の刻みが見られる。類例は青谷上寺地遺跡や唐古・鏡遺跡、朝日遺跡にある。唐古・鏡遺跡のものは刻みが多数あるのに対し、青谷上寺地遺跡や朝日遺跡のものには刻みがないようである。

卜骨（未製品?）

イノシシの右肩甲骨骨を利用したものであるが、時期と出土地点は不明である。遺存状態が悪く、内側面は観察できない。卜骨によく見られる肩甲骨を削り落としたものであり、骨の厚みを減らす加工や灼の痕跡は見られない。一般的には内側面に灼を加えるため本来は内側面の観察が欠かせないが、外側面の観察のみから判断すると、神沢勇一による卜骨の分類（神沢1976）では、すべて灼が加えられたものなので卜骨には含まれないかもしれない。灼が加えられる前段階のものと位置づけられる。

4 遺構ごとの特徴

最も多く動物遺存体が出土したのは、溝SD7001（弥生前期）である。イノシシとニホンジカが中心でイヌが含まれる。溝SD5003（弥生前期）も同様の出土傾向がみられ、イノシシの下顎骨に穿孔したもの1点がある。そして土坑SX6002（弥生前期）では、イノシシ、ニホンジカ以外にタイ科やニシン、鳥類がみられ、溝SD4001（弥生中期から後期）では、イノシシ、ニホンジカが中心でエイ類、鱈脚類が1点ずつ出土した。堅穴住居址覆土SB801（古墳以前）は2番目に多く動物遺存体が出土している。やはりイノシシとニホンジカが中心で、サメ類やマダヒ、その他魚類、ウシ、ウマ、クジラ類も含まれ、最も多くの種類が出土した。これらの遺構には大きな特徴が見られず、日常のゴミ廃棄場となっていたと考えられる。一方、土坑SX6001（弥生前期）では、イノシシ、ニホンジカが見られるが、特にイノシシの遊離歯を含む頭蓋部が多く出土している。イノシシのみでみると9割が頭蓋部である。そして土坑SX501（古墳以前）でもイノシシ、ニホンジカ両種が見られ、特にイノシシの8割が下顎骨である。また、SK6010（弥生前期）では、8点出土中1点のみがイノシシで、あとはニホンジカである。ニホンジカは枝角と中手骨で骨角器の材料となる部位である。鹿角には加工痕が見られるものがあり、いずれも火熱を受け茶褐色か黒色を呈し、一部白色変化が見られる。

動物遺存体のみから遺構の性格を決めることは難しいが、短期間に埋まった遺構であれば、これらの偏りが当時の人々の意志を反映している可能性は高いだろう。動物遺存体以外の出土遺物を含めて検討することが必要である。

5 考察

弥生時代の動物遺存体

弥生時代になるとイノシシ、ニホンジカが大半を占め、その他の小型動物があまり出土せず、特にイノシシが多く出土する傾向が論じられている(松井前掲書)。新方遺跡に近い、明石川流域の玉津田中遺跡でも弥生時代中期には小型動物が少なく、イノシシとニホンジカが大半を占める。しかし、イノシシとニホンジカについては、破片数によるとニホンジカがイノシシを上回る(甲斐1996)。新方遺跡もそれと同様であるが、これは鹿角の破片が多く出土していることに起因する。最小個体数でみればイノシシの下顎骨(左)20個体、ニホンジカの脛骨(左)9個体でイノシシが多い。このような量比の示し方にはそれぞれの特徴があり、場合に応じて検討しなくてはならない(松井1990)。それとは別に、新方遺跡の立地から水産資源について触れておく。玉津田中遺跡や新方遺跡は水産資源が豊富な明石海峡のすぐ近くに位置する。それにもかかわらず、魚骨の出土量がわずかであることは不自然である。大阪府沿岸に位置する大阪府池上遺跡や瀬戸内海沿岸の兵庫県田能遺跡でも、貝類、魚類の種類は豊富であるが出土量はそれほど多くない。稲作がはじまった弥生時代には農閑期に狩猟、漁撈が行われたと考えられ、効率のよい大型獣に集中したことが考えられるが、骨自体の遺存の良さの違いという埋没過程に要因がある。最近、それとは別に集落内のイヌの影響も考えられている(松井・宮路前掲書)。新方遺跡でもイヌの骨が出土し、その存在は明らかで、イノシシやニホンジカの骨に咬痕があることから、イヌが骨ごと人間の食料残渣を食べた可能性が高い。よって、出土する遺存体は、イヌが食べなかったもの、食べられなかったものであると考えられる。ただし、縄文時代の集落にもイヌが存在したことは、大阪府森ノ宮遺跡などの例で確実であり、イヌによる影響だけでは、弥生時代の動物遺存体の構成を説明するには不十分である。この他にも要因があることは、兵庫県個遺跡でゴミの廃棄場所に区別があることが指摘されていることからわかる(片山・松井・宮路1998)。

弥生時代のイノシシ

弥生時代のイノシシについて、金子浩昌らは、池上遺跡を例として、イノシシの幼若獣が多いことを理由にイノシシ飼養の可能性を論じた(金子・牛沢1980)。その後、西本豊弘は下郡桑苗遺跡のイノシシの形態的な観察から、弥生ブタが存在する可能性を示した(西本1989・1992a)。その後も、西本豊弘は弥生ブタの形態的特徴を論じ(西本1991・1993)、愛知県朝日遺跡のイノシシの多くはブタであるとした(西本1992b)。そして、それらブタは弥生時代初頭に大陸から移入されたものと考えたが(西本1993)、DNA分析によりその可能性が小沢智生により否定された(小沢2000)。松井章は沖縄県伊江島の具志原貝塚出土のリュウキュウイノシシとされていたイノシシの中に通常より大きな個体が含まれることから、沖縄諸島以外から搬入されたブタであるとした(松井1997)。その後、DNA分析からリュウキュウイノシシの系統を明らかにし、炭素・窒素同位体分析から野生種と家畜種の判別を行い、古代リュウキュウイノシシの飼育の可能性を示した(松井・石黒・本郷・南川2001)。新方遺跡では、イノシシを形態のみからブタと断定することは難しく、幼若獣より成獣の方が多くみられることからイノシシの飼養が盛んであったとは考えにくい。

また、イノシシの下顎骨の穿孔も弥生時代特有のもので、佐賀県菜畑遺跡が弥生時代初頭の例として有名である。菜畑遺跡などでは、木棒とともに出土していることが知られ、岡山県南方遺跡では12個体分の下顎骨が埋没河道に並んだ状態で出土している(扇崎・安川1995)。その他にも類例はいくつかあるが、愛知県朝日遺跡以東に例はない。これは縄文時代にはなく、弥生時代になって見られることから、稲作とともに入ってきた農耕祭祀として考えられていた(金子1984)。その後、春成秀爾は大陸の例や出土状況を考慮し、

ブタの下顎骨を懸架する壁邪の習俗であるとした(春成1993)。しかし、下顎骨を懸架する行為をとれば、春成も大陸での事例挙げているように無穿孔の懸架が考えられる。野林厚志は、台湾バイワン民族を中心にイノシシの狩猟について民族調査を行い(野林2000)、無穿孔の下顎骨懸架の事例をあげ、それが狩猟活動のトロフィーとしての役割を持っていることを指摘している(野林2002)。イノシシの下顎骨の場合、懸架するだけならば無穿孔でも可能である。下顎骨を穿孔し、懸架することに何らかの意味があるのかもしれない。新方遺跡で下顎骨が穿孔されているイノシシは、犬歯の大きさからオスのみで、いずれも成獣である。また、出土状況は木棒を伴わず、同遺構では他に穿孔された下顎骨は見られない。

弥生時代における金属器の普及

弥生時代になると骨に見られる傷は、石器によるものだけではなく金属器によるものが見られる。鉄斧を例にあげると、刃こぼれした刃で削ることから平行する条線が多く見え、条線は1回の削りで付けられるため交差しないこと、そして刃部を振り下ろすため最初に段が生じて力が逃げるのが特徴である。それに対し石器は、刃器によるものと粗い砥石によるものがあり、金属器同様に平行条線が見られるが、何度も刃部が往復することで、溝の断面が鈍くU字形で交差する条線が見られることが特徴である(松井・宮路前掲書)。

新方遺跡でも鹿角の加工に金属器(鉄斧)の使用が認められた。しかし、それぞれの傷の詳細な観察ができていないため、刃器による傷が石器と金属器のどちらを使用したものか不明なままである。このような観察には、実体顕微鏡の使用はもちろんであるが、より微細な観察を行うことが可能な電子顕微鏡や二次元的に画像復原ができる機器の利用も有効であると考えられる。今後、これらを詳細に観察し、縄文時代から歴史時代の道具の変遷や器種の使い分けを検討していくことが必要である。

まとめ

新方遺跡では、弥生時代前期を中心に多くの動物遺存体が出土した。イノシシとニホンジカが全体の9割を占め、その中には弥生時代に特徴的なイノシシの下顎骨穿孔や金属器の使用による鹿角の加工がみられた。弥生時代前期におけるイノシシと枝角破片を除いたニホンジカの全体に占める割合は、イノシシ51%、ニホンジカ36%である(図133)。また、部位別の出土傾向も大きく見て、これまでの畿内の様相と類似すると言えるだろう。しかし、イノシシの年齢構成は、成獣が多く、飼養が盛んではなかったと考えられる。近年、大阪や九州北部以外の地域でも試料が増しつつあり、特に瀬戸内海沿岸や日本海沿岸における動物遺存体研究が発展する可能性が見込まれる。新方遺跡もその一例であり、特に縄文時代から弥生時代への変化が見られる弥生時代前期の貴重な試料と言える。